

平成 26 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—



平成 27 年 3 月

関西大学総合情報学部

はじめに

この報告書は、高槻市と関西大学が共同で、高槻市民を対象に実施した平成26年度市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の成果をとりまとめたものです。本調査は、関西大学総合情報学部で開講されている授業「社会調査実習」(2014年度)の一環として行われています。この授業では、学部生として上級の社会学的分析手法を習得するばかりでなく、受講生が各自の分析テーマを設定し、それらを盛り込んだ調査票の作成から最終報告書の執筆まで、社会調査の実施に必要な一連の作業を経験します。

この調査では毎年、研究テーマとして受講生の現代的感覚に溢れたユニークなテーマが取り上げられており、今年度の調査でもその傾向は受け継がれています。例えば、緑豊かな自然環境が市民の日々の生活に与える影響や、家庭ゴミの削減を成功させる要因の分析、あるいは高槻市のゆるキャラを観光資源とみなして、それが市民の地域観光意識に及ぼす影響、さらには人生設計を立てて将来に備える人々の意識など、研究テーマのひとつひとつに受講生の発想の柔軟性と感性の瑞々しさを見ることができるよう。

第4回目の実施となる本調査でも、回収率が60%を越えた過去3回の調査と同様、回収率が59.9%という、近年の郵送調査としては非常に高い数値を創出しました。大学の授業という限られた時間と資源の中で、受講生がこのような質の高いデータを得て分析できたのは、偏に、関西大学総合情報学部の松本渉先生より時宜を得た的確なアドバイスを頂き、それによって着実に手続きを進めることができたことによります。またティーチング・アシスタントの吉崎雅基さん、スチューデント・アシスタントの川口千里さんと田和あかりさんにはさまざまな形でご尽力いただき、授業を円滑に進めるために大きな助けとなりました。そして、殊に本講座の受講生の皆さんには、毎回仕事量が多く極めて密度の高い授業であったにもかかわらず、一年間まじめに取り組んで頂きました。最終報告書は受講生のみなさんの努力の結晶として上梓されるものです。

最後になりましたが、本調査の実施にあたり多大なご協力を頂いた高槻市市民生活部市民生活相談課の皆さま、関西大学総合情報学部オフィスの皆さま、そして何より、調査にご協力いただいた高槻市民の皆さまに、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

2015年3月

関西大学総合情報学部「社会調査実習」担当講師 李 容玲

目次

はじめに			i
第1章	調査の概要	李容玲・松本渉	1
第2章	調査結果	吉崎 雅基	8
第3章	地域におけるつながりの現状と需要に関する 分析	原田 淳平	107
第4章	属性別による環境に対する意識について	山本 明	115
第5章	生活における自然環境の影響	越智 祐貴	119
第6章	女性の初婚年齢と家庭の豊かさの因果関係	井上 愛弓	124
第7章	配偶者の育児満足度について	乗本 愛美	128
第8章	エコ志向と公共交通機関利用度との関係	松岡 亮祐	132
第9章	商店街と地域の関わり	山下 慶洋	136
第10章	継続したコミュニティ構築による社会問題 改善の提案	小谷 勇人	141
第11章	人生設計の意識について	松山 奈央	145
第12章	生活満足度と運動頻度の関連性	福山 将平	149
第13章	高槻市民が感じるゴミ排出への関心度	東久保 亮成	154
第14章	高槻市のバスと地域満足度の関係性	樋之内 祥馬	161
第15章	通学時間・通勤時間と生活満足度の関係性	佐々木 百合	165
第16章	地域観光におけるゆるキャラの影響力	中田 千裕	171
第17章	高槻市民の地域活動への参加と愛着度の関係	古森 光	175
第18章	高槻市バスの利用マナーとバス満足度の関連性	守田 早輝子	179
第19章	バスの利用頻度に関する調査	鼻崎 将	183
第20章	子育て環境の分析	山田 航暉	187
第21章	公共の施設の利用に対する生活満足度	谷口 有紀	191
第22章	地方行政活動が地域愛着へ与える影響	石倉 広祐	194
第23章	環境で形成する高槻市への愛着	中川 千彰	200
第24章	インターネット利用が近所付き合いに与える 影響	杉浦 翔	206
資料			213
予告ハガキ			215
調査票			217

第 1 章 調査の概要

李容玲・松本渉

1. 調査の概要とスケジュール

「高槻市と関西大学による市民意識調査」は、平成 26 年 8 月から 9 月にかけて、高槻市と関西大学総合情報学部によって行われた。社会調査実習の一環として、前期には調査票の作成が、夏休みには調査票発送作業が、後期にはデータの打ち込み、データ作成、分析等が行われた(表 1)。

表 1 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査スケジュール

	日付	授業内	授業外
前期	4/8	「社会調査実習」前期授業開講	
	4/15～5/20	基礎的・応用的な分析方法の習得	高槻市と関西大学の打ち合わせ(随時)
	5/27～7/22	調査票の作成	
夏休み	7/23～8/5		調査票印刷
	7/31		サンプリング
	8/6	調査票発送準備作業	
	8/12		予告はがき発送
	8/21		調査票発送
	10/1		返送締切日
後期	9/30	「社会調査実習」後期授業開講	
	9/30～11/11	データの打ち込み・読み合わせ	
	11/18～12/2		データクリーニング
	12/9	応用的な分析方法の習得	
	12/24	中間レポートの提出	速報版報告書執筆
	1/20	最終授業(最終レポートの提出)	報告書執筆
	1/21～2/28		報告書編集

2. サンプリング

調査対象者：20歳以上85歳未満の高槻市民(1929年8月1日～1994年7月31日出生)

抽出名簿：住民基本台帳(平成26年7月31日現在)

標本抽出法：層化抽出法

(具体的な手順)

1. 平成26年6月末現在の人口に基づいて、性別と年齢によって作成された12の層の人口を算出する。次に、その人口の比率に従って、計画標本2,000を各層に割り当てる(表2)。

表2 層化の基準日の人口構成と計画標本の割り当て

	平成26年6月末現在の人口			計画標本の割り当て		
	男	女	男女計	男	女	男女計
20代	17,019	17,461	34,480	121	124	245
30代	22,931	23,574	46,505	163	167	330
40代	27,329	27,617	54,946	194	196	390
50代	18,561	19,811	38,372	131	141	272
60代	23,315	27,556	50,871	165	196	361
70代以上	25,890	30,825	56,715	184	218	402
合計	135,045	146,844	281,889	958	1,042	2,000

2. 各層で割り当てられた人数を系統的に無作為抽出する。

3. 調査実施上の工夫

この調査では、調査および回収を円滑に実施するために、過年度と同様の工夫を行っている。

予告はがきの送付

調査票が届き次第、スムーズに回答できるように調査票発送の9日前に予告はがきを送付した。このように事前に調査の実施を通知することで、調査対象者は心の準備をすることができ、また調査に対する期待感を高められると考えたからである。なお、見やすくシンプルな文面とするため、ご挨拶以外にはがきに掲載した情報は最低限(「近日中に大きな茶封筒(ボールペン入り)が届くこと」「対象者が無作為で選ばれたこと」の2点)にとどめた。今回は、お盆休みに入った直後の8月12日(火)に予告はがきを送付した。

調査票送付日

調査票の送付は、お盆が終わってから最初の木曜日である平成 26 年 8 月 21 日(木)に行った。勤め人の夏休みを避けた上で、金曜日頃に調査票を受け取るためである。

同封物

筆記具を探す必要がないようにという配慮から、箱入りボールペンを同封した。また、箱を同封することで封筒の形状を目立たせ、ほかの郵便物に紛れなくなるという効果もある。なお事前にも事後にも金銭的な謝礼は一切行っていない。

調査票の用紙

目立つように、水色(なお前年はうす水色)の紙を使用した。また、やや重くなるが、裏面が透けて読みにくくならないように厚手の紙を利用した。

調査票における挨拶文

すぐに質問文が目に入るようにするため、挨拶文は 1 ページの上段のみにとどめた。その主な内容は、①調査目的以外に一切利用しないこと、②結果の公表を約束すること、③住所や名前を記入しないことをお願いすることの 3 点である。それぞれ、①安心感の付与、②社会還元の明示、③匿名性の担保を示している。

調査票の構成デザイン

二段組にすることによってスペースを有効に利用し、A4 サイズ 8 ページ(両面)の範囲に収まる調査票とした。文字フォントは、質問文を太字の MS ゴシック、選択肢を MS 明朝としてメリハリをつけた。

封筒

調査票送付用封筒については、A4 サイズの調査票を折り曲げずに済むように、角 2 サイズの糊付封筒を利用した。

一方、返信用の封筒については、ハイシール加工済みの角 2 サイズの封筒を利用した。調査対象者が、回答票を封入して返送しやすくするためである。

催促状(なし)

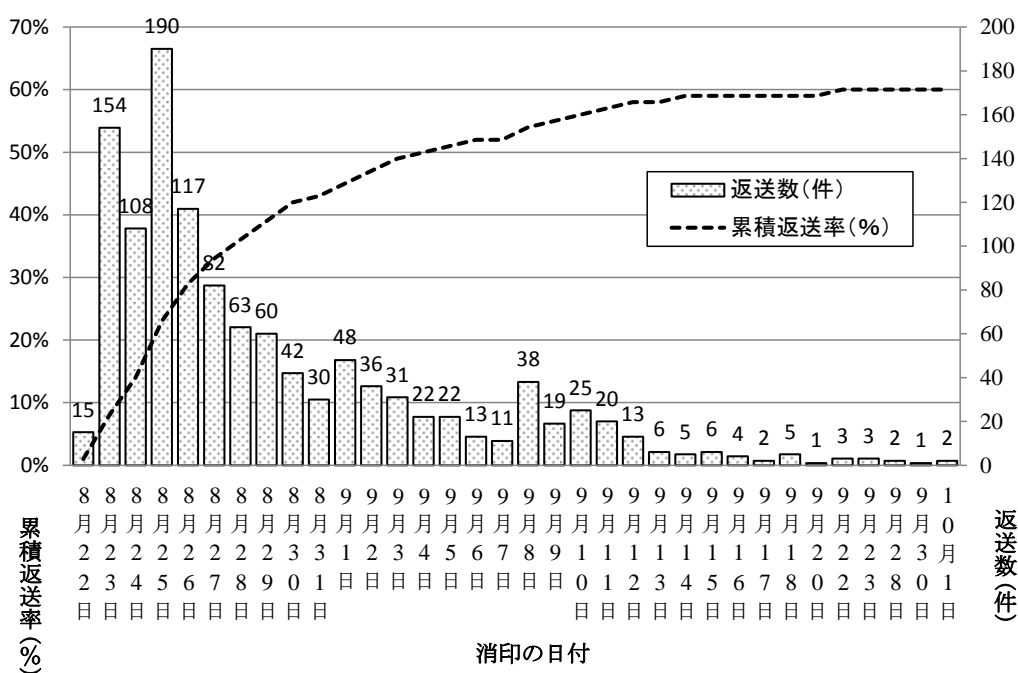
催促状の送付は行っていない。

4. 調査票の回収状況

4.1. 返送状況

調査票の返送状況について述べる。図 1 は、消印の日付から調査票の返送状況の経過を示したものである。最も早い消印は翌 22 日(金)である。例年の調査と同様に、返送日の山が二つみられる。第 1 の山は、返送数が 154 の 8 月 23 日(土)であり、調査票受取直後の記入・返送のピークといえる。第 2 の山は返送数が 190 で最大の返送数を記録している 8 月 25 日(月)である。調査票受領後におとずれた土日を利用した記入・返送のピークといえる。これに続く山は、2 回目の月曜日である 9 月 1 日と、3 回目の月曜日となる 9 月 8 日である。これらは、それぞれ土日を利用した記入・返送によるものと考えられる。この返送のパターンはおおむね例年の調査と同様といえる。

ただし累積返送率については、例年なら調査票の返送受け取り期間の前半で返送率が 60%に達しているが、本調査の場合、累積返送率のグラフ(図 1)が示しているように、回収期間後半に入ってもなだらかに上昇を続け、受け取り締切日頃ようやく返送率が 60%近くに達している。この差は、調査対象者に事前に送付する「予告はがき」を、例年ならば調査票を送付する直前(2 日前)に送付しているところ、本年度の場合 9 日前の送付となったことによって生じたものと推測される。



(注1) 返送数とは、回答票の返送日ごとの件数(日付は消印による)。

(注2) 累積返送率とは、その日までに返送された件数の累計を計画標本サイズで割った値。

図 1 時系列に見た調査票の返送状況

4.2. 回収率と調査不能の内訳

郵送調査の特質上、締切日の9月12日(金)以降も調査票の返送が続いた。そのためしばらくの間返送を受け付け、10月1日(水)で打ち切った。返送されてきた調査票総数は1,200件であったが、2件については記入状況から無効と判断し、最終的に有効な回答票数を1,198件、回収率を59.9%とした。調査不能の内訳も含めた調査の状況は表3の通りである。

表3 回収率と調査不能の内訳

		件数	(%)
1. 調査不能	尋ね当たらず等	15	(0.75%)
	未返送	785	(39.25%)
	無効調査票	2	(0.10%)
	計	802	(40.10%)
2. 有効回答票		1,198	(59.90%)
3. 計画標本サイズ(合計)		2,000	(100.00%)

4.3. 回収率の詳細

男女別の回収率については、男性53.1%、女性64.9%となり、女性の方が12%ほど高い(表4)。年齢層別の回収率では、70代以上で72.4%、60代が76.5%と高く、年齢が下がるにつれて回収率が低下し、20代では33.9%にまで低下する(表5)。社会調査において、男性よりも女性において、若年層よりも高年齢層において回収率が高くなることは一般的な傾向である。

表4 男女別の回収率

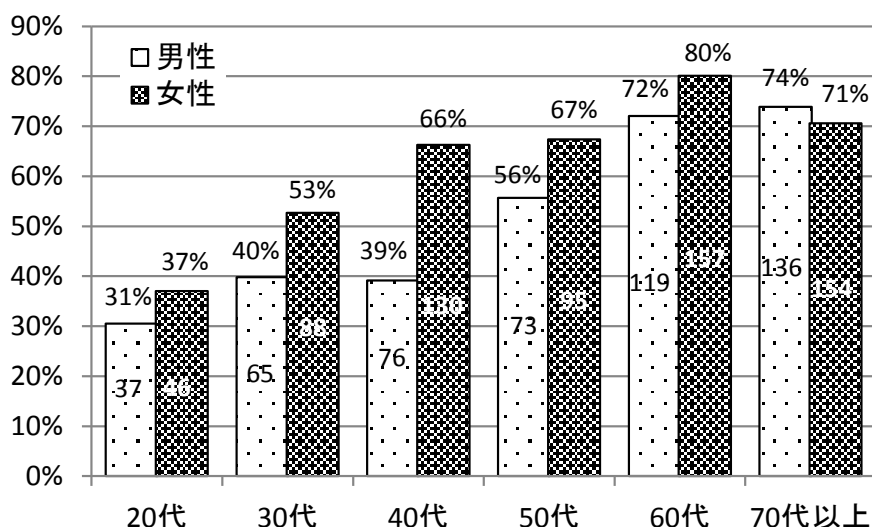
	男性	女性	不明	合計
回収標本	509	676	13	1,198
計画標本	958	1,042	—	2,000
回収率(%)	53.1%	64.9%	—	59.9%

(注) 男女別の回収率の計算には、不明分13件が含まれていない。

表5 年齢層別の回収率

	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	合計
回収標本	83	153	206	170	276	291	19	1,198
計画標本	245	330	390	272	361	402	—	2,000
回収率(%)	33.9%	46.4%	52.8%	62.5%	76.5%	72.4%	—	59.9%

(注) 年齢層別の回収率の計算には、不明分19件が含まれていない。



(注1) 棒グラフの高さおよび上側の数字は、回収率をあらわしている。
(注2) 棒グラフの内側の数字は、各層における実際の回収数である。
(注3) 男女別・年齢層別のいずれかで不明となった分は含まれていない。

図2 男女・年齢層別の回収率

5. 回収標本の特徴

前述した男女別・年齢層別の回収率の違いにより、回収標本が母集団からある程度ずれている可能性があるため、その確認を行った。

表6は、母集団における男女・年齢別の人口分布と回収標本における男女・年齢別の人口分布を比較したものである。適合度検定*から、男女・年齢別の人口分布について、回収標本が母集団と乖離していることが統計学的に示されている。とりわけ、20代、30代の男性といった回収率の低い層では母集団よりも過小な人口割合である一方で、男性60代以上、女性40代以上といった回収率の高い層では母集団より過大な人口割合である。

高槻市の統計では、世帯人数別の人口分布もわかるので、この点についても回収標本と母集団との間の人口分布の比較を行った(表7)。その結果、この比較においても適合度検定*から両者が乖離していることが統計学的に示された。一人暮らしの多い20代、30代の回収率の低さがここにも影響したと考えられる。

*適合度検定

観測したデータの分布が、理論上の分布に当てはまっているかどうかを調べる統計学的手法。表6と表7では、平成26年6月末時点での高槻市全体の人口の分布を理論上の分布としている。なお、表6と表7の注釈にある統計量 χ^2 は適合度基準と呼ばれる値で、この値が0の場合二つの分布は同一であり、値が大きいほど乖離していることを示している。dfは、自由度と呼ばれる値(表6と表7では、「性別と年齢」「世帯人員数」の各カテゴリ数から1を引いた数に相当)である。pは、二つの分布が同一の分布である確率を表しており、統計量 χ^2 と自由度dfから計算されている。

表6 男女・年齢別の人口分布の比較

性別	年齢	回収標本	%	H26年 6月末人口	%
男性	20代	37	(3%)	17,019	(6%)
男性	30代	65	(6%)	22,931	(8%)
男性	40代	76	(6%)	27,329	(10%)
男性	50代	73	(6%)	18,561	(7%)
男性	60代	119	(10%)	23,315	(8%)
男性	70～84	136	(12%)	25,890	(9%)
女性	20代	46	(4%)	17,461	(6%)
女性	30代	88	(7%)	23,574	(8%)
女性	40代	130	(11%)	27,617	(10%)
女性	50代	95	(8%)	19,811	(7%)
女性	60代	157	(13%)	27,556	(10%)
女性	70～84	154	(13%)	30,825	(11%)
		1,176	(100%)	281,889	(100%)

(注1) 表左側の回収標本には、性別または年齢の不明分19件が含まれていない。

(注2) 表右側はH26年6月末の高槻市全体の人口である。

(<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/index.html>) 参照。

(適合度検定) $\chi^2=86.2659$, $df=11$, $p=0.0000$

表7 世帯人員別世帯数分布の比較

世帯人員数	回収標本	%	H26年6月末 世帯人員別人口	%
1人	121	10.1%	53,305	15.0%
2人	395	33.0%	92,644	26.0%
3人	286	23.9%	82,653	23.2%
4人	249	20.8%	90,176	25.3%
5人	86	7.2%	29,785	8.4%
6人	28	2.3%	5,490	1.5%
7人	7	0.6%	1,274	0.4%
8人	1	0.1%	336	0.1%
9人	0	0.0%	90	0.0%
10人	0	0.0%	20	0.0%
11人以上	0	0.0%	11	0.0%
無回答	25	2.1%	—	—
合計	1,198	100.0%	355,784	100.0%

(注1) 表右側の世帯人数別人口は母集団の分布であり、高槻市の人口

(http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/jinko_h26/1404975908832.html)

から算出した。ただし、回収標本が20～84歳で構成されているのに対し、表右側の世帯人数別人口には未成年および85歳以上も含まれている。

(適合度検定) $\chi^2=60.2745$, $df=10$, $p=0.0000$

第2章 調査結果

吉崎雅基

1. 調査対象者の属性

調査票の質問順とは異なるが、はじめに本調査における回答者の属性を確認する。ただし、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。

回答者の性別は男性が509人で女性が676人であり女性の方が多い(図1)。年齢は60代と70代以上は2割以上と多く、20代は6.9%と最も少ない(図2)。男女別に年齢を確認しても同様の傾向が見られる(図3)。

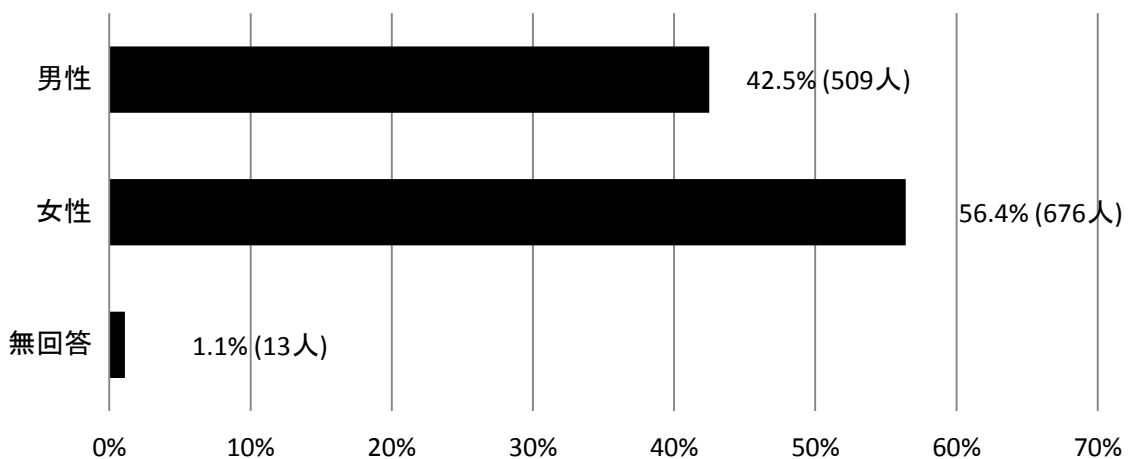


図1 Q72 性別

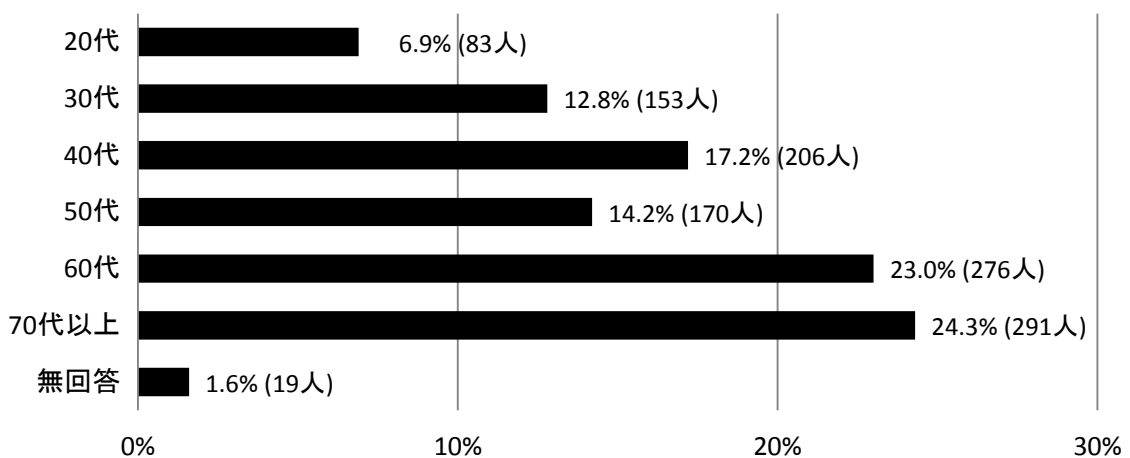


図2 Q73 年齢

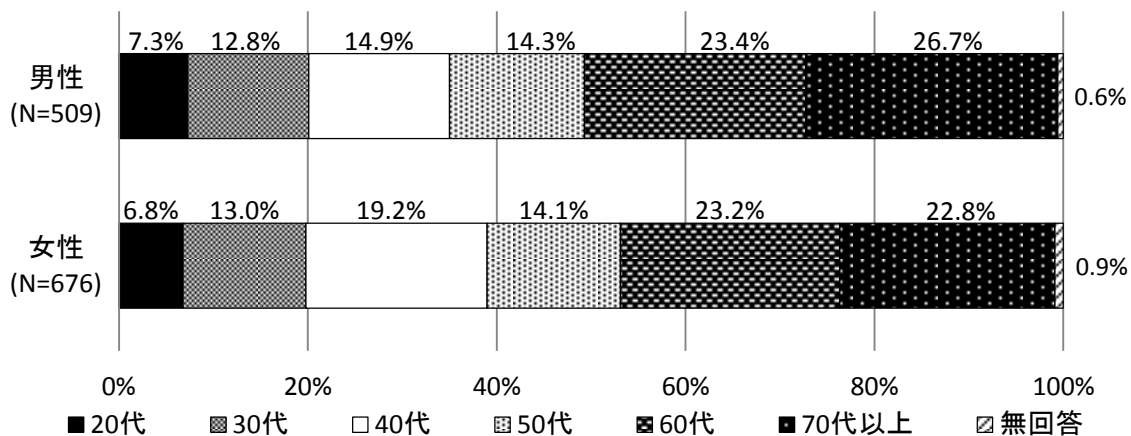


図 3 性別×年齢

以降、基本的には全ての質問項目に関して性別・年齢とのクロス集計を提示する。ただし、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関しては、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。なお、本調査の全回答者数は 1,198 人である。性別・年齢の内訳については図 1 と図 2 を参照のこと。

職業は、合計を見ると常時雇用者が 28.4%と最も多く、次いで無職が多い。男女別で見ると、男性では常時雇用者が 42.2%と最も多く、女性では家事専業が 31.5%と最も多い。年代別で見ると、60 代以上で常時雇用者の割合が大きく減少し、無職と家事専業が増加している。臨時雇用、パート、アルバイトと回答した人は、40 代で 26.2%と全年代中で最も高い割合である (表 1)。

表 1 Q74 職業

		(%)									
		常時雇用の 勤め人	臨時雇用、 パート、 アルバイト	自営業主	自営業の 家族従業者	経営者、 役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答
合計 (N=1198)		28.4	15.9	4.5	2.3	1.8	17.9	1.0	24.7	1.5	2.1
男女別	男性 (N=509)	42.2	8.6	6.9	1.6	3.1	0.0	1.2	33.8	1.6	1.0
	女性 (N=676)	18.5	21.7	2.8	2.7	0.7	31.5	0.9	18.0	1.5	1.6
年代別	20代 (N=83)	62.7	10.8	0.0	1.2	0.0	6.0	14.5	2.4	2.4	0.0
	30代 (N=153)	50.3	17.6	6.5	3.3	1.3	16.3	0.0	2.6	1.3	0.7
	40代 (N=206)	48.1	26.2	2.9	2.9	1.5	11.7	0.0	4.4	1.5	1.0
	50代 (N=170)	42.9	21.8	5.3	2.9	4.7	12.4	0.0	8.8	1.2	0.0
	60代 (N=276)	11.6	19.6	5.1	2.9	2.5	28.3	0.0	27.9	0.7	1.4
	70代以上 (N=291)	2.1	2.7	5.2	0.7	0.3	20.3	0.0	64.3	2.4	2.1

週あたりの労働日数は、年代別で見ると、20代から50代では5日の割合が最も高いが、60代以上では0日の割合が最も高い。男女別で見ると、女性では0日が41.1%と最も多く、次いで5日が多い。一方で、男性では5日が36.0%と最も多く、次いで0日が多い(図4)。

最終学歴は、男女別で見ると、男性では「大学(旧高専)・大学院」が41.5%と最も多いのに対し、女性では17.8%と男性よりも少なく、「高校(または旧制中学など)」が38.5%と女性で最も多い。また、「短大・高専(5年制)」は男性では1.6%と最も少ないのに対して、女性では19.2%と「高校(または旧制中学など)」に次いで2番目の多さである。年代別で見ると、20代では「大学(旧高専)・大学院」が53.0%であるが徐々に減少し、70代以上では17.2%である。反対に、20代では「高校(または旧制中学など)」が22.9%であるが、30代で17.0%に一度減少した後、徐々に増加し、70代以上では49.5%と多くなっている。また、「中学(旧小学校など)」についても年代が上がるごとに増加している(図5)。

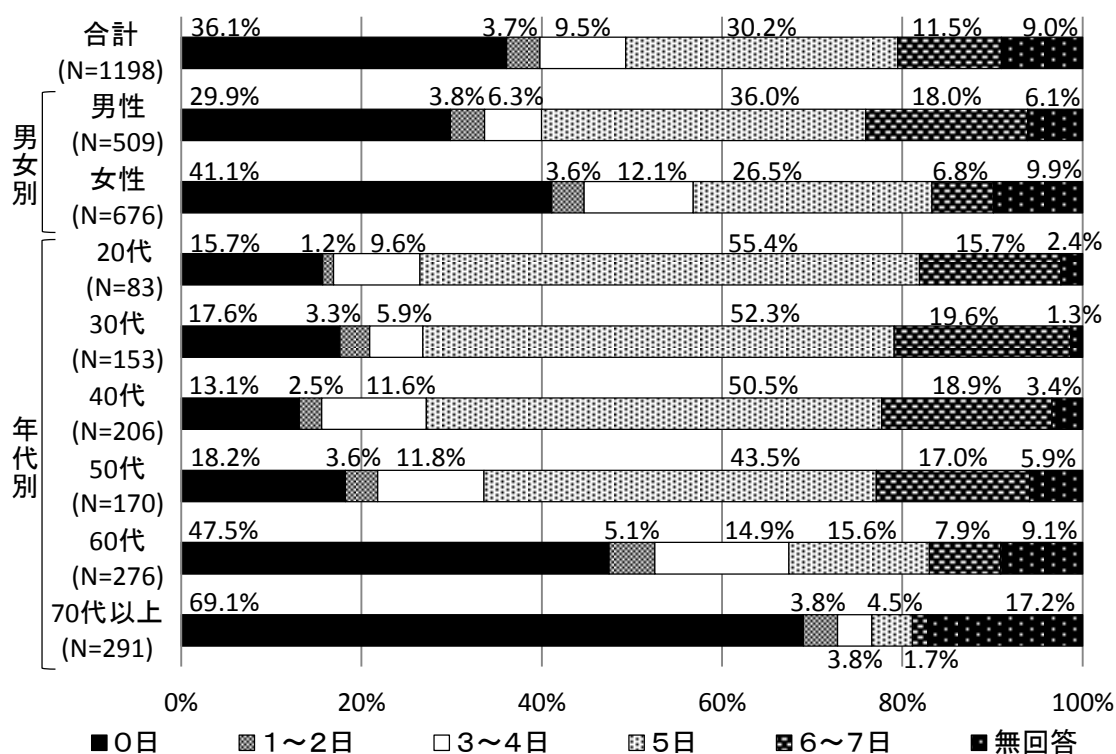


図4 Q75 週あたりの労働日数

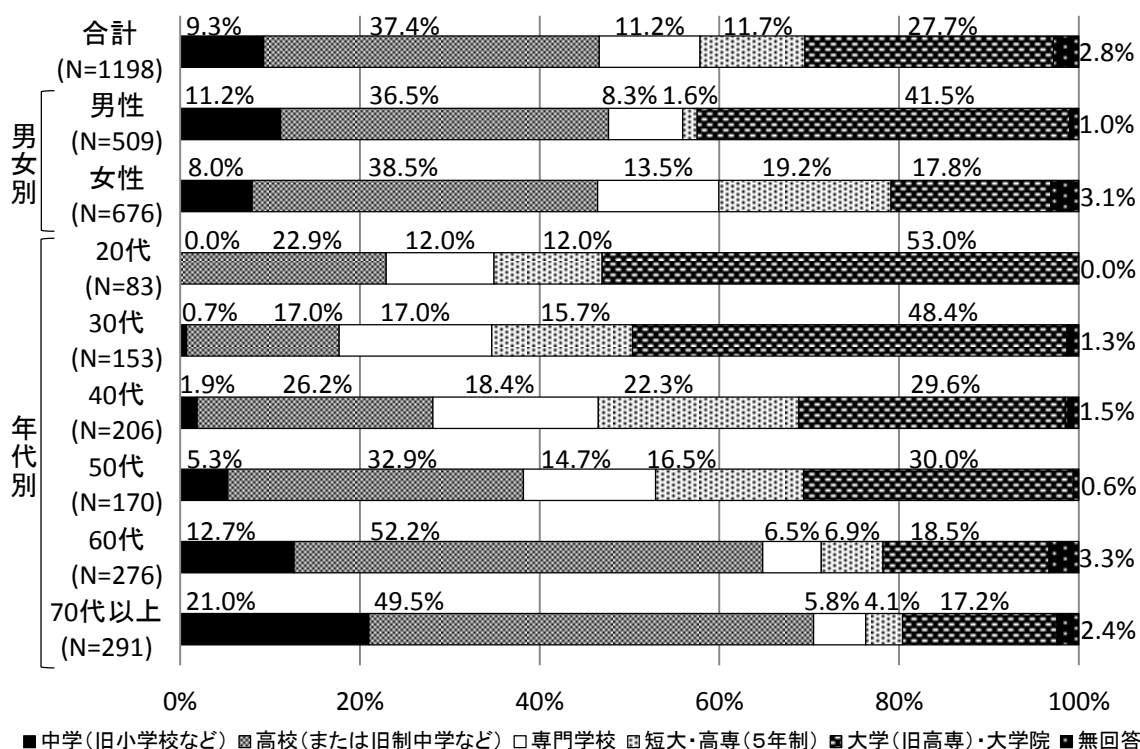


図 5 Q76 最終学歴

居住地については例外的に、単純集計のみを提示する。檜田地区に住む回答者は 2 人と極めて少なく、統計的に処理することにそぐわないためである。ここでの地区とは小学校の校区を参考にしてている。各地区と該当小学校区は、高槻北地区(芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校)、高槻南地区(高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校)、五領地区(五領・上牧小学校)、高槻西地区(群家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校)、如是・富田地区(芝生・丸橋・寿永・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校)、三箇牧地区(三箇牧・柱本小学校)である (図 6)。

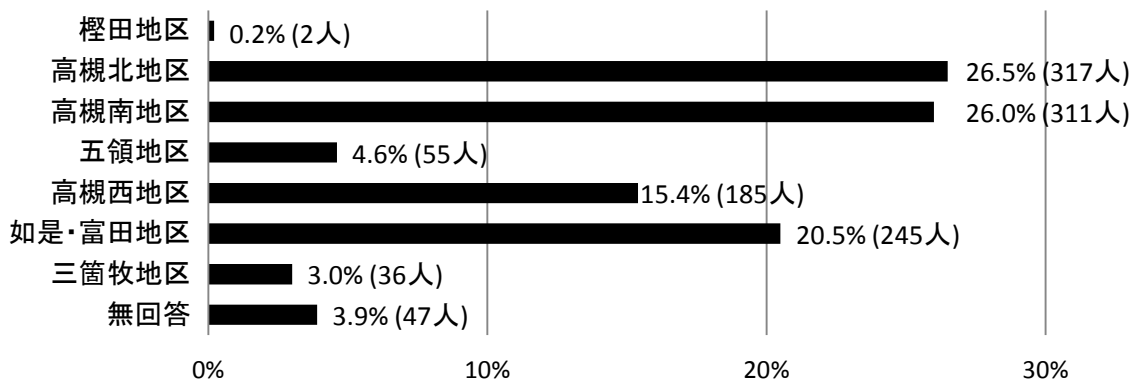


図 6 Q77 居住地域

高槻市内での居住年数に関しては、全体の8割以上が10年以上市内に居住していることが分かる。年代別で見ると、20代では「20年以上30年未満」が51.8%と最も多く、子どもころから市内に居住していることが分かる。70代以上では「40年以上50年未満」が42.3%と最も多い。なお、大きな男女差は見られない。(表2)。

市民の住居は、20代を除く男女別・年代別のすべての層で「一戸建て」の方が「集合住宅」よりも多い。男女別で見ると、男性・女性のどちらも「一戸建て」が66.6%である。年代別で見ると、年代が上がるごとに「一戸建て」の割合が徐々に増加しており、20代の44.6%に対して70代以上では75.6%である(図7)。

居住形態は、男女別・年代別のすべての層で「持ち家」が5割以上と最も高い割合である。50代以上では8割以上が「持ち家」である。20代では「民間の賃貸住宅」も32.5%と一定割合いるが、年代が上がるにつれて減少しており、70代以上では5.5%である。「公社・公団等の公営の賃貸住宅」は、男女別・年代別のすべての層で5%から10%ほど存在している(図8)。

表2 Q78 市内居住年数

		(%)									
		1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上 40年未満	40年以上 50年未満	50年以上	無回答
合計 (N=1198)		1.1	3.4	3.3	8.1	12.4	16.4	23.4	22.2	8.5	1.3
男女別	男性 (N=509)	1.0	3.7	3.1	8.1	11.0	16.7	24.0	22.6	9.2	0.6
	女性 (N=676)	1.2	3.1	3.4	8.1	13.8	16.3	23.4	21.9	8.0	0.9
年代別	20代 (N=83)	6.0	9.6	6.0	10.8	14.5	51.8	0.0	0.0	0.0	1.2
	30代 (N=153)	1.3	11.8	9.2	25.5	13.1	9.2	30.1	0.0	0.0	0.0
	40代 (N=206)	1.0	3.4	5.8	10.7	30.1	11.2	13.6	23.3	0.0	1.0
	50代 (N=170)	0.6	0.0	1.8	5.3	12.4	31.2	22.9	16.5	9.4	0.0
	60代 (N=276)	0.7	1.8	1.1	4.7	7.2	14.9	35.9	23.9	9.8	0.0
	70代以上 (N=291)	0.3	0.7	0.7	1.4	4.5	7.6	22.3	42.3	19.9	0.3

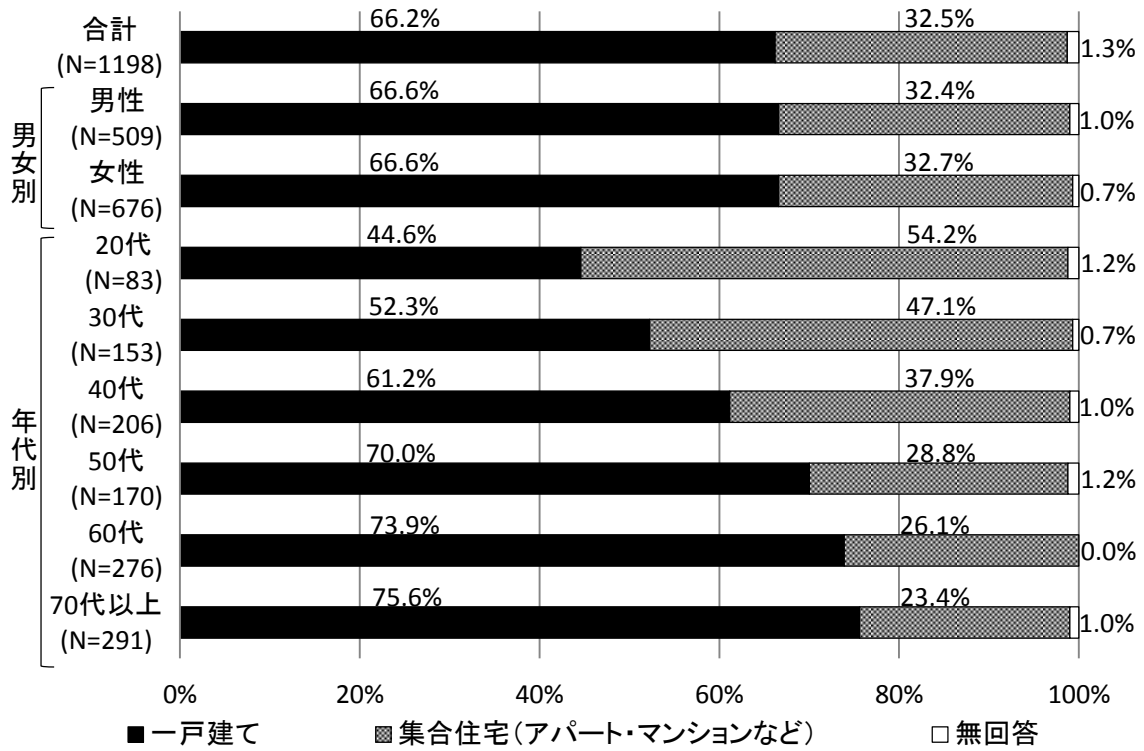


図 7 Q79 住居

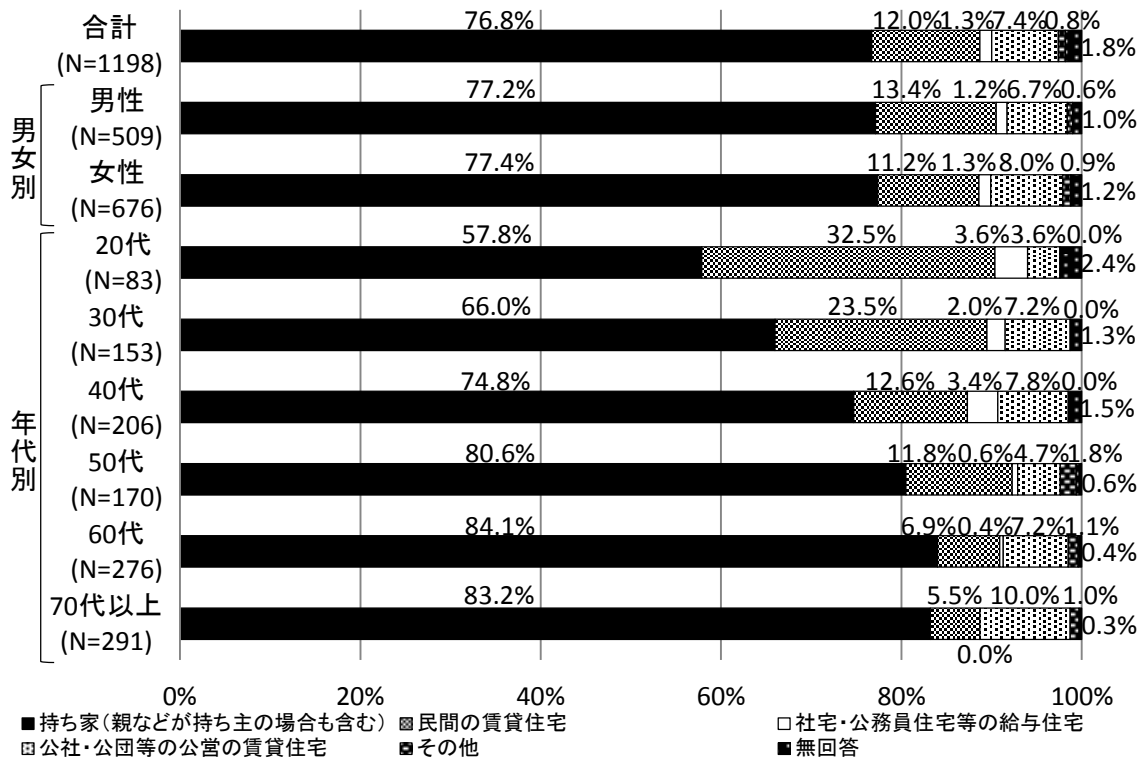


図 8 Q80 居住形態

世帯人数に関しては、その多くは2～4人世帯である。20代から40代では「4人」が最も多く、50代以上では「2人」が最も多い。特に60代以上では2人世帯が4割以上を占めている（表3）。

表3 Q81 世帯人数

		(%)								
		1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	無回答
合計 (N=1198)		10.1	33.0	23.9	20.8	7.2	2.3	0.6	0.1	2.1
男女別	男性 (N=509)	8.3	33.2	27.3	20.8	7.1	2.2	0.4	0.0	0.8
	女性 (N=676)	11.5	33.0	21.6	20.9	7.4	2.5	0.7	0.1	2.2
年代別	20代 (N=83)	10.8	13.3	21.7	32.5	15.7	3.6	1.2	0.0	1.2
	30代 (N=153)	7.8	10.5	29.4	39.9	8.5	0.7	1.3	0.0	2.0
	40代 (N=206)	7.3	14.6	25.7	32.5	13.6	4.9	0.5	0.0	1.0
	50代 (N=170)	7.6	29.4	27.6	22.4	8.2	2.9	0.6	0.0	1.2
	60代 (N=276)	9.1	43.1	27.2	13.4	4.0	2.5	0.4	0.0	0.4
	70代以上 (N=291)	15.5	56.4	15.8	6.5	2.4	0.7	0.3	0.3	2.1

世帯収入は、合計および男性・女性では「200～400万円未満」が最も多い。年代別で見ると、相対比率が最も高いのは、20代では「200万円～400万円未満」で24.1%、30代と40代では「400万円～600万円未満」、50代では「600万円～800万円未満」と、年代が上がるごとに収入が高額になっている。ただし60代以上では「200万円～400万円未満」の割合が最も高い（表4）。

表4 Q82 世帯収入

		(%)									
		100万円 未満	100万円～ 200万円 未満	200万円～ 400万円 未満	400万円～ 600万円 未満	600万円～ 800万円 未満	800万円～ 1000万円 未満	1000万円～ 1500万円 未満	1500万円 以上	わからない	無回答
合計 (N=1198)		5.3	8.7	29.7	19.4	11.6	6.5	4.4	1.3	4.8	8.3
男女別	男性 (N=509)	4.1	6.7	32.6	22.4	13.4	6.3	3.9	1.2	2.9	6.5
	女性 (N=676)	6.1	10.2	27.8	17.6	10.5	6.8	4.9	1.3	6.2	8.6
年代別	20代 (N=83)	8.4	10.8	24.1	18.1	8.4	7.2	8.4	1.2	8.4	4.8
	30代 (N=153)	4.6	3.9	19.0	28.8	16.3	5.2	4.6	2.0	5.9	9.8
	40代 (N=206)	2.9	5.8	18.0	22.3	19.9	11.7	7.8	1.9	5.8	3.9
	50代 (N=170)	4.1	5.3	18.2	15.3	18.8	17.1	7.6	2.4	2.4	8.8
	60代 (N=276)	6.5	12.0	35.9	17.8	7.2	3.3	3.3	0.7	5.4	8.0
	70代以上 (N=291)	5.8	11.3	47.1	18.2	4.8	0.7	0.3	0.3	3.4	7.9

2. 各質問項目の結果

ここからは回答者個人の属性だけではなく、意識や行動などの項目についての結果の概要を示す。ここでも基本的には性別・年齢によるクロス集計を提示する。なお、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関しては、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。回答者の性別と年齢の分布については 8 ページの図 1 と図 2 を参照のこと。

なお、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第 2 位を四捨五入し、小数点第 1 位までを表示している。よって合計%は 100.0%になるとは限らない。

Q1 の生活満足度に関しては、男女別・年代別のすべての層で半数以上が「満足」もしくは「やや満足」と回答している。なお、年代別で見ると、「満足」と回答した人の割合は 20 代が 22.9%と最も高く、反対に 30 代が 11.1%と最も低い (図 9)。

Q2 の居住地として思い浮かべる範囲に関しては、合計および男性・女性では、自治会の割合が 2.5 割程度と最も高い。年代別で見ると、自治会の割合が最も高いのは 60 代以上であり、20 代・40 代・50 代は市域全体、30 代では小学校区の割合が最も高い (表 5)。

Q3 の居住地の暮らしやすさに関しては、男女別・年代別のすべての層で「非常によい」または「まあよい」と回答した人が 8 割前後である。年代別で見ると、「非常によい」と回答した人の割合は 20 代で 19.3%と最も高く、全年代層で唯一 2 割近くに及んでいる (図 10)。

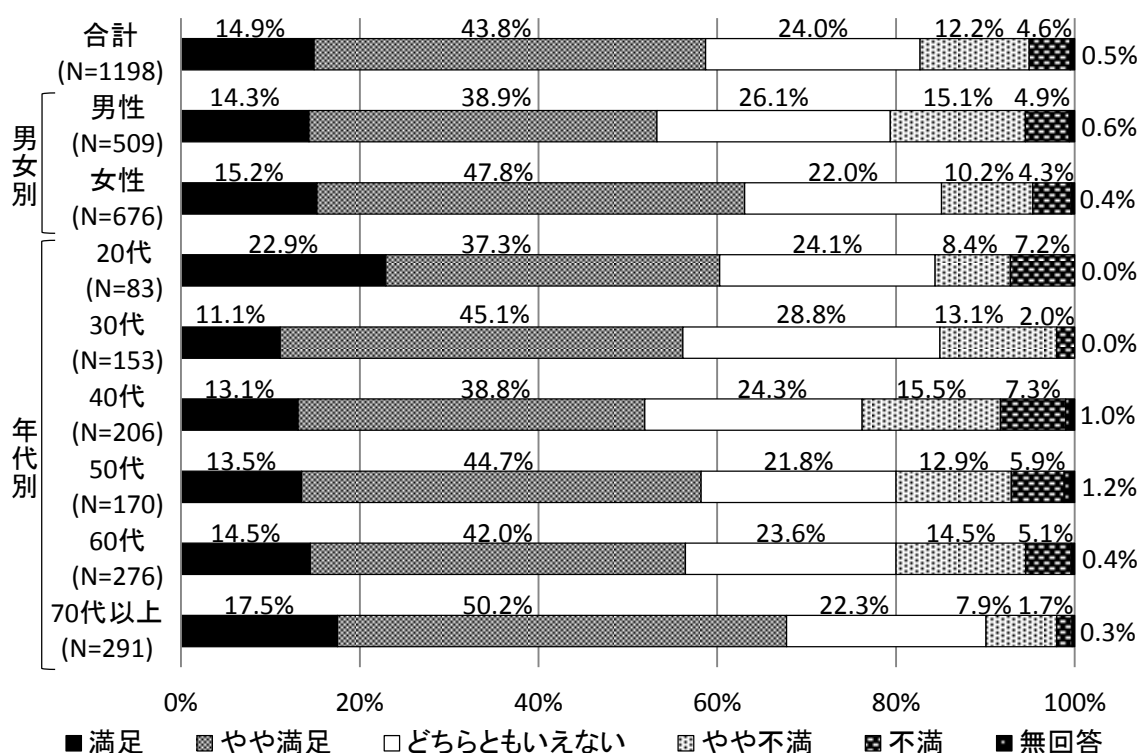


図 9 Q1 生活満足度

表 5 Q2 居住地域として思い浮かべる範囲

		(%)							
		自治会	町単位	地区コミュニティ (連合自治会)	小学校区	中学校区	市域全体	その他	無回答
合計 (N=1198)		25.3	15.9	9.7	15.5	7.1	21.3	3.2	2.1
男女別	男性 (N=509)	24.2	15.5	8.6	14.9	7.5	22.4	4.3	2.6
	女性 (N=676)	25.7	15.8	10.7	16.1	6.8	20.7	2.4	1.8
年代別	20代 (N=83)	16.9	7.2	6.0	14.5	12.0	37.3	2.4	3.6
	30代 (N=153)	15.0	20.9	1.3	31.4	6.5	21.6	3.3	0.0
	40代 (N=206)	14.1	18.4	6.8	19.9	13.6	22.8	3.4	1.0
	50代 (N=170)	21.2	16.5	7.6	18.2	10.0	21.8	3.5	1.2
	60代 (N=276)	30.1	13.4	13.0	9.8	3.3	23.9	4.3	2.2
	70代以上 (N=291)	38.5	15.1	14.8	8.9	3.1	13.4	2.1	4.1

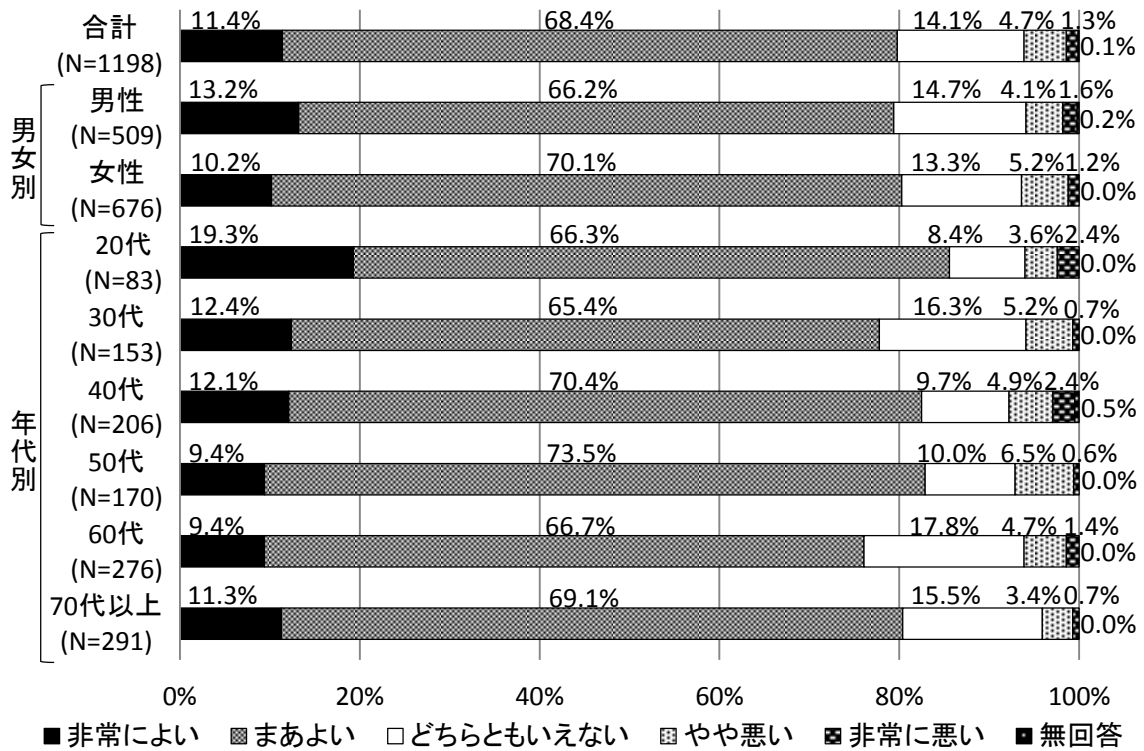


図 10 Q3 居住地域の暮らしやすさ

Q4の地域に住み続けたいかに関しては、合計および男性・女性においては「ずっと住み続けたい」または「住み続けたい」と回答した人の割合が5割程度である。その割合を年代別で見ると、年代が上がるごとに増加しており、20代で40.9%であるのに対して70代以上では62.5%である。また、「機会があれば引っ越したい」と回答した人は、合計と70代以上を除く男女別・年代別のすべての層で1割程度である(図11)。

Q5の地域の役に立ちたいかに関しては、合計で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人は54.8%と5割以上である。年代別で見ると、その割合は20代で38.5%であるが、年代が上がるごとに増加し、60代で60.2%になる。70代以上では56.4%と少し減少する(図12)。

Q6の地域の自然環境満足度に関しては、合計および男性・女性において、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が約6割である。年代別で見ると、その割合は20代と30代では5割以下であるが、40代以上では5割以上である。70代以上では66.7%と最も高い。また、「どちらともいえない」と回答した人は20代が最も多く41.0%である(図13)。

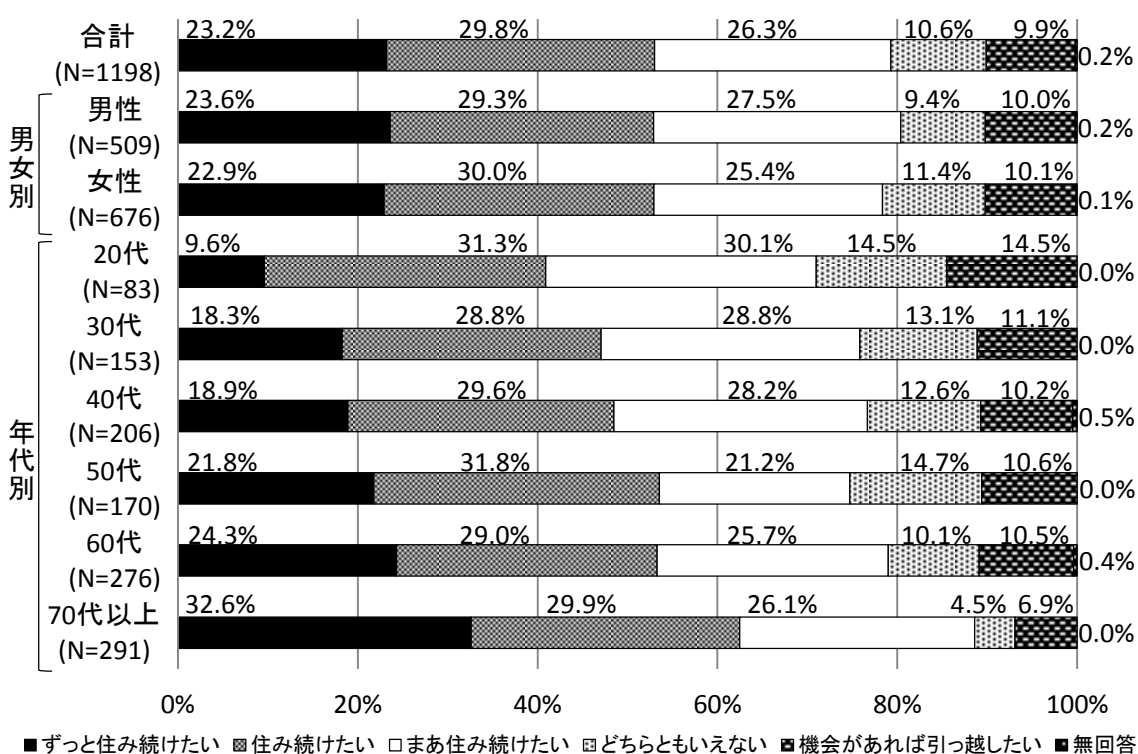


図 11 Q4 地域に住み続けたいか

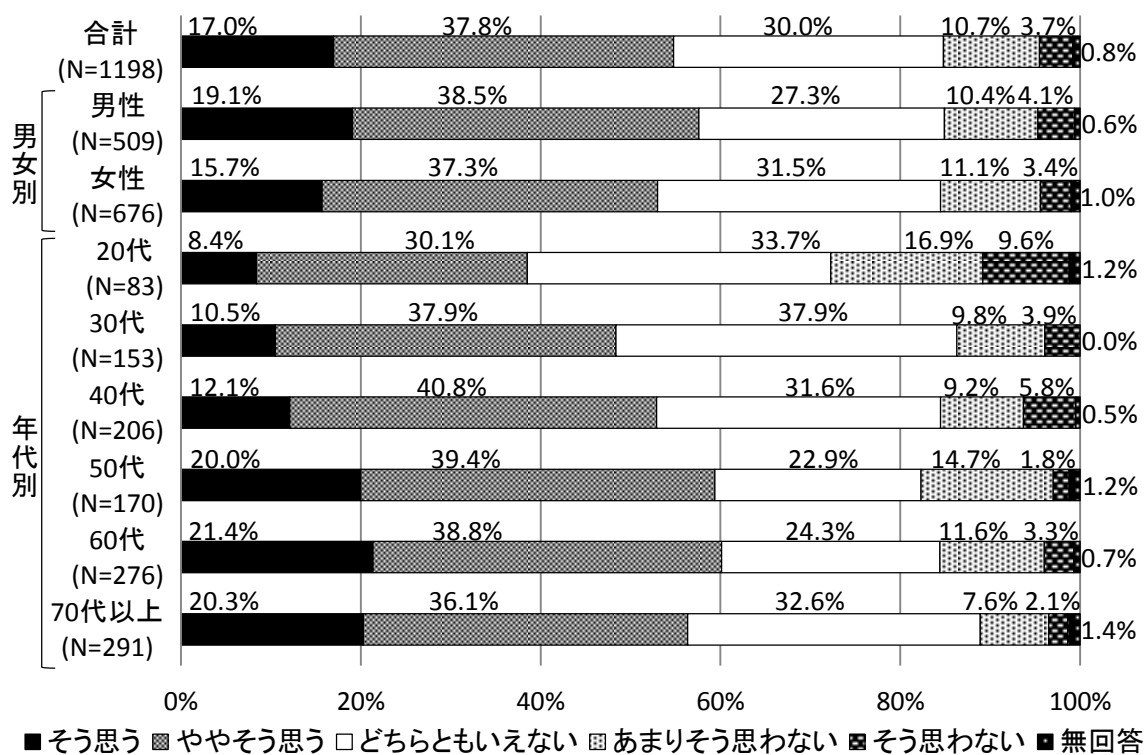


図 12 Q5 地域の役に立ちたいか

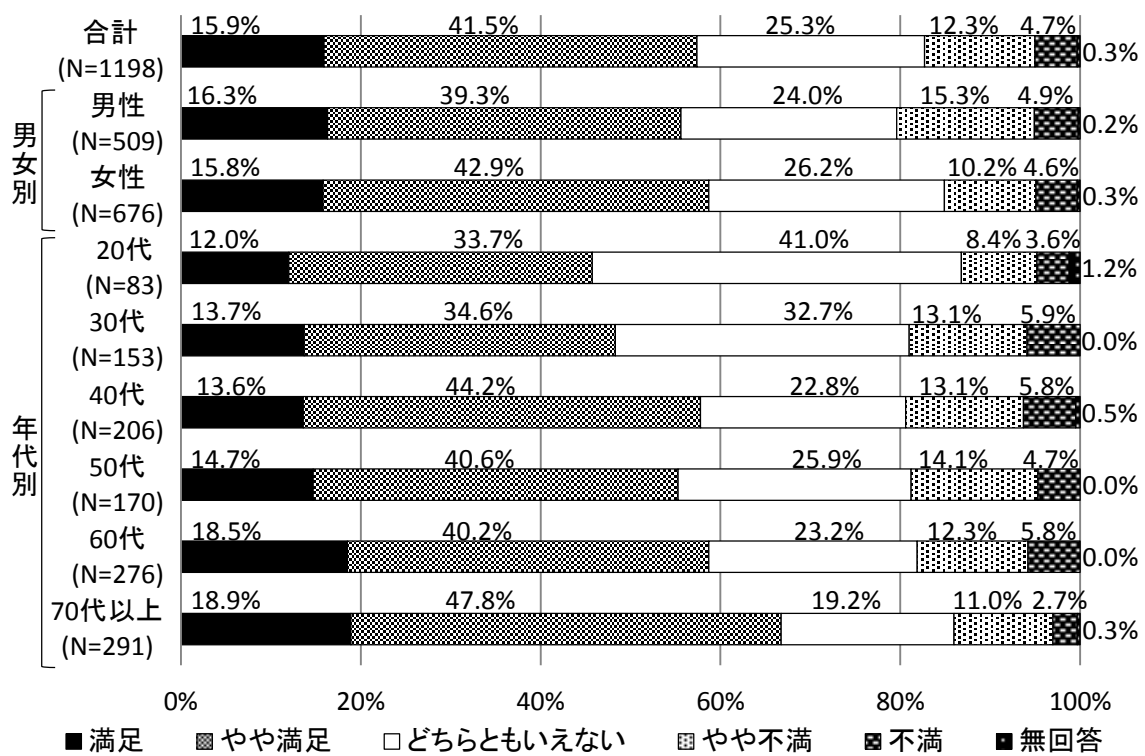


図 13 Q6 地域の自然環境満足度

Q7の地域の自然の量に関しては、40代を除く男女別・年代別のすべての層で「普通だと思ふ」の割合が最も高い。40代は「やや多いと思ふ」の割合が30.1%と最も高い。また、「やや少ないと思ふ」または「少ないと思ふ」と回答した人の割合は20代で最も高く、36.1%である（図14）。

Q8の居住地選択時における自然環境の重要度に関しては、年代別で見ると、「重要だった」または「やや重要だった」と回答した人の割合は20代で最も低く22.9%である。しかし30代になると大きく増加し、45.8%になっている。また、最も高い割合は70代以上の57.1%である。「重要でなかった」の割合は20代と30代でのみ1割を超えている（図15）。

Q9の近所での世間話の頻度に関しては、合計で見ると、「月に1~2日」以上の頻度が62.5%である。年代別で見ると、20代は「ほとんどない」の割合が74.7%と最も高く、年代が上がるごとにその割合は減少している。70代以上では「ほとんどない」の割合は17.2%である。「ほとんどない」の次に続くのは、20代では「週に3~4日」、30代・60代・70代以上では「週に1~2日」、40代・50代では「月に1~2日」である（図16）。

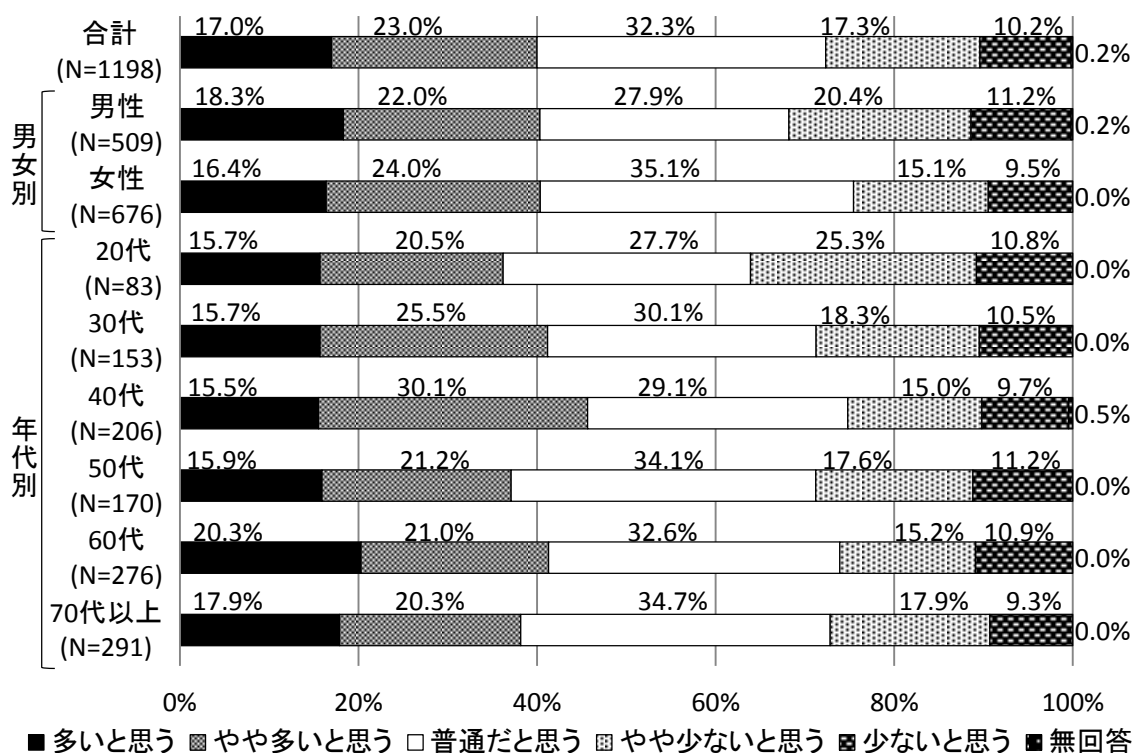


図14 Q7 地域の自然の量

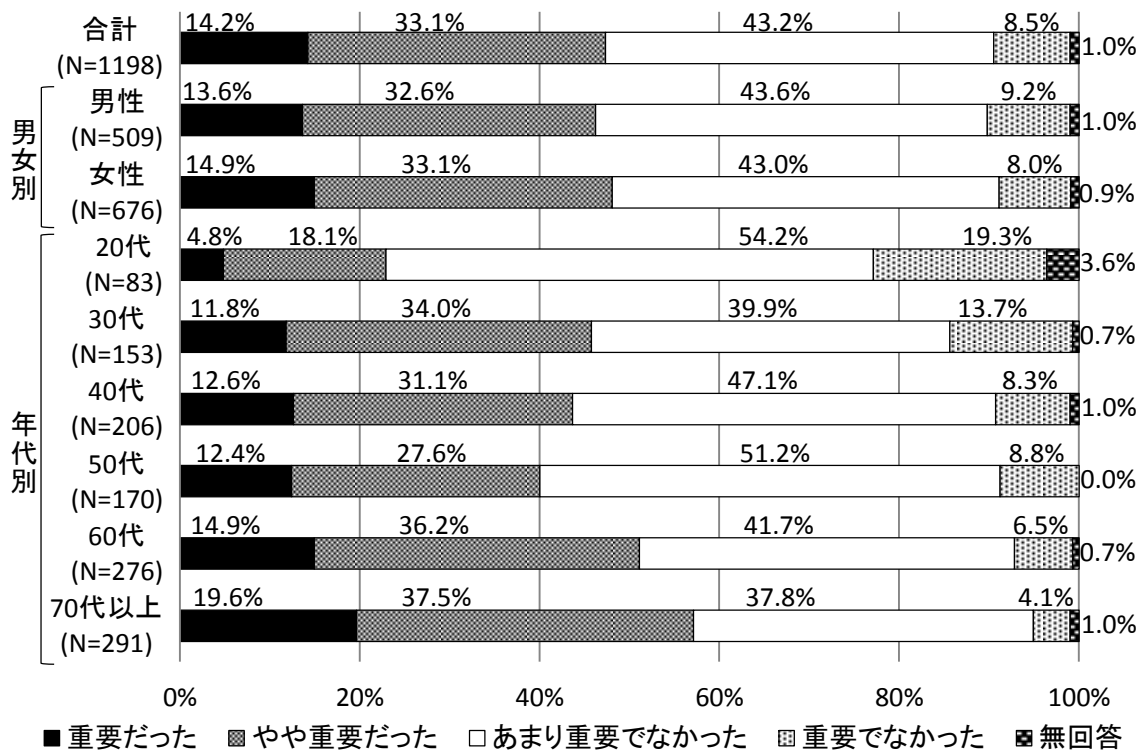


図 15 Q8 居住地域選択時における自然環境の重要度

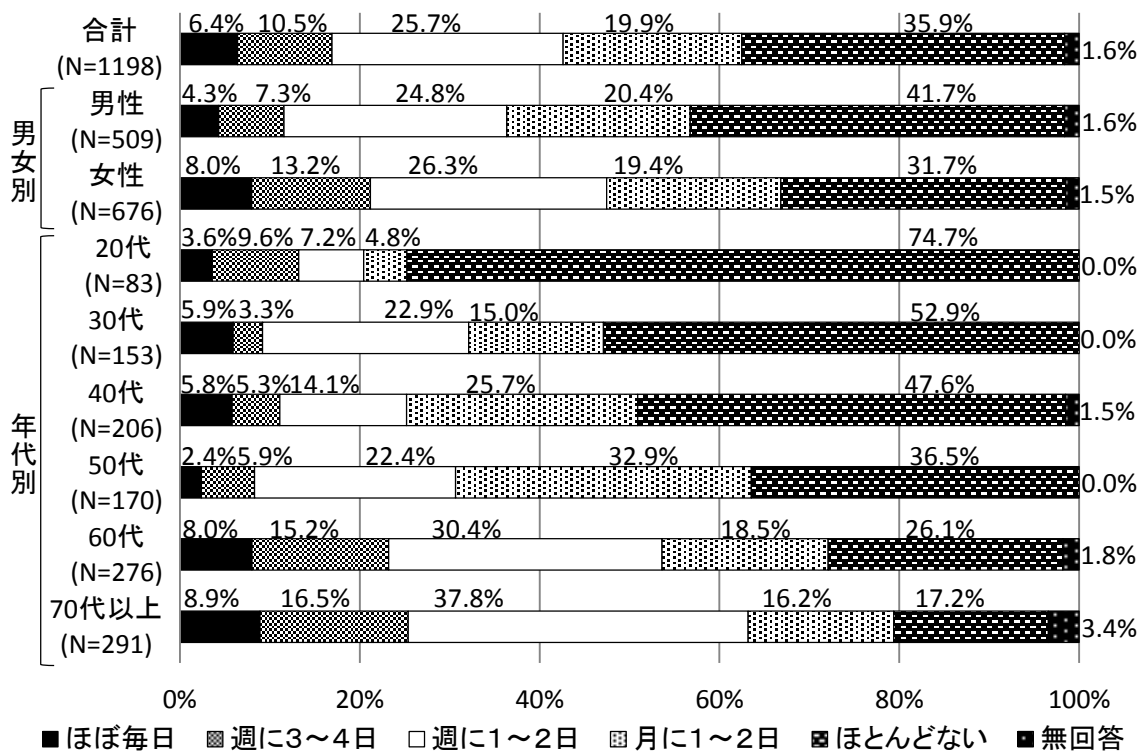


図 16 Q9 近所での世間話の頻度

Q10の近所づきあいを増やしたいかに関しては、「増やしたい」または「少し増やしたい」と回答した人の割合は、70代以上が28.9%と年代別で最も高い。男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」が最も高く6割から7割以上である。(図17)。

Q11の地域のつながりは必要かに関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「災害時に助け合うために必要だと思う」、「防犯のために必要だと思う」、「病気やけが等の緊急時に助け合うために必要だと思う」の順に高い割合である(図18)。

Q11を男女別で見ると、「子育てのために必要だと思う」において特に大きな男女差が見られ、男性が31.2%なのに対して女性では41.6%であり、女性の方が10ポイントほど高い。また、「地域の文化を維持・継承するために必要だと思う」では、男性が19.1%、女性が13.2%であり、男性の方が6ポイントほど高い(図19)。

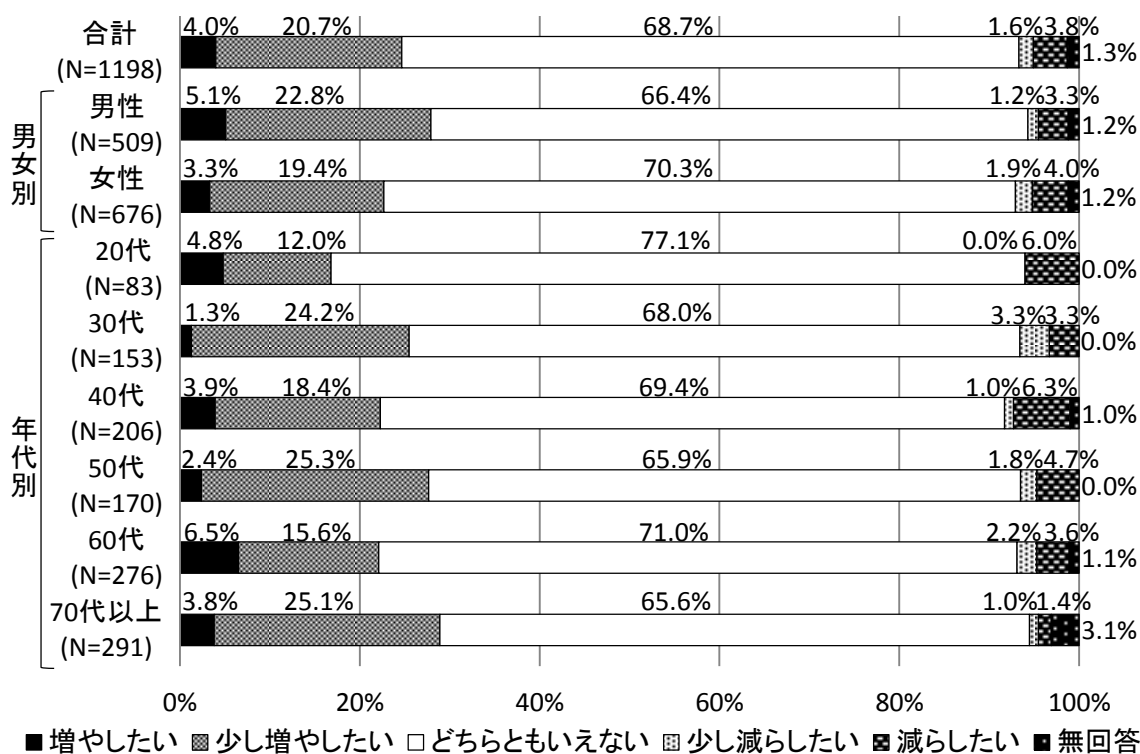


図17 Q10 近所づきあいを増やしたいか

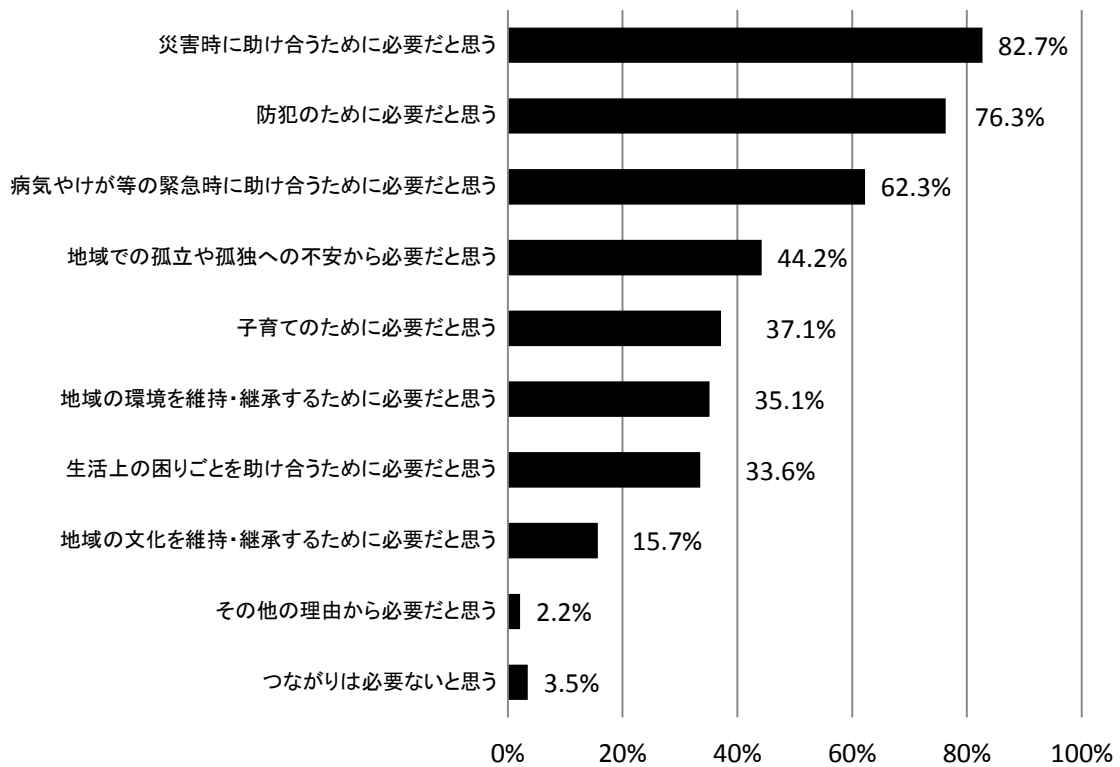


図 18 Q11 地域のつながりは必要か（全体 N=1198）

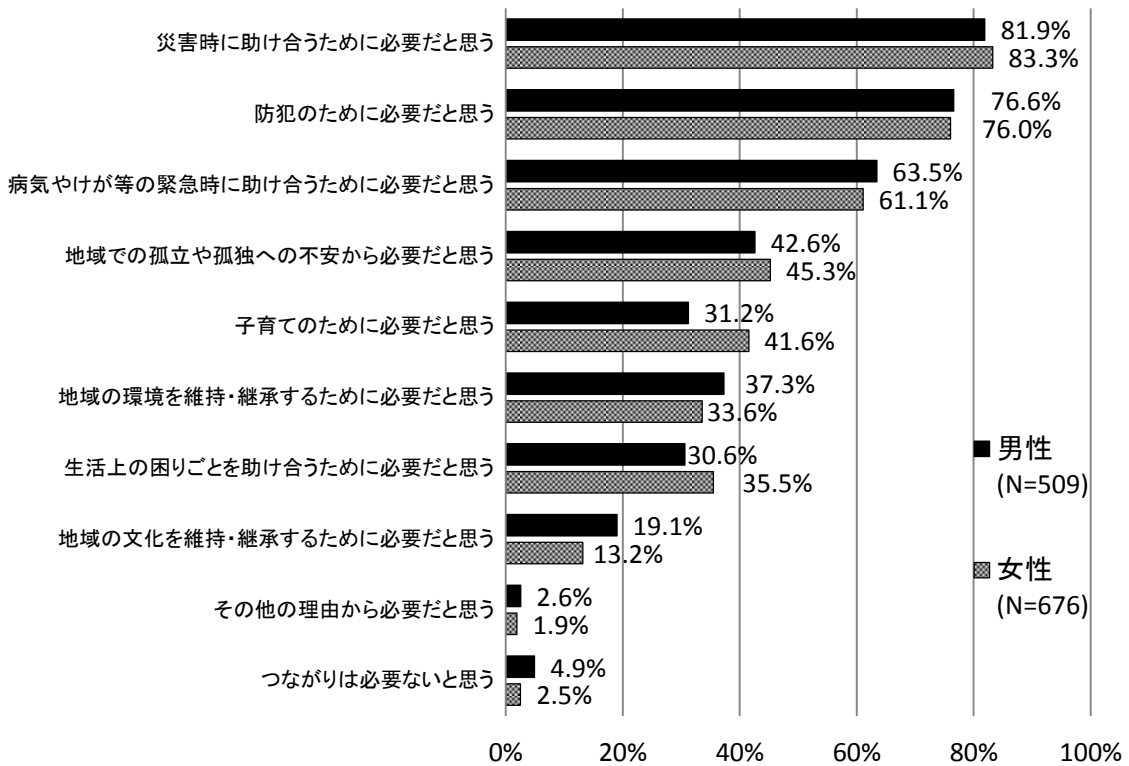


図 19 Q11 地域のつながりは必要か（男女別）

Q11 を年代別で見ると、「災害時に助け合うために必要だと思う」と「防犯のために必要だと思う」において、20代のみ他の年代に比べて10ポイント以上低い割合である。「病いやけが等の緊急時に助け合うために必要だと思う」においては、20代から50代は5割程度であるのに対して、60代以上では7割程度である。「子育てのために必要だと思う」においては、30代のみ6割以上であり、すべての年代で最も高い。また、「地域の環境を維持・継承するために必要だと思う」においては、20代では14.5%であるが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では47.1%である（図 20）。

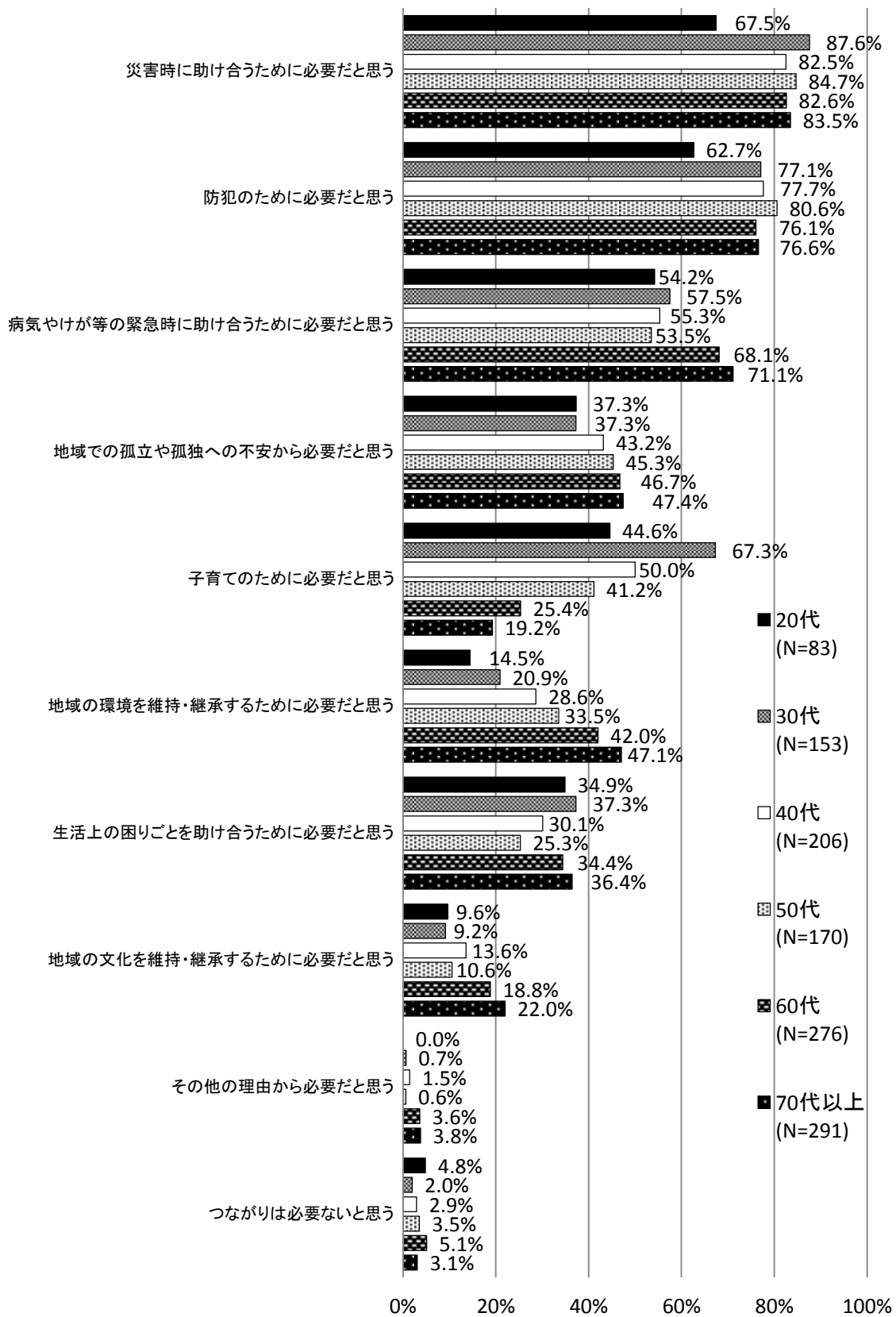


図 20 Q11 地域のつながりは必要か（年代別）

Q12A の電車に対する満足度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が7割以上である。20代は最も高く、83.1%である(図 21)。

Q12B のバスに対する満足度に関しては、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は、年代別で見ると、20代から60代では5割前後であるが、70代以上になると69.8%と大きく増加する(図 22)。

Q12C の図書館に対する満足度に関しては、「満足」または「やや満足」と回答した人の男女別の割合は、男性で41.9%であるのに対して女性では53.2%であり、女性の方が11ポイントほど高い。年代別で見ると、30代が55.5%と最も高い割合で、60代の43.8%まで年代が上がるごとに徐々に減少している。20代と70代以上はともに5割程度である(図 23)。

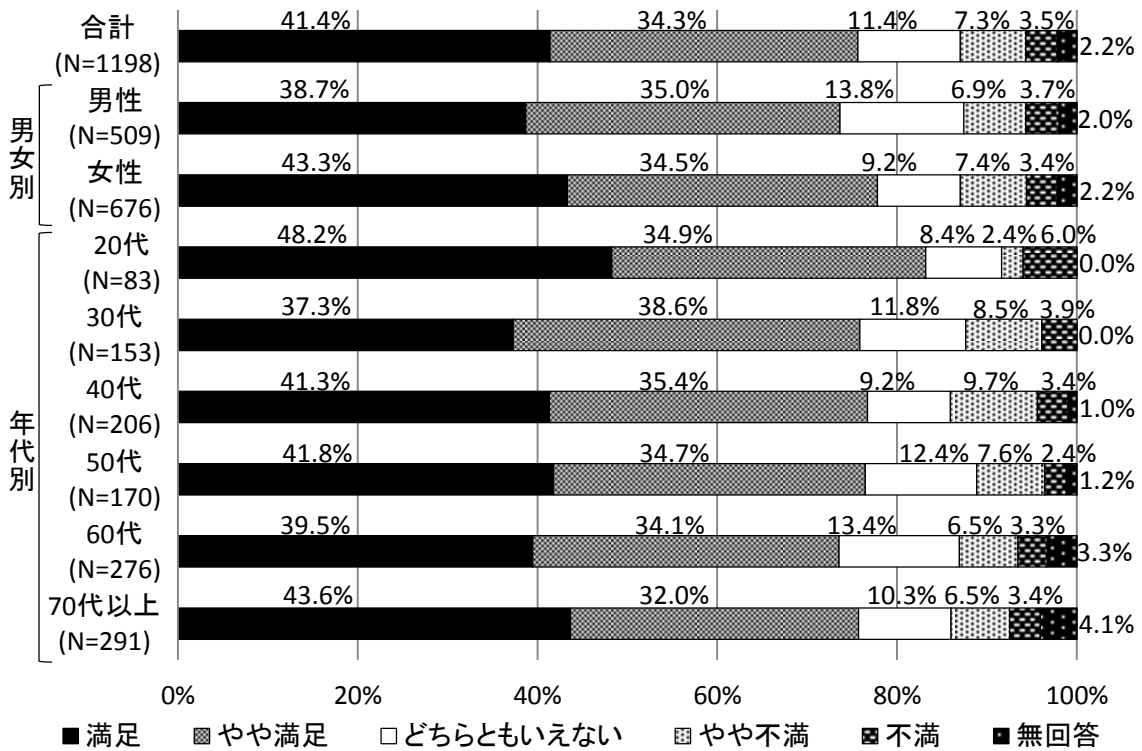


図 21 Q12A 交通や施設の満足度 電車

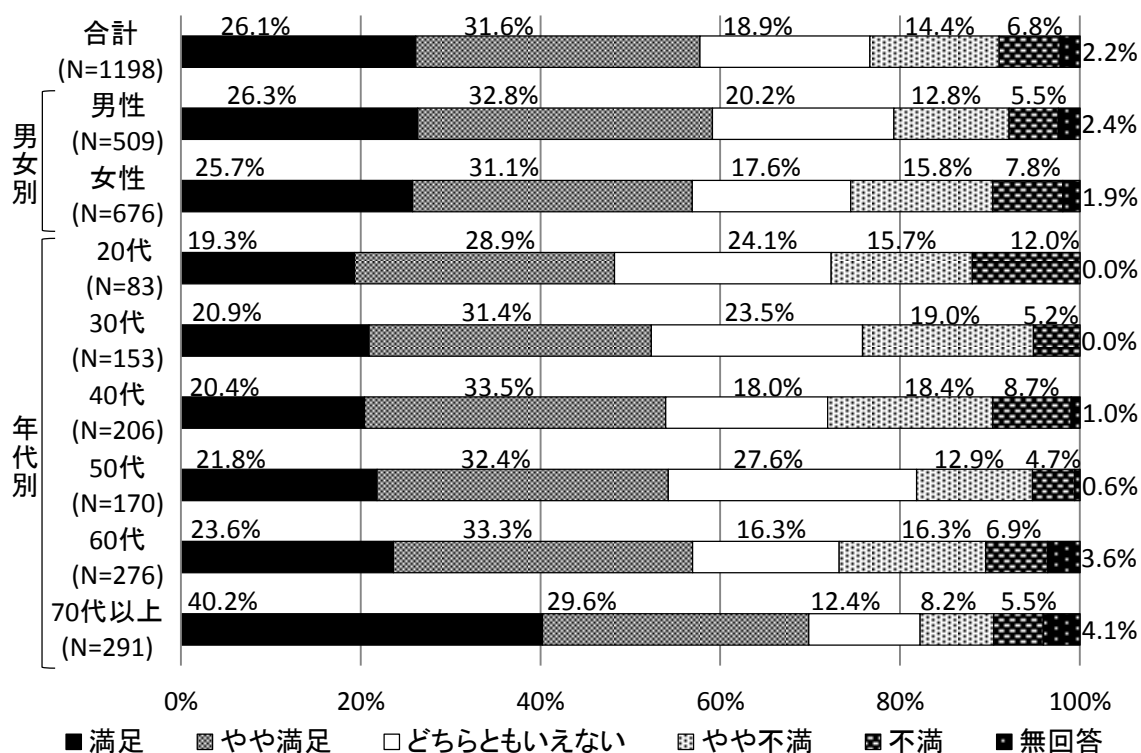


図 22 Q12B 交通や施設の満足度 バス

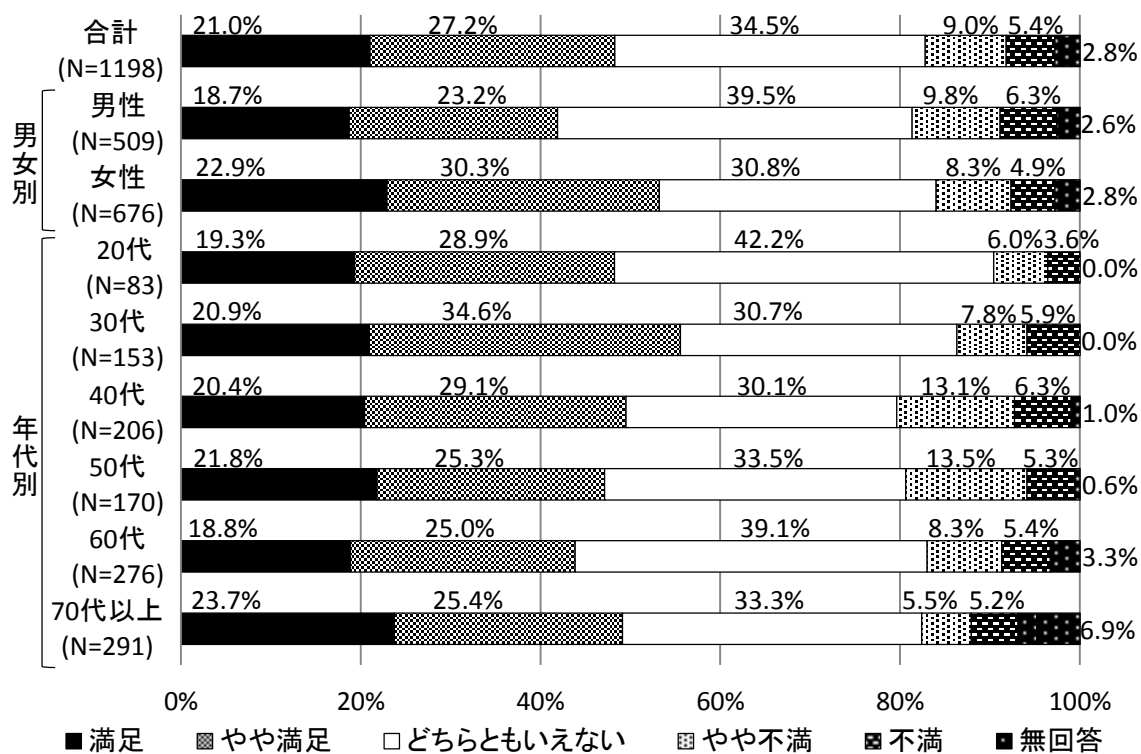


図 23 Q12C 交通や施設の満足度 図書館

Q12D の体育館に対する満足度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」の割合が最も高く 5 割から 6 割以上である（図 24）。

Q12E の市の行政サービスに対する満足度に関しては、70 代以上では、「やや満足」が 36.4%と最も高い割合である。また、男性と 50 代でのみ、「不満」または「やや不満」の割合が 2 割以上である。70 代以上を除く男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」が最も高い割合である（図 25）。

Q13 の地域活動参加頻度に関しては、年代別で見ると、「よく参加している」または「ときどき参加している」と回答した人の割合は、年代が上がるごとに増加している。反対に、「参加したことはない」の割合が 20 代で 60.2%と最も高く、年代が上がるごとに減少している。70 代以上では 13.7%である。ただし、「あまり参加していない」の割合については、そのような一定の変化は見られない（図 26）。

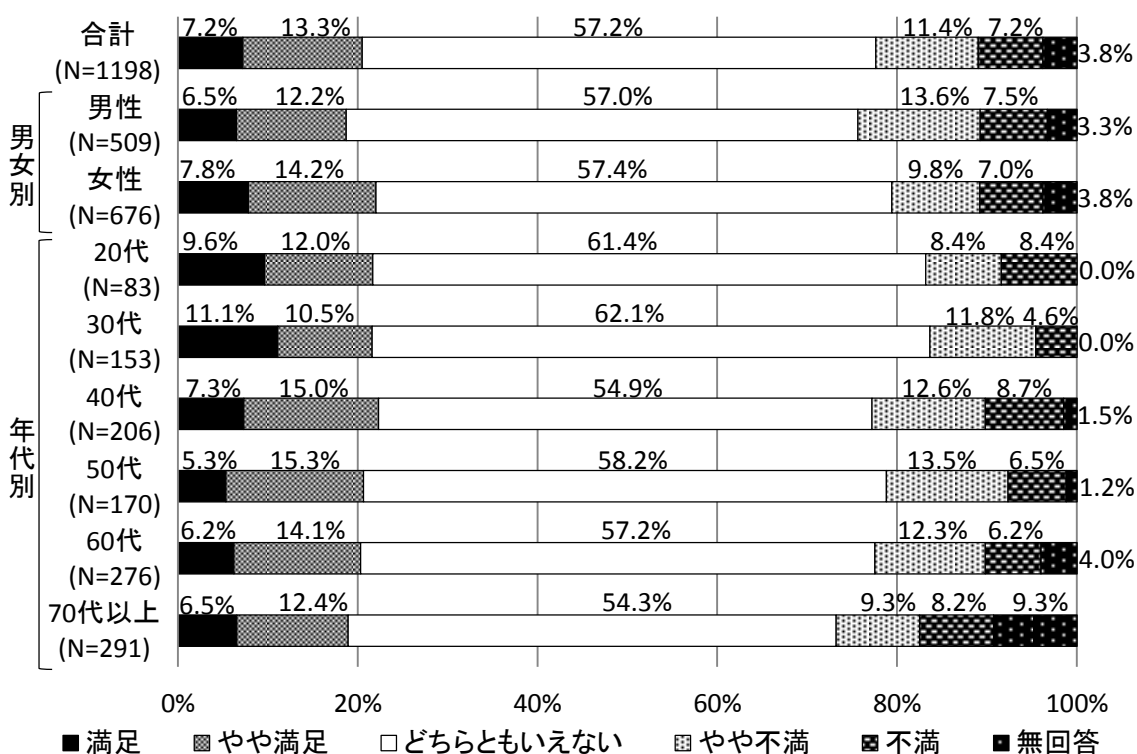


図 24 Q12D 交通や施設の満足度 体育館

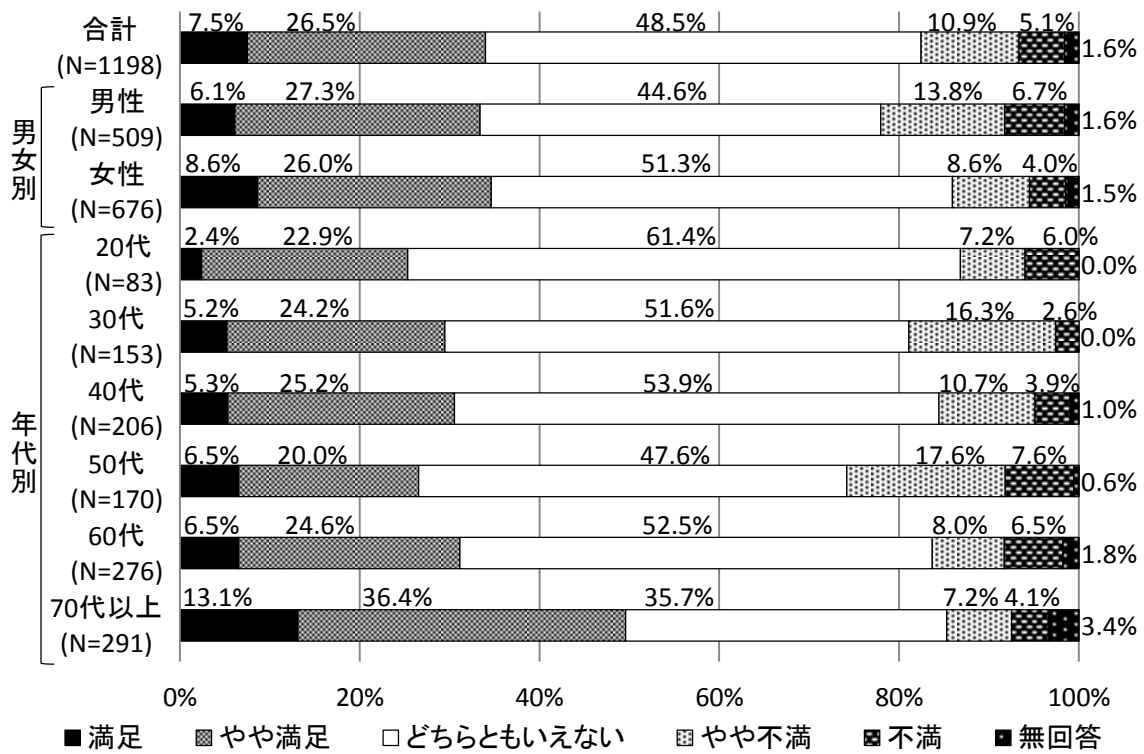


図 25 Q12E 交通や施設の満足度 市の行政サービス

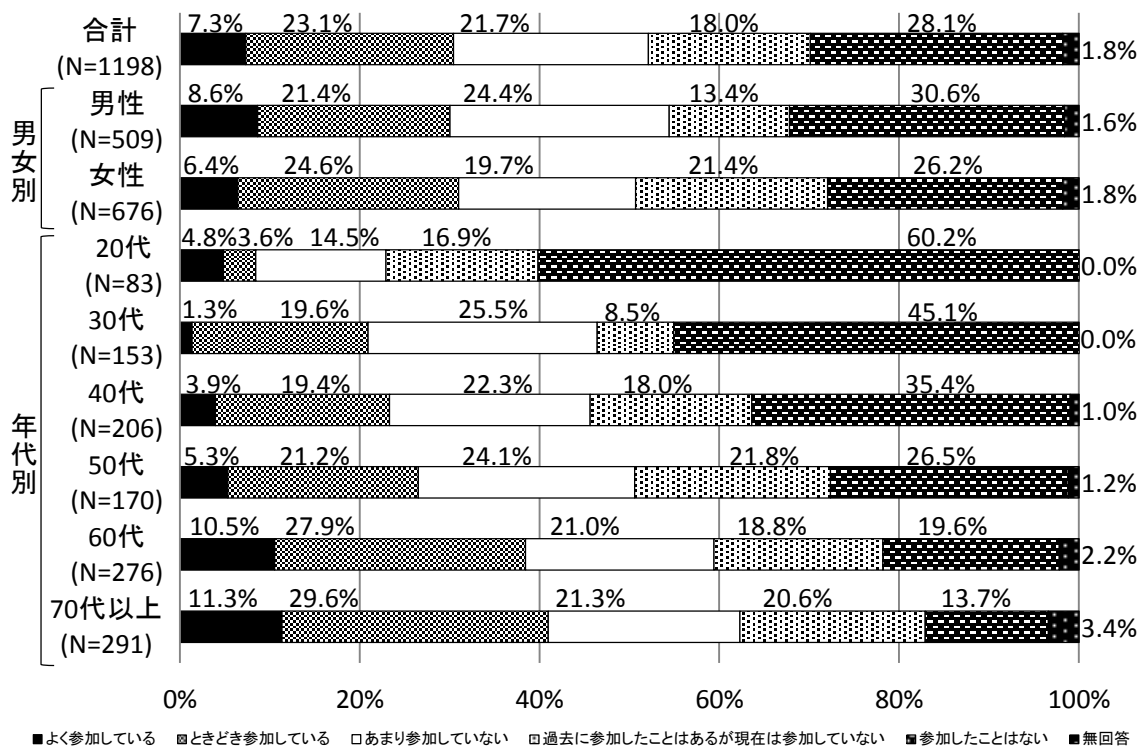


図 26 Q13 地域活動参加頻度

Q14 の清掃活動参加頻度に関しては、合計および男性・女性で見ると、参加している人と参加していない人がおよそ半々の割合である。年代別で見ると、「参加していない」の割合が20代で91.6%と最も高い。そして年代が上がるごとに減少していき、70代以上では35.7%である。「参加していない」を除くと、いずれの年代においても「1~2回」の割合が最も高い(図27)。

Q15 の居住地で参加している地域活動に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「自治会・地区コミュニティの活動」と「何も参加していない」のみが4割以上であり特に多い。次いで多いのは「防犯・防災・消防活動」の11.1%である(図28)。

Q15 を男女別で見ると、「自治会・地区コミュニティの活動」において男女差が最も大きく、男性が36.7%であるのに対して女性は42.6%であり、女性の方が6ポイントほど高い割合である。また、「防犯・防災・消防活動」では、男性が14.3%であるのに対して女性は8.9%であり、男性の方が5ポイントほど高い。なお、「何も参加していない」の割合は男性の方が女性よりも4ポイントほど高い(図29)。

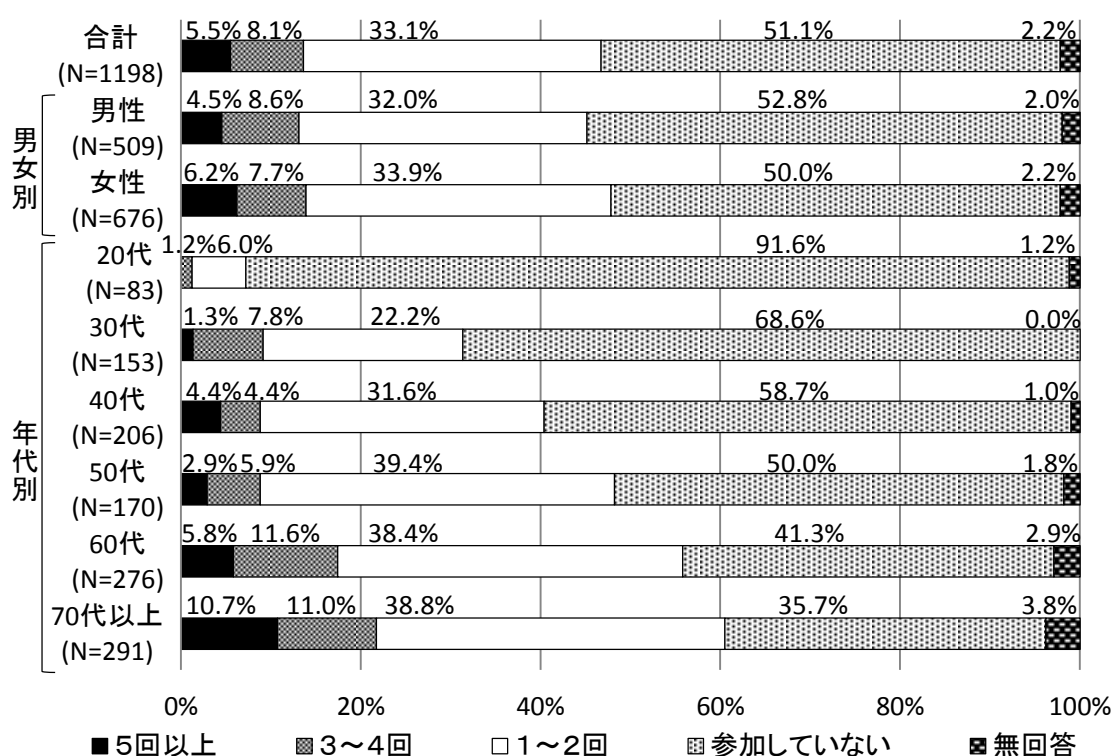


図27 Q14 清掃活動参加頻度

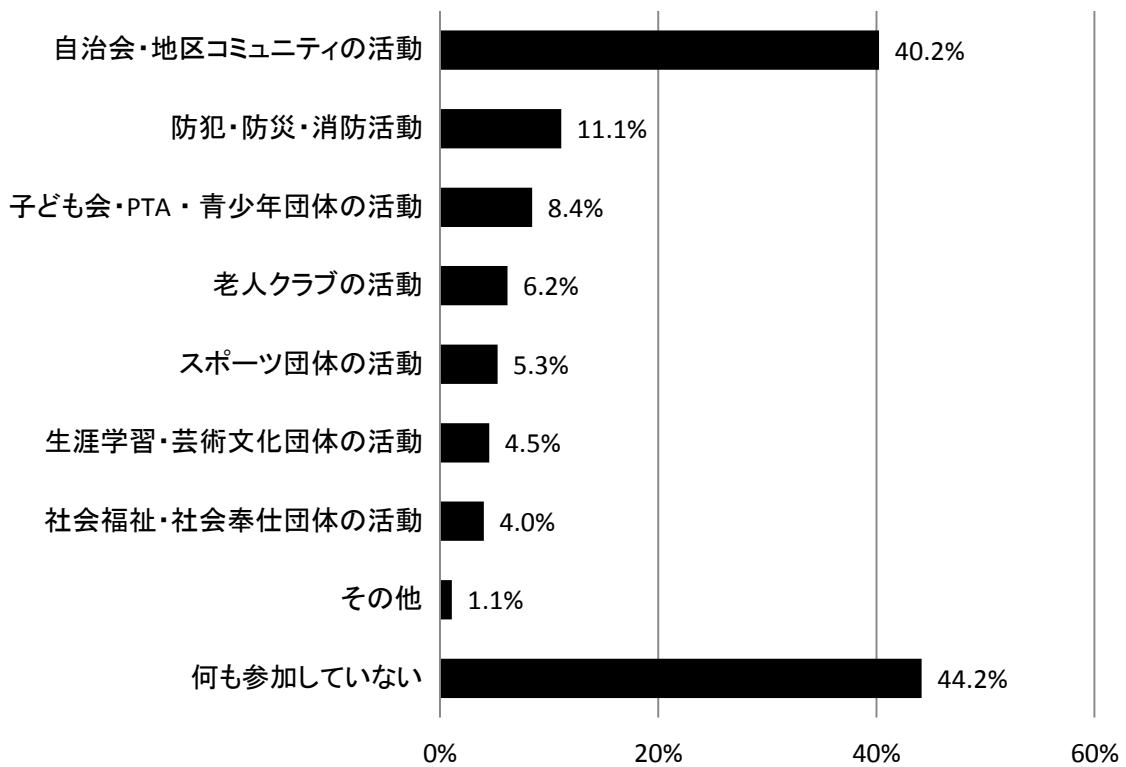


図 28 Q15 居住地域で参加している地域活動（全体 N=1198）

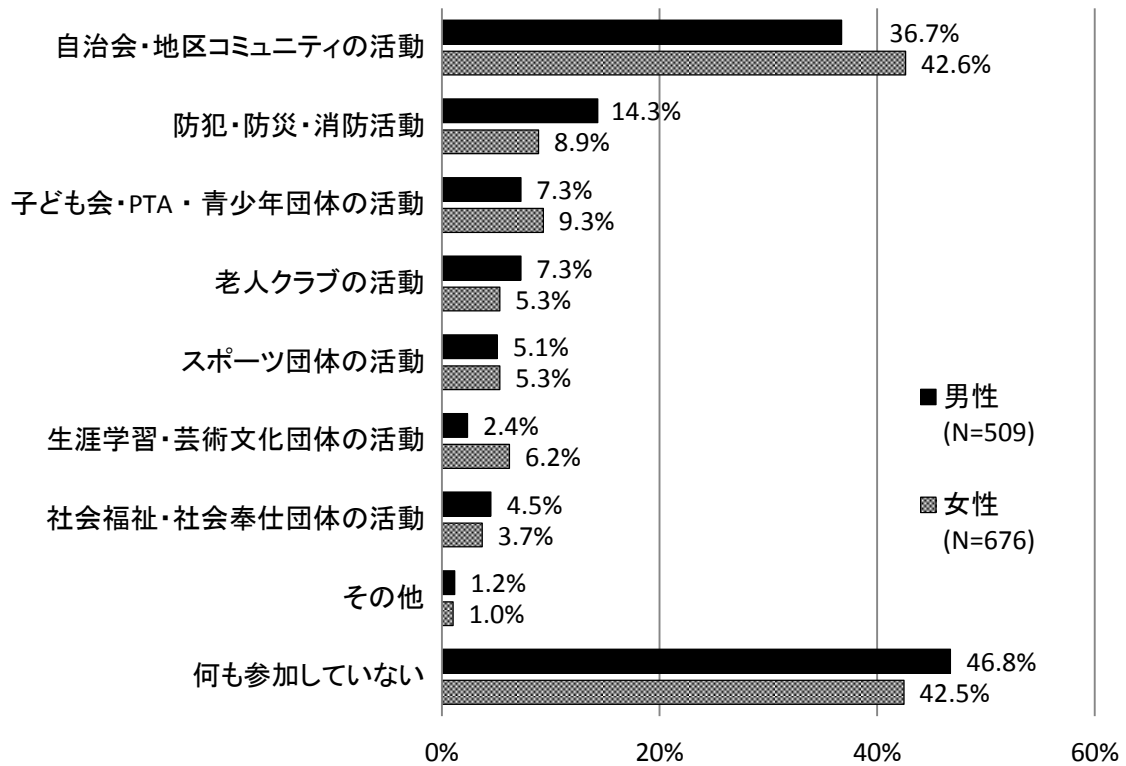


図 29 Q15 居住地域で参加している地域活動（男女別）

Q15 を年代別で見ると、すべての地域活動において 20 代が最も低い割合であり、すべての地域活動において 5%未満である。なお、20 代の「何も参加していない」の割合は 84.3%と、全年代中で最も高い割合である。また、「自治会・地区コミュニティの活動」と「防犯・防災・消防活動」と「生涯学習・芸術文化団体の活動」では、年代が上がるごとに割合が増加している。一方で、「子ども会・PTA・青少年団体の活動」では、40 代以上において、年代が上がるごとに割合が減少している（図 30）。

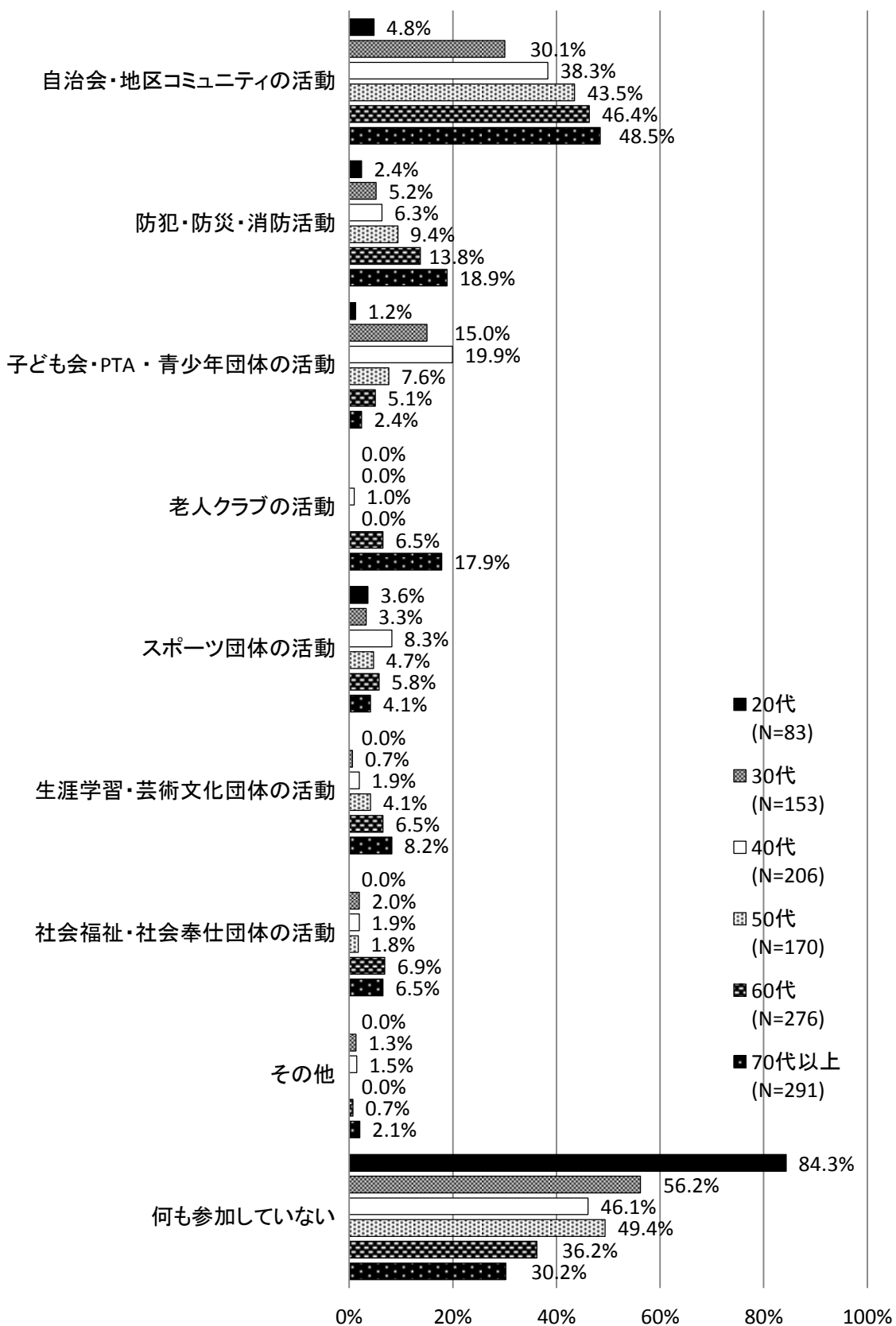


図 30 Q15 居住地域で参加している地域活動（年代別）

Q16 の最も重要な地域活動に関しては、20 代を除く男女別・年代別のすべての層で「自治会・地区コミュニティの活動」が最も高い割合である。20 代では、「自治会・地区コミュニティの活動」と「スポーツ団体の活動」がともに 25.0%である。男女別で見ると、男性では「防犯・防災・消防活動」、女性では「子ども会・PTA・青少年団体の活動」がそれぞれ 1 割以上 2 割未満である。年代別で見ると、30 代と 40 代では「子ども会・PTA・青少年団体の活動」、50 代では「防犯・防災・消防活動」がそれぞれ 2 割以上 3 割未満である (表 6)。

Q17 の地域活動や団体運営の課題に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「活動を支える人が高齢化している」、「活動を支える人が少ない」、「参加者が増えない、あるいは減少している」の順で高い割合である。特に「活動を支える人が高齢化している」は 61.3%と、他の項目よりも 27 ポイント以上高い (図 31)。

Q17 を男女別で見ると、「活動を支える人が高齢化している」、「活動を支える人が少ない」、「参加者が増えない、あるいは減少している」、「役員の事務負担が大きい」において男女差が大きく、いずれも 10 ポイント前後の差をつけて男性の方が高い割合である (図 32)。

表 6 Q16 最も重要な地域活動

		自治会・地区 コミュニティ の活動	子ども会・ PTA・青少年 団体の活動	防犯・防災・ 消防活動	社会福祉・ 社会奉仕団 体の活動	生涯学習・ 芸術文化団 体の活動	スポーツ団体 の活動	老人クラブ の活動	その他	無回答
合計 (N=597)		49.9	9.0	12.6	3.7	4.2	3.7	3.7	1.2	12.1
男女別	男性 (N=239)	51.0	5.4	17.2	3.8	3.3	4.2	2.5	1.7	10.9
	女性 (N=351)	49.3	11.4	9.4	3.7	4.8	3.1	4.3	0.9	13.1
年代別	20代 (N=8)	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0	12.5	0.0	37.5
	30代 (N=61)	45.9	27.9	8.2	4.9	0.0	6.6	0.0	1.6	4.9
	40代 (N=106)	48.1	25.5	9.4	1.9	1.9	3.8	0.0	1.9	7.5
	50代 (N=83)	57.8	8.4	21.7	1.2	4.8	2.4	0.0	0.0	3.6
	60代 (N=152)	55.9	0.0	14.5	4.6	8.6	2.6	2.0	0.7	11.2
	70代以上 (N=176)	46.0	1.1	10.2	5.1	2.8	2.3	9.7	1.7	21.0

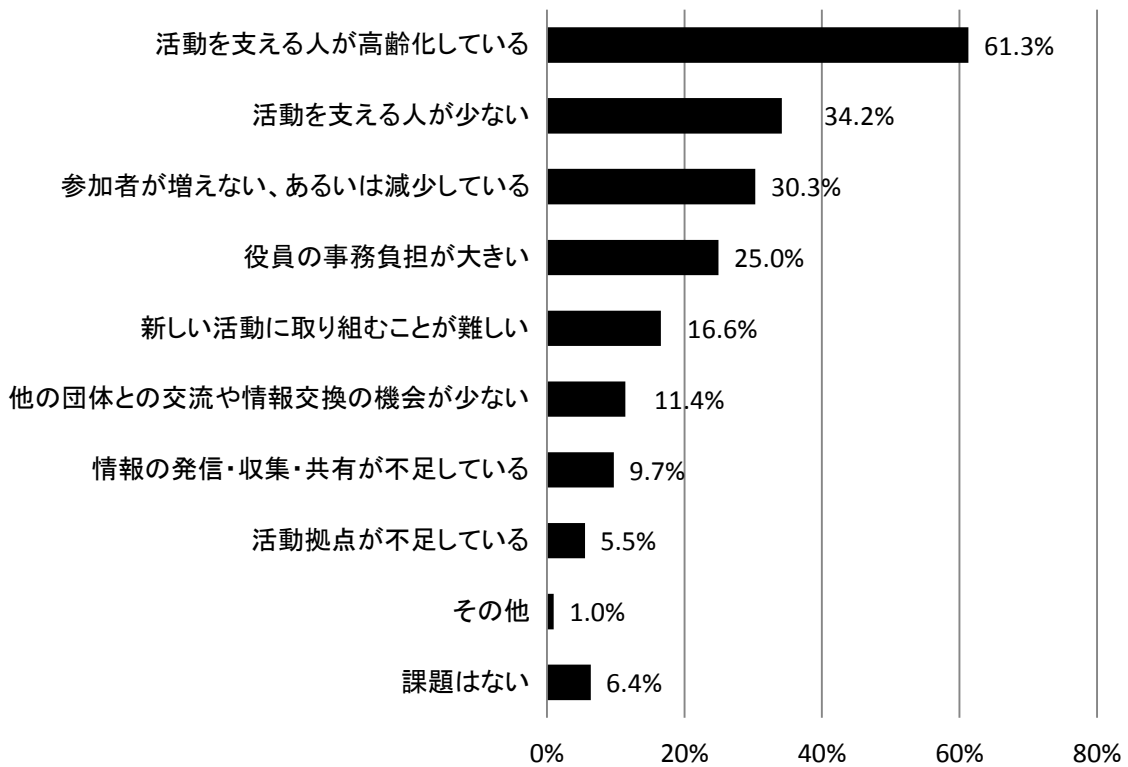


図 31 Q17 地域活動や団体運営の課題（全体 N=597）

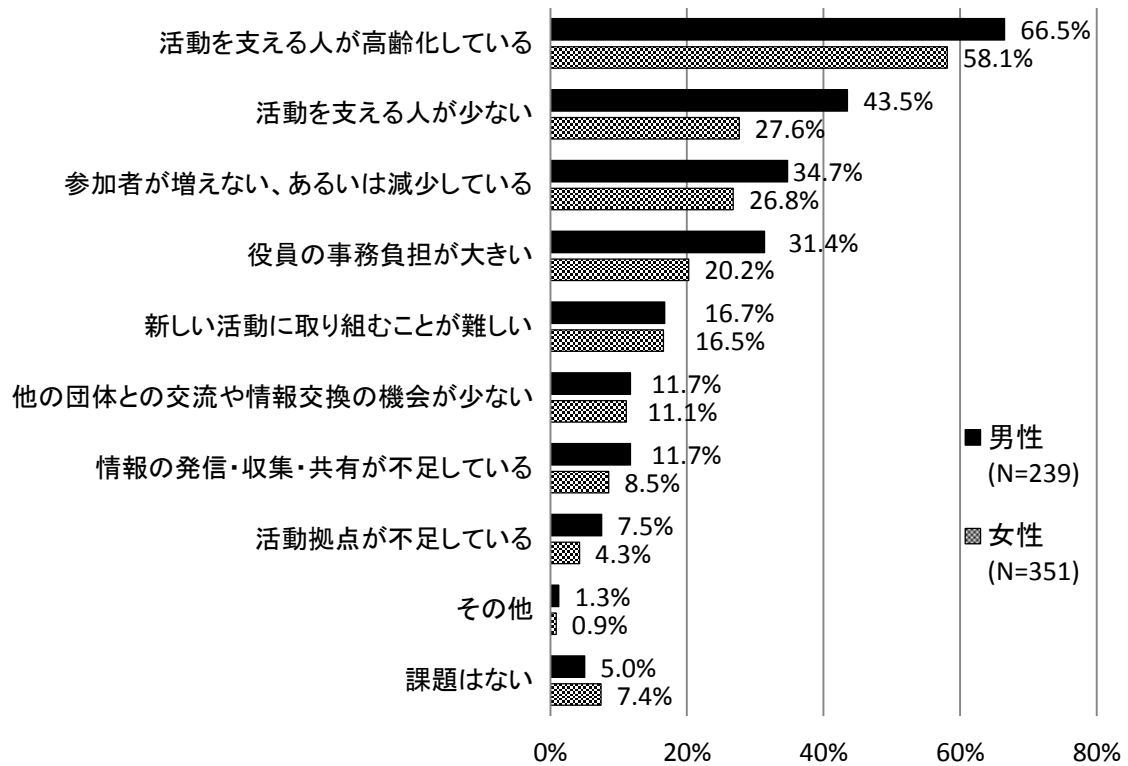


図 32 Q17 地域活動や団体運営の課題（男女別）

Q17 を年代別で見ると、「活動を支える人が高齢化している」の割合は 20 代では 37.5% であるが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 71.0% である。また、「新しい活動に取り組むことが難しい」、「情報の発信・収集・共有が不足している」、「活動拠点が不足している」において、20 代が最も高い割合である。30 代については、「役員の事務負担が大きい」で 41.0% と全年代中で最も高い割合であるが、「参加者が増えない、あるいは減少している」では 14.8% と全年代中で最も低い割合である（図 33）。

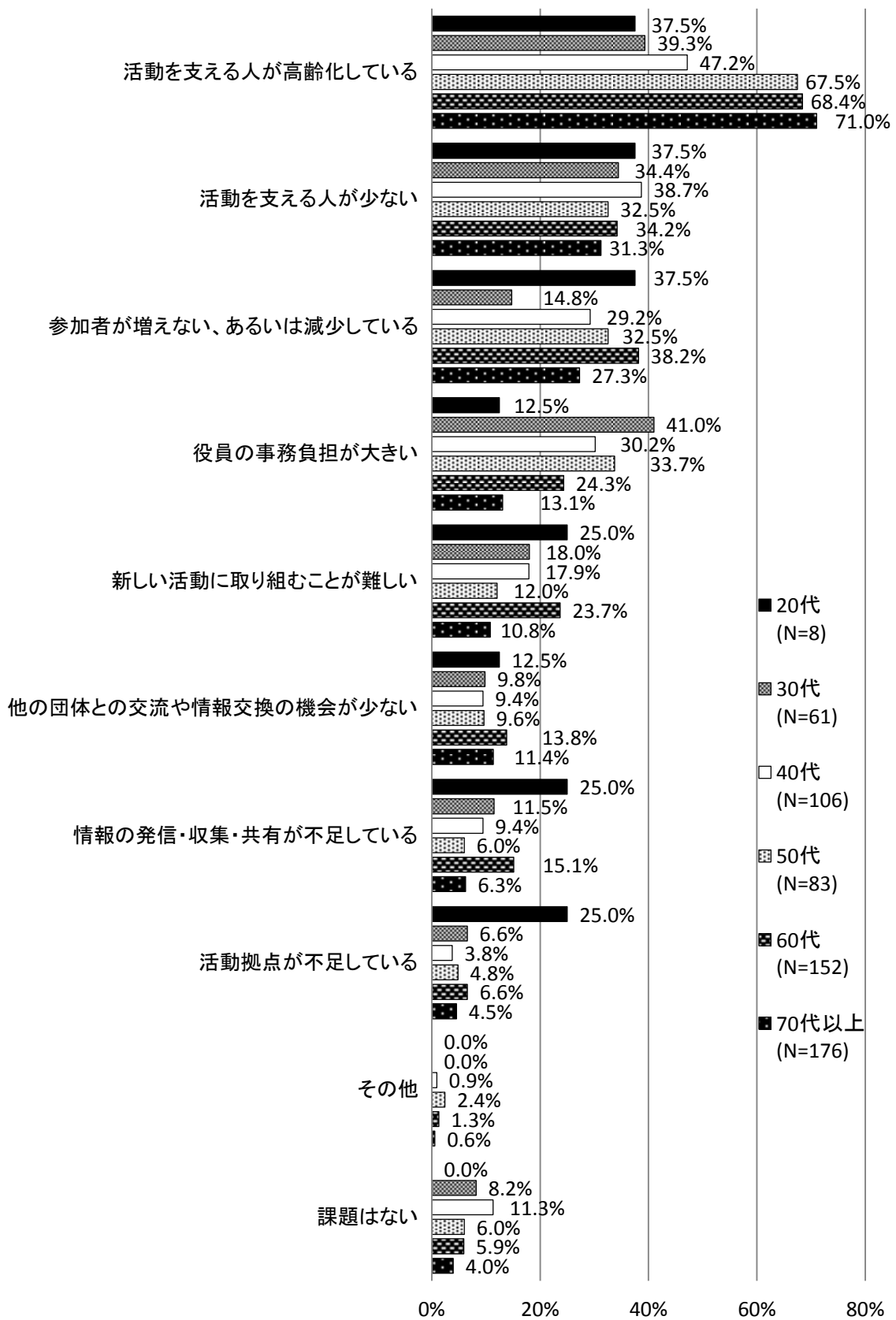


図 33 Q17 地域活動や団体運営の課題（年代別）

Q18 の地域活動への参加に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「忙しくて参加するほど時間に余裕がない」、「役員などになると大変だと思う」、「参加するきっかけが得られない」の順で高い割合である（図 34）。

Q18 を男女別で見ると、「身近に参加したいと思う活動や団体がない」でのみ女性の方が男性よりも高い割合である。その差は 0.7 ポイントである。「参加すること自体に興味や関心がない」で最も男女差が大きく、男性が 16.7%であるのに対して女性では 13.0%であり、男性の方が 4 ポイントほど高い（図 35）。

Q18 を年代別で見ると、「忙しくて参加するほど時間に余裕がない」、「参加するきっかけが得られない」、「一緒に参加できる仲間がいない」、「団体や活動内容に関する情報がない」、「参加すること自体に興味や関心がない」、「会費等の支払いに負担を感じる」において 20 代が最も高い割合である。特に「一緒に参加できる仲間がいない」と「参加すること自体に興味や関心がない」において、他の年代に比べて 10 ポイントほど高い割合である（図 36）。

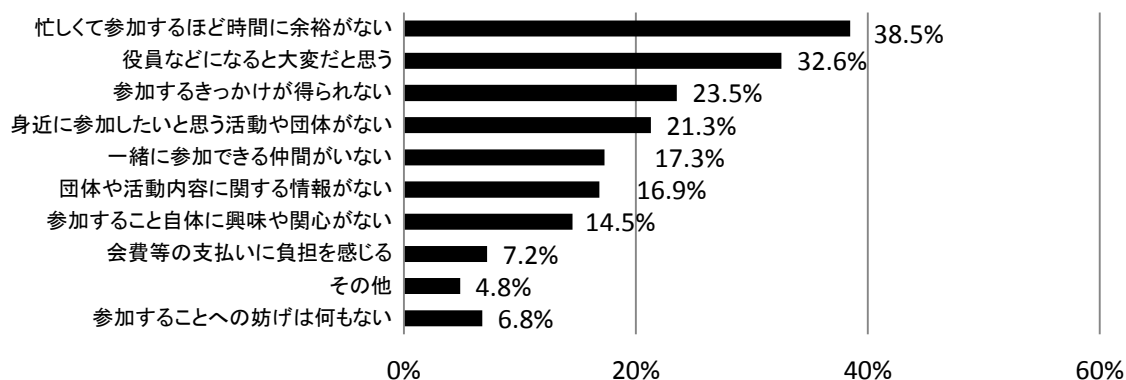


図 34 Q18 地域活動への参加について (N=1198)

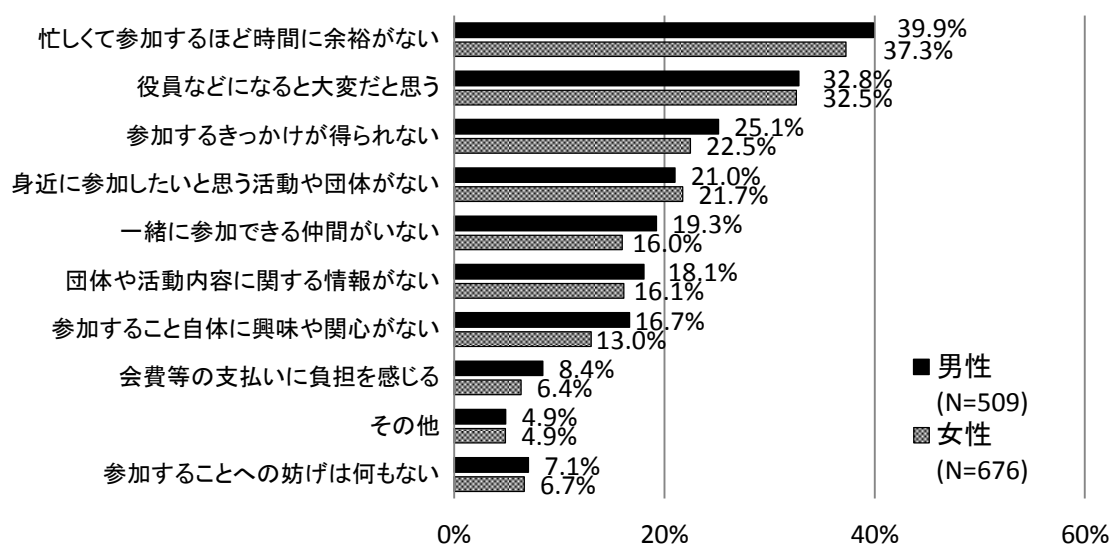


図 35 Q18 地域活動への参加について (男女別)

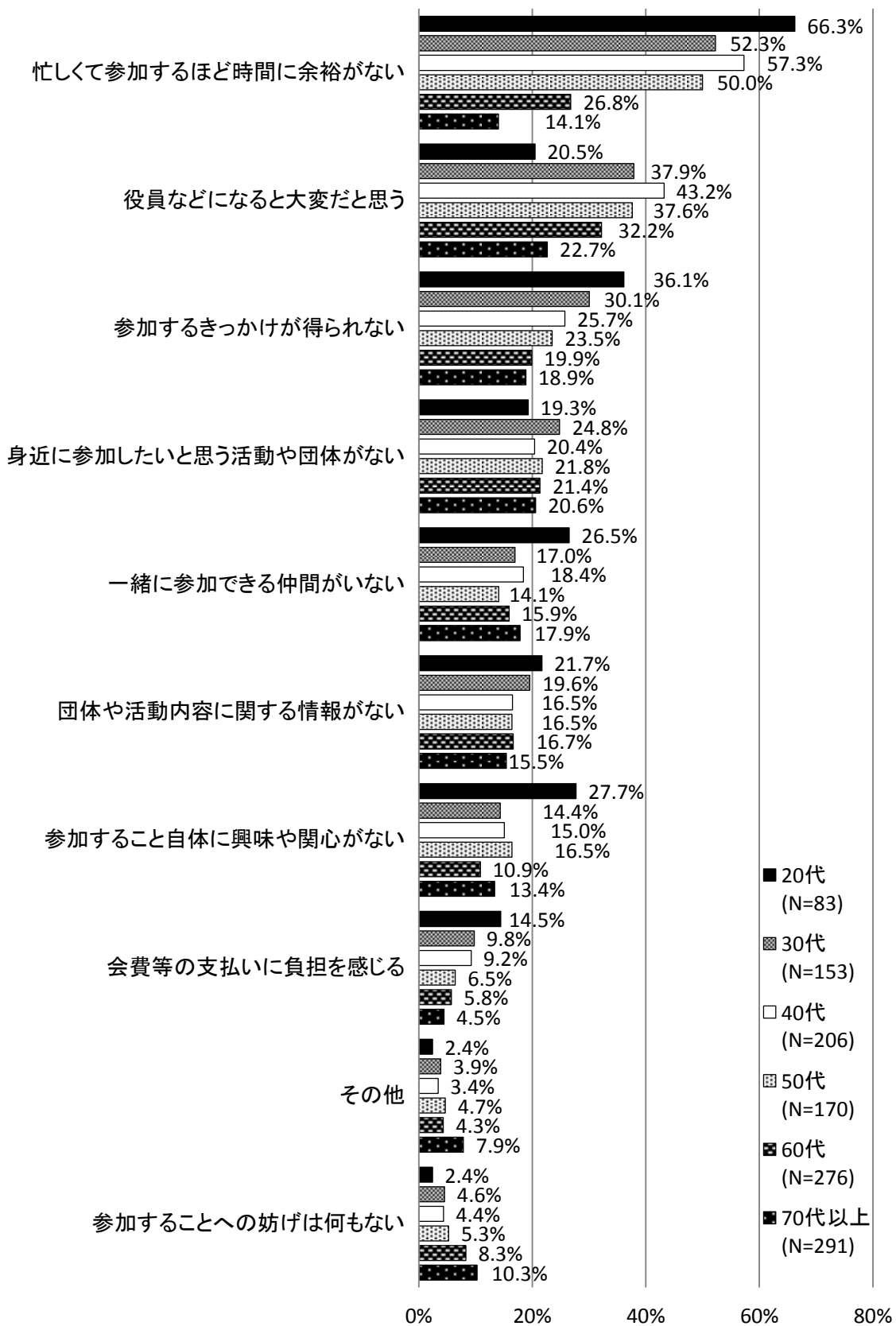


図 36 Q18 地域活動への参加について（年代別）

Q19の高槻市に愛着を感じるかに関しては、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は、30代を除く男女別・年代別のすべての層で8割以上である。30代では77.8%である。特に20代が最も高い割合であり、89.2%である（図37）。

Q20のはにたんに愛着を感じるかに関しては、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は、合計では51.3%である。男女別で見ると、男性で43.8%、女性で57.1%と、女性の方が13ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、30代が最も高く68.0%である。それ以上の年代では徐々に減少し、60代と70代以上ではおよそ4割である（図38）。

Q21のゴミを分別している方かに関しては、合計もしくは男性・女性では「そう思う」の割合は5割から6割である。年代別で見ると、「そう思う」の割合は20代では27.7%であるが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では72.9%である。また、「あまりそう思わない」と「そう思わない」の合計割合では、20代でのみ1割を超える（図39）。

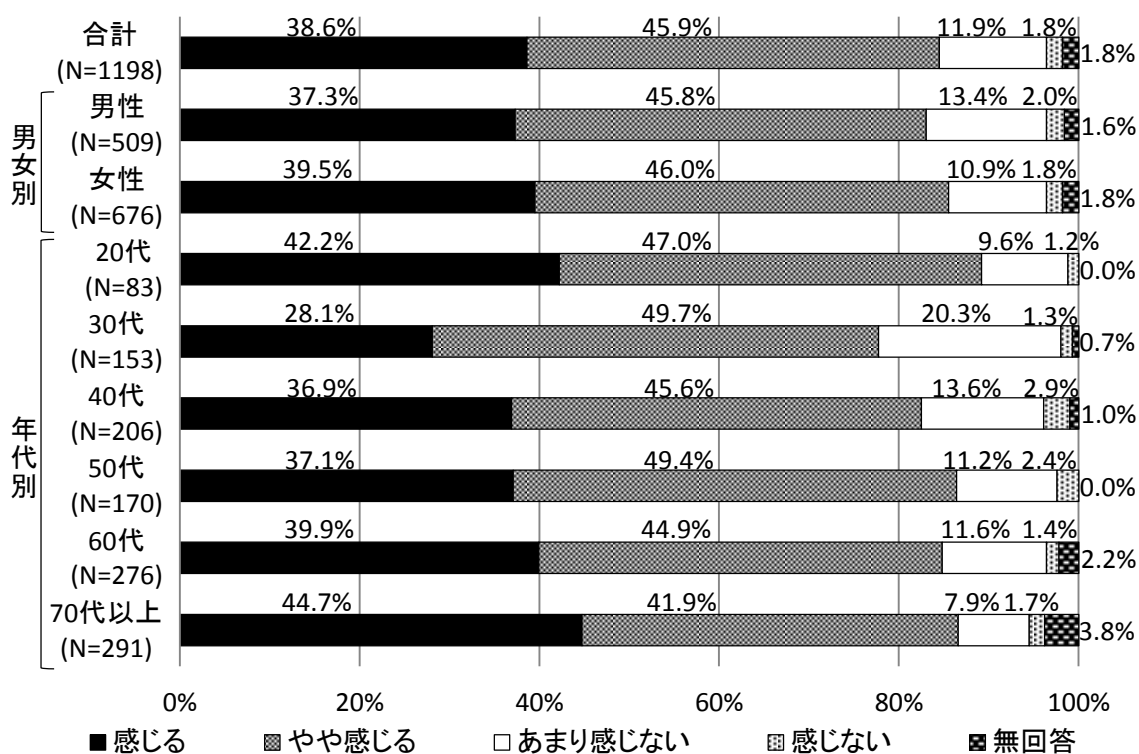


図37 Q19 高槻市に愛着を感じるか

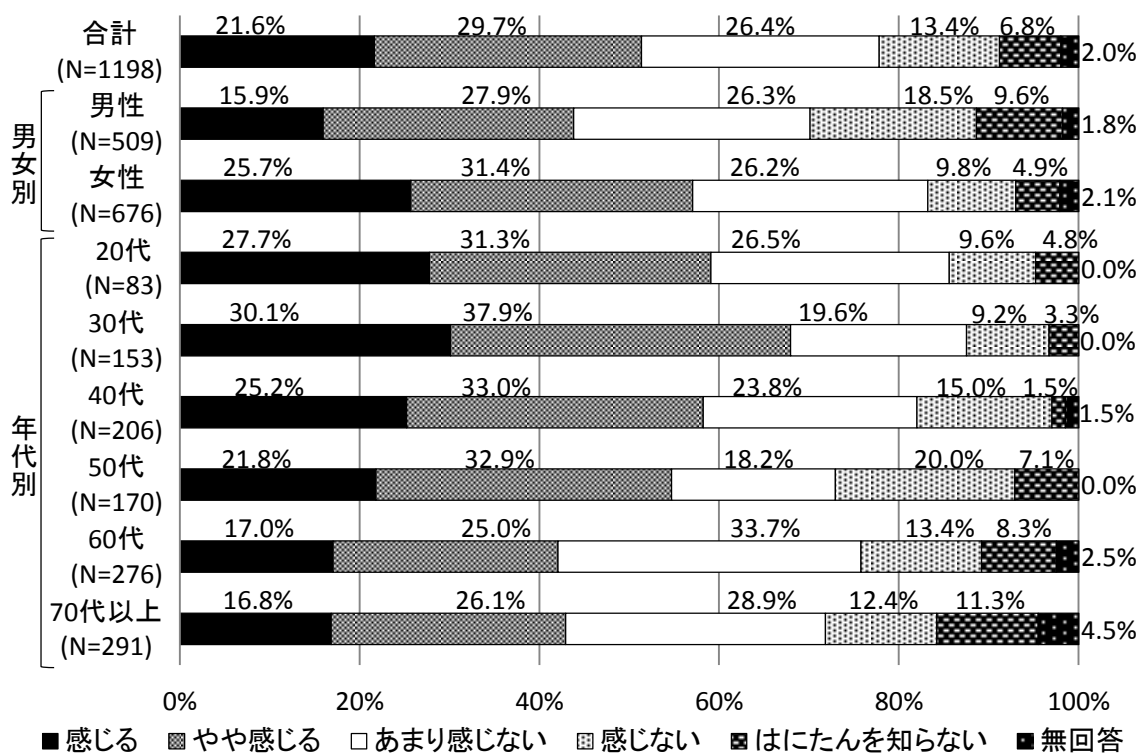


図 38 Q20 はにたんを愛着を感じるか

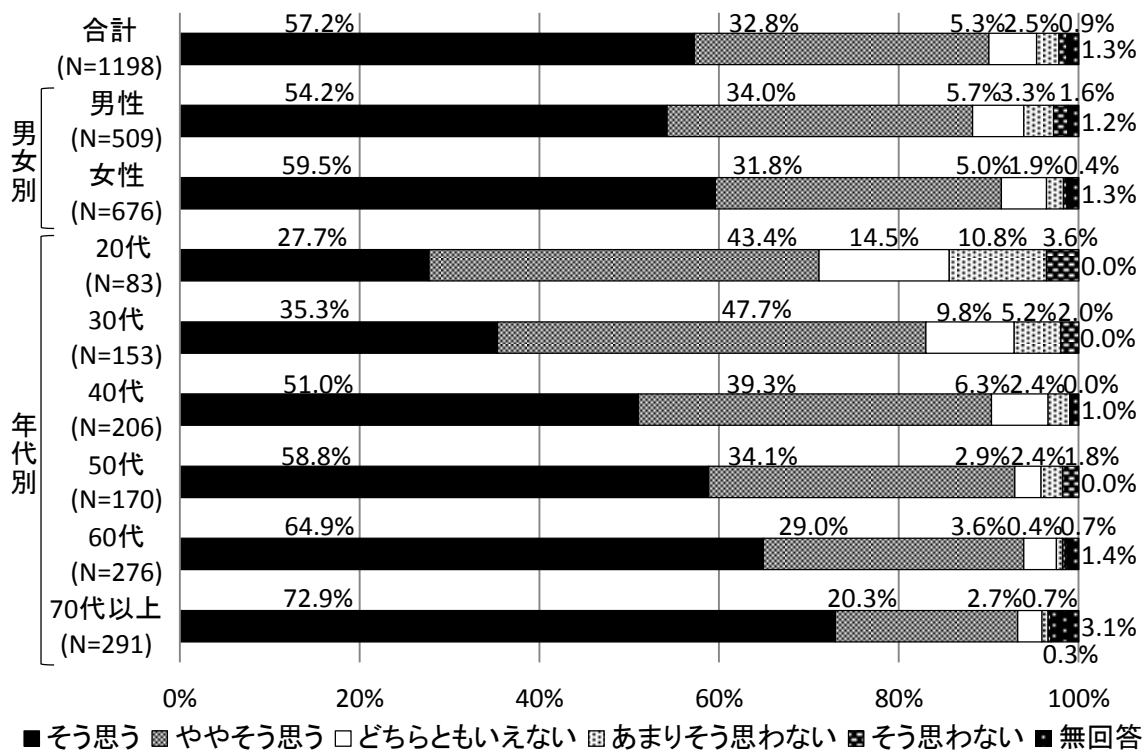


図 39 Q21 ゴミを分別している方か

Q22 のゴミを出さないように心がけているかに関しては、「かなり心がけている」または「ある程度心がけている」と回答した人の割合は、合計および男性・女性では 7 割から 8 割である。その割合を年代別で見ると、20 代では 47.0%であるが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 90.3%である。「まったく心がけていない」の割合は 20 代で最も高く、唯一 1 割を超える（図 40）。

Q23 の公共交通機関を利用するよう心がけているかに関しては、「かなり心がけている」または「ある程度心がけている」と回答した人の割合は、合計および男性・女性では 6 割程度である。年代別で見ると、70 代以上が 80.8%と最も高い割合である。30 代と 40 代では 5 割程度と最も低い（図 41）。

Q24 のバスの乗客はマナーを守っているかに関しては、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、70 代以上でのみ 6 割以上である。70 代以上を除く男女別・年代別のすべての層では 5 割から 6 割である（図 42）。

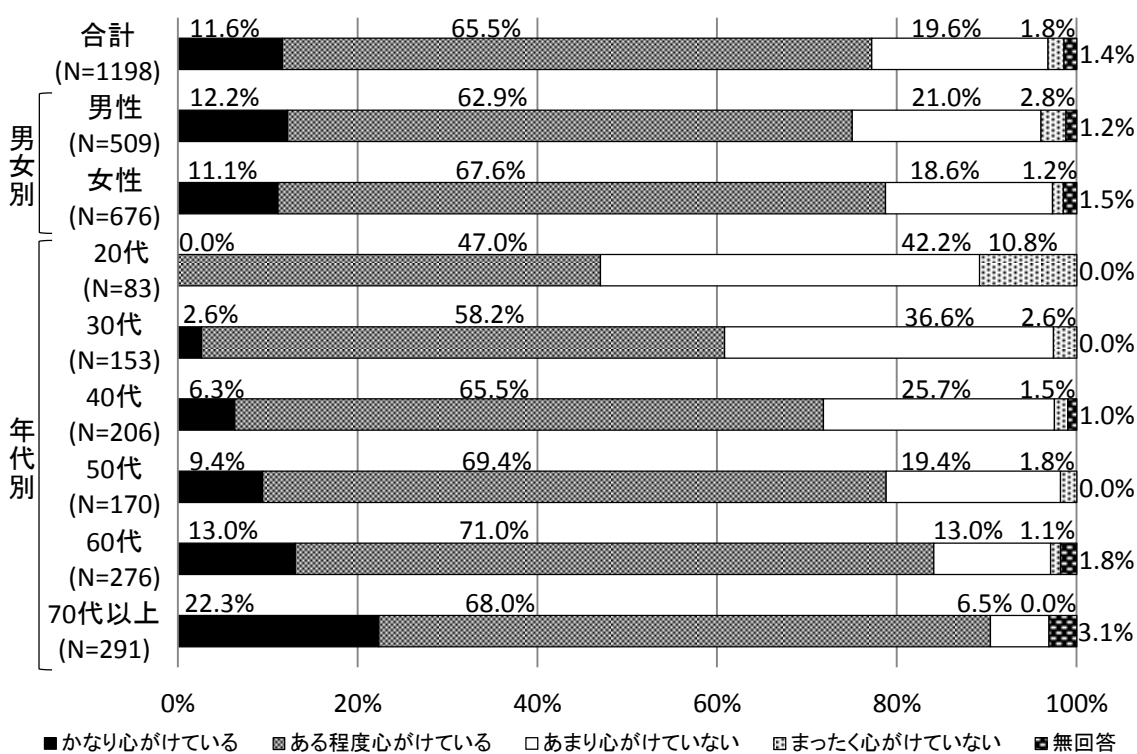


図 40 Q22 ゴミを出さないように心がけているか

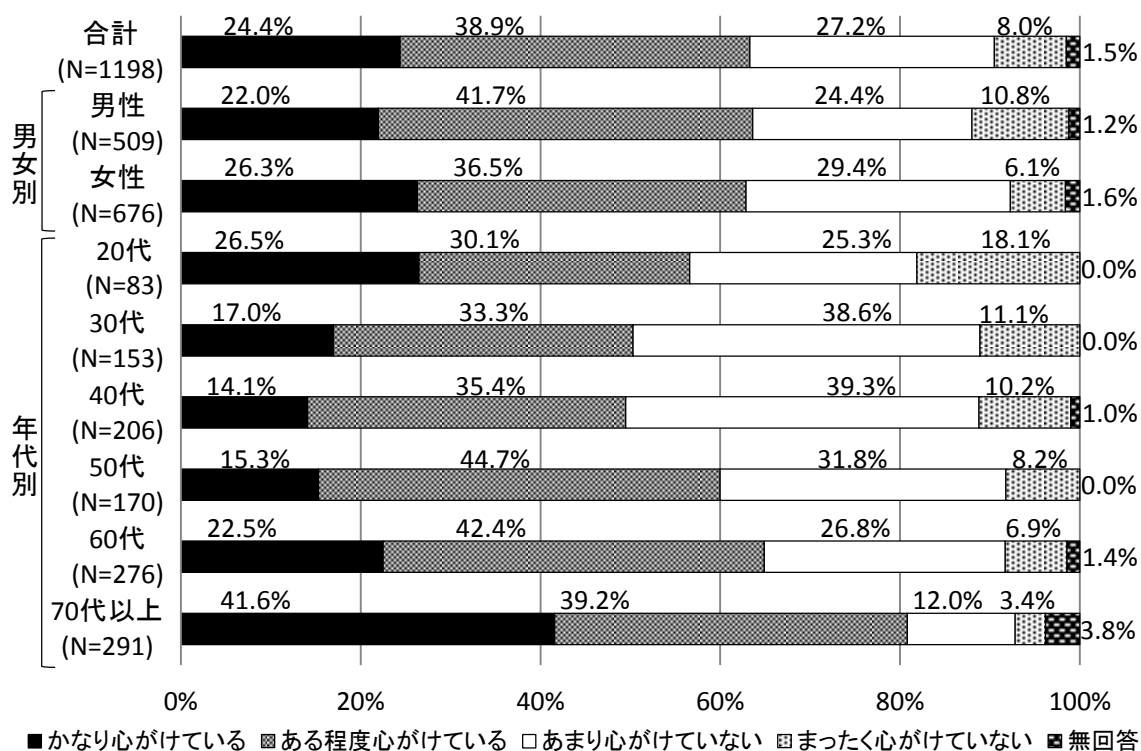


図 41 Q23 公共交通機関を利用するよう心がけているか

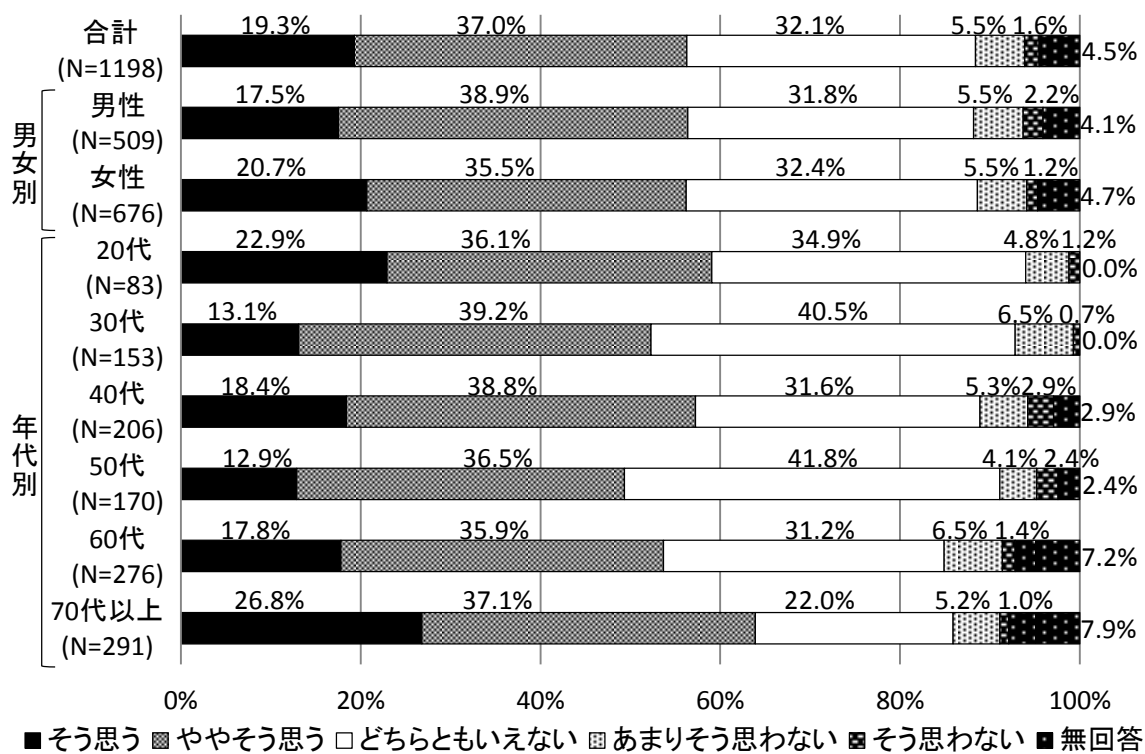


図 42 Q24 バスの乗客はマナーを守っているか

Q25 の市バスの利用頻度に関しては、合計で見ると、「月に1~2日」以上利用する割合は51.0%である。年代別で見ると、「週に1~2日」の割合は20代から60代では1.5割以下であるが、70代以上でのみ26.8%である。また、「年に1~2日」の割合は、20代から60代では2.5割以上であるが、70代以上でのみ15.5%である。「利用しない」の割合は20代で最も高く28.9%である（図43）。

Q26 の通学・通勤をしているかに関しては、「している」の割合は、男女別で見ると、男性で58.3%、女性で42.0%であり、男性の方が16ポイントほど高い。年代別で見ると、20代から50代では約7割またはそれ以上であるが、60代では33.0%、70代以上では7.2%と大きく減少する（図44）。

Q27 の通学・通勤の片道所要時間に関しては、「30分未満」の割合は、男女別で見ると、男性で33.3%、女性で58.1%であり、女性の方が25ポイントほど高い。年代別で見ると、男女差ほどの差は見られないが、70代以上でのみ5割以上である。また、「30分以上1時間未満」の割合は、20代でのみ4割以上であり最も高い割合である（図45）。

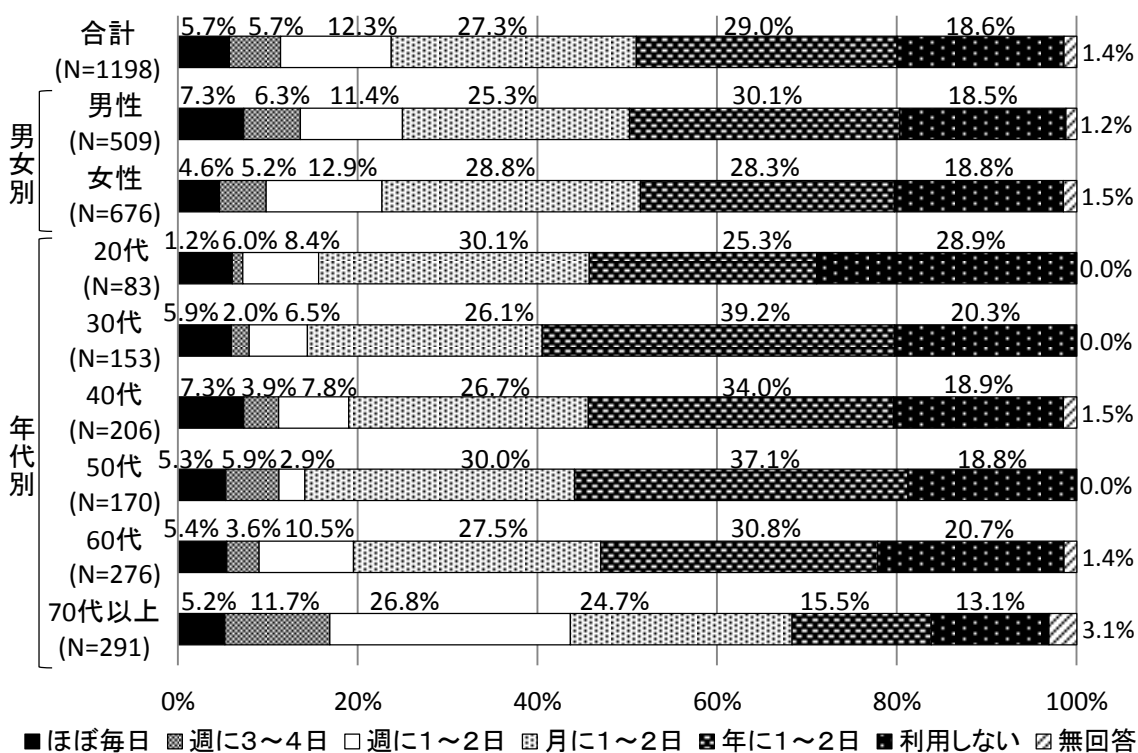


図43 Q25 市バスの利用頻度

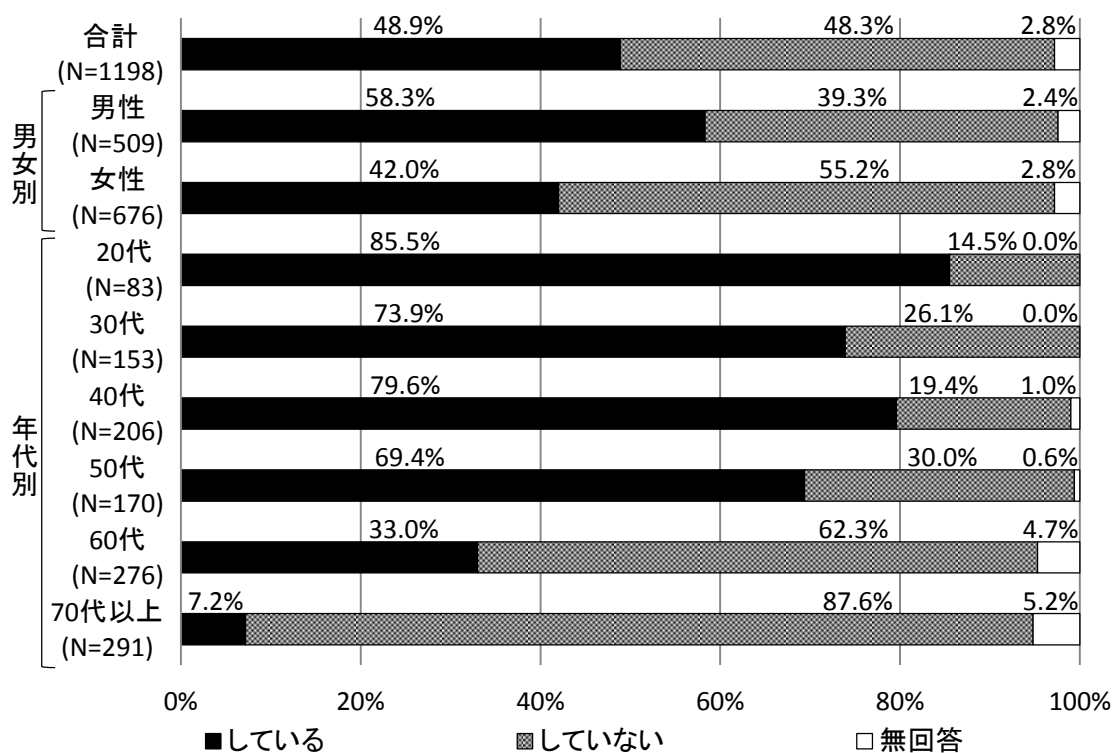


図 44 Q26 通学・通勤をしているか

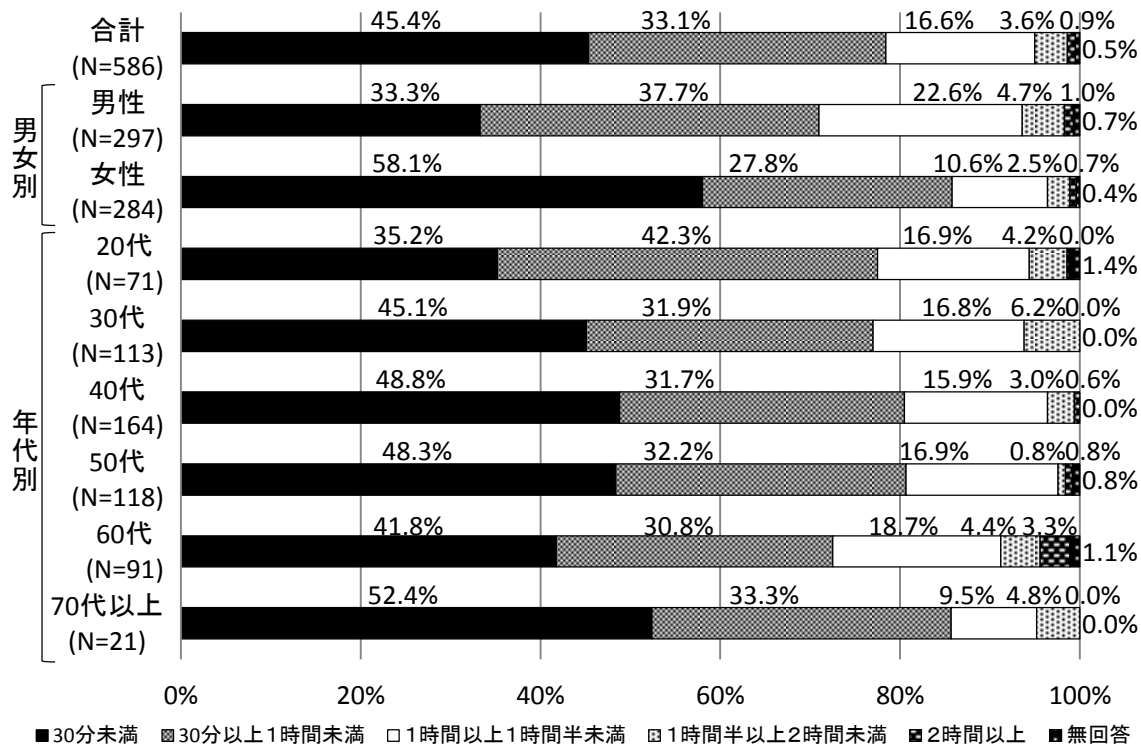


図 45 Q27 通学・通勤の片道所要時間

Q28 の最も主要な通学・通勤の手段に関しては、合計で見ると、「電車」が 38.1%と最も高く、「自転車」と「自家用車」が 2 割程度である。男女別で見ると、男性では「電車」が 43.1%、「自転車」が 13.1%であるが、女性では「電車」でも「自転車」でも 33.1%である。年代別で見ると、20 代から 60 代は「電車」が最も高い割合であるが、70 代以上では「自家用車」が最も高い割合である。「バス」の割合は、70 代以上でのみ 1 割以上である (表 7)。

Q29 の商店街や繁華街に行く頻度に関しては、合計で見ると、月に 1~2 日以上の頻度の割合は 76.3%である。男女別で見ると、その割合は、男性で 70.8%、女性で 80.8%であり女性の方が 10 ポイント高い。年代別で見ると、「週に 1~2 日」と「月に 1~2 日」において 20 代が最も高い割合である。一方で、「ほぼ毎日」と「週に 3~4 日」の割合は 20 代が最も低い (図 46)。

Q30 の公園に行く頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「公園には行かない」が最も高い割合である。男女別で見ると、月に 1~2 日以上の頻度の割合は、男性では 41.5%、女性では 28.6%であり、男性の方が 13 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は 30 代で 53.0%と最も高く、他の年代よりも 17 ポイント以上高い (図 47)。

表 7 Q28 最も主要な通学・通勤の手段

		バス	電車	自転車	徒歩	バイク	自家用車	その他	無回答
		(%)							
合計 (N=586)		6.1	38.1	22.7	3.2	8.9	20.3	0.3	0.3
男女別	男性 (N=297)	6.1	43.1	13.1	3.0	8.4	25.9	0.3	0.0
	女性 (N=284)	6.3	33.1	33.1	3.5	9.5	13.4	0.4	0.7
年代別	20代 (N=71)	4.2	52.1	16.9	1.4	15.5	9.9	0.0	0.0
	30代 (N=113)	8.0	36.3	23.0	5.3	5.3	21.2	0.0	0.9
	40代 (N=164)	5.5	39.6	25.0	2.4	11.0	16.5	0.0	0.0
	50代 (N=118)	5.1	35.6	22.9	3.4	5.1	26.3	1.7	0.0
	60代 (N=91)	6.6	31.9	25.3	3.3	9.9	22.0	0.0	1.1
	70代以上 (N=21)	14.3	28.6	19.0	0.0	4.8	33.3	0.0	0.0

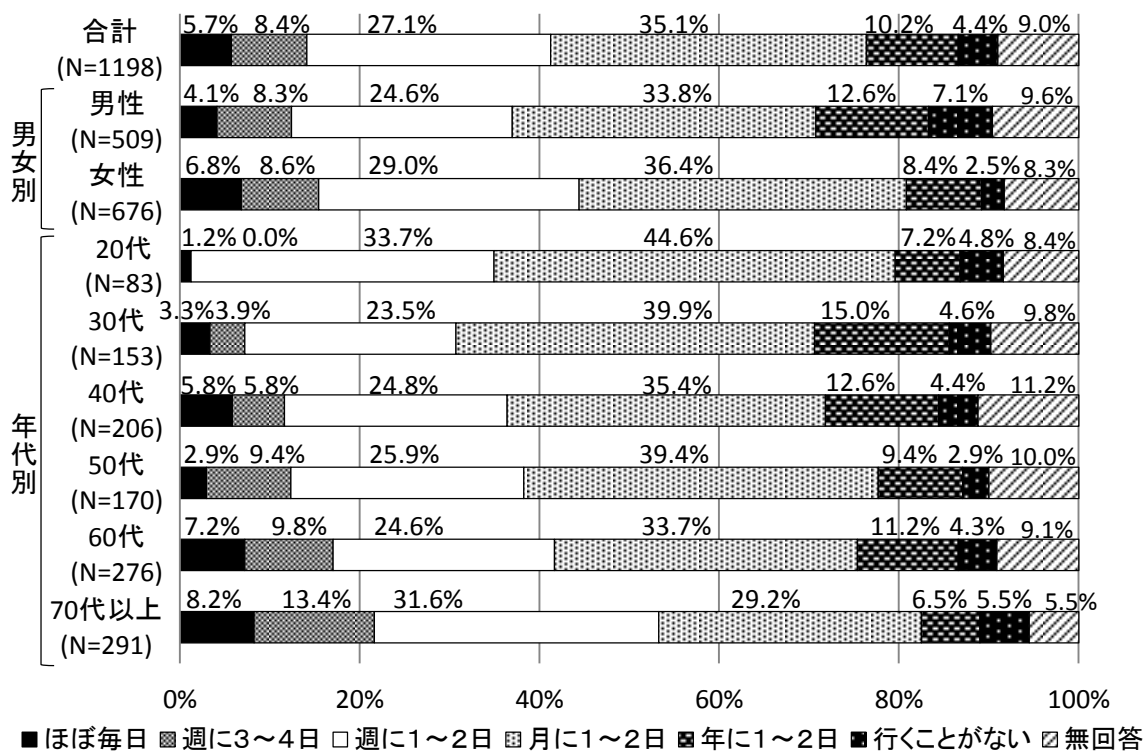


図 46 Q29 商店街や繁华街に行く頻度

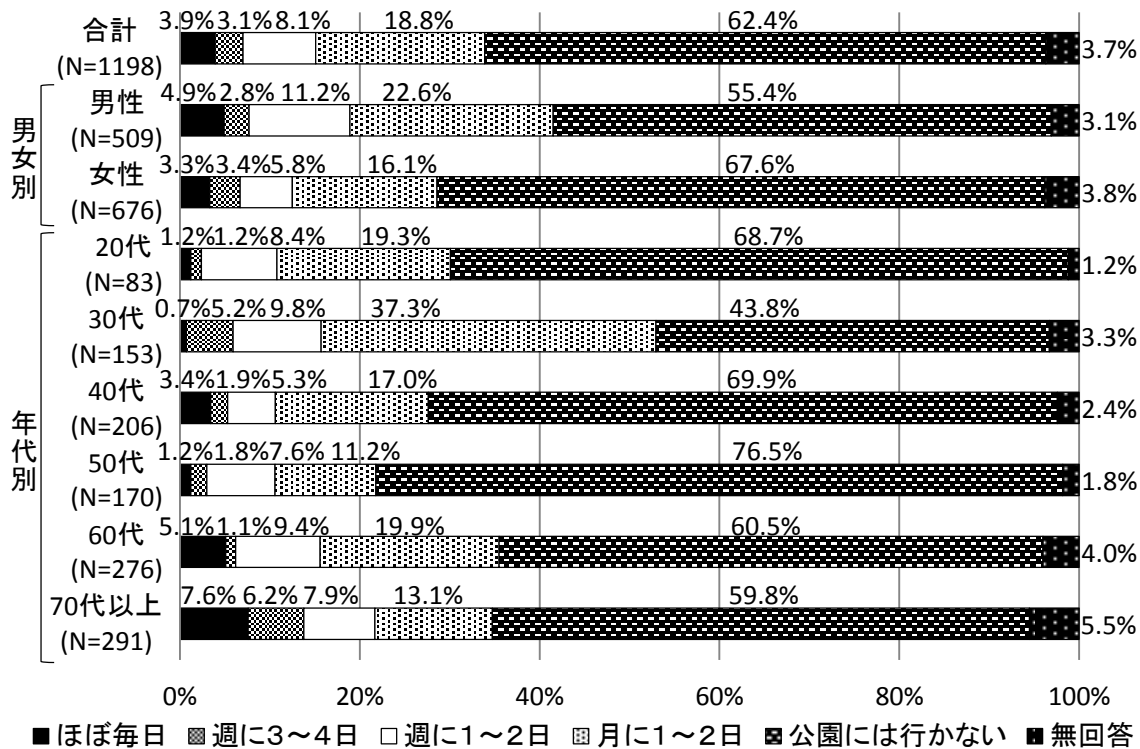


図 47 Q30 公園に行く頻度

Q31 の公園での平均滞在時間に関しては、合計で見ると、30分以上の滞在は45.6%である。年代別で見ると、その割合は、20代から40代では5割以上である。30代では67.9%と最も高い割合である。一方で、50代以上では4割以下である（図48）。

Q32 の公園での目的に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「子供と遊ぶ」、「トレーニング」、「休憩」の順に高い割合である（図49）。

Q32 を男女別で見ると、「子供と遊ぶ」の割合は、男性では31.3%、女性では46.6%と、女性の方が15ポイントほど高い。「トレーニング」の割合は、男性では37.0%、女性では25.9%と、男性の方が11ポイントほど高い（図50）。

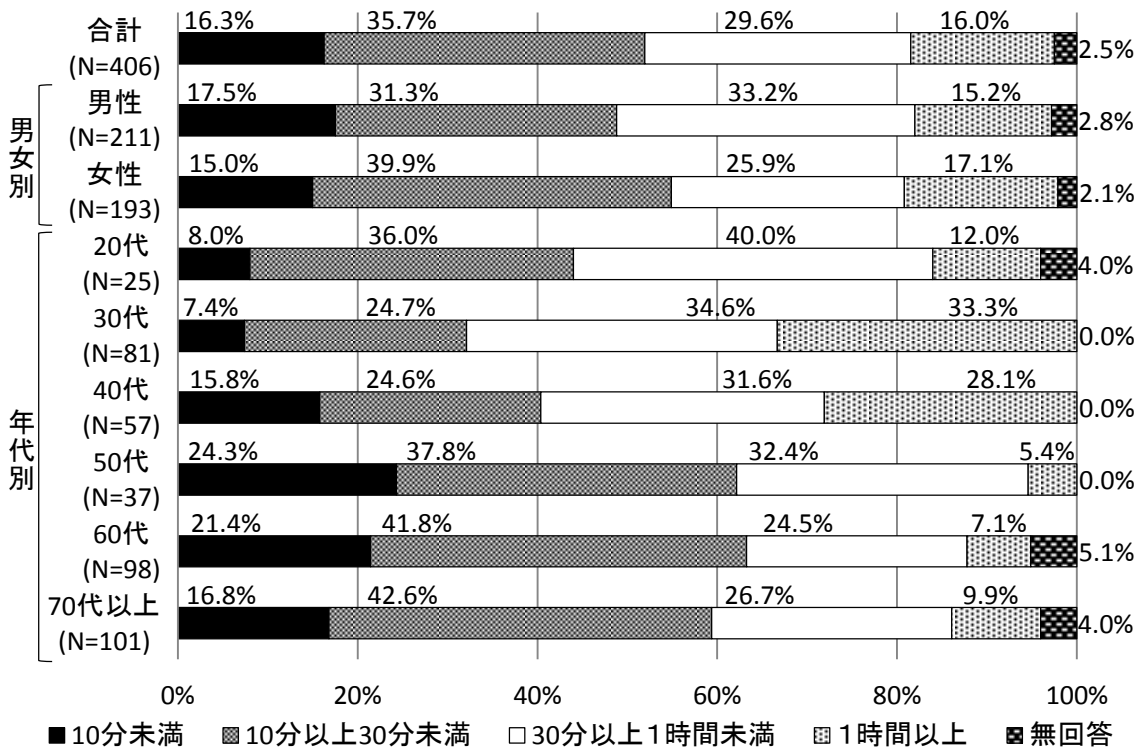


図48 Q31 公園での平均滞在時間

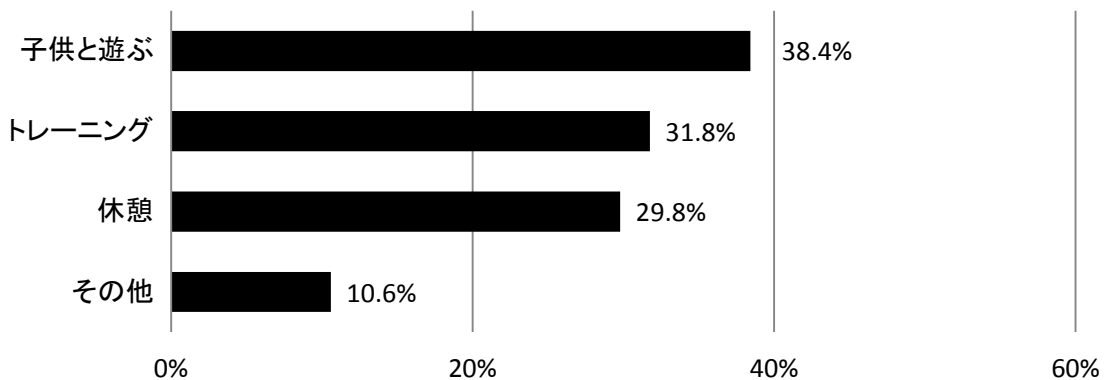


図49 Q32 公園での目的 (全体 N=406)

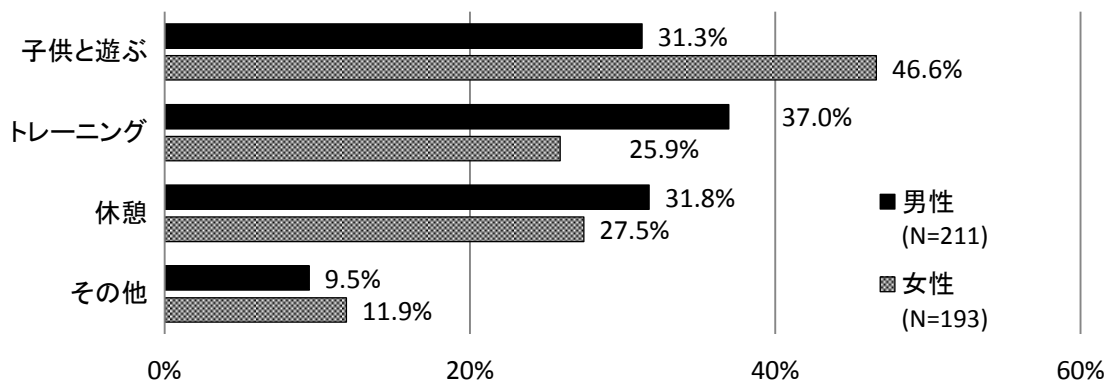


図 50 Q32 公園での目的 (男女別)

Q32 を年代別で見ると、「子供と遊ぶ」の割合は、30代が最も高く 84.0%であるが、年代が上がるごとに減少し、70代以上では 10.9%である。なお、20代では 40.0%である。「トレーニング」の割合は、20代で 36.0%であるものの 30代で 8.6%と大きく減少し、その後年代が上がるごとに増加する。70代以上では 48.5%である (図 51)。

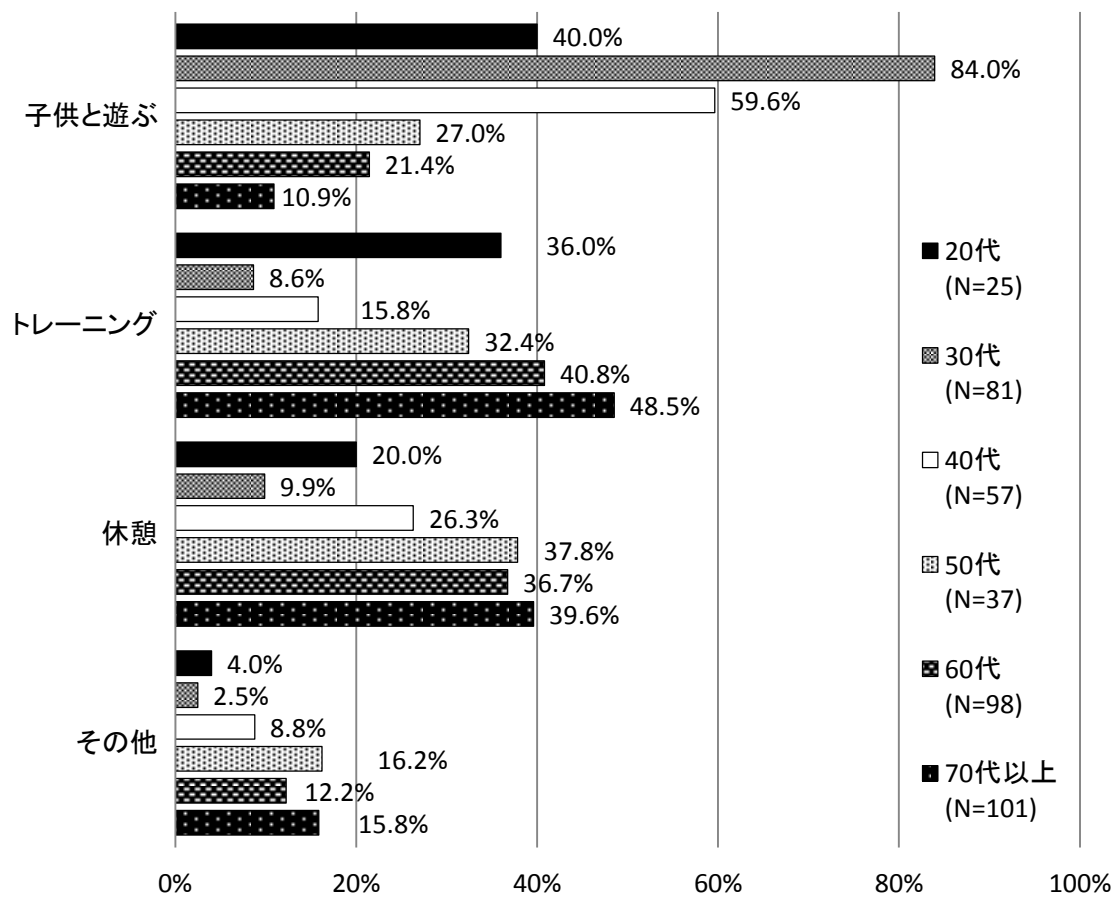


図 51 Q32 公園での目的 (年代別)

Q33A の高槻シティハーフマラソンへの参加頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「全く参加したことがない」の割合が 8 割以上であり、最も高い割合である。参加したことがある人の割合は、男女別で見ると、男性で 6.3%、女性で 1.9%であり男性の方が 4 ポイントほど高い。年代別で見ると、30 代と 40 代が 6%程度と最も高い（図 52）。

Q33B の高槻まつりへの参加頻度に関しては、合計で見ると、参加したことがある人の割合は 55.2%である。年代別で見ると、その割合は、20 代で 75.9%と最も高いが、年代が上がるごとに減少し、70 代以上では 40.2%である。なお、特に「時々参加している」の割合の変化が大きく、20 代では 51.8%であるが 70 代以上では 17.5%である（図 53）。

Q33C の高槻ジャズストリートへの参加頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で 6 割以上が「全く参加したことがない」と回答し、最も高い割合である。参加したことがある人の割合は、年代別で見ると、20 代から 50 代では 3 割以上、60 代以上では 3 割未満である。（図 54）。

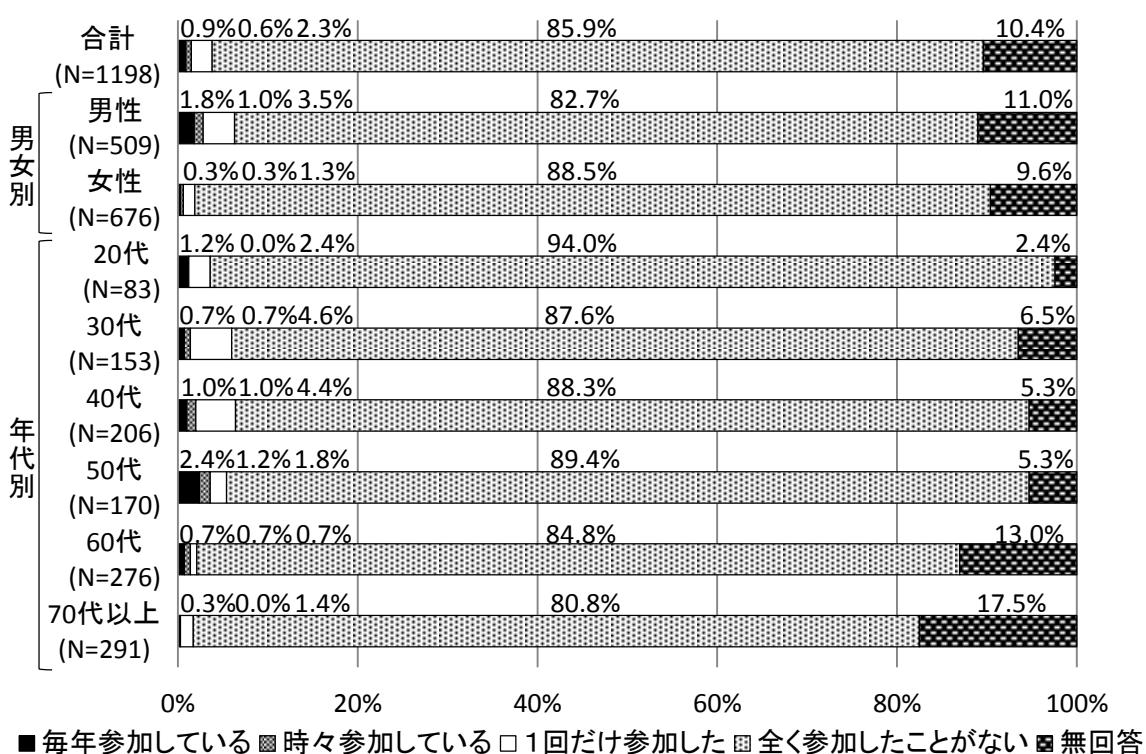


図 52 Q33A 高槻シティハーフマラソンへの参加頻度

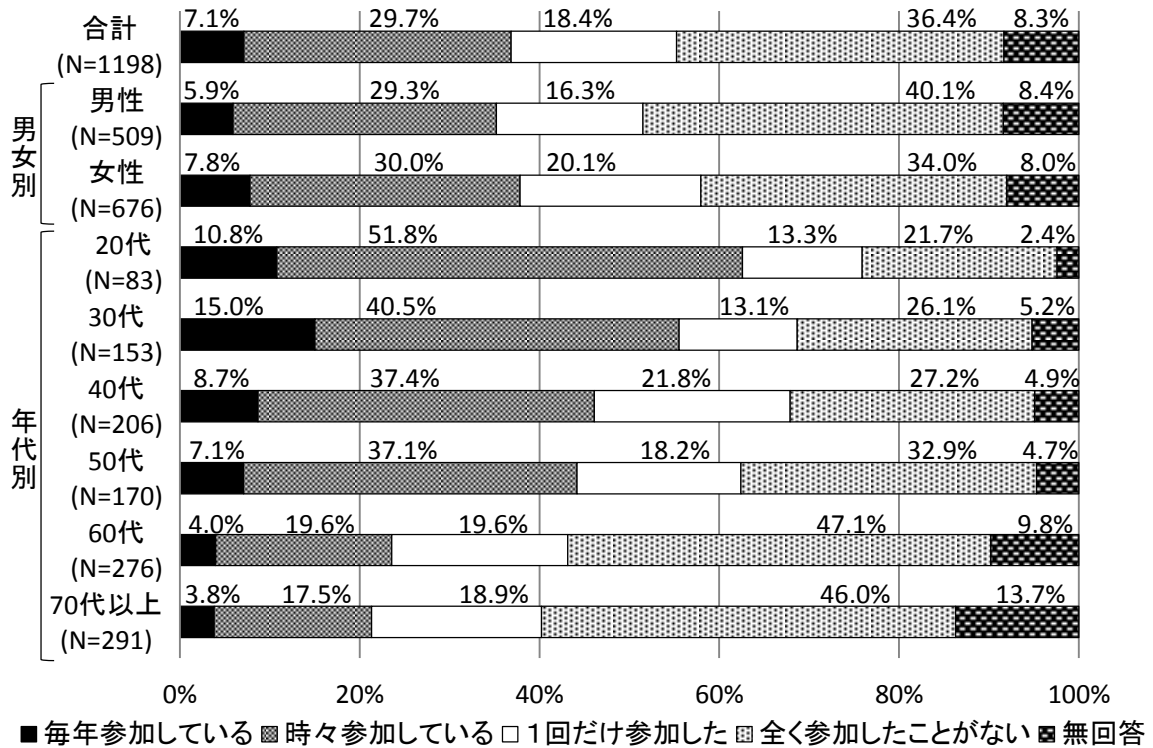


図 53 Q33B 高槻まつりへの参加頻度

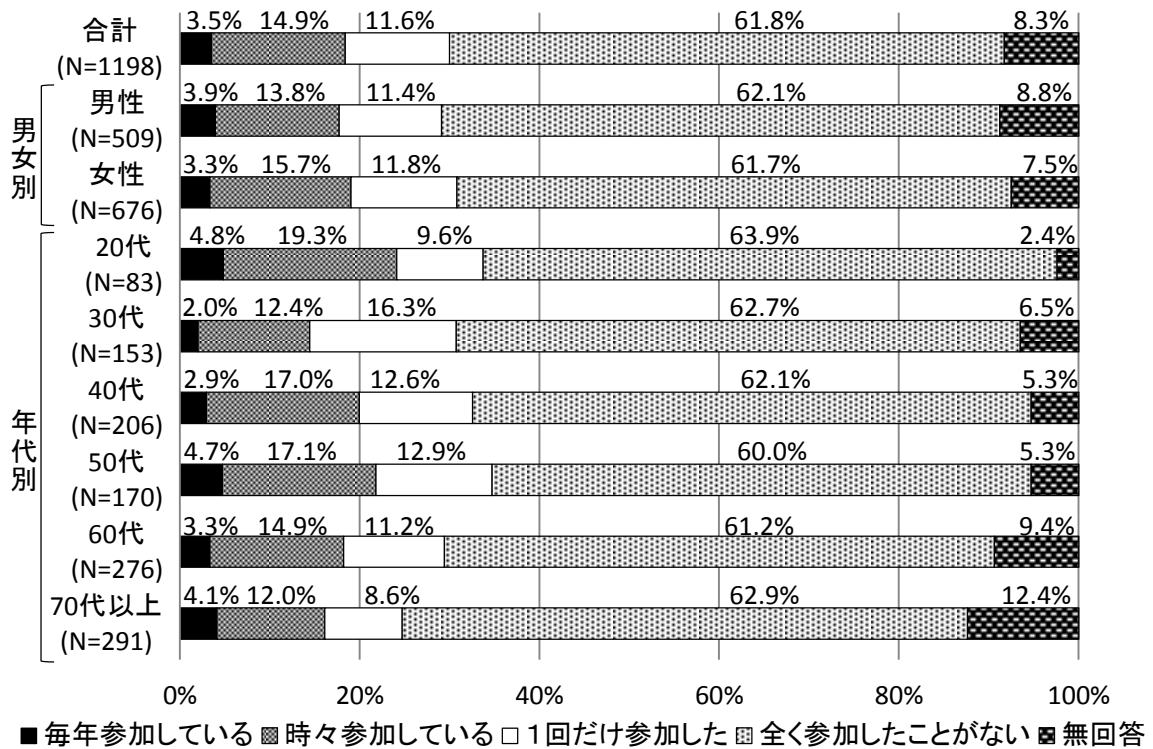


図 54 Q33C 高槻ジャズストリートへの参加頻度

Q33Dの関西大学の行事（講演会や学園祭など）への参加頻度に関しては、男女別・年代別のすべての層で「全く参加したことがない」の割合が7割から9割であり最も高い。1回以上の頻度での参加は、70代以上が11.3%であり最も高い割合である（図55）。

Q34の就寝用の居室と階段への住宅用火災警報器の設置状況に関しては、合計で見ると、「全てに設置されている」の割合は36.9%、「設置されていない」の割合は28.7%である。年代別で見ると、20代から40代は「全てに設置されている」の割合が4割以上であるが、50代以上では4割未満である。特に60代は25.7%と最も低い割合である。「設置されていない」の割合は、20代と60代が最も高く、ともに33.7%である（図56）。

Q35の救急車を呼ぶ判断に迷ったことがあるかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「ない」が6割以上と最も高い割合である。特に20代は80.7%と最も高い。「ある」の割合は、男女別で見ると、男性が29.3%、女性が35.5%と女性の方が6ポイントほど高い。年代別で見ると、20代を除いて3割以上である（図57）。

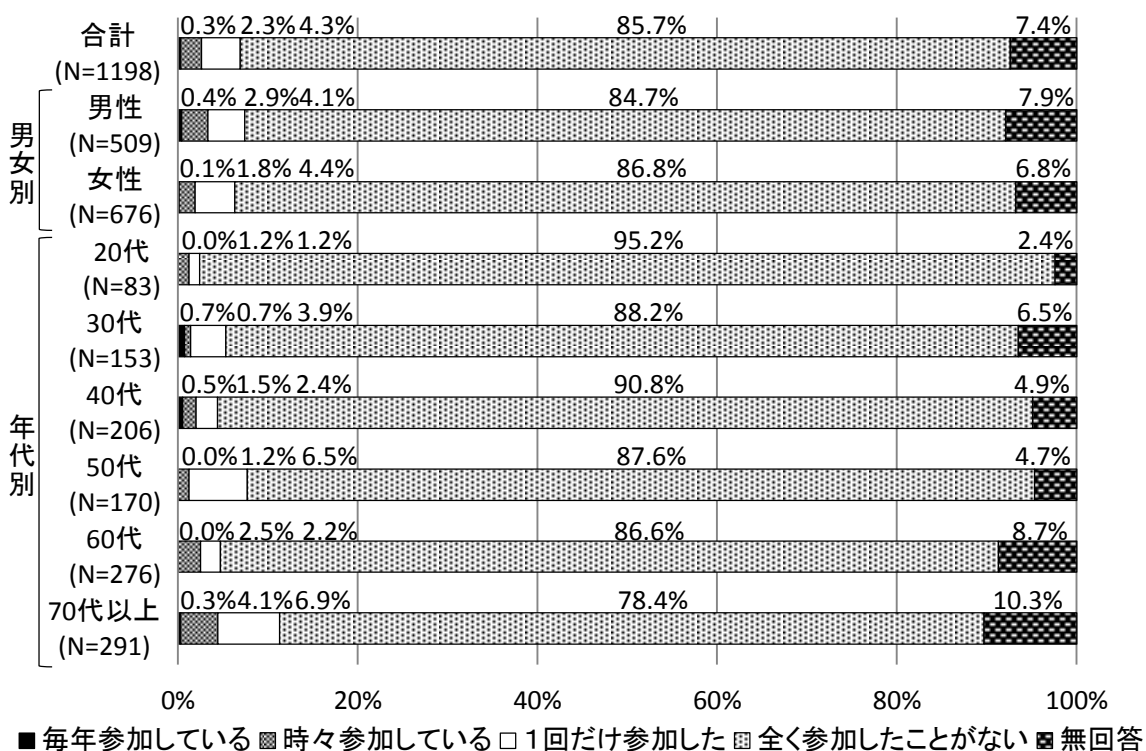


図55 Q33D 関西大学の行事（講演会や学園祭など）への参加頻度

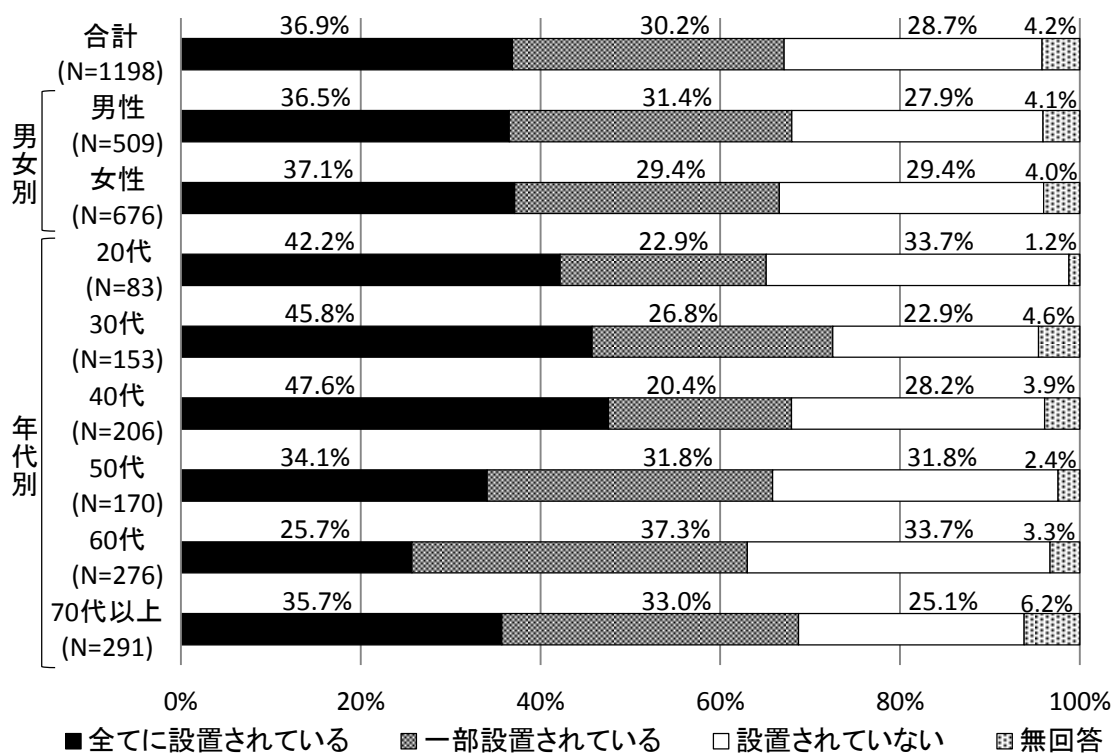


図 56 Q34 就寝用の居室と階段への住宅用火災警報器の設置状況

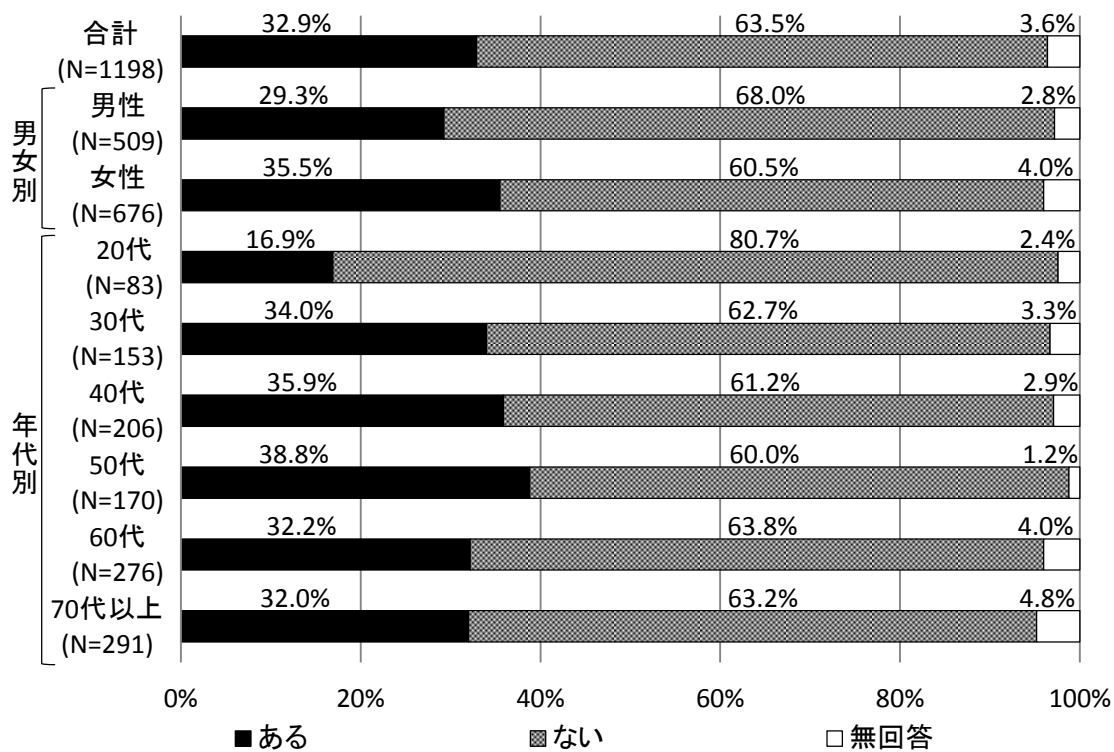


図 57 Q35 救急車を呼ぶ判断に迷ったことがあるか

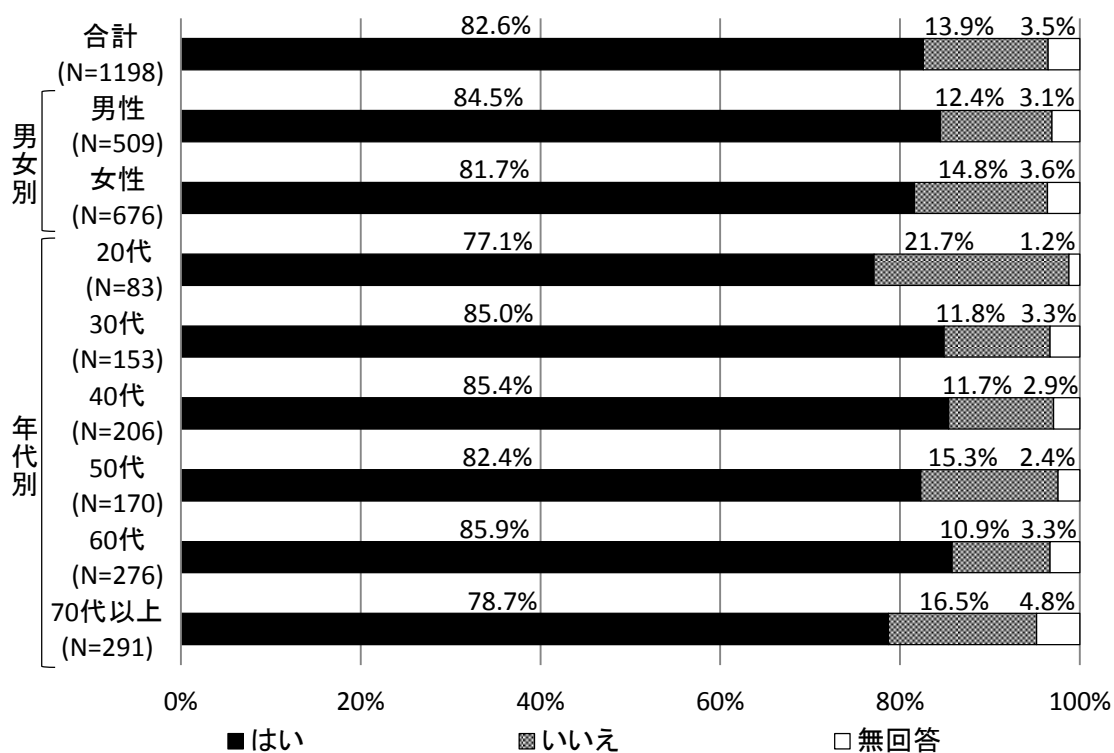


図 58 Q36 夜間・休日の緊急診療可能機関を知っているか

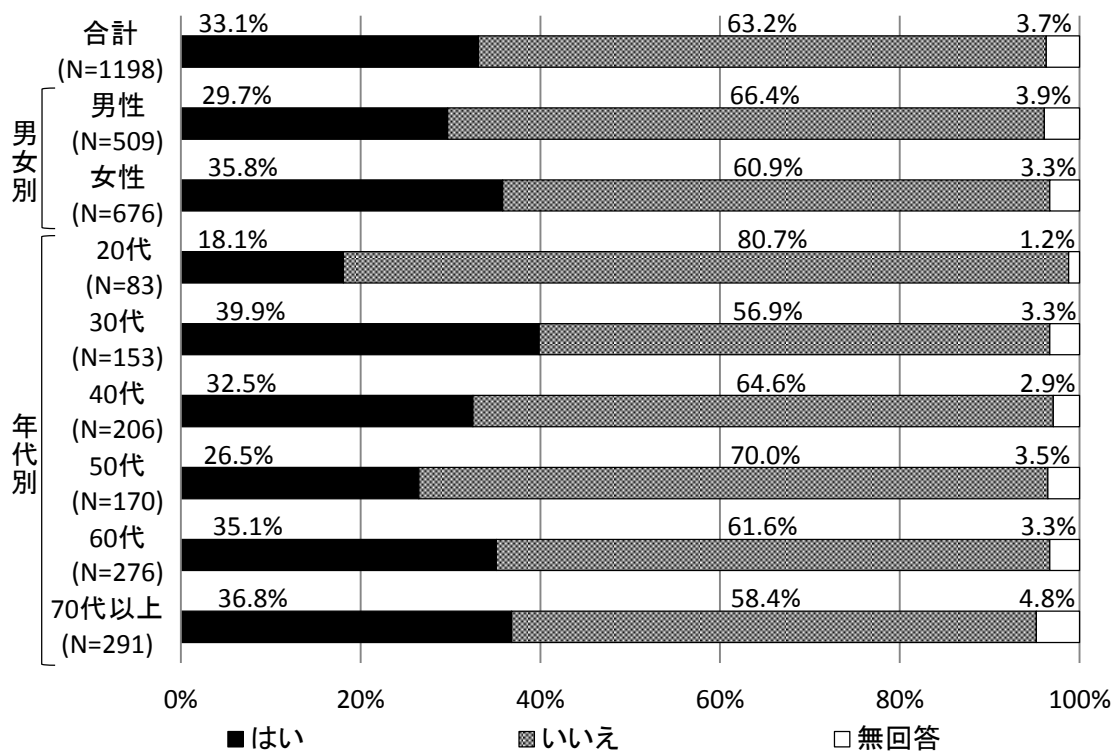


図 59 Q37 「救急安心センターおおさか」を知っているか

Q36 の夜間・休日の緊急診療可能機関を知っているかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「はい」の割合が 7 割から 8 割以上であり最も高い。「いいえ」の割合は、20 代でのみ 2 割以上であり、全年代中で最も高い割合である（図 58）。

Q37 の「救急安心センターおおさか」を知っているかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「いいえ」の割合が 5 割から 8 割であり最も高い。「はい」の割合は、男性で 29.7%、女性で 35.8%と女性の方が 6 ポイントほど高い。年代別で見ると、20 代が 18.1%と最も低い割合である。また、30 代では 39.9%であるが、40 代、50 代と次第に減少し、60 代、70 代以上ではまた増加している（図 59）。

Q38 の直近 2 ヶ月の使用水量に関しては、世帯人数とのクロス集計も提示する。合計で見ると、「30m³以上 40m³未満」が 18.3%と最も高い割合である。次いで「40m³以上 50m³未満」、「20m³以上 30m³未満」の順に多い。年代別で見ると、40 代でのみ「40m³以上 50m³未満」が最も多く、それ以外の年代では「30m³以上 40m³未満」が最も多い。世帯人数別で見ると、世帯人数が増加するごとに最も割合が高い使用水量も増加しているが、7~8 人の世帯では、6 人の世帯よりも最も割合が高い使用水量が低い（表 8）。

表 8 Q38 直近 2 ヶ月の使用水量

		(%)								
		10m ³ 未満	10m ³ 以上 20m ³ 未満	20m ³ 以上 30m ³ 未満	30m ³ 以上 40m ³ 未満	40m ³ 以上 50m ³ 未満	50m ³ 以上 60m ³ 未満	60m ³ 以上 70m ³ 未満	70m ³ 以上	無回答
合計 (N=1198)		2.4	8.9	12.6	18.3	14.9	10.3	5.0	6.5	21.1
男女別	男性 (N=509)	3.7	8.8	13.2	16.1	17.1	9.8	4.7	6.9	19.6
	女性 (N=676)	1.5	9.0	12.3	19.8	13.2	10.7	5.3	6.4	21.9
年代別	20代 (N=83)	3.6	7.2	7.2	20.5	7.2	15.7	3.6	7.2	27.7
	30代 (N=153)	3.3	5.2	13.7	20.3	14.4	8.5	4.6	4.6	25.5
	40代 (N=206)	1.5	9.7	10.7	16.0	18.9	13.6	3.4	7.3	18.9
	50代 (N=170)	3.5	9.4	14.1	14.7	13.5	12.9	8.2	8.8	14.7
	60代 (N=276)	1.8	9.4	12.3	18.5	14.1	10.5	4.7	8.0	20.7
	70代以上 (N=291)	2.4	10.3	14.1	19.6	15.8	5.8	5.5	4.5	22.0
	世帯人数別	1人 (N=121)	14.9	37.2	20.7	10.7	0.0	1.7	2.5	0.8
2人 (N=395)		1.8	10.4	19.7	24.3	14.9	4.6	2.5	2.8	19.0
3人 (N=286)		0.3	5.2	9.8	19.2	18.9	14.3	4.9	7.7	19.6
4人 (N=249)		1.2	1.6	5.6	15.7	18.1	13.7	8.0	9.6	26.5
5人 (N=86)		0.0	2.3	3.5	11.6	15.1	25.6	9.3	10.5	22.1
6人 (N=28)		0.0	0.0	3.6	0.0	17.9	7.1	3.6	35.7	32.1
7~8人 (N=8)		0.0	0.0	0.0	12.5	0.0	25.0	25.0	12.5	25.0

Q39 の給水方式に関しては、男女別・年代別のすべての層で「直結給水方式」が 5 割から 8 割と最も高い割合である。「受水槽給水方式」については、30 代で 18.3%、40 代で 19.9% と全年代中で最も高い割合である（図 60）。

Q40 の水道水用途に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「家庭用」の割合が 95.7%と最も高い割合である。「店舗用」と「その他」は 1%未満と低い（図 61）。

Q40 を男女別で見ると、「家庭用」が男性で 95.9%、女性で 96.0%と最も高い割合である。「店舗用」において女性は 1.2%と、1%以上である。それ以外の層はすべて 1%未満であり低い（図 62）。

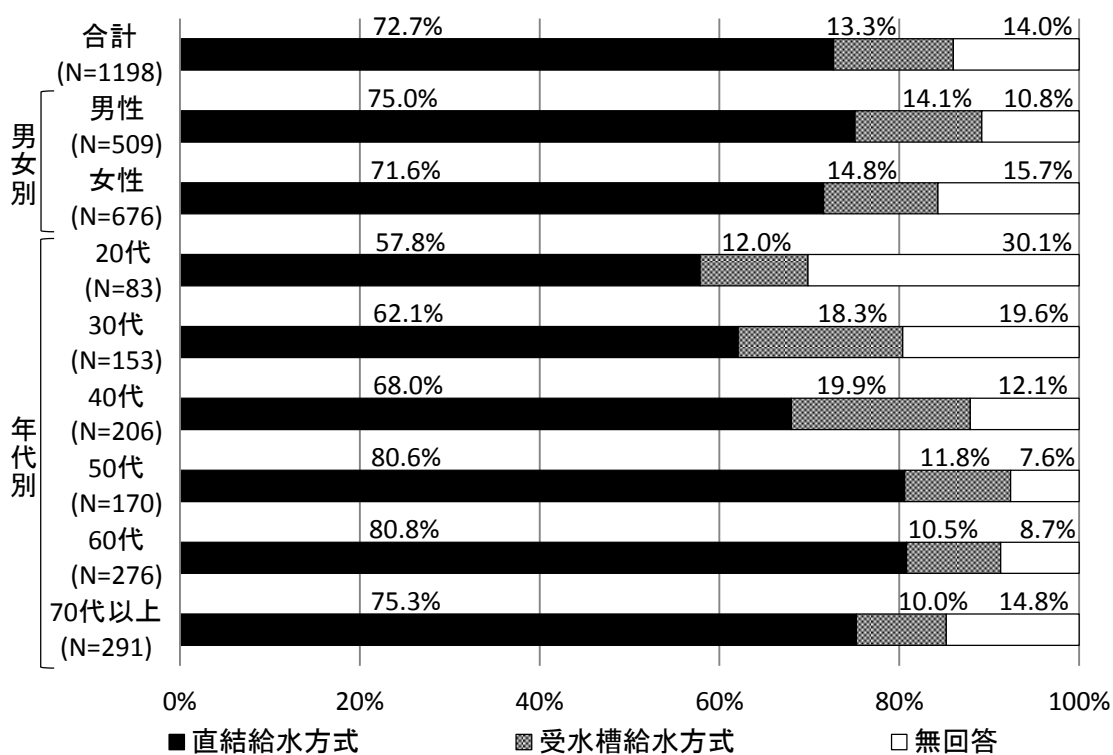


図 60 Q39 給水方式

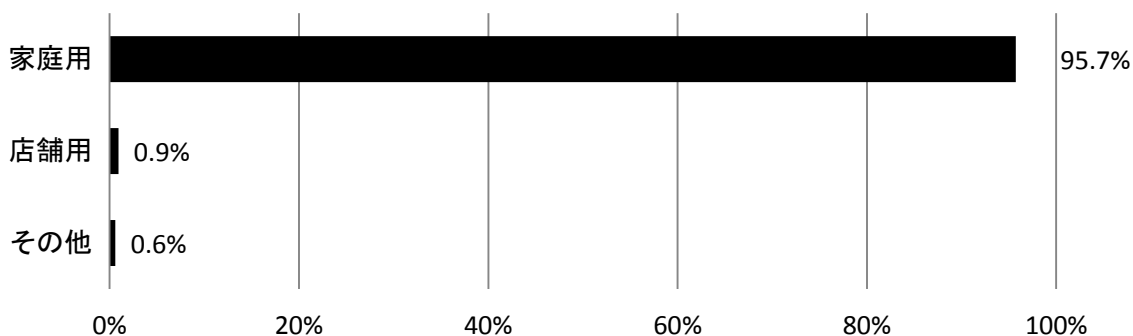


図 61 Q40 水道水用途 (全体 N=1198)

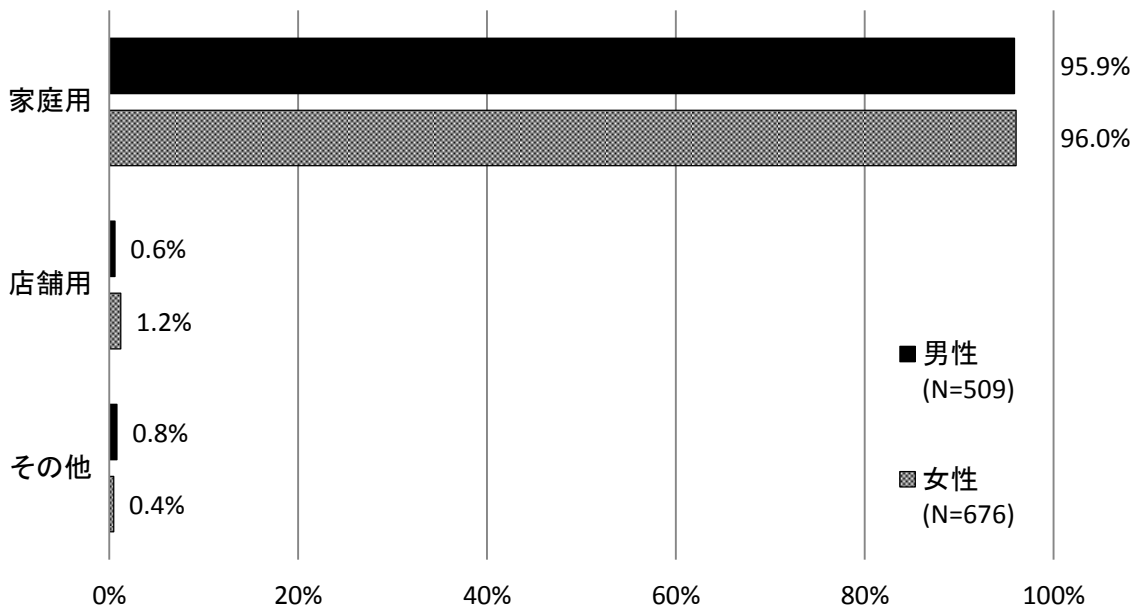


図 62 Q40 水道水用途（男女別）

Q40 の水道水用途を年代別で見ると、「家庭用」がすべての年代で 9 割以上であり、最も高い割合である。「店舗用」における 30 代、60 代、70 代以上、「その他」における 70 代以上では 1%以上である。それ以外の層ではすべて 1%未満であり低い（図 63）。

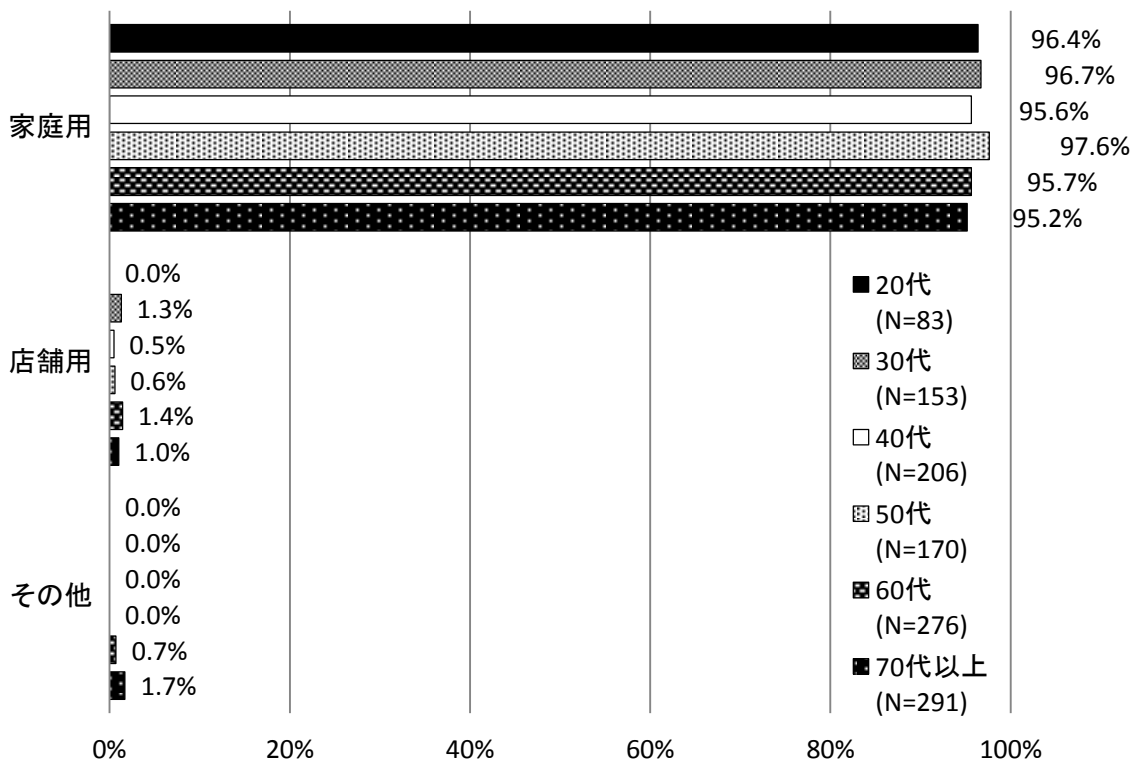


図 63 Q40 水道水用途（年代別）

Q41 の水の節約のために行っていることに関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「水道の水をこまめに止める」、「お風呂の水を洗濯に再利用する」、「家電製品の節水機能を利用する」の順で高い割合である（図 64）。

Q41 を男女別で見ると、「水道の水をこまめに止める」では男性が 71.7%、女性が 78.0%と女性の方が 6 ポイントほど高い。「家電製品の節水機能を利用する」では男性が 14.3%、女性が 22.3%と女性の方が 8 ポイント高い（図 65）。

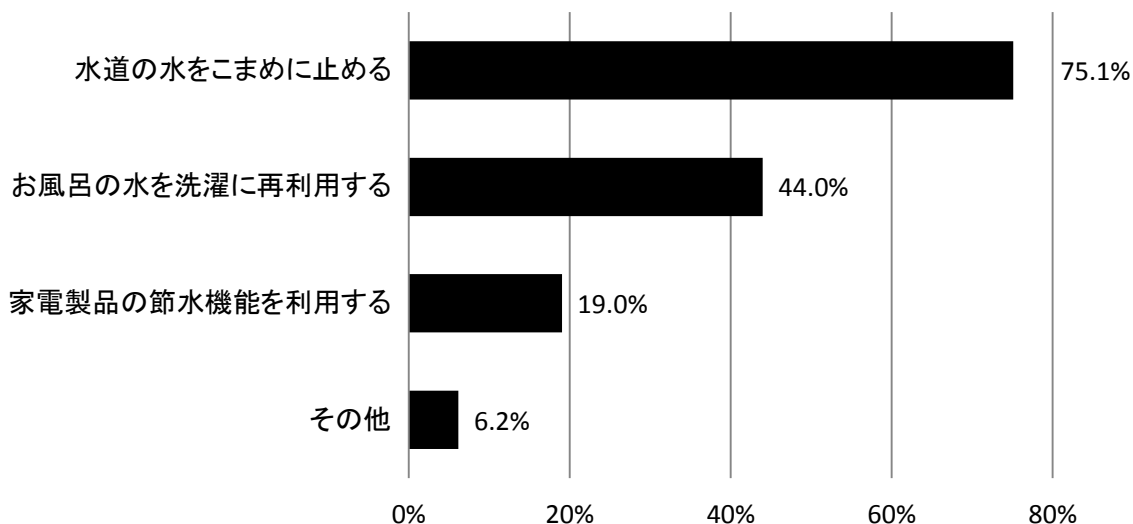


図 64 Q41 水の節約のために行っていること（全体 N=1198）

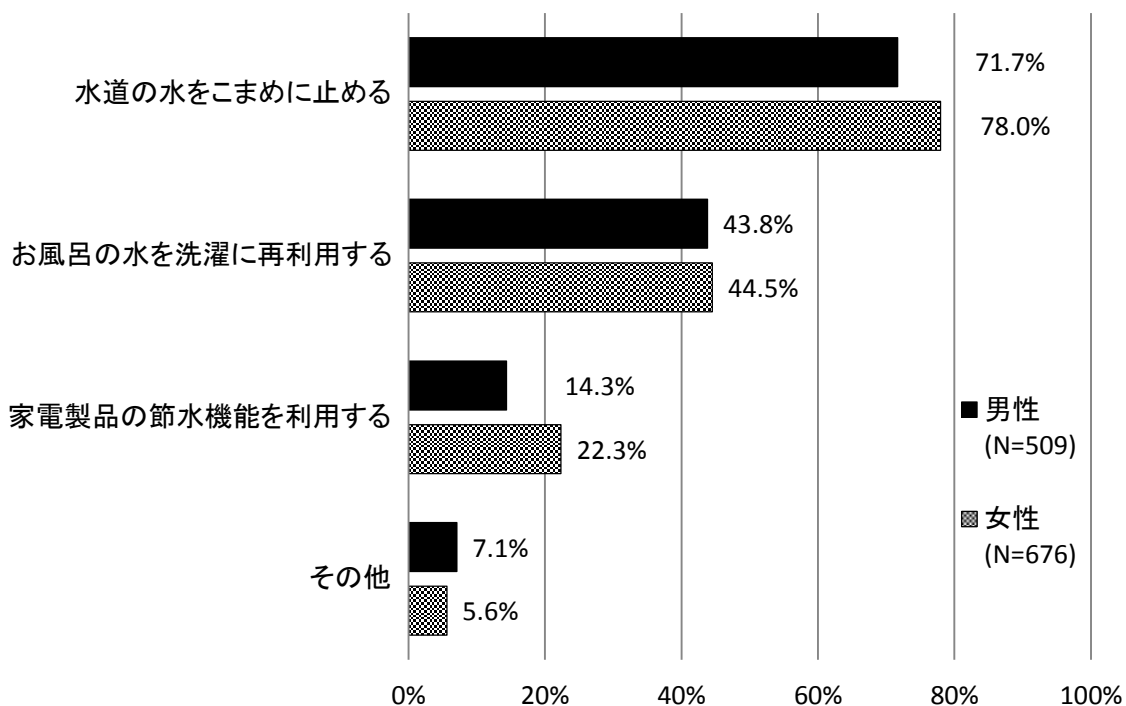


図 65 Q41 水の節約のために行っていること（男女別）

Q41 を年代別で見ると、「水道の水をこまめに止める」では 20 代のみが 7 割未満であり、その他の年代は 7 割以上である。「お風呂の水を洗濯に再利用する」では 30 代が 37.3% と最も低く、40 代が 50.5% と最も高い割合である。「家電製品の節水機能を利用する」では 70 代が 12.7% と最も低く、その他の年代は 2 割前後である（図 66）。

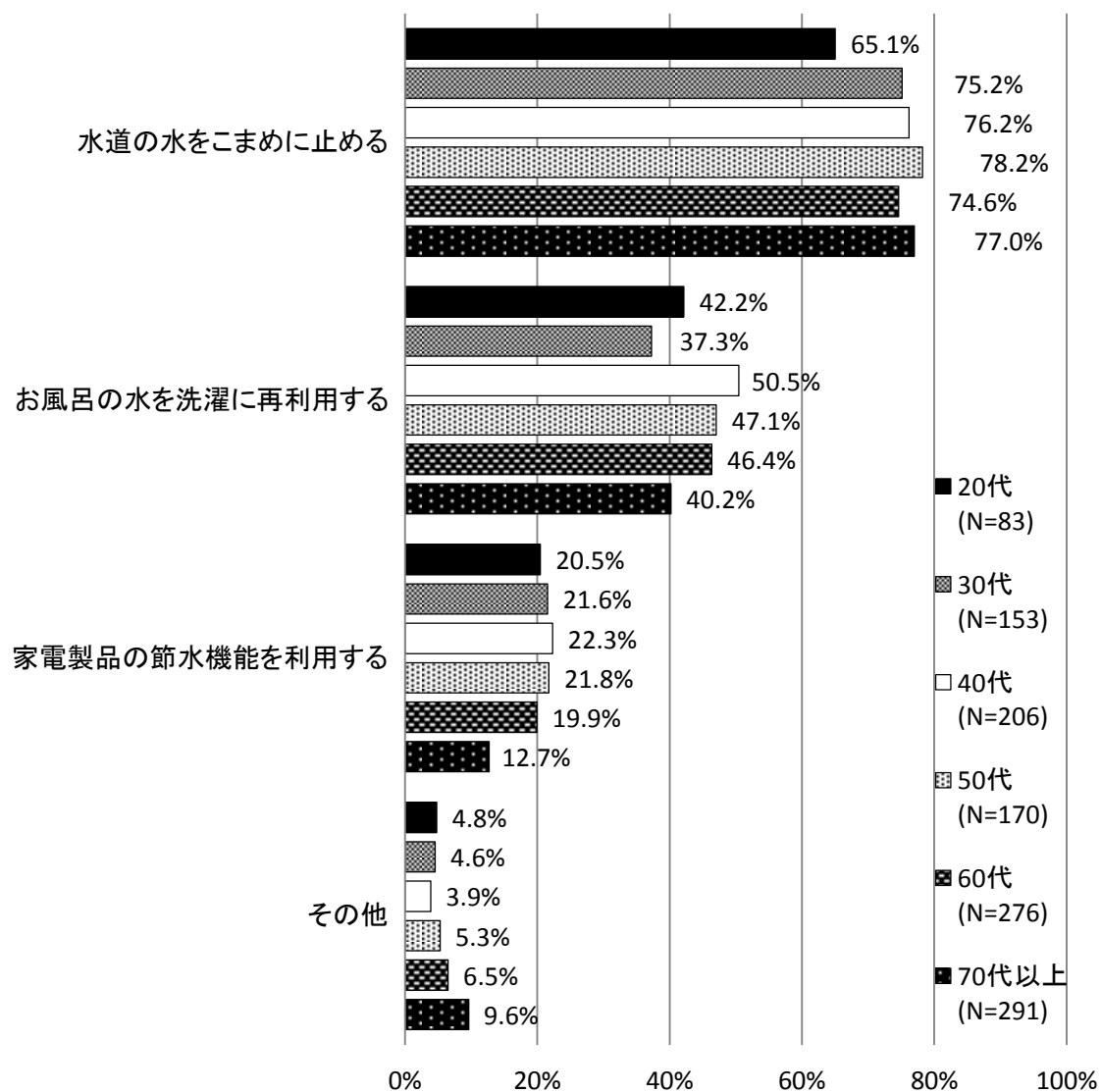


図 66 Q41 水の節約のためにやっていること（年代別）

Q42 の利用道路の安全認識に関しては、合計で見ると、「ほぼ安全だと思う」が 30.5%、「多少危険だと思う」が 29.7%と近い割合である。男女別で見ると、男性は「ほぼ安全だと思う」が 28.5%、「多少危険だと思う」が 31.2%と後者の方が高い。一方で、女性は逆の傾向である。年代別で見ると、20代から50代では「多少危険だと思う」の方が「ほぼ安全だと思う」の割合よりも高いが、60代以上では逆の傾向である（図 67）。

Q43 の利用道路が自動車に抜け道として使われているかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「ややそう思う」が最も高い割合である。なお、年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、30代から50代でのみ5割以上である（図 68）。

Q44 の車の運転の有無に関しては、合計で見ると、「はい」が 48.1%、「いいえ」が 48.4%とほぼ等しい割合である。男女別で見ると、男性では「はい」が 68.4%、「いいえ」が 28.7%と「はい」の方が多いのに対し、女性では「はい」が 33.3%、「いいえ」が 63.2%と男性の回答比とほぼ逆になっている。年代別で見ると、「はい」の割合は、20代の 45.8%から年代が上がるごとに増加し、40代で 61.2%になった後、年代が上がるごとに減少している。70代以上では 33.0%である（図 69）。

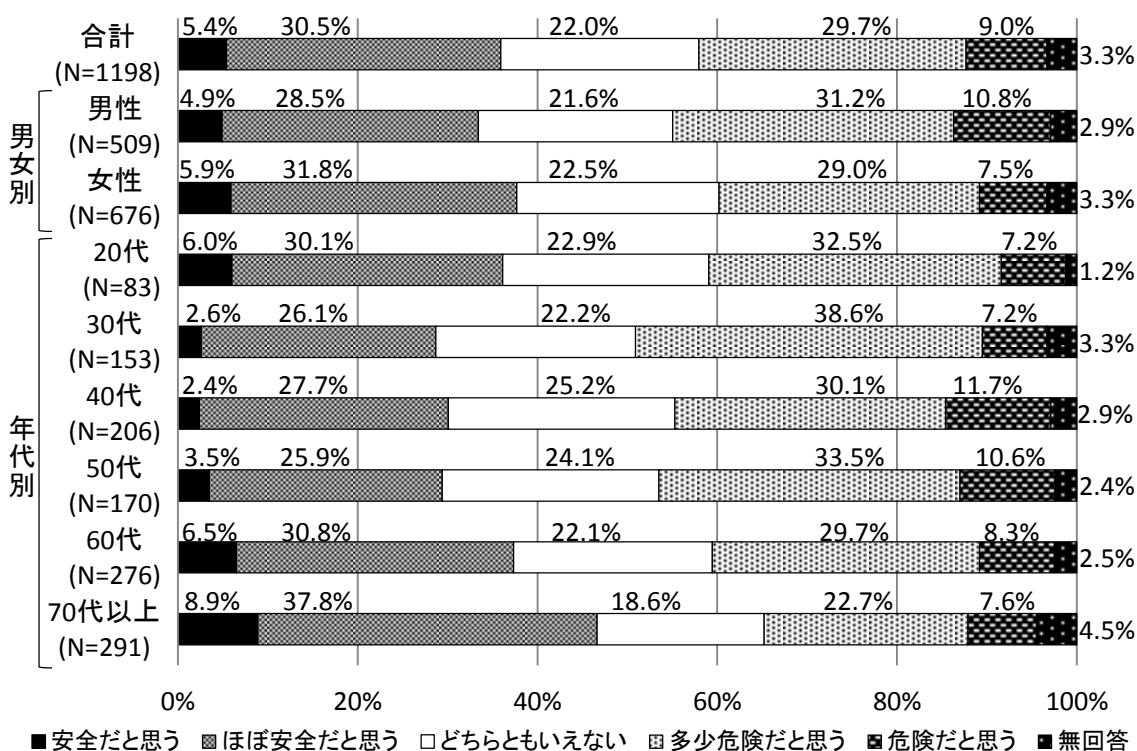


図 67 Q42 利用道路の安全認識

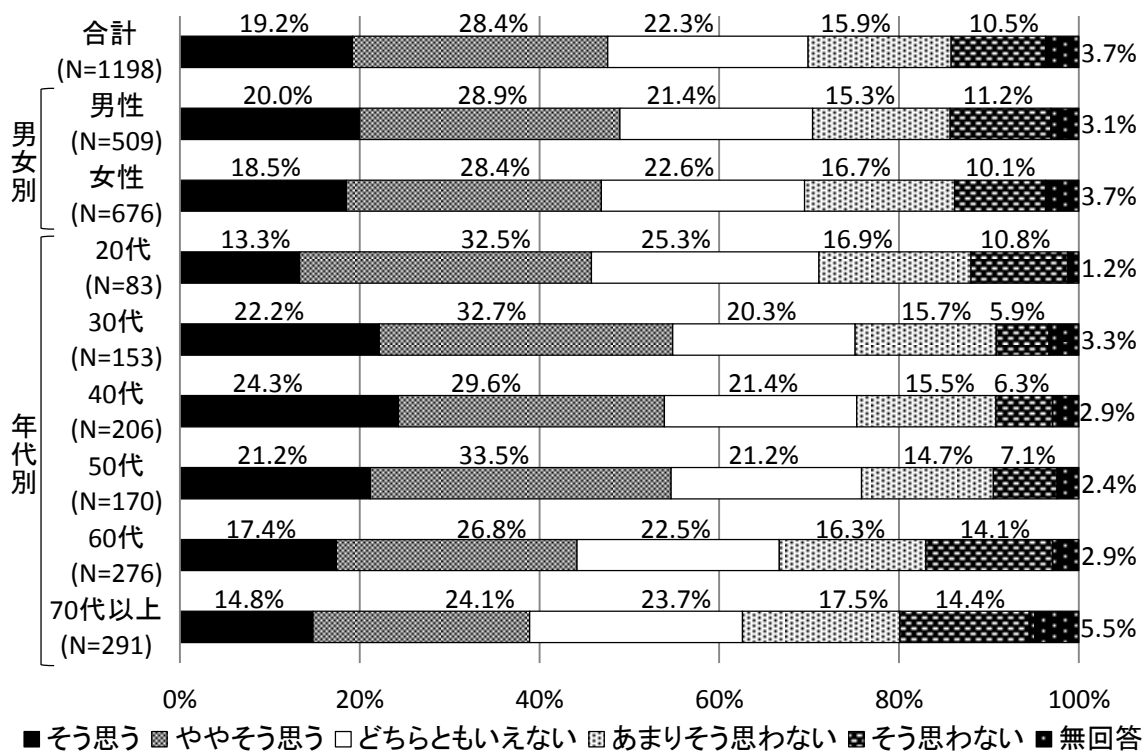


図 68 Q43 利用道路が自動車に抜け道として使われているか

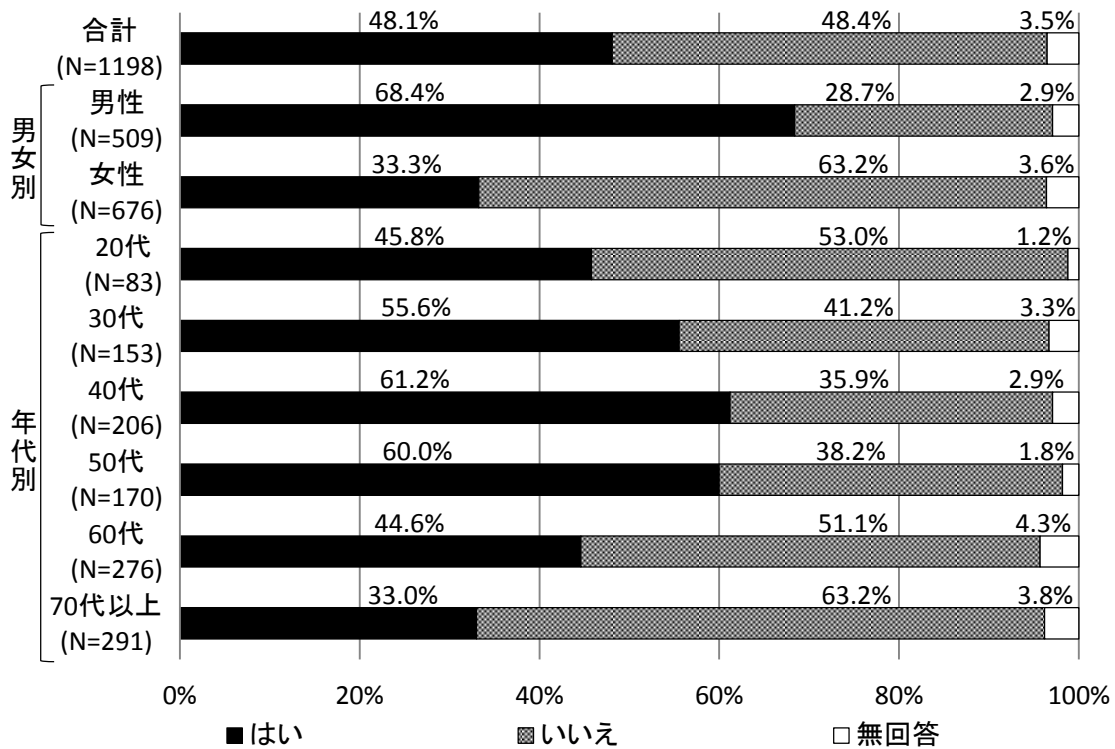


図 69 Q44 車の運転の有無

Q45 の利用幹線道路でよく渋滞が発生しているかに関しては、全体および男性・女性で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合が7割程度である。年代別で見ると、その割合は、20代と30代では8割程度であるが、年代が上がるごとに減少している。70代以上では54.2%である（図70）。

Q46 の昨年と比較して利用幹線道路の渋滞が減少しているかに関しては、20代と30代を除く男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」が最も高い割合である。20代と30代では「あまりそう思わない」が最も高い割合である。「どちらともいえない」を除くと、男女別・年代別のすべての層で、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合よりも、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合の方が高い（図71）。

Q47 の新名神完成後に通行したいルートに関しては、20代を除く男女別・年代別のすべての層で「枚方亀岡線・南平台日吉台線ルート」が最も高い割合である。20代では「国道170号・伏見柳谷高槻線ルート」が最も高い割合である。また、男女別・年代別のすべての層で「十三高槻線・高槻東道路ルート」の割合は2割以上3割未満である（図72）。

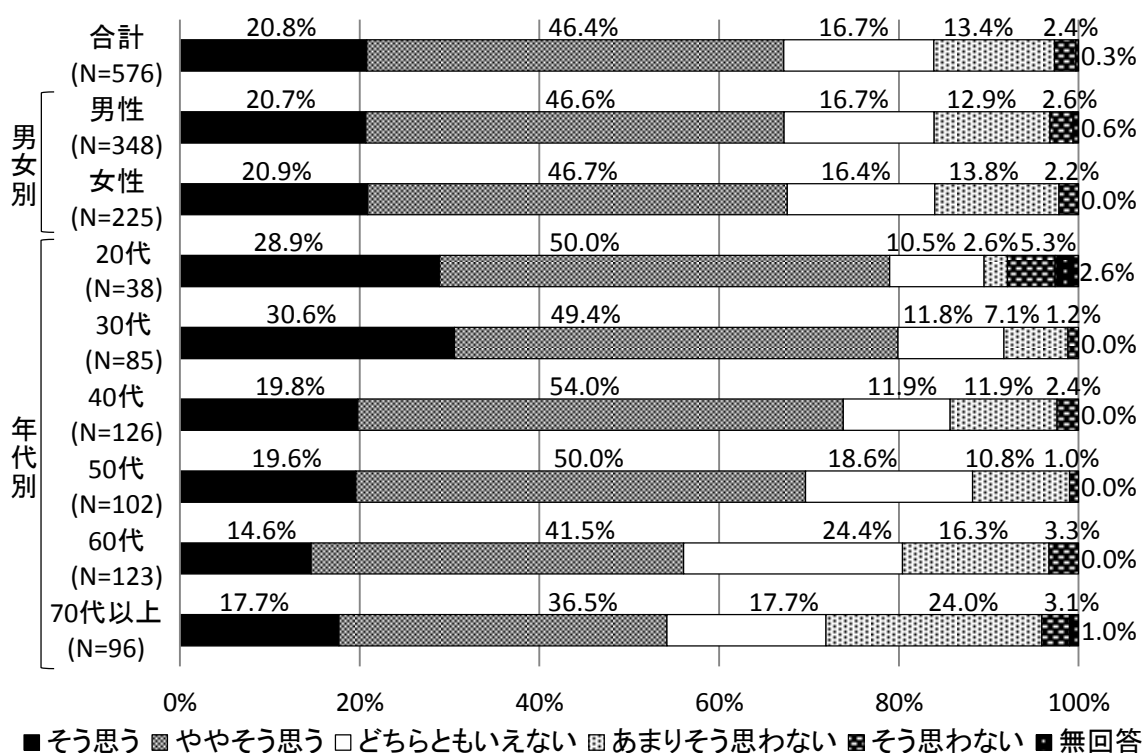


図70 Q45 利用幹線道路でよく渋滞が発生しているか

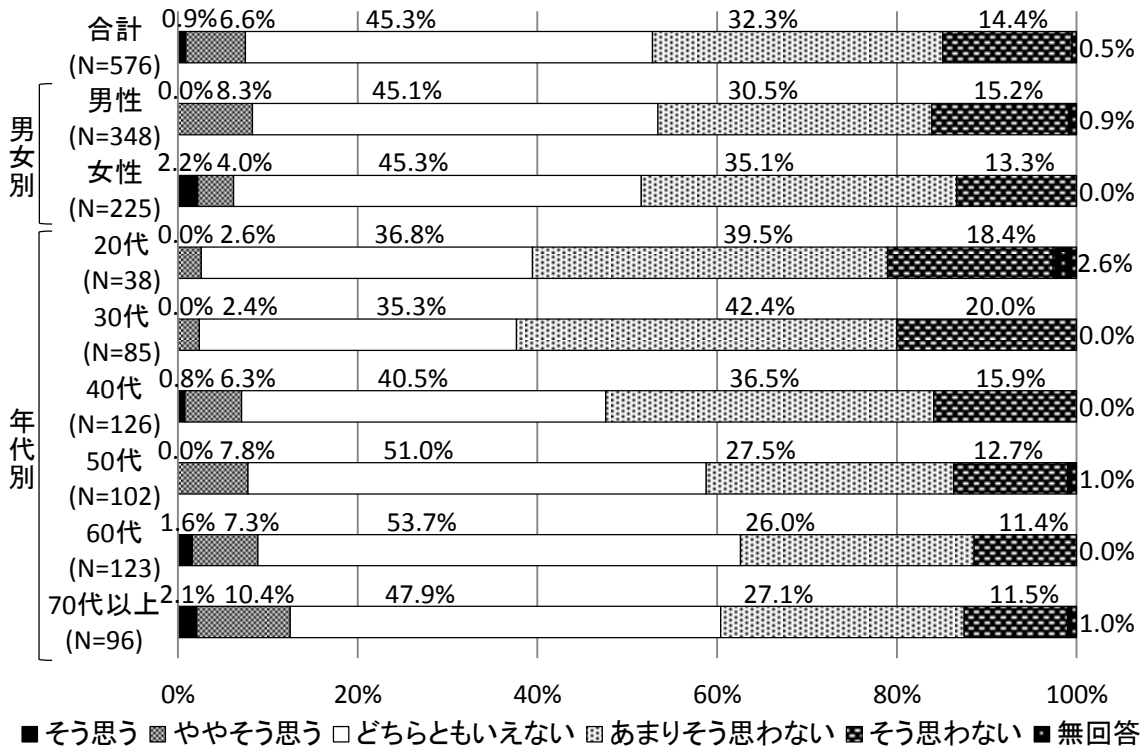


図 71 Q46 昨年と比較して利用幹線道路の渋滞が減少しているか

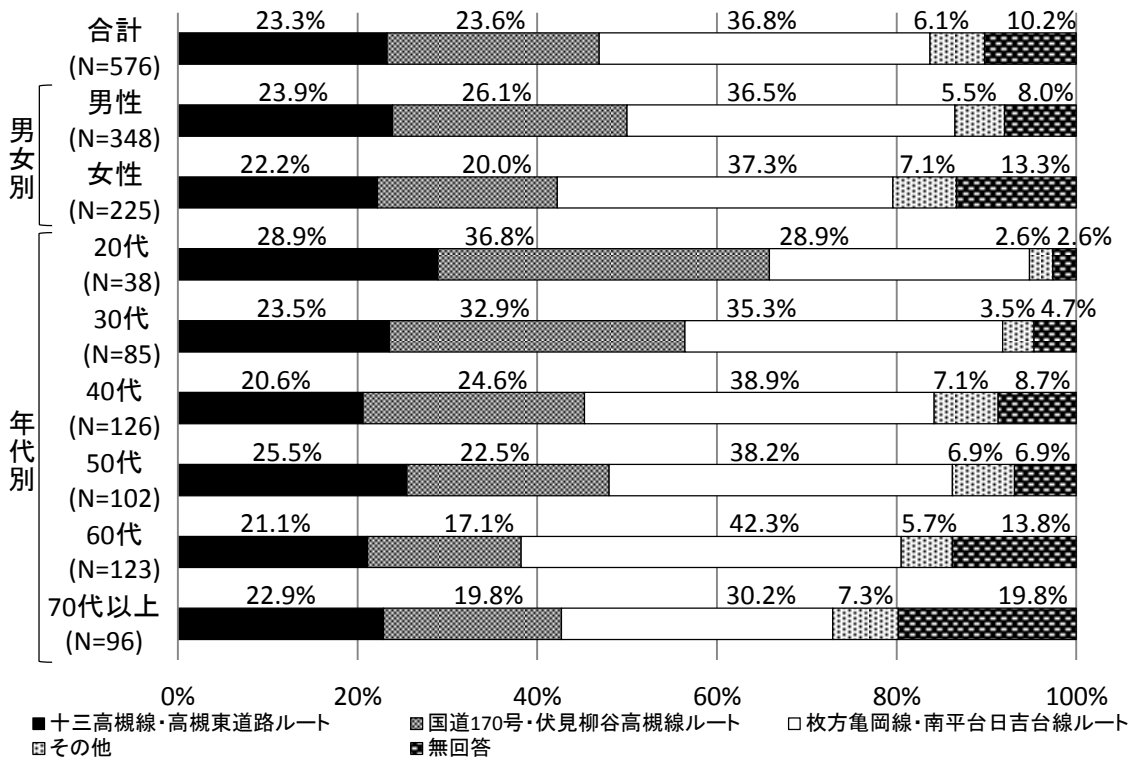


図 72 Q47 新名神完成後に通行したいルート

Q48 の新名神完成後に利用したいインターチェンジに関しては、男女別・年代別のすべての層で「高槻インターチェンジ」が 5 割から 7 割であり、最も高い割合である。また、70 代以上を除く男女別・年代別のすべての層で「茨木インターチェンジ」と「大山崎インターチェンジ」は 1 割から 2 割の割合、「茨木北インターチェンジ」は 1 割未満である。70 代以上では「大山崎インターチェンジ」の割合も 1 割未満である（図 73）。

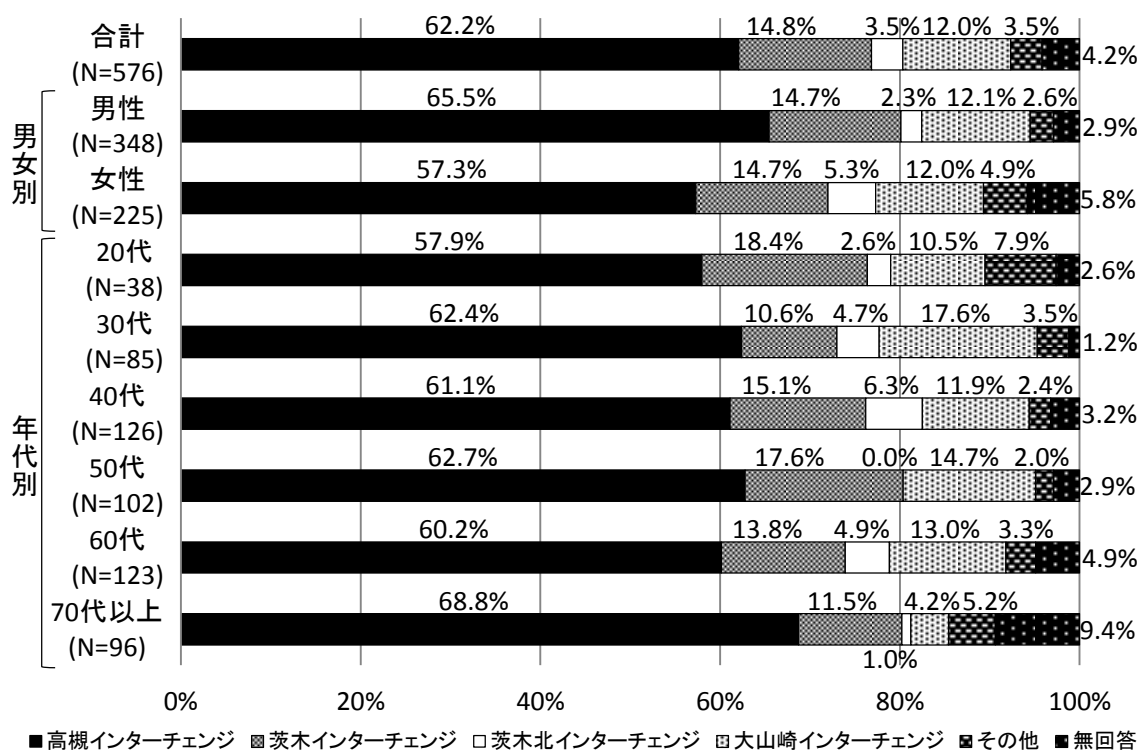


図 73 Q48 新名神完成後に利用したいインターチェンジ

Q49①と Q49②では、居住地域と居住年数とのクロス集計も提示する。また、図の数字が読みづらくなる場合は同時に表も提示している。

Q49①の市の仕事のうち良くなってきたものに関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」、「図書館、博物館などの文化施設の整備」、「ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）」の順に高い割合である（図74）。

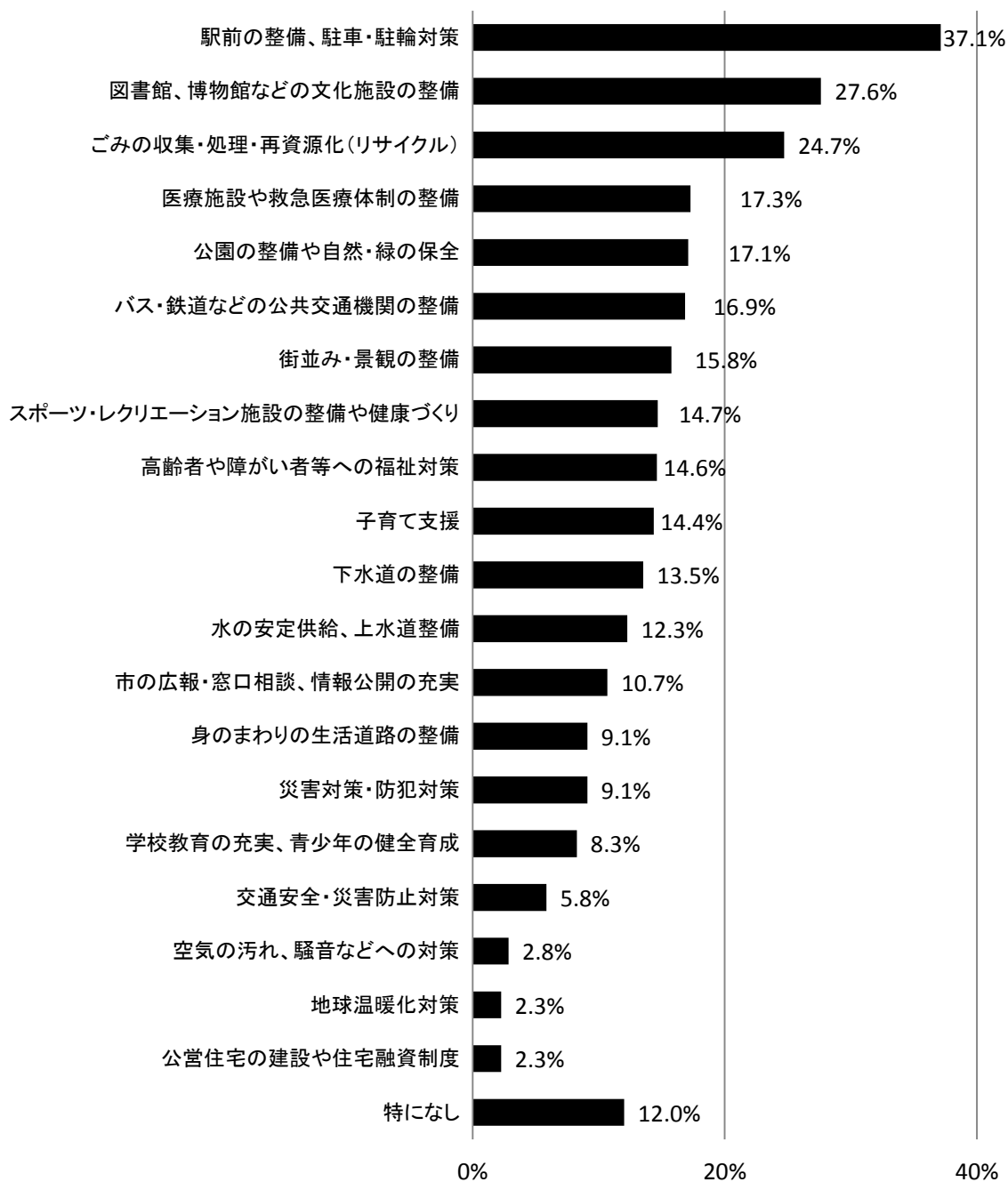


図 74 Q49① 市の仕事のうち良くなってきたもの（全体 N=1198）

Q49①を男女別で見ると、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」、「図書館、博物館などの文化施設の整備」、「子育て支援」において、男性よりも女性の方が4ポイント以上高い割合である。また、「バス・鉄道などの公共交通機関の整備」において、女性よりも男性の方が4ポイントほど高い割合である（図75）。

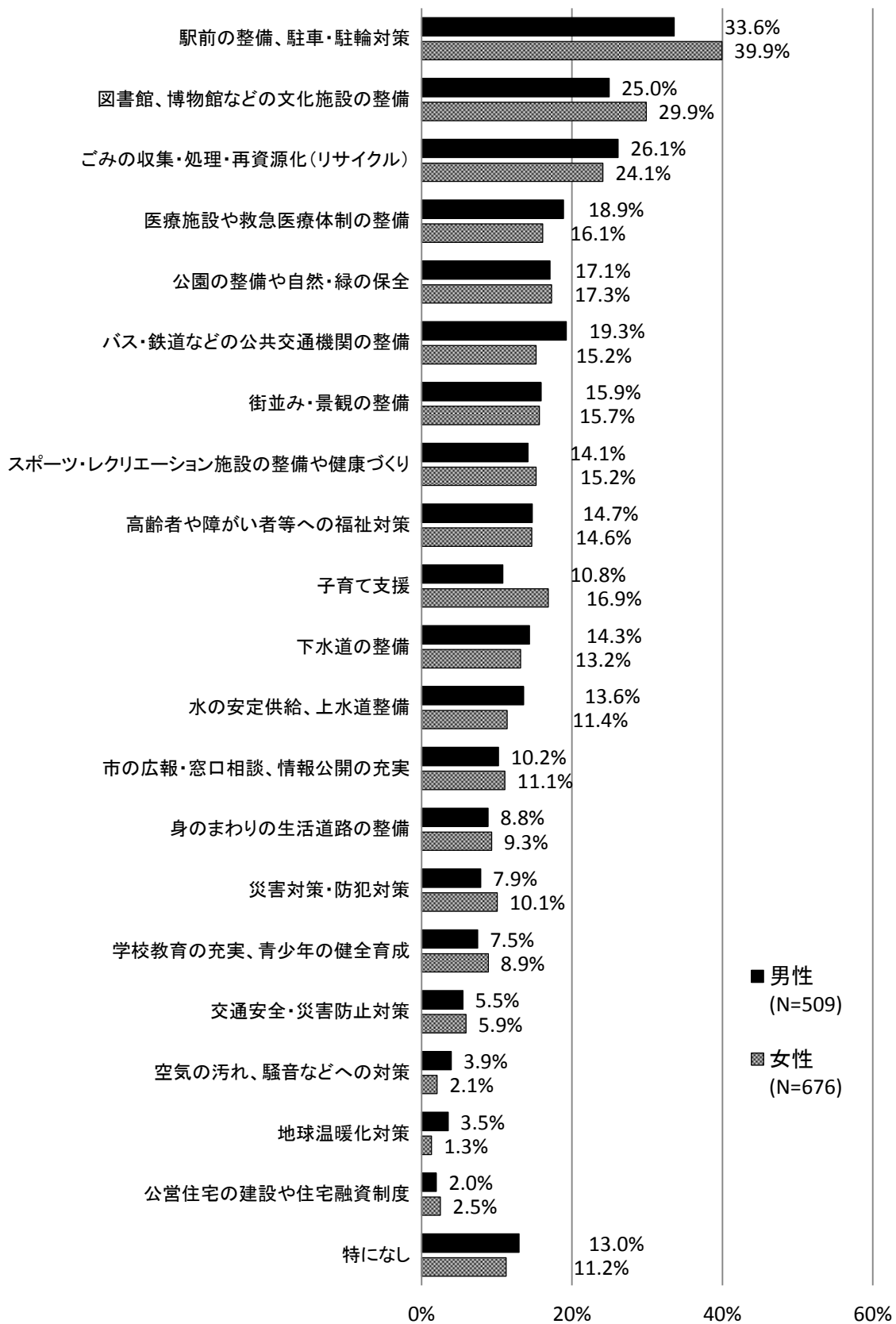


図 75 Q49① 市の仕事のうち良くなってきたもの（男女別）

Q49①を年代別で見ると、多くの項目において、70代以上が最も高い割合もしくは2番目に高い割合である。ただし「子育て支援」においては、70代以上は4.8%と最も低い割合である。「子育て支援」においては30代が最も高く、26.8%である。また、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」では、50代と60代が4割以上と高く、一方で70代以上は20代に次いで低い割合である。「街並み・景観の整備」においても、20代が他の年代よりも7ポイント以上高く、一方で70代以上は40代と同じ割合であり、30代に次いで低い(表9, 図76)。

表9 Q49① 市の仕事のうち良くなってきたもの(年代別)

	(%)						
	駅前の整備、 駐車・駐輪対策	図書館、博物館 などの文化施設 の整備	ごみの収集・ 処理・再資源化 (リサイクル)	医療施設や救急 医療体制の整備	公園の整備や 自然・緑の保全	バス・鉄道などの 公共交通機関の 整備	街並み・景観 の整備
20代 (N=83)	27.7	16.9	13.3	10.8	10.8	18.1	25.3
30代 (N=153)	35.9	22.2	9.2	15.0	17.0	13.1	13.7
40代 (N=206)	37.9	25.7	16.0	12.6	11.7	16.0	14.1
50代 (N=170)	40.0	30.0	19.4	14.7	12.9	8.8	15.3
60代 (N=276)	42.8	30.8	34.4	20.7	20.7	17.8	18.1
70代以上 (N=291)	33.3	30.6	36.4	22.0	21.6	22.7	14.1

	(%)						
	スポーツ・レクリ エーション施設の 整備や健康づくり	高齢者や 障がい者等への 福祉対策	子育て支援	下水道の整備	水の安定供給、 上水道整備	市の広報・ 窓口相談、 情報公開の充実	身のまわりの 生活道路の整備
20代 (N=83)	15.7	7.2	9.6	3.6	2.4	3.6	8.4
30代 (N=153)	7.8	9.8	26.8	3.9	5.9	6.5	5.9
40代 (N=206)	11.7	7.8	18.9	7.3	7.3	8.3	8.7
50代 (N=170)	13.5	7.6	14.1	9.4	10.0	3.5	6.5
60代 (N=276)	19.9	18.1	15.6	19.9	16.3	14.5	12.0
70代以上 (N=291)	16.5	25.4	4.8	22.7	19.9	17.2	10.3

	(%)						
	災害対策・ 防犯対策	学校教育の 充実、青少年の 健全育成	交通安全・ 災害防止対策	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	地球温暖化対策	公営住宅の建設 や住宅融資制度	特になし
20代 (N=83)	6.0	6.0	6.0	2.4	1.2	2.4	16.9
30代 (N=153)	4.6	10.5	3.9	1.3	2.0	1.3	17.0
40代 (N=206)	10.2	10.7	4.9	1.5	1.0	1.9	12.6
50代 (N=170)	11.2	5.9	6.5	1.2	0.0	2.9	12.4
60代 (N=276)	9.4	9.8	6.9	5.1	2.5	2.9	8.3
70代以上 (N=291)	10.7	6.5	5.8	3.8	4.8	2.1	10.3

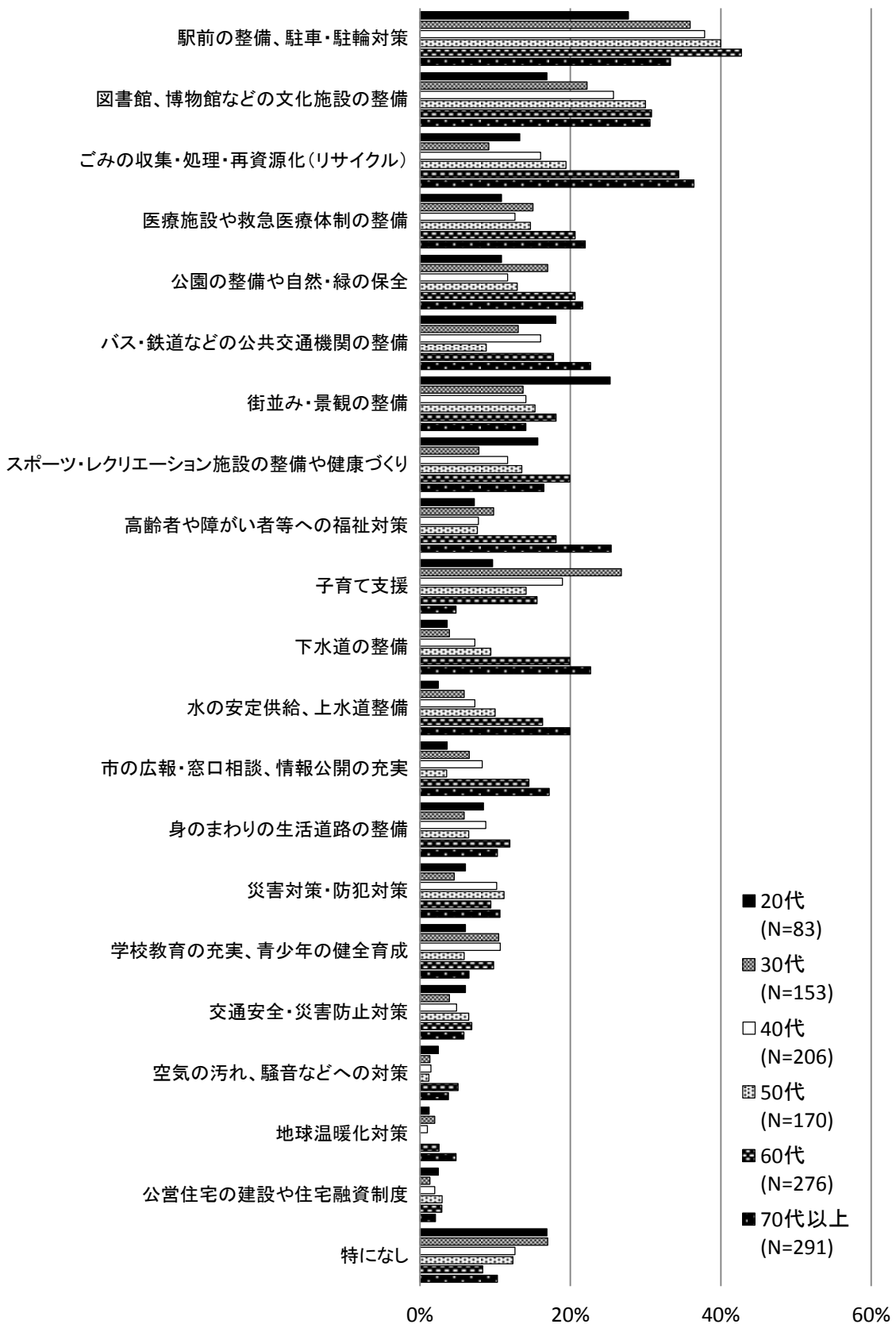


図 76 Q49① 市の仕事のうち良くなってきたもの（年代別）

次に提示する居住地域別に見たクロス集計では、檜田地区は除外してある。檜田地区は該当者が2人と極めて少なく、分析にそぐわないためである。

Q49①を居住地域別で見ると、檜田地区を除くすべての割合の中で、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」における高槻北地区と高槻南地区の割合のみが4割以上である。また、「バス・鉄道などの公共交通機関の整備」において、五領地区が38.2%と、その他の地区よりも20ポイント以上高い割合である（表10、図77）。

表10 Q49①市の仕事のうち良くなってきたもの（居住地域別）

	(%)						
	駅前の整備、 駐車・駐輪対策	図書館、博物館 などの文化施設 の整備	ごみの収集・ 処理・再資源化 (リサイクル)	医療施設や救急 医療体制の整備	公園の整備や 自然・緑の保全	バス・鉄道などの 公共交通機関の 整備	街並み・景観 の整備
高槻北地区 (N=317)	42.6	35.6	27.4	20.2	13.9	17.7	20.8
高槻南地区 (N=311)	42.4	20.6	24.8	18.3	16.7	15.8	11.6
五領地区 (N=55)	27.3	10.9	30.9	23.6	21.8	38.2	18.2
高槻西地区 (N=185)	34.1	34.6	21.6	11.4	22.2	17.8	13.5
如是・富田地区 (N=245)	31.0	29.0	23.7	16.7	18.0	11.8	17.1
三箇牧地区 (N=36)	22.2	11.1	22.2	13.9	19.4	13.9	8.3
	(%)						
	スポーツ・レクリ エーション施設の 整備や健康づくり	高齢者や 障がい者等への 福祉対策	子育て支援	下水道の整備	水の安定供給、 上水道整備	市の広報・ 窓口相談、 情報公開の充実	身のまわりの 生活道路の整備
高槻北地区 (N=317)	17.4	12.6	13.9	12.0	10.4	10.4	8.2
高槻南地区 (N=311)	12.9	17.0	14.8	11.3	11.6	10.3	9.6
五領地区 (N=55)	9.1	14.5	12.7	25.5	16.4	3.6	12.7
高槻西地区 (N=185)	13.0	14.6	15.7	16.2	12.4	11.9	11.9
如是・富田地区 (N=245)	15.5	13.5	13.1	13.5	15.1	11.8	8.2
三箇牧地区 (N=36)	16.7	22.2	13.9	19.4	11.1	11.1	5.6
	(%)						
	災害対策・ 防犯対策	学校教育の 充実、青少年の 健全育成	交通安全・ 災害防止対策	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	地球温暖化対策	公営住宅の建設 や住宅融資制度	特になし
高槻北地区 (N=317)	9.1	6.3	4.7	1.9	2.5	1.6	8.8
高槻南地区 (N=311)	10.9	8.0	7.7	3.5	1.6	1.6	13.2
五領地区 (N=55)	7.3	9.1	5.5	1.8	1.8	0.0	12.7
高槻西地区 (N=185)	7.0	14.1	5.9	4.3	2.7	2.2	13.0
如是・富田地区 (N=245)	9.8	6.9	5.3	2.9	1.6	2.0	12.7
三箇牧地区 (N=36)	8.3	8.3	5.6	2.8	11.1	11.1	16.7

注) 檜田地区の回答者は2人と少数であるため、精度上の理由で調査結果に表示していない。

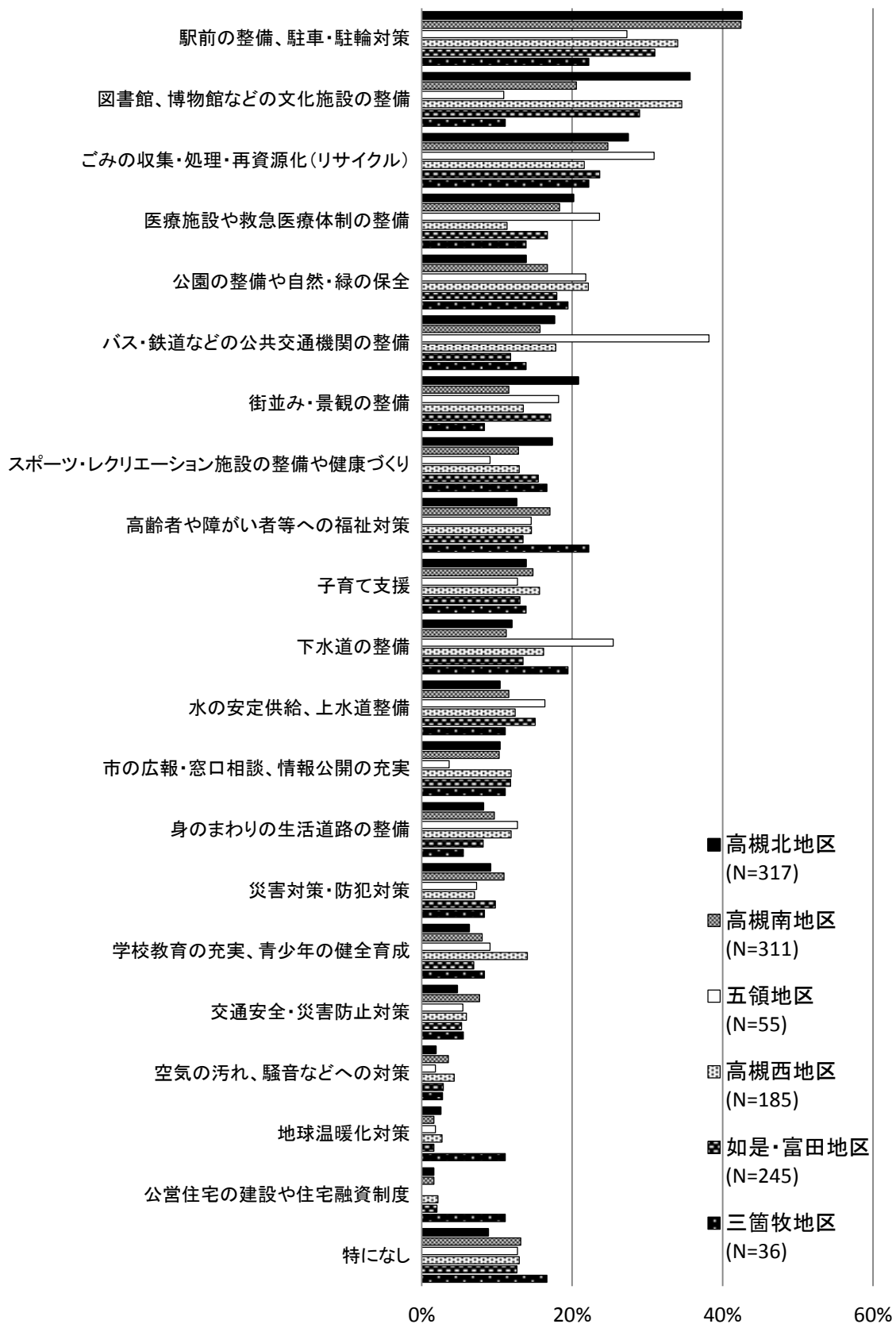


図 77 Q49① 市の仕事のうち良くなってきたもの（居住地域別）

Q49①を居住年数別で見ると、「子育て支援」において、5年以上10年未満が28.9%と、その他の居住年数よりも11ポイント以上高い割合である。「街並み・景観の整備」において、1年未満が30.8%と、その他の居住年数よりも12ポイント以上高い（表11、図78）。

表11 Q49①市の仕事のうち良くなってきたもの（居住年数別）

	(%)						
	駅前の整備、 駐車・駐輪対策	図書館、博物館 などの文化施設 の整備	ごみの収集・ 処理・再資源化 (リサイクル)	医療施設や救急 医療体制の整備	公園の整備や 自然・緑の保全	バス・鉄道などの 公共交通機関の 整備	街並み・景観 の整備
1年未満 (N=13)	38.5	15.4	15.4	7.7	23.1	15.4	30.8
1年以上3年未満 (N=41)	29.3	19.5	17.1	22.0	14.6	17.1	12.2
3年以上5年未満 (N=39)	25.6	17.9	5.1	12.8	17.9	5.1	10.3
5年以上10年未満 (N=97)	33.0	20.6	5.2	13.4	12.4	11.3	12.4
10年以上20年未満 (N=149)	42.3	26.2	22.8	15.4	12.8	18.1	14.1
20年以上30年未満 (N=196)	36.2	25.5	25.0	11.7	14.3	20.9	18.4
30年以上40年未満 (N=280)	40.0	32.1	29.6	20.4	19.6	16.1	18.6
40年以上50年未満 (N=266)	37.6	32.0	27.1	19.9	19.5	17.3	15.0
50年以上 (N=102)	34.3	27.5	38.2	20.6	19.6	17.6	14.7

	(%)						
	スポーツ・レクリ エーション施設の 整備や健康づくり	高齢者や 障がい者等への 福祉対策	子育て支援	下水道の整備	水の安定供給、 上水道整備	市の広報・ 窓口相談、 情報公開の充実	身のまわりの 生活道路の整備
1年未満 (N=13)	7.7	15.4	7.7	15.4	23.1	23.1	7.7
1年以上3年未満 (N=41)	19.5	14.6	17.1	4.9	9.8	4.9	7.3
3年以上5年未満 (N=39)	2.6	2.6	17.9	0.0	5.1	5.1	2.6
5年以上10年未満 (N=97)	8.2	6.2	28.9	2.1	1.0	10.3	7.2
10年以上20年未満 (N=149)	11.4	11.4	14.1	6.7	7.4	6.0	10.1
20年以上30年未満 (N=196)	16.3	8.7	11.7	13.3	10.7	6.6	7.1
30年以上40年未満 (N=280)	16.8	17.5	15.7	15.7	14.3	11.8	9.6
40年以上50年未満 (N=266)	17.7	21.1	10.2	19.2	15.8	16.2	10.9
50年以上 (N=102)	14.7	18.6	10.8	24.5	22.5	11.8	11.8

	(%)						
	災害対策・ 防犯対策	学校教育の 充実、青少年の 健全育成	交通安全・ 災害防止対策	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	地球温暖化対策	公営住宅の建設 や住宅融資制度	特になし
1年未満 (N=13)	0.0	7.7	7.7	0.0	7.7	7.7	7.7
1年以上3年未満 (N=41)	2.4	7.3	4.9	2.4	2.4	4.9	31.7
3年以上5年未満 (N=39)	5.1	5.1	0.0	5.1	0.0	0.0	20.5
5年以上10年未満 (N=97)	4.1	13.4	7.2	0.0	0.0	0.0	15.5
10年以上20年未満 (N=149)	6.7	11.4	2.0	2.0	1.3	1.3	11.4
20年以上30年未満 (N=196)	9.2	5.1	4.1	2.6	3.1	2.6	11.2
30年以上40年未満 (N=280)	11.1	7.5	7.5	3.6	1.4	3.6	10.0
40年以上50年未満 (N=266)	11.3	8.3	6.4	4.1	3.8	1.9	9.0
50年以上 (N=102)	12.7	8.8	9.8	2.0	2.9	2.0	13.7

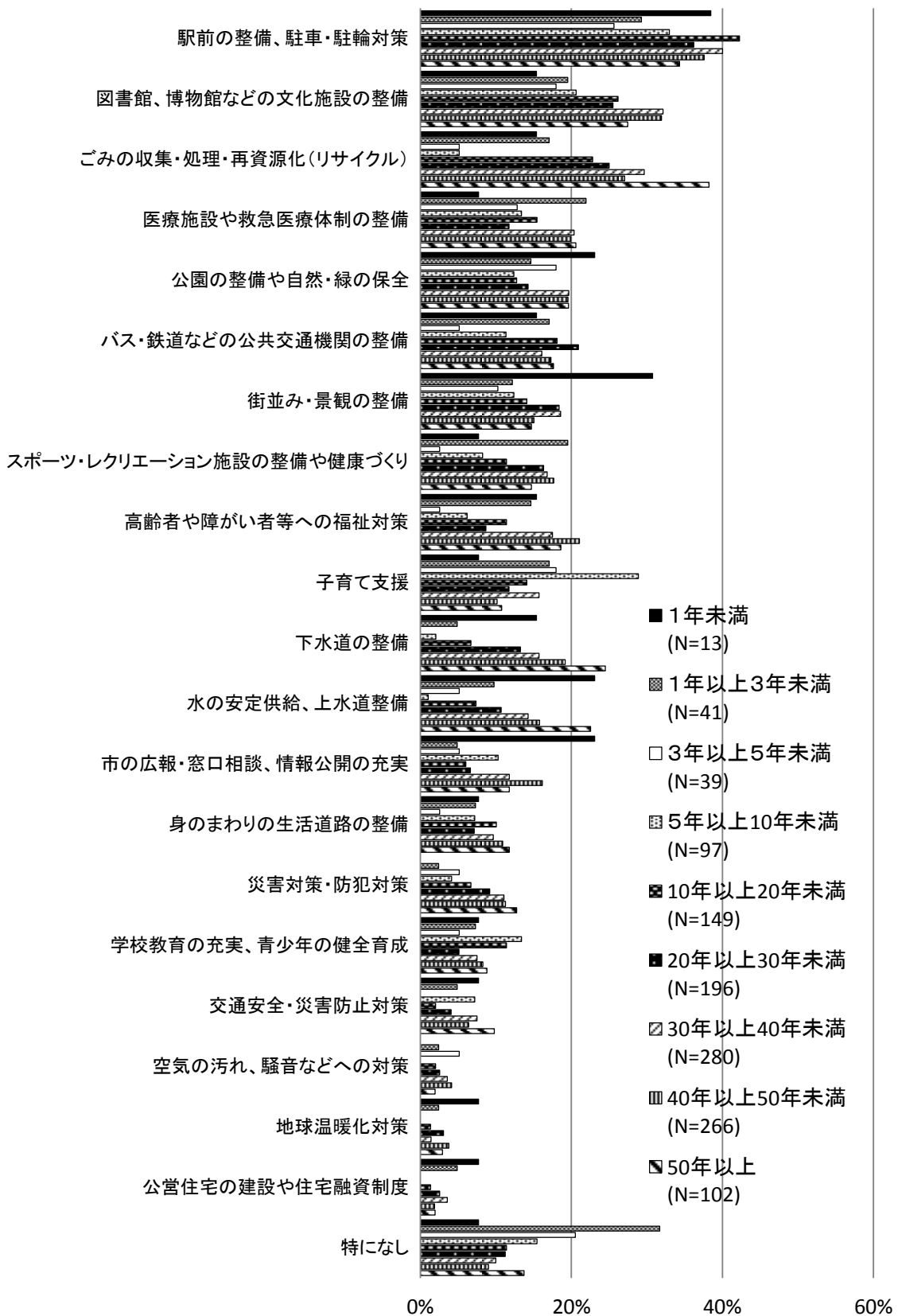


図 78 Q49① 市の仕事のうち良くなってきたもの（居住年数別）

Q49②の市の仕事のうち力を入れてほしいものに関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「高齢者や障がい者等への福祉対策」、「医療施設や救急医療体制の整備」、「災害対策・防犯対策」の順に高い割合である（図 79）。

Q49②を男女別で見ると、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」において、男性が 15.3%、女性が 9.6%と、男性の方が 6 ポイントほど高い割合である。また、「スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり」において、男性が 12.0%、女性が 7.8%と、男性の方が 4 ポイントほど高い割合である。女性の方が高い割合で、最も男女差が大きいのは「地球温暖化対策」であり、男性が 8.4%、女性が 11.8%である（図 80）。

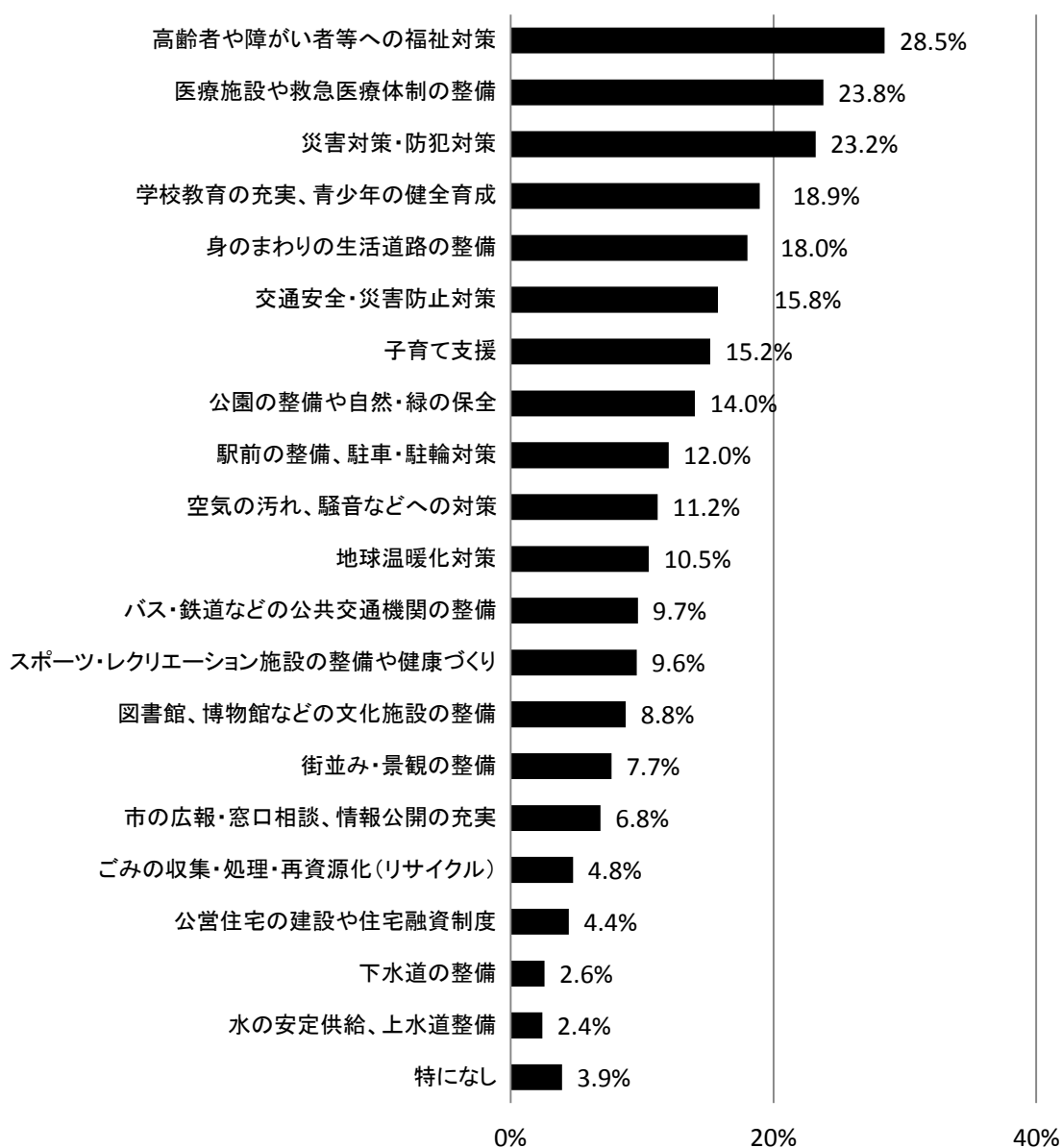


図 79 Q49② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（全体 N=1198）

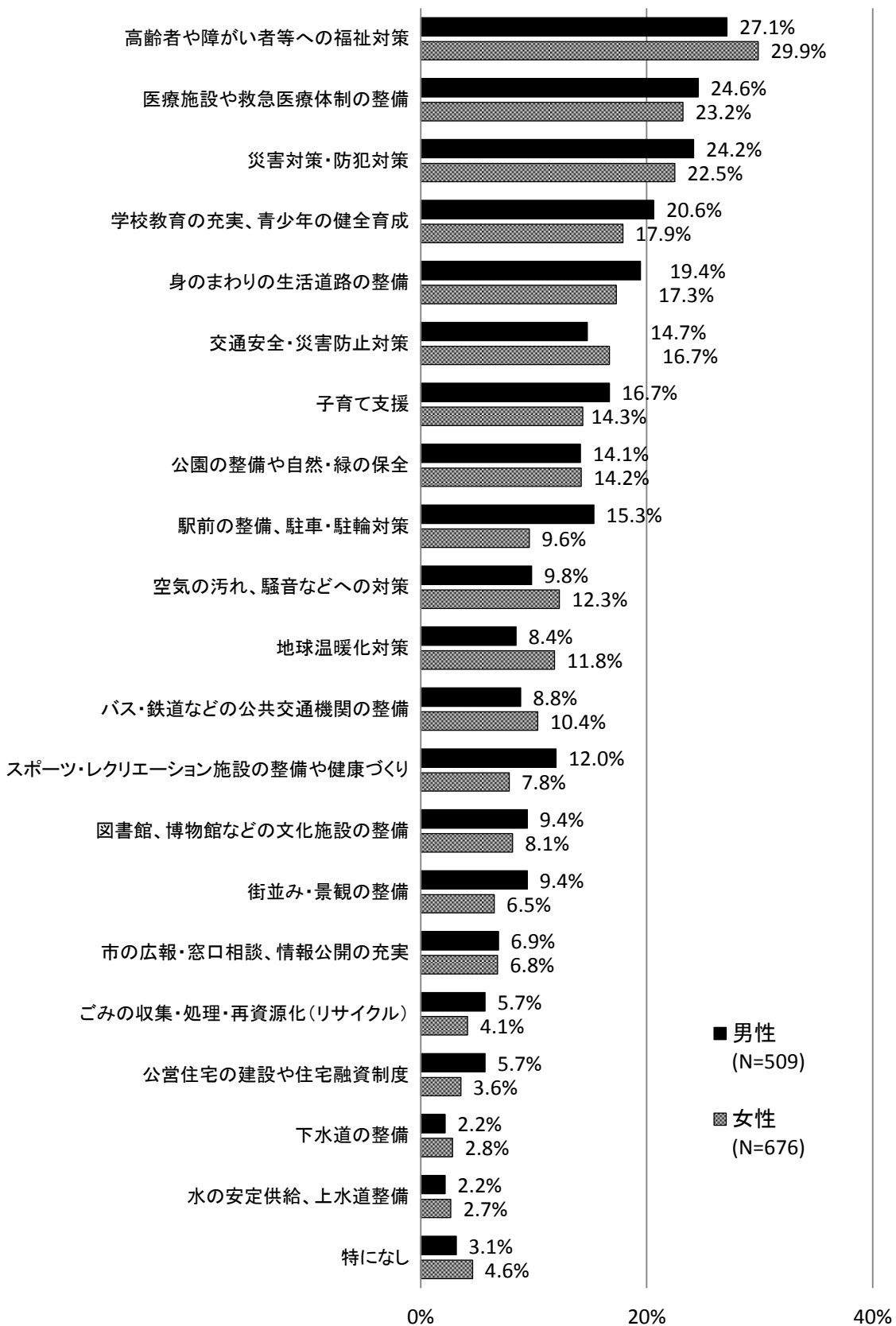


図 80 Q49② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（男女別）

Q49②を年代別で見ると、「子育て支援」において、30代が42.5%と、その他の年代よりも16ポイント以上高い割合である。それ以外で4割以上であるのは、「高齢者や障がい者等への福祉対策」における70代以上である。また、「高齢者や障がい者等への福祉対策」、「学校教育の充実、青少年の健全育成」、「子育て支援」、「身のまわりの生活道路の整備」、「空気の汚れ、騒音などへの対策」において、40代以下と50代以上での差が大きい(表12、図81)。

表12 Q49② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの(年代別)

	(%)						
	高齢者や障がい者等への福祉対策	医療施設や救急医療体制の整備	災害対策・防犯対策	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備	交通安全・災害防止対策	子育て支援
20代(N=83)	20.5	22.9	18.1	21.7	22.9	16.9	26.5
30代(N=153)	11.1	15.0	26.8	30.7	21.6	13.1	42.5
40代(N=206)	19.9	23.8	26.7	23.8	21.4	18.0	19.9
50代(N=170)	27.1	27.6	28.2	18.2	15.9	22.9	9.4
60代(N=276)	34.8	26.4	21.0	12.0	17.0	15.6	7.6
70代以上(N=291)	40.9	24.7	19.2	15.8	15.5	12.0	5.8

	(%)						
	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	地球温暖化対策	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	図書館、博物館などの文化施設の整備
20代(N=83)	14.5	19.3	15.7	6.0	10.8	18.1	13.3
30代(N=153)	15.7	11.8	15.0	9.2	9.2	10.5	11.8
40代(N=206)	14.6	13.6	13.6	7.3	11.2	8.7	10.2
50代(N=170)	13.5	13.5	8.8	9.4	11.2	14.7	10.6
60代(N=276)	12.7	9.4	10.9	15.6	8.0	9.1	8.7
70代以上(N=291)	15.1	10.7	7.9	10.0	9.6	5.2	3.4

	(%)						
	街並み・景観の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	公営住宅の建設や住宅融資制度	下水道の整備	水の安定供給、上水道整備	特になし
20代(N=83)	13.3	3.6	6.0	2.4	1.2	3.6	3.6
30代(N=153)	9.8	5.2	4.6	3.9	1.3	0.0	4.6
40代(N=206)	9.2	5.3	4.4	6.3	1.5	1.9	1.9
50代(N=170)	7.6	7.6	2.9	4.7	2.4	0.6	2.9
60代(N=276)	8.7	7.6	5.8	5.1	3.6	3.6	5.8
70代以上(N=291)	3.1	8.6	5.2	3.4	3.4	3.8	4.1

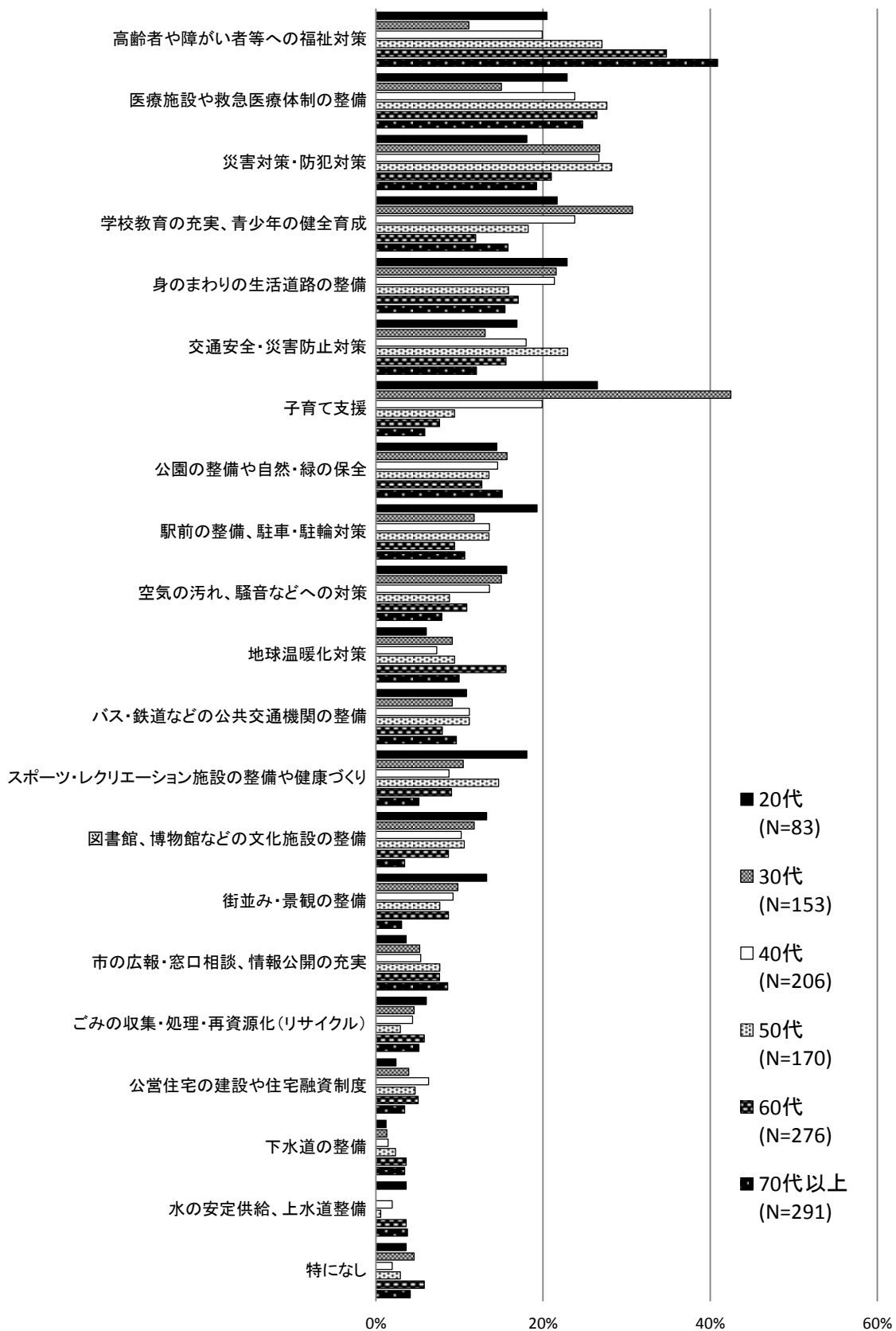


図 81 Q49② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（年代別）

次に提示する居住地域別に見たクロス集計では、樫田地区は除外してある。樫田地区は該当者が2人と極めて少なく、分析にそぐわないためである。

Q49②を居住地域別で見ると、「高齢者や障がい者等への福祉対策」において、三箇牧地区が47.2%と、樫田地区を除く他の地区よりも16ポイント以上高い割合である。「図書館、博物館などの文化施設の整備」において、五領地区が29.1%と、その他の地区よりも19ポイント以上高い割合である。また、「水の安定供給、上水道整備」において、三箇牧地区が13.9%と、その他の地区よりも10ポイント以上高い割合である（表13、図82）。

表13 Q49② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（居住地域別）

	高齢者や障がい者等への福祉対策	医療施設や救急医療体制の整備	災害対策・防犯対策	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備	交通安全・災害防止対策	子育て支援
高槻北地区 (N=317)	29.0	21.1	22.1	18.9	16.4	16.4	13.2
高槻南地区 (N=311)	25.1	23.5	28.9	19.9	18.0	17.0	14.5
五領地区 (N=55)	21.8	16.4	23.6	14.5	14.5	18.2	10.9
高槻西地区 (N=185)	28.1	27.6	21.1	21.6	22.2	17.3	22.2
如是・富田地区 (N=245)	30.6	27.8	20.4	19.6	18.4	14.3	15.9
三箇牧地区 (N=36)	47.2	16.7	19.4	11.1	8.3	5.6	5.6

	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	地球温暖化対策	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	図書館、博物館などの文化施設の整備
高槻北地区 (N=317)	14.5	12.6	9.8	10.4	8.2	9.8	8.2
高槻南地区 (N=311)	13.8	12.9	15.1	12.5	8.4	11.3	8.7
五領地区 (N=55)	5.5	5.5	10.9	12.7	14.5	16.4	29.1
高槻西地区 (N=185)	15.7	13.5	9.7	9.2	12.4	11.4	9.7
如是・富田地区 (N=245)	15.1	11.0	8.6	8.6	9.4	7.3	5.7
三箇牧地区 (N=36)	11.1	5.6	11.1	13.9	16.7	2.8	5.6

	街並み・景観の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	公営住宅の建設や住宅融資制度	下水道の整備	水の安定供給、上水道整備	特になし
高槻北地区 (N=317)	8.5	5.4	3.2	3.2	1.6	0.9	4.1
高槻南地区 (N=311)	8.0	7.1	5.5	5.1	1.9	1.9	3.5
五領地区 (N=55)	7.3	9.1	7.3	1.8	5.5	3.6	0.0
高槻西地区 (N=185)	7.0	5.9	3.8	3.2	2.7	1.6	3.8
如是・富田地区 (N=245)	7.3	9.4	5.7	6.9	2.0	2.4	4.5
三箇牧地区 (N=36)	0.0	0.0	2.8	5.6	11.1	13.9	11.1

注) 樫田地区の回答者は2人と少数であるため、精度上の理由で調査結果に表示していない。

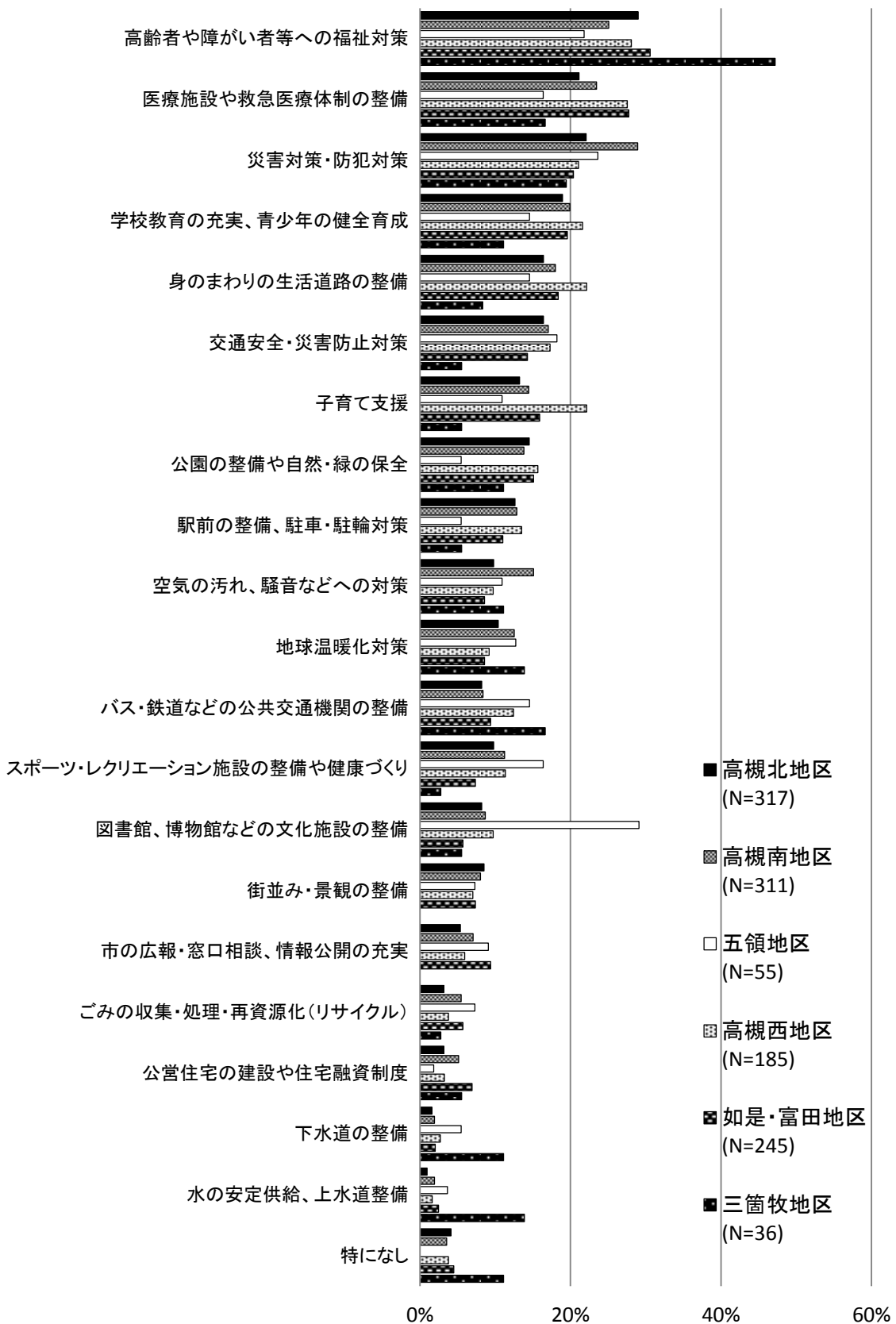


図 82 Q49② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（居住地域別）

Q49②を居住年数別に見ると、「子育て支援」において、5年以上10年未満が38.1%と、その他の居住年数よりも8ポイント以上高い。「身のまわりの生活道路の整備」においては、3年以上5年未満が30.8%と、その他の居住年数よりも10ポイント以上高い(表14、図83)。

表14 Q49② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの(居住年数別)

	高齢者や障がい者等への福祉対策	医療施設や救急医療体制の整備	災害対策・防犯対策	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備	交通安全・災害防止対策	子育て支援
1年未満(N=13)	23.1	23.1	23.1	7.7	7.7	0.0	23.1
1年以上3年未満(N=41)	17.1	19.5	14.6	19.5	17.1	2.4	29.3
3年以上5年未満(N=39)	10.3	17.9	25.6	30.8	30.8	17.9	28.2
5年以上10年未満(N=97)	18.6	13.4	28.9	32.0	20.6	18.6	38.1
10年以上20年未満(N=149)	27.5	25.5	28.9	18.8	18.8	20.8	17.4
20年以上30年未満(N=196)	26.0	20.9	22.4	17.3	16.3	17.3	11.7
30年以上40年未満(N=280)	29.6	28.6	26.1	14.6	18.6	14.6	14.3
40年以上50年未満(N=266)	35.0	24.8	18.0	21.4	18.8	15.4	8.3
50年以上(N=102)	35.3	27.5	17.6	12.7	11.8	13.7	7.8

	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	地球温暖化対策	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	図書館、博物館などの文化施設の整備
1年未満(N=13)	15.4	23.1	15.4	7.7	15.4	7.7	15.4
1年以上3年未満(N=41)	12.2	12.2	19.5	9.8	14.6	12.2	12.2
3年以上5年未満(N=39)	25.6	12.8	17.9	5.1	5.1	12.8	10.3
5年以上10年未満(N=97)	12.4	5.2	11.3	5.2	13.4	8.2	16.5
10年以上20年未満(N=149)	10.1	10.1	12.8	6.7	12.8	9.4	11.4
20年以上30年未満(N=196)	14.8	15.8	9.2	11.7	8.2	15.3	9.7
30年以上40年未満(N=280)	17.5	11.8	9.6	12.9	7.1	8.9	5.7
40年以上50年未満(N=266)	14.7	12.8	11.7	12.8	9.4	7.5	7.5
50年以上(N=102)	6.9	9.8	8.8	9.8	12.7	6.9	5.9

	街並み・景観の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	公営住宅の建設や住宅融資制度	下水道の整備	水の安定供給、上下水道整備	特になし
1年未満(N=13)	7.7	0.0	15.4	7.7	7.7	15.4	0.0
1年以上3年未満(N=41)	7.3	7.3	9.8	4.9	2.4	0.0	2.4
3年以上5年未満(N=39)	7.7	5.1	2.6	7.7	0.0	2.6	5.1
5年以上10年未満(N=97)	6.2	3.1	6.2	1.0	2.1	1.0	4.1
10年以上20年未満(N=149)	8.7	6.0	4.0	3.4	3.4	0.7	3.4
20年以上30年未満(N=196)	10.7	7.7	3.6	3.1	2.0	2.0	5.1
30年以上40年未満(N=280)	6.8	5.7	3.9	6.1	2.9	0.7	4.6
40年以上50年未満(N=266)	7.1	8.6	4.9	5.3	2.6	6.0	2.6
50年以上(N=102)	6.9	9.8	6.9	2.9	2.0	2.0	3.9

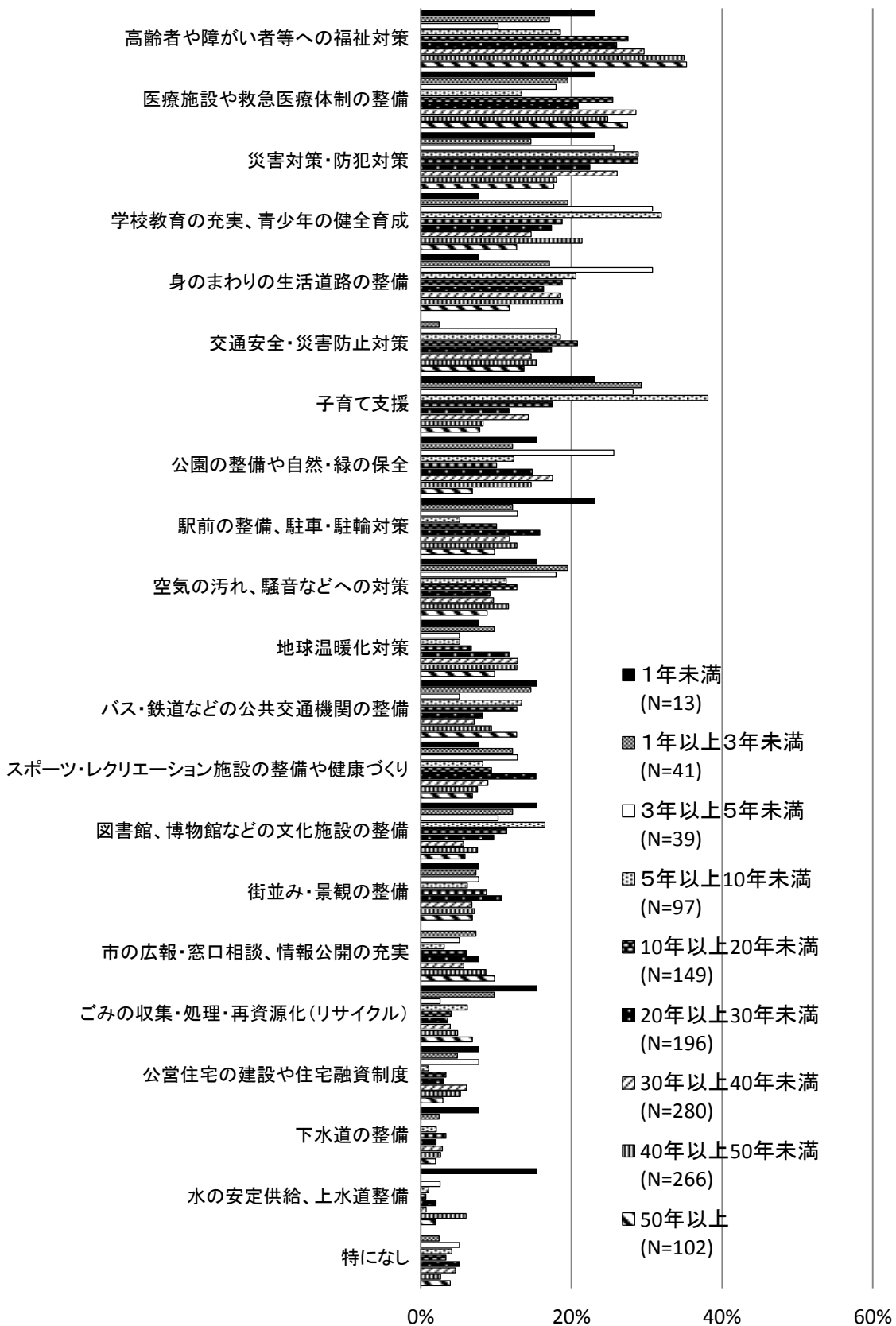


図 83 Q49② 市の仕事のうち力を入れてほしいもの（居住年数別）

Q50 の高槻市を訪れる観光客数に関しては、男女別・年代別のすべての層で「少ないと思う」または「やや少ないと思う」と回答した人の割合が7割以上である。「適正であると思う」の割合は、20代のみが2割以上で、その他の層では1割以上2割未満である(図84)。

Q51a の観光客に地域の良さを体験してほしいかに関しては、年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、30代の27.4%から年代が上がるごとに増加し、70代以上では46.3%である。なお、20代では33.7%である。また、男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」が最も高い割合である(図85)。

Q51b の観光客と交流したいかに関しては、20代と40代と50代では「あまりそう思わない」が最も高い。また、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、20代でのみ2割以上である。20代と40代と50代を除く男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」が最も高い割合であるが、「どちらともいえない」を除くと、すべての層で、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合よりも、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合の方が高い(図86)。

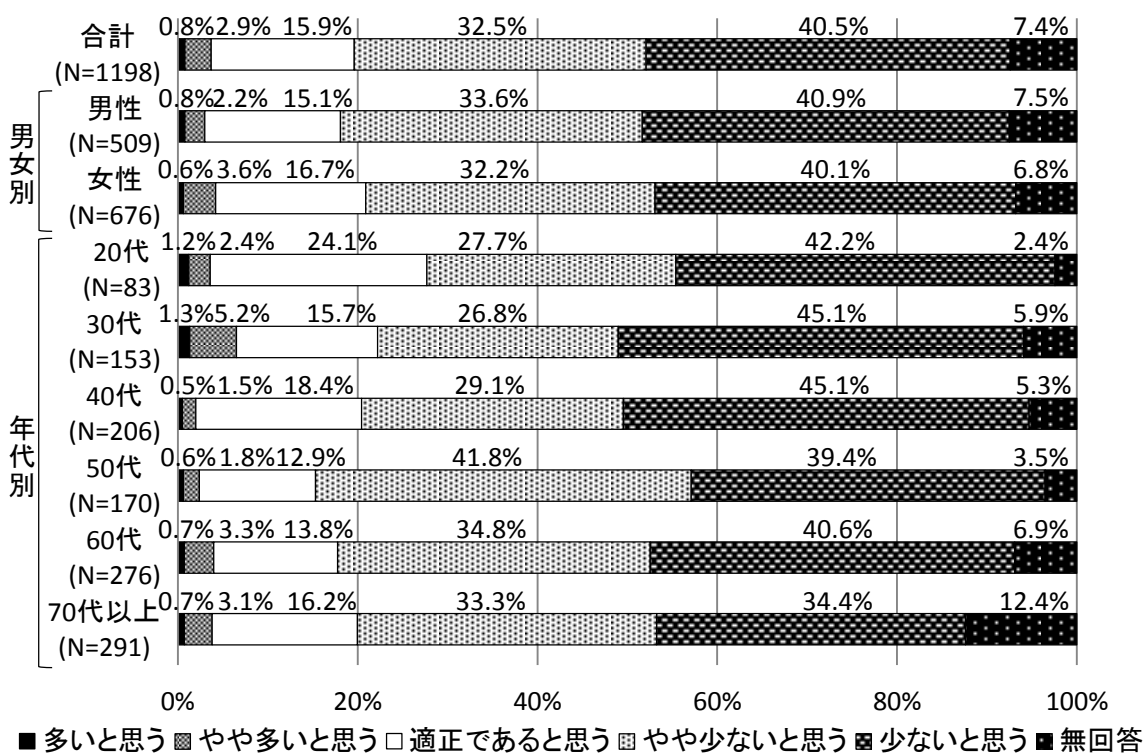


図84 Q50 高槻市を訪れる観光客数

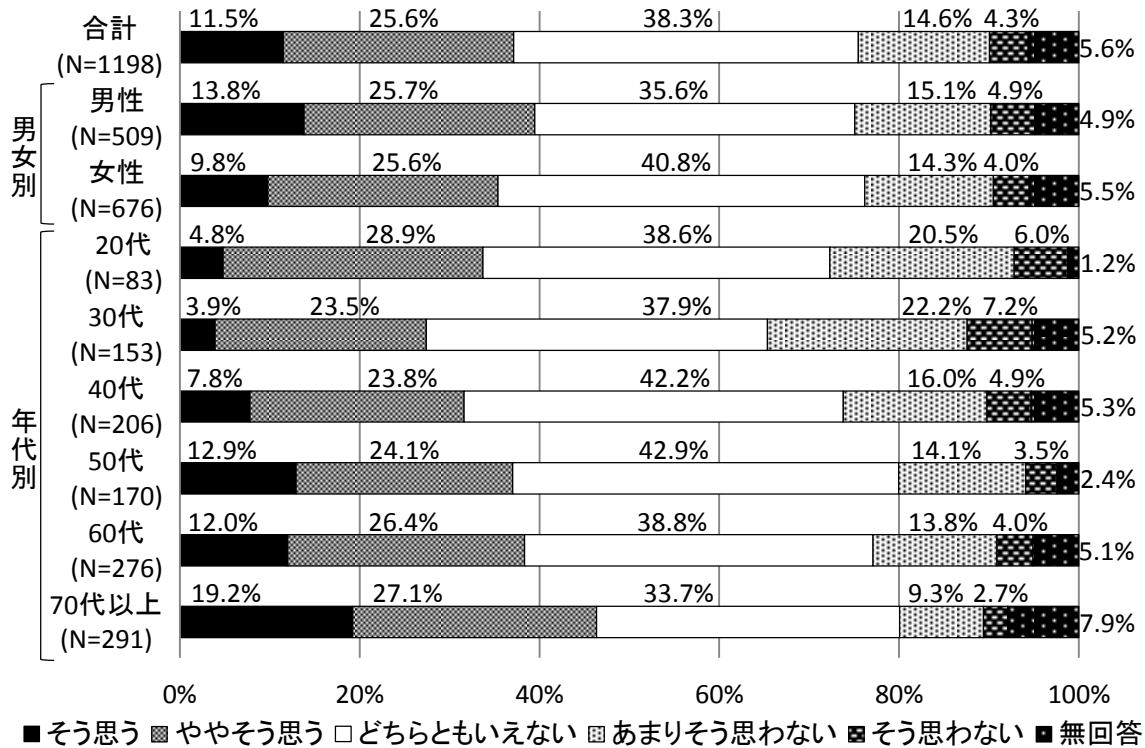


図 85 Q51a 観光客に地域の良さを経験してほしいか

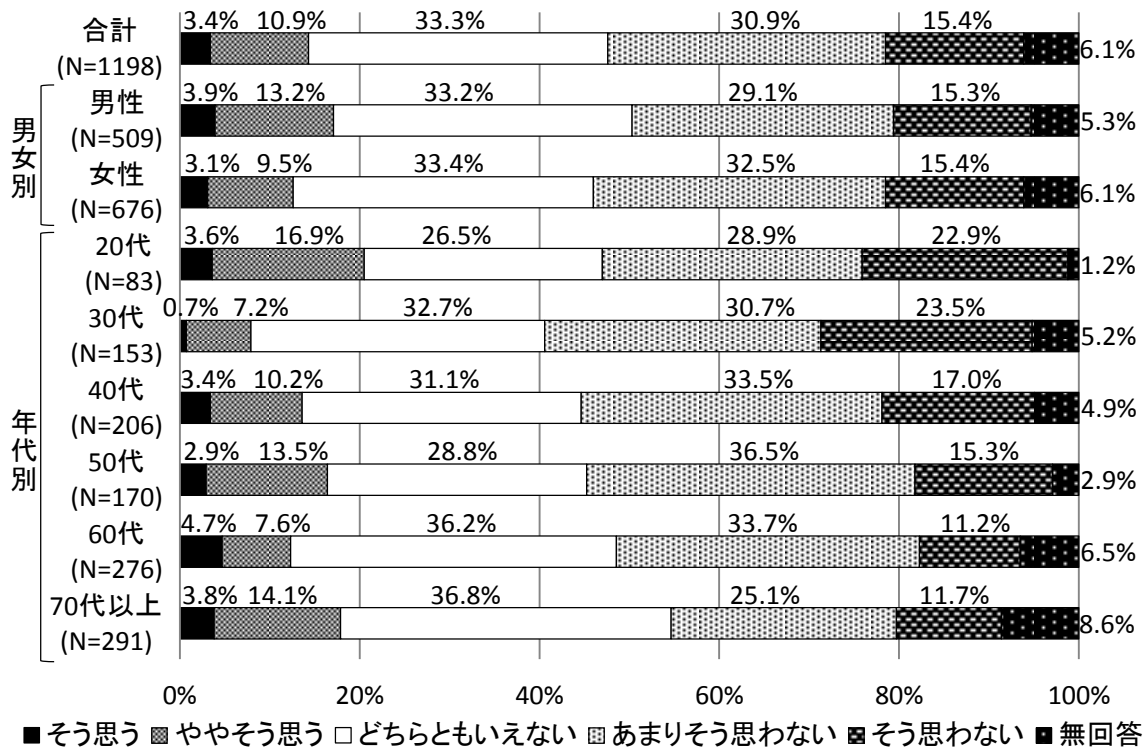


図 86 Q51b 観光客と交流したいか

Q51c の観光客によって地域が活性化しているかに関しては、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、20代でのみ3割以上である。男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」が最も高い割合であるが、「どちらともいえない」を除くと、すべての層で、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合よりも、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合の方が高い（図 87）。

Q51d の観光のための環境整備によって利便性が高まっているかに関しては、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、20代でのみ2.5割以上である。男女別で見ると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合は、男性で38.9%、女性で30.5%と男性の方が8ポイントほど高い。また、男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」が最も高い割合である（図 88）。

Q51e の観光のための環境整備を進めるべきかに関しては、年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、20代と60代以上において4割以上である。20代では「ややそう思う」が最も高い。「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合は、30代でのみ3割以上である。20代を除くと、男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」が最も高い割合である（図 89）。

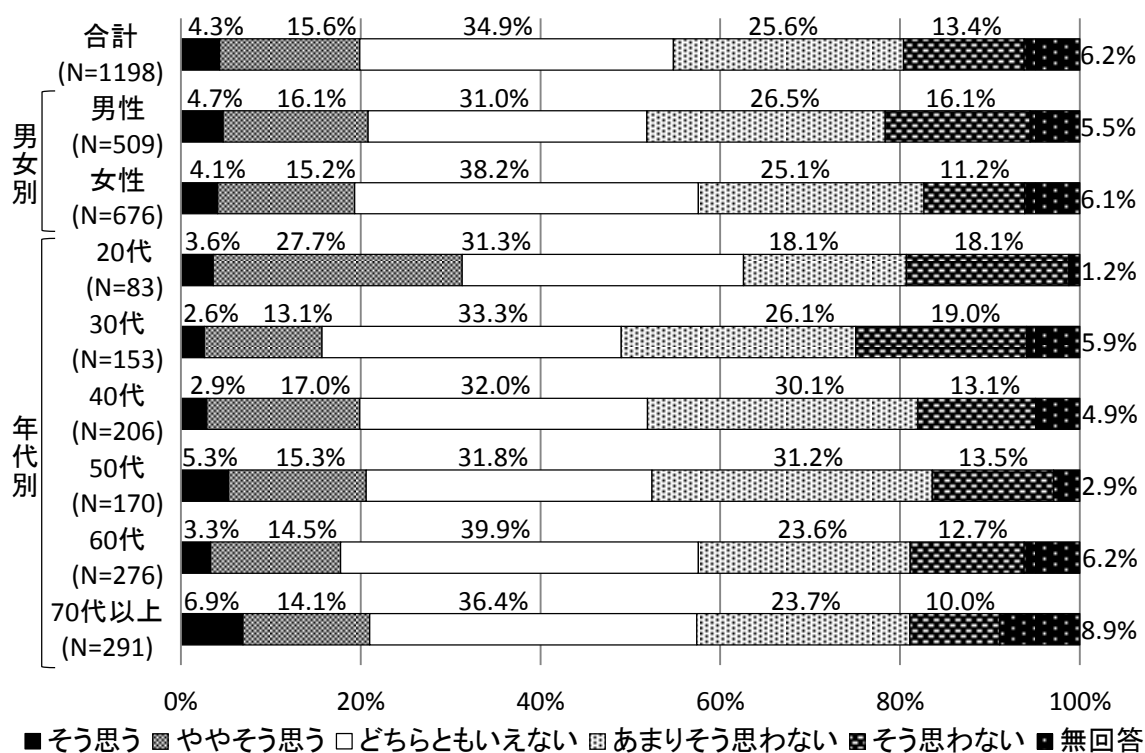


図 87 Q51c 観光客によって地域が活性化しているか

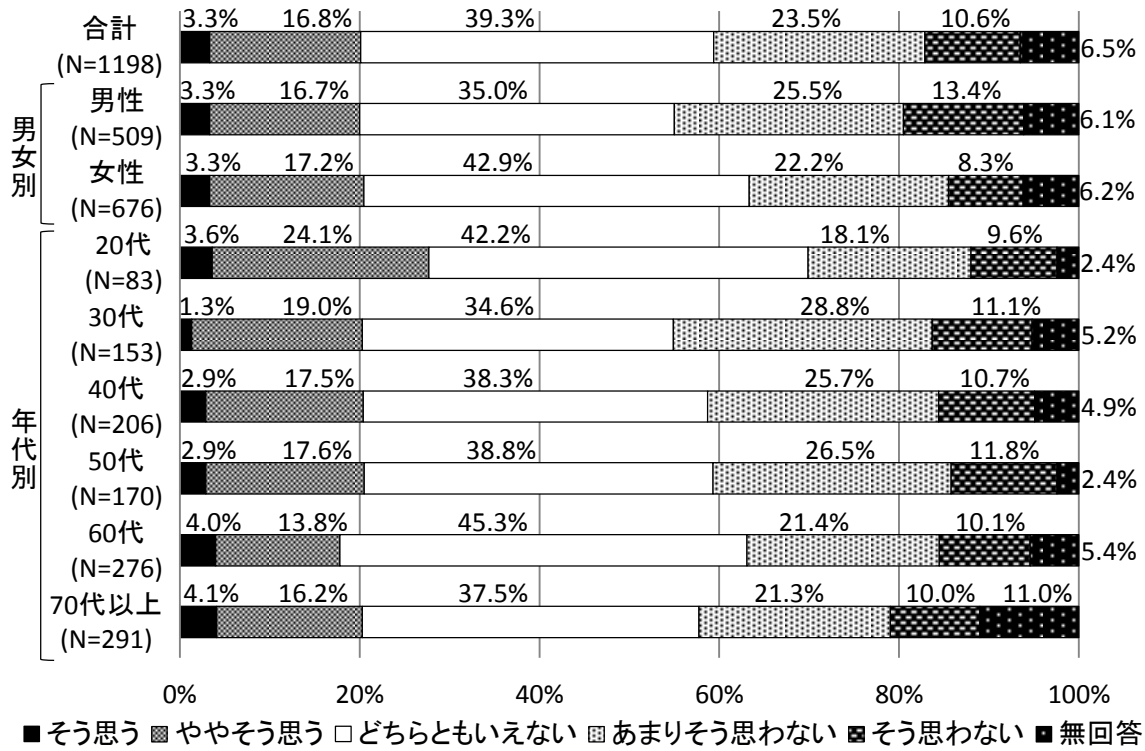


図 88 Q51d 観光のための環境整備によって利便性が高まっているか

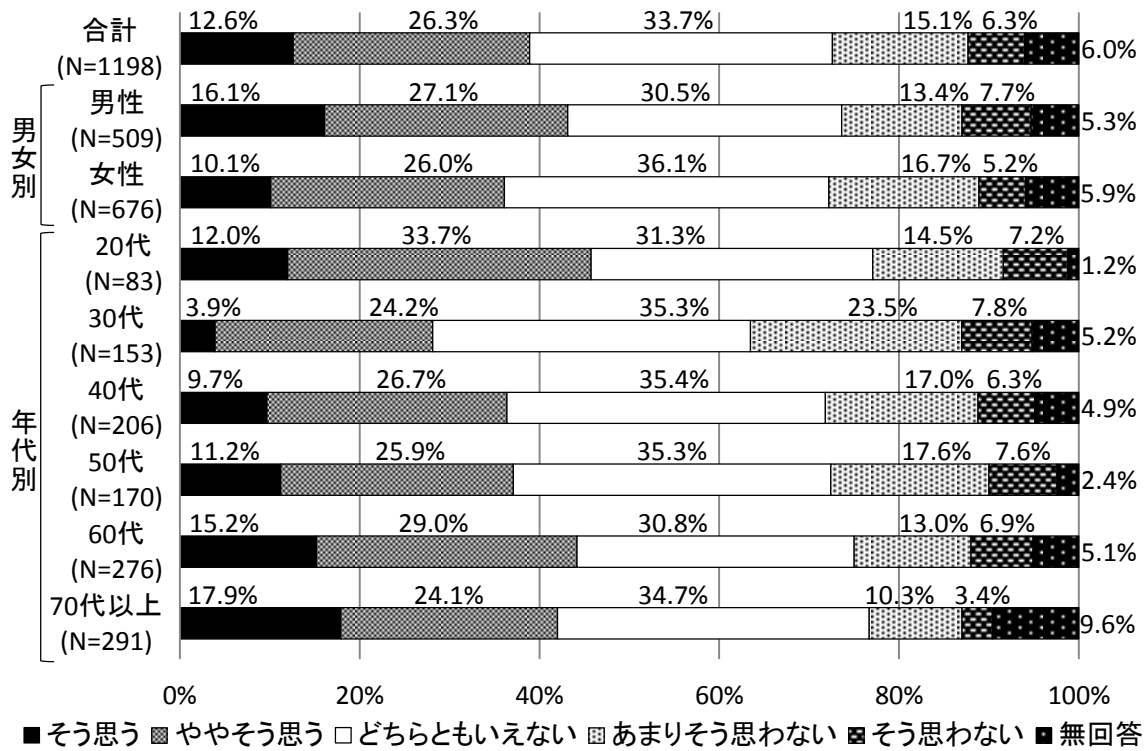


図 89 Q51e 観光のための環境整備を進めるべきか

Q51fの住民生活を優先した上で観光開発すべきかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合が7割前後である(図90)。

Q52の時間的ゆとりを感じるかに関しては、合計で見ると、「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は38.7%である。年代別で見ると、その割合は、30代の16.4%から年代が上がるごとに増加し、70代以上では60.1%である。なお、20代では30.1%である(図91)。

Q53の情報収集にインターネット上のやりとりを重視するかに関しては、「重視する」または「少し重視する」の割合は、合計で見ると、48.8%である。男女別で見ると、その割合は、男性では55.0%、女性では44.5%と、男性の方が10ポイントほど高い。年代別で見ると、20代が82.0%で最も高い割合で、年代が上がるごとに減少し、70代以上では21.3%である(図92)。

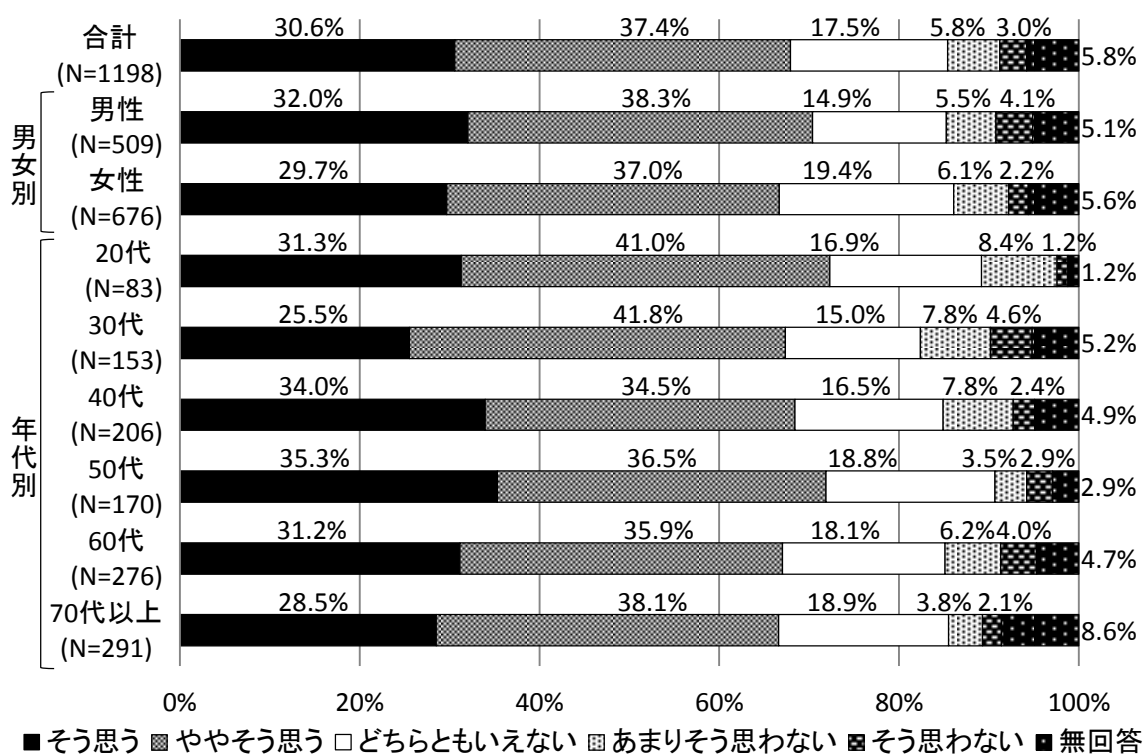


図90 Q51f 住民生活を優先した上で観光開発すべきか

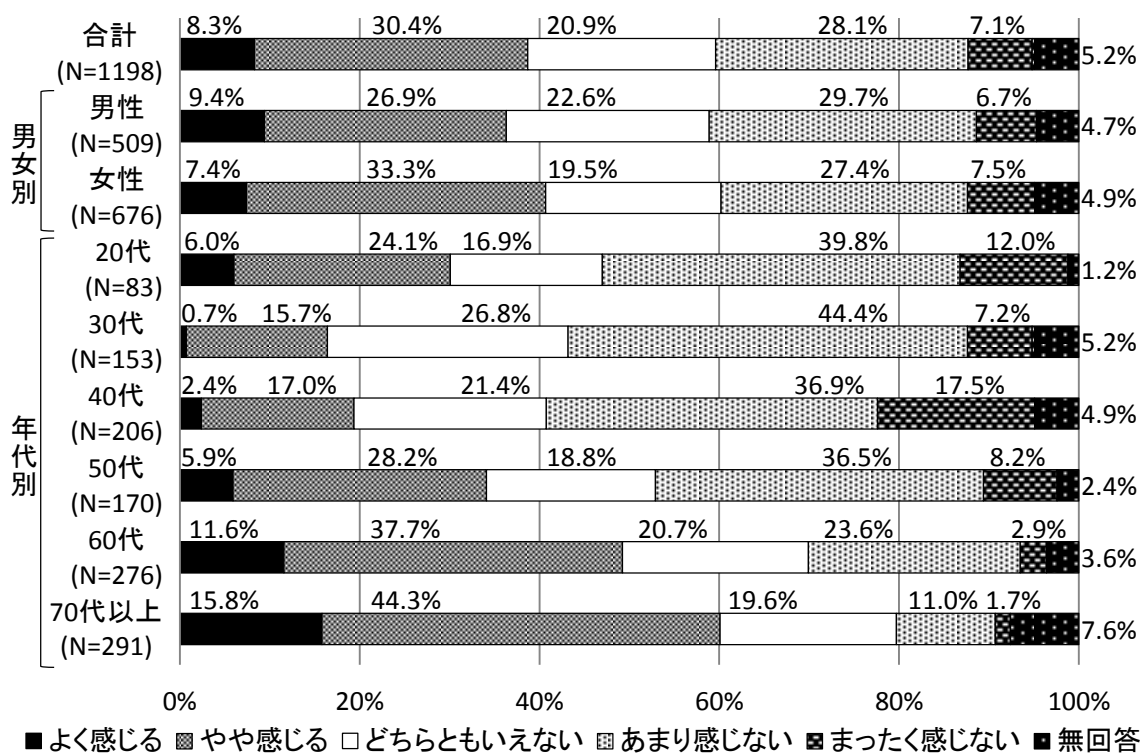


図 91 Q52 時間的ゆとりを感じるか

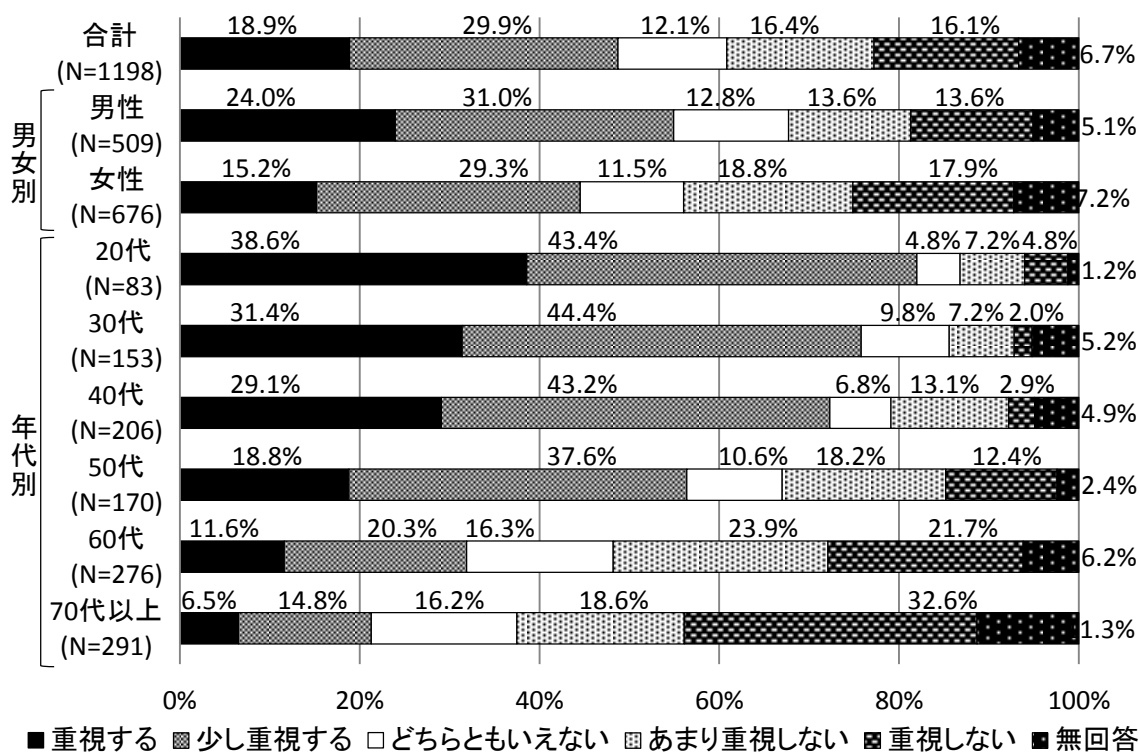


図 92 Q53 情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか

Q54 のインターネットの1日平均利用時間に関しては、合計および男性・女性で見ると、「全く利用しない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「全く利用しない」の割合は60代で46.7%、70代以上で64.3%と最も高い割合であるが、20代から40代では1割未満、50代では21.8%である。20代から40代では「30分以上1時間未満」が最も高い割合で、50代では「30分未満」が最も高い（表15）。

Q55 の1日に趣味に費やす時間に関しては、70代以上を除く男女別・年代別のすべての層で「1時間未満」が最も高い割合である。70代以上では「1時間以上3時間未満」が最も高い。年代別で見ると、3時間以上の割合は20代では8.4%であるが、年代が上がるほど減少し、40代で2.9%になった後は増加に転じ、70代以上では17.9%になる（図93）。

Q56 の自由時間の使い方に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「趣味」、「買い物」、「睡眠」の順に高い割合である（図94）。

表 15 Q54 インターネットの1日平均利用時間

											(%)
		全く利用 しない	30分未満	30分以上 1時間未満	1時間以上 1時間半未満	1時間半以上 2時間未満	2時間以上 3時間未満	3時間以上 4時間未満	4時間以上 5時間未満	5時間以上	無回答
合計 (N=1198)		32.1	17.2	17.5	9.8	5.5	5.9	3.3	0.7	2.0	6.1
男女別	男性 (N=509)	24.6	15.1	19.3	13.6	6.3	8.1	3.9	0.6	2.8	5.9
	女性 (N=676)	37.9	18.6	16.6	6.8	5.0	4.4	2.7	0.7	1.5	5.8
年代別	20代 (N=83)	2.4	16.9	21.7	13.3	13.3	12.0	12.0	1.2	4.8	2.4
	30代 (N=153)	5.2	17.0	24.2	15.0	11.1	12.4	5.2	2.0	2.6	5.2
	40代 (N=206)	7.3	23.8	26.2	15.0	7.8	7.8	4.4	0.0	2.9	4.9
	50代 (N=170)	21.8	24.1	21.2	12.9	6.5	2.9	4.7	0.6	2.9	2.4
	60代 (N=276)	46.7	17.4	14.9	7.6	1.8	4.0	0.4	0.7	1.4	5.1
	70代以上 (N=291)	64.3	8.6	7.9	2.4	2.1	3.4	0.7	0.3	0.3	10.0

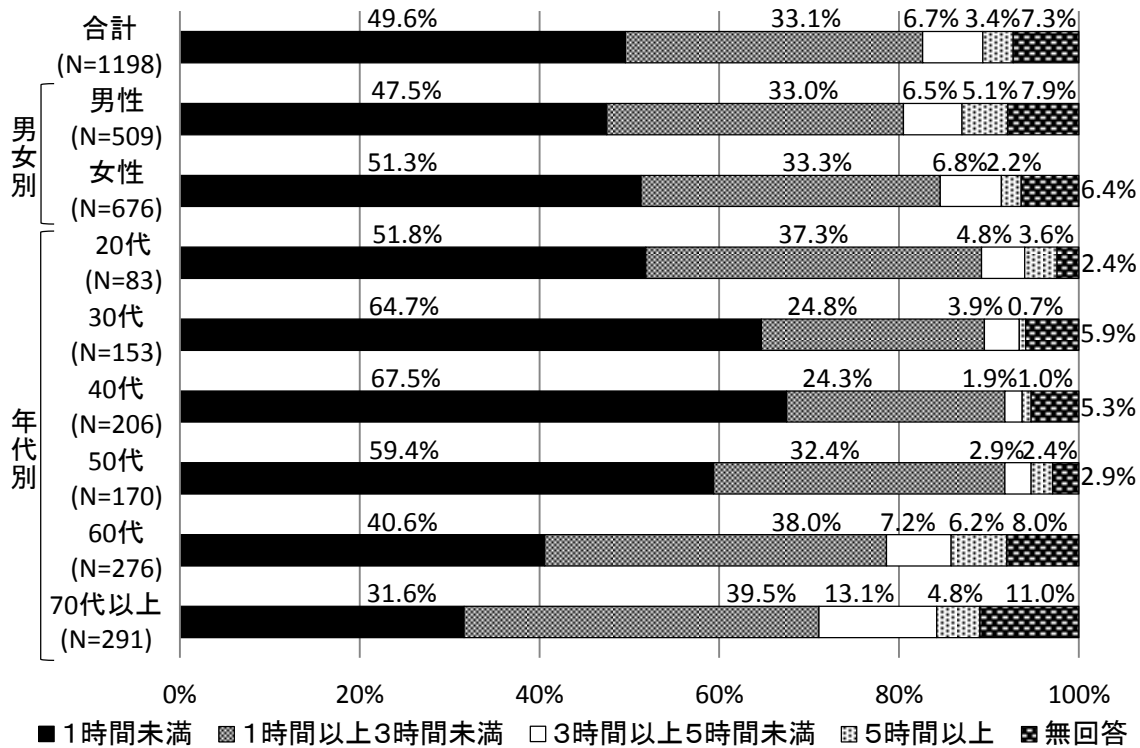


図 93 Q55 1日に趣味に費やす時間

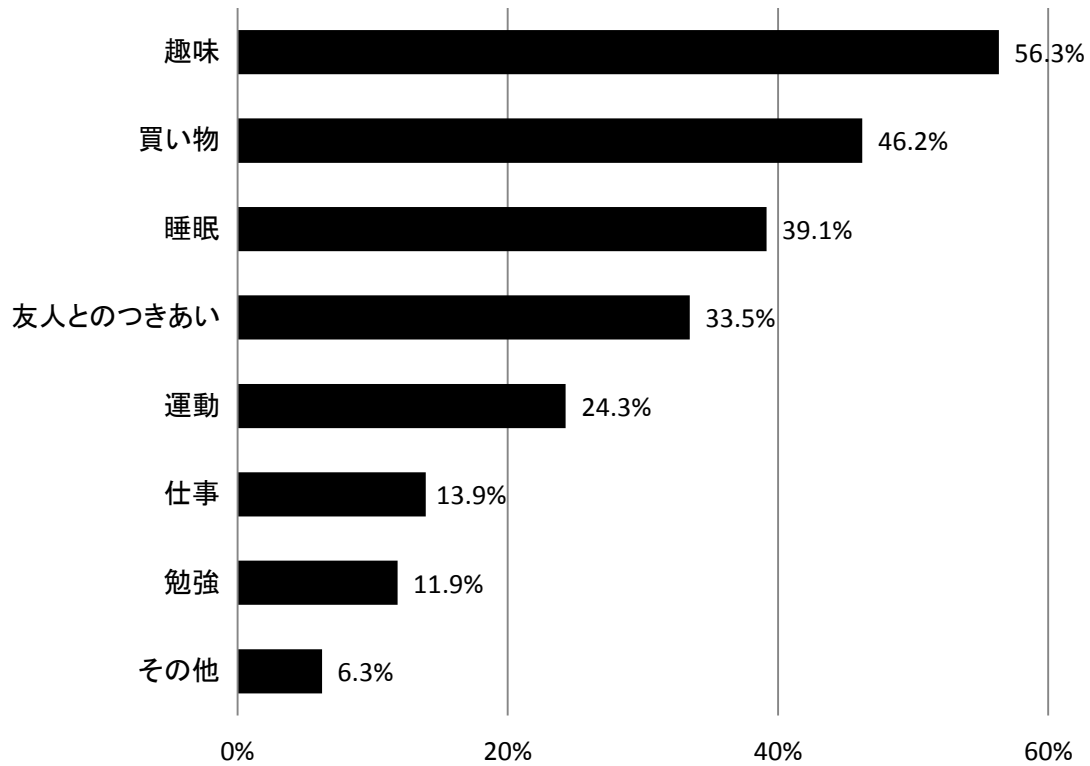


図 94 Q56 自由時間の使い方 (全体 N=1198)

Q56 の自由時間の使い方を男女別で見ると、「買い物」において、男性が 34.2%、女性が 55.6%と、女性の方が 21 ポイントほど高い割合である。「友人とのつきあい」においても、男性が 22.2%、女性が 42.2%と、女性の方が 20 ポイント高い割合である。一方で、「運動」では、男性が 28.9%、女性が 20.9%と、男性の方が 8 ポイント高い割合である（図 95）。

Q56 を年代別で見ると、「睡眠」と「友人とのつきあい」において、20 代がその他の年代よりも 15 ポイント以上高い割合である。「睡眠」では、20 代が 71.1%と最も高い割合であるが、年代が上がるごとに減少し、70 代以上では 26.5%である。一方で、「運動」は 20 代が 14.5%と最も低い割合であるが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 32.3%である（図 96）。

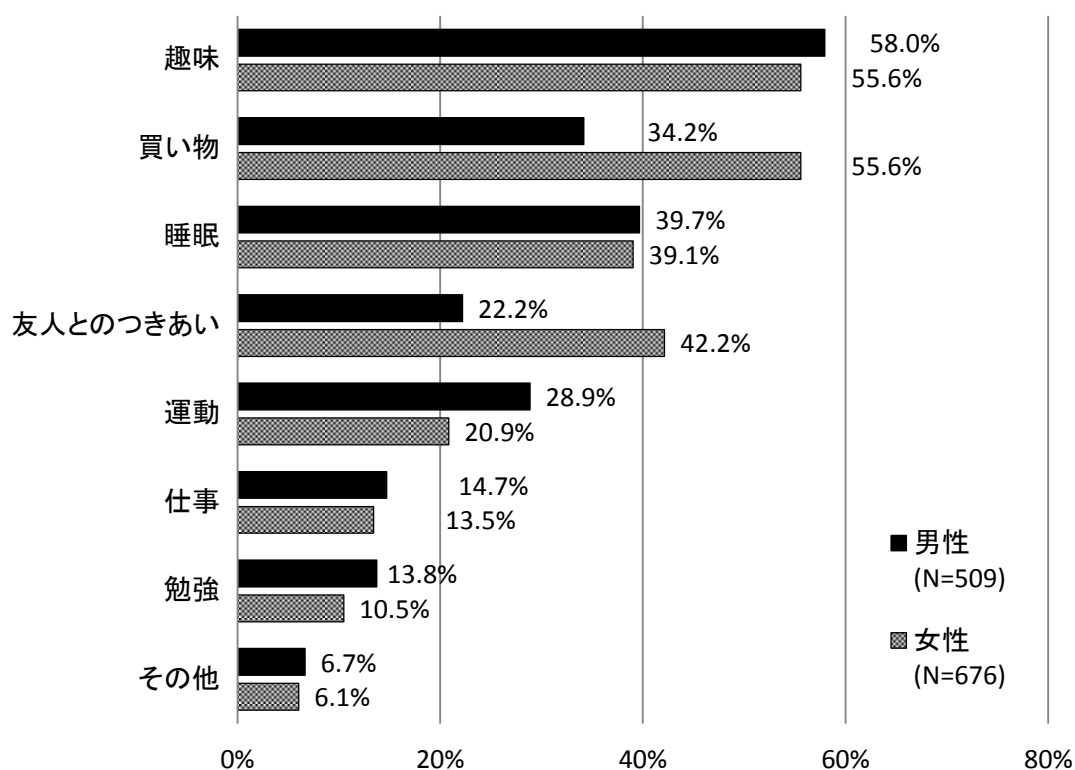


図 95 Q56 自由時間の使い方（男女別）

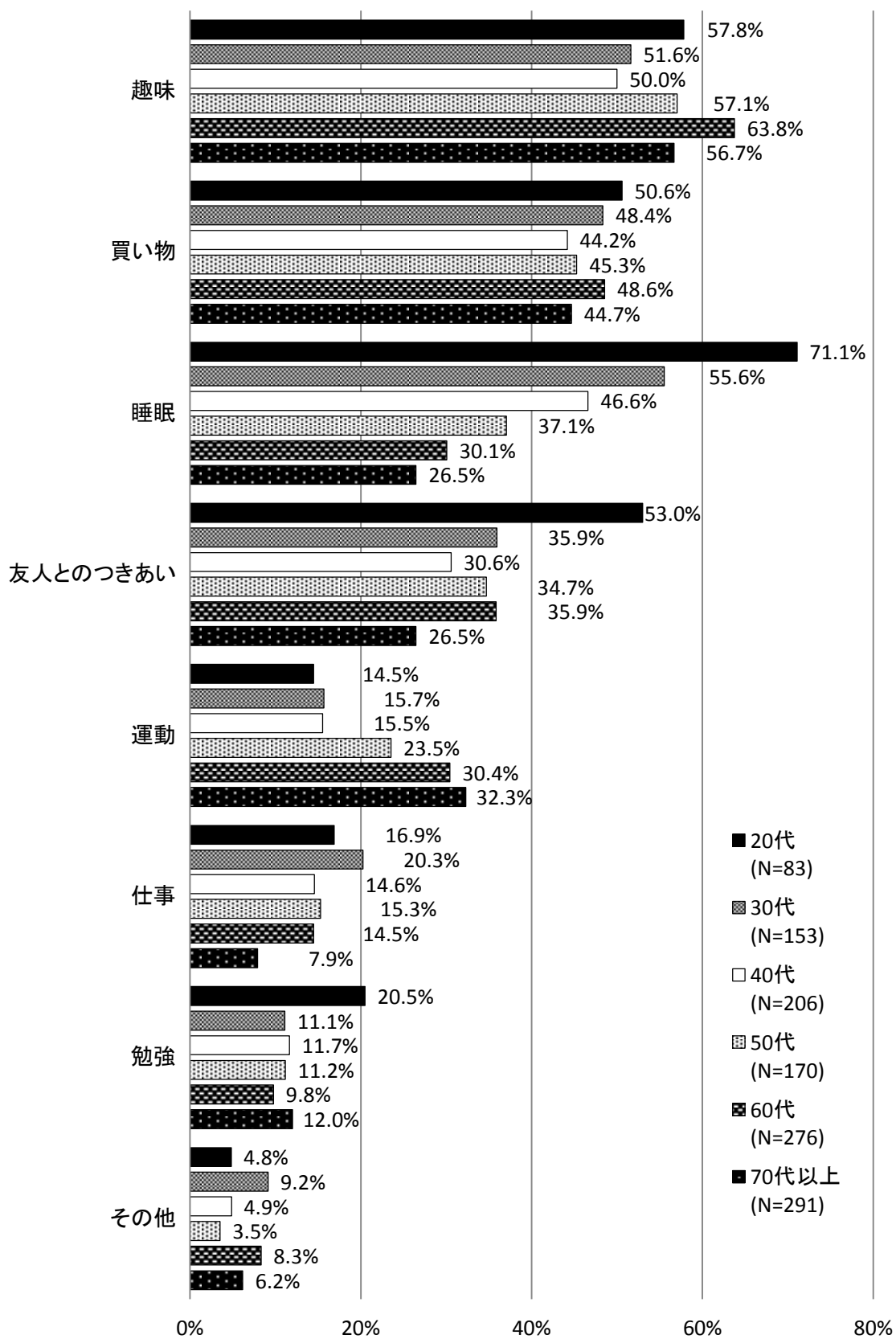


図 96 Q56 自由時間の使い方（年代別）

Q57 のどれくらいの頻度で運動をしているかに関しては、合計で見ると、「週に 1~2 回」以上運動をする人がおよそ半数である。男女別で見ると、「月に 1~2 回」以上の割合は、男性では 66.4%、女性では 57.5%であり、男性の方が 9 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、20 代が 47.0%と最も低く、年代が上がるごとに増加し、70 代以上では 73.6%である（図 97）。

Q58 の誰と運動しているかに関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「一人」、「友人」、「夫婦」の順で高い割合である。特に「一人」はその他の項目よりも 43 ポイント以上高い割合である（図 98）。

Q58 を男女別で見ると、「一人」と「職場や仕事関係の人」でのみ男性の方が女性よりも高い割合である。特に「一人」の男女差が最も大きく、男性では 69.2%、女性では 60.2%と、男性の方が 9 ポイント高い割合である。一方で「友人」の割合は、男性では 17.8%、女性では 24.5%と、女性の方が 7 ポイントほど高い（図 99）。

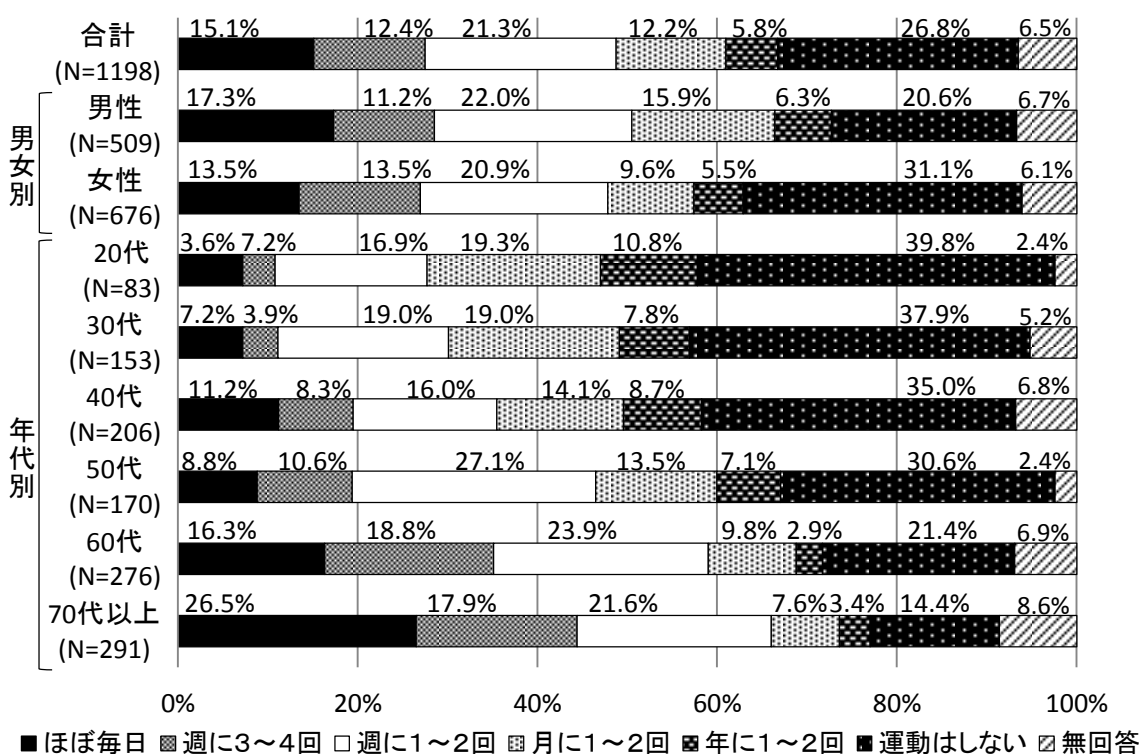


図 97 Q57 どれくらいの頻度で運動をしているか

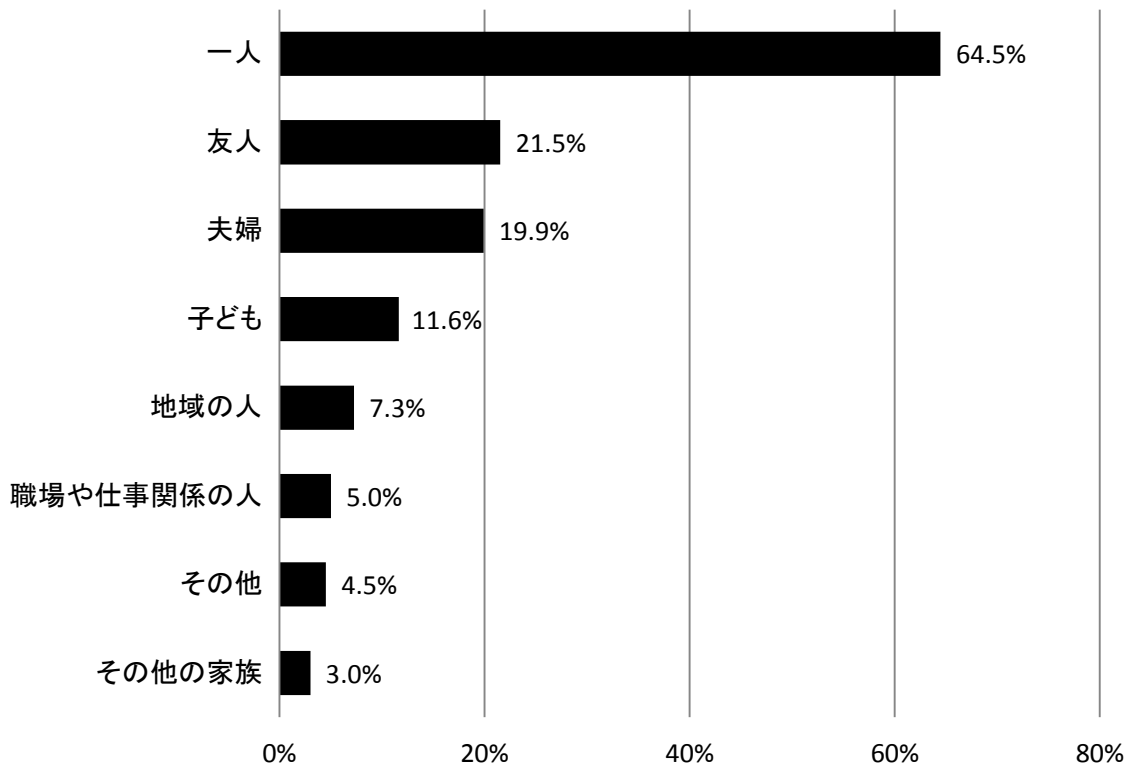


図 98 Q58 誰と運動しているか (全体 N=799)

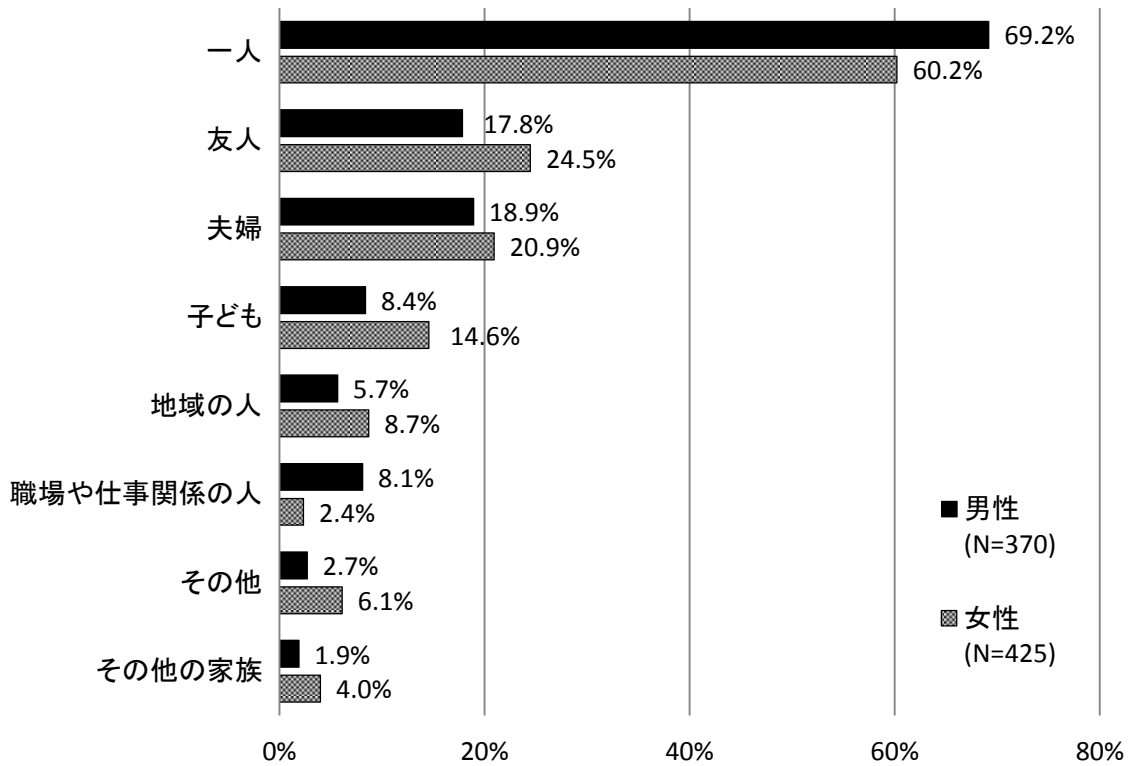


図 99 Q58 誰と運動しているか (男女別)

Q58 を年代別で見ると、「子ども」において、30代が 37.9%と、その他の年代よりも 17ポイント以上高い割合である。「地域の人」の割合は、20代で 0.0%と最も低く、年代が上がるごとに増加し、70代以上では 12.1%である。一方で「職場や仕事関係の人」の割合は、20代で 20.8%と最も高く、年代が上がるごとに減少し、70代以上では 1.3%である(図 100)。

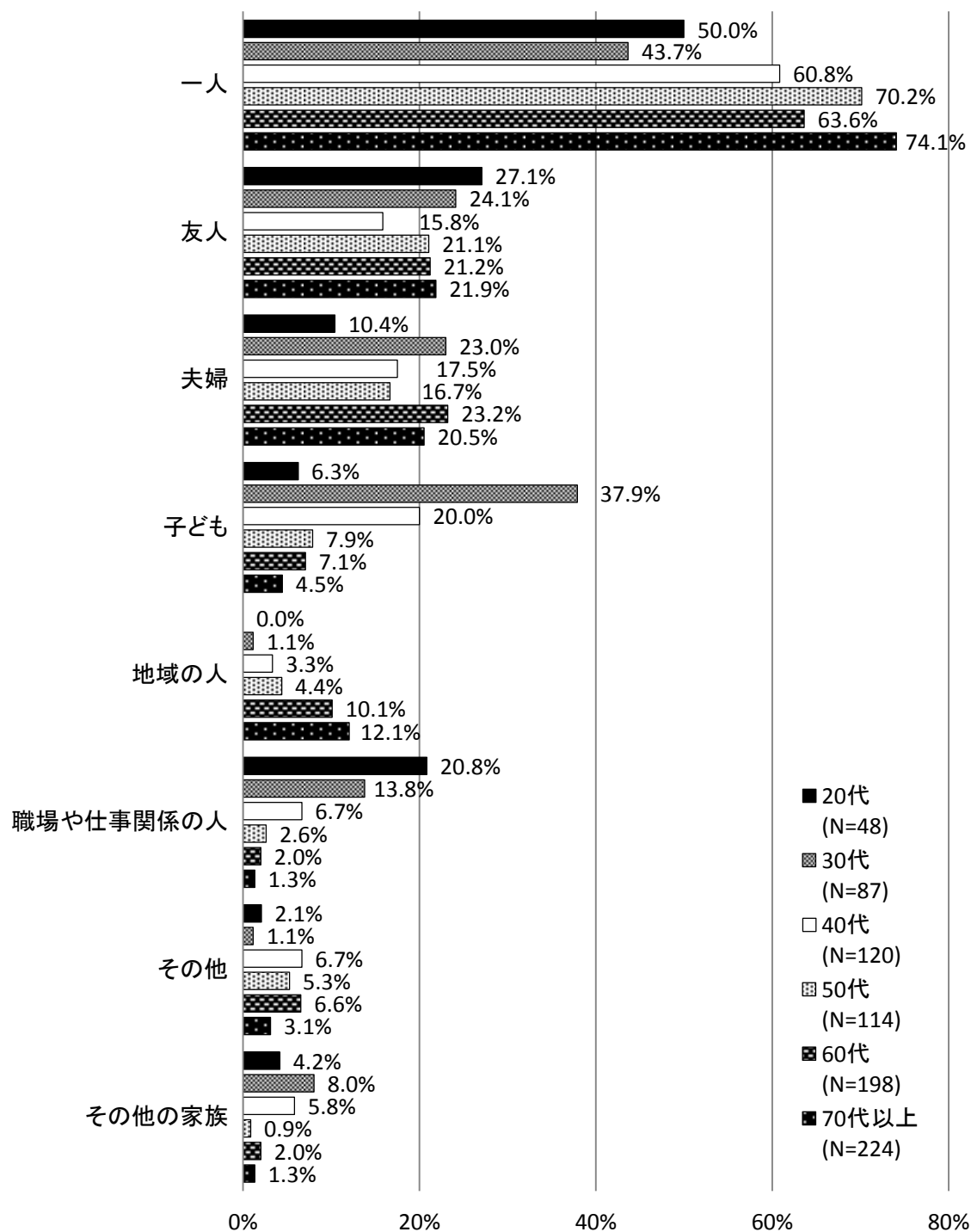


図 100 Q58 誰と運動しているか (年代別)

Q59 の運動をする目的に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「健康のため」、「ストレス解消のため」、「純粋に楽しむため」の順に高い割合である。特に「健康のため」はその他の項目よりも 47 ポイント以上高い割合である (図 101)。

Q59 を男女別で見ると、特に大きな男女差は見られない。最も大きな男女差でも「ある競技でよい記録を出すため」の 3.5 ポイントの差であり、男性が 5.1%、女性が 1.6%と男性の方が高い (図 102)。

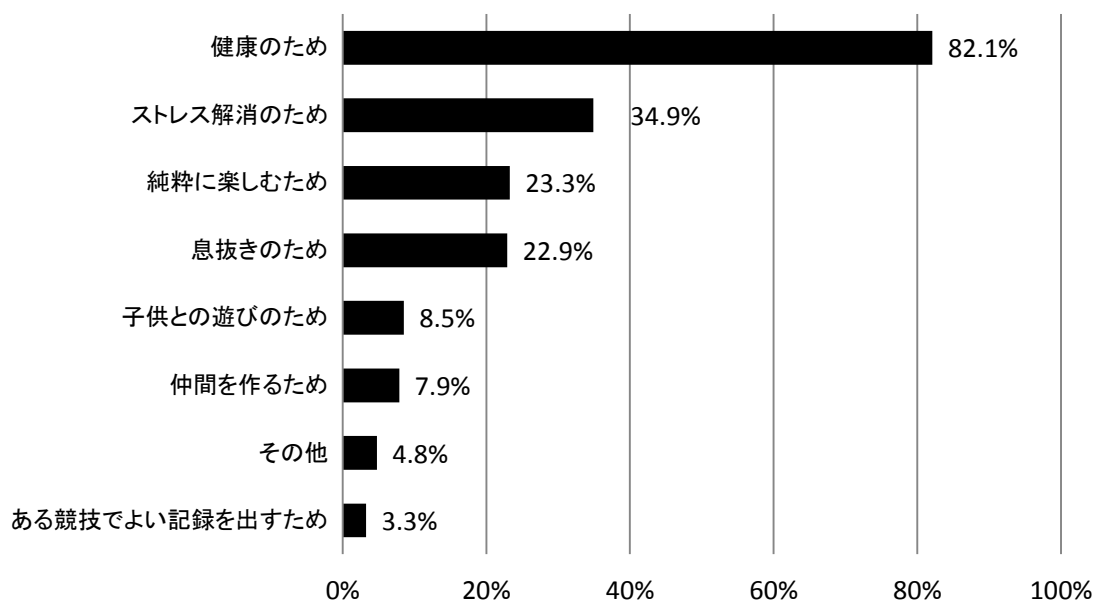


図 101 Q59 運動をする目的 (全体 N=799)

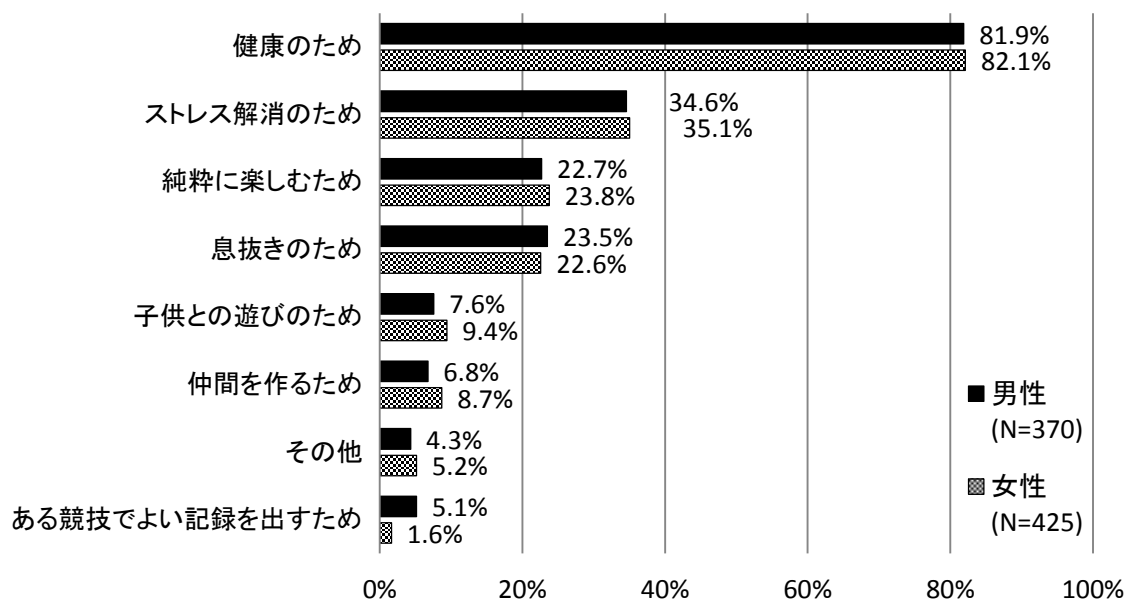


図 102 Q59 運動をする目的 (男女別)

Q59 を年代別で見ると、「子供との遊びのため」において、30代が 35.6%と、その他の年代よりも 15 ポイント以上高い割合である。「純粋に楽しむため」においては、20代が 41.7%と、その他の年代よりも 15 ポイント以上高い割合である。また、「健康のため」の割合は、20代では 58.3%と最も低いが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では 91.1%である（図 103）。

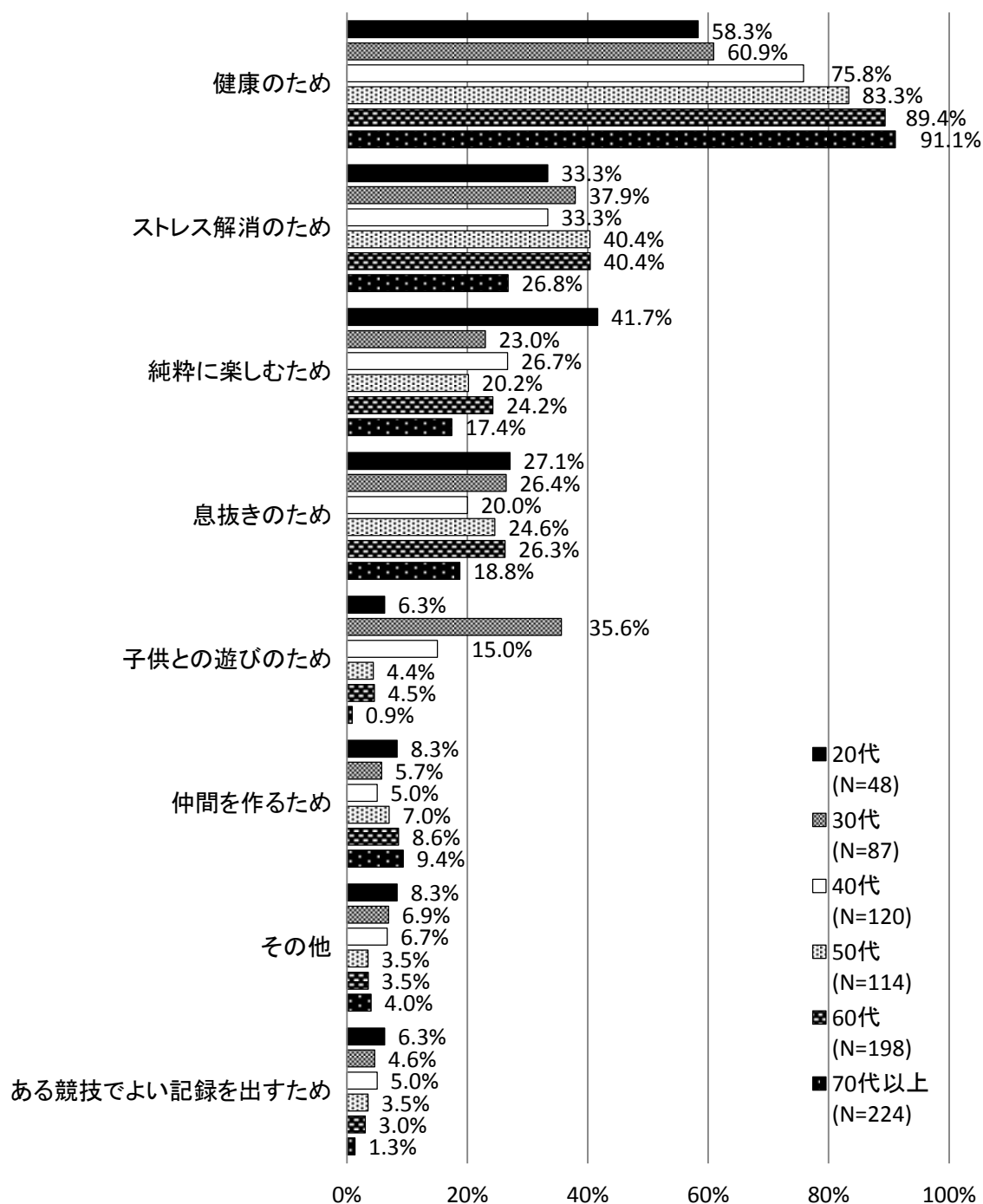


図 103 Q59 運動をする目的（年代別）

Q60 の若者は経済的な準備をするべきかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」が最も高い割合である。「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、男女別で見ると、男性で 79.6%、女性で 83.8%と、女性の方が 4 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、50 代が 87.7%と最も高いが、それ以外の年代では 8 割以上 8.5 割未満である（図 104）。

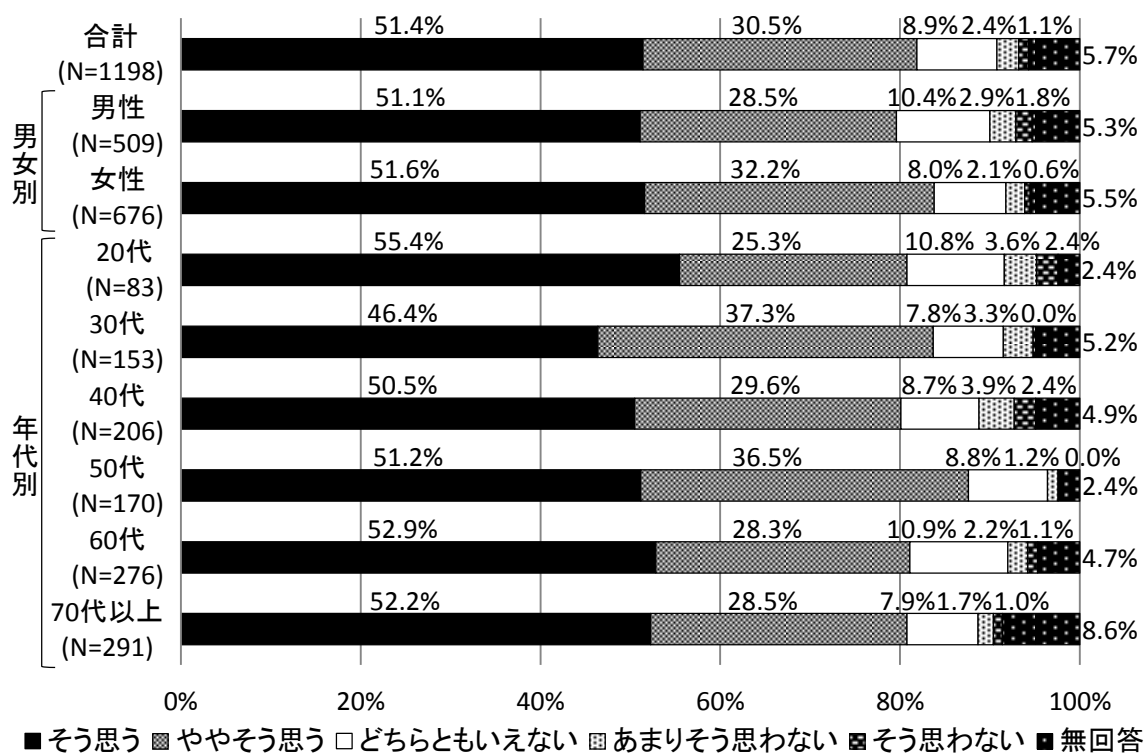


図 104 Q60 若者は経済的な準備をするべきか

Q61の老後の生活費はどうまかなわれるのが適切かに関しては、40代を除く男女別・年代別のすべての層で、「働けるうちに自分で準備する」の割合が最も高く、次いで「公的な社会保障でまかなう」が高い。40代では、「公的な社会保障でまかなう」が最も高く、次いで「働けるうちに自分で準備する」である。また、男女別・年代別のすべての層で、「家族が面倒をみる」の割合は3%未満である（図105）。

Q62の生活を豊かにしたい面に関しては、複数回答でその項目を選択した人の割合で見ると、全体では、「金銭」、「健康」、「精神」の順に高い割合である（図106）。

Q62を男女別で見ると、「健康」において、男性が62.5%、女性が71.6%と女性の方が9ポイントほど高い割合である。また、「精神」においても、男性が46.6%、女性が61.1%と、女性の方が14ポイントほど高い。一方で、「趣味」においては、男性が42.2%、女性が35.9%と、男性の方が6ポイントほど高い割合である（図107）。

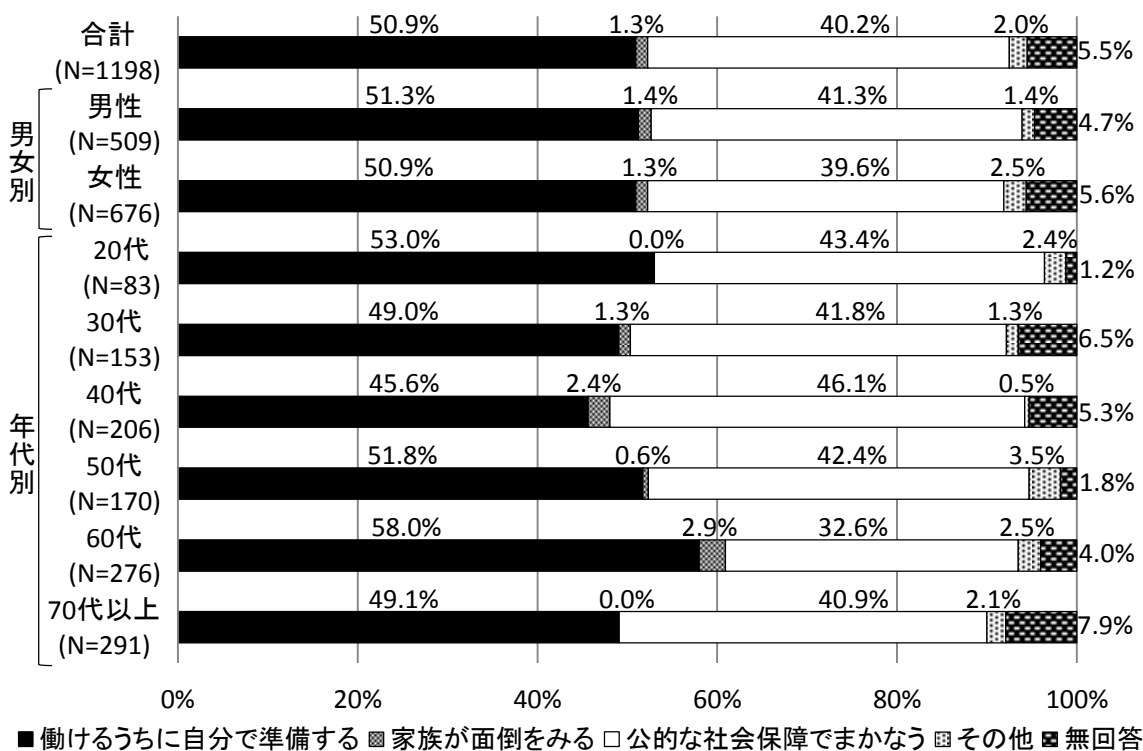


図 105 Q61 老後の生活費はどうまかなわれるのが適切か

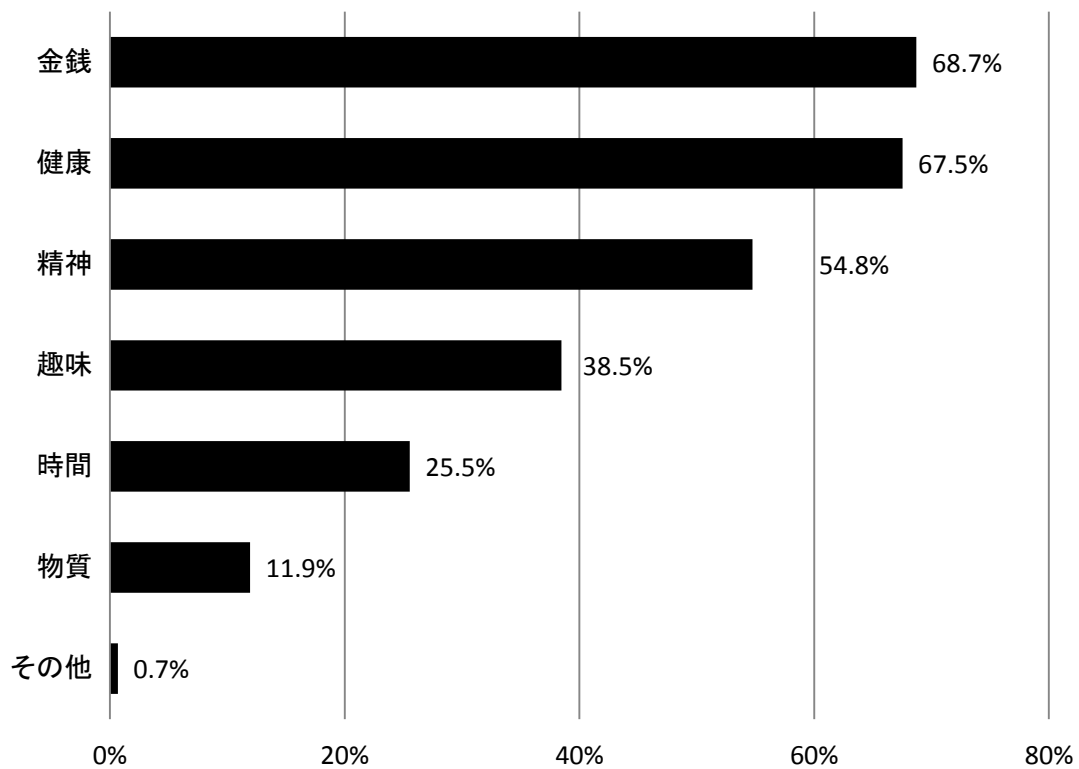


図 106 Q62 生活を豊かにしたい面 (全体 N=1198)

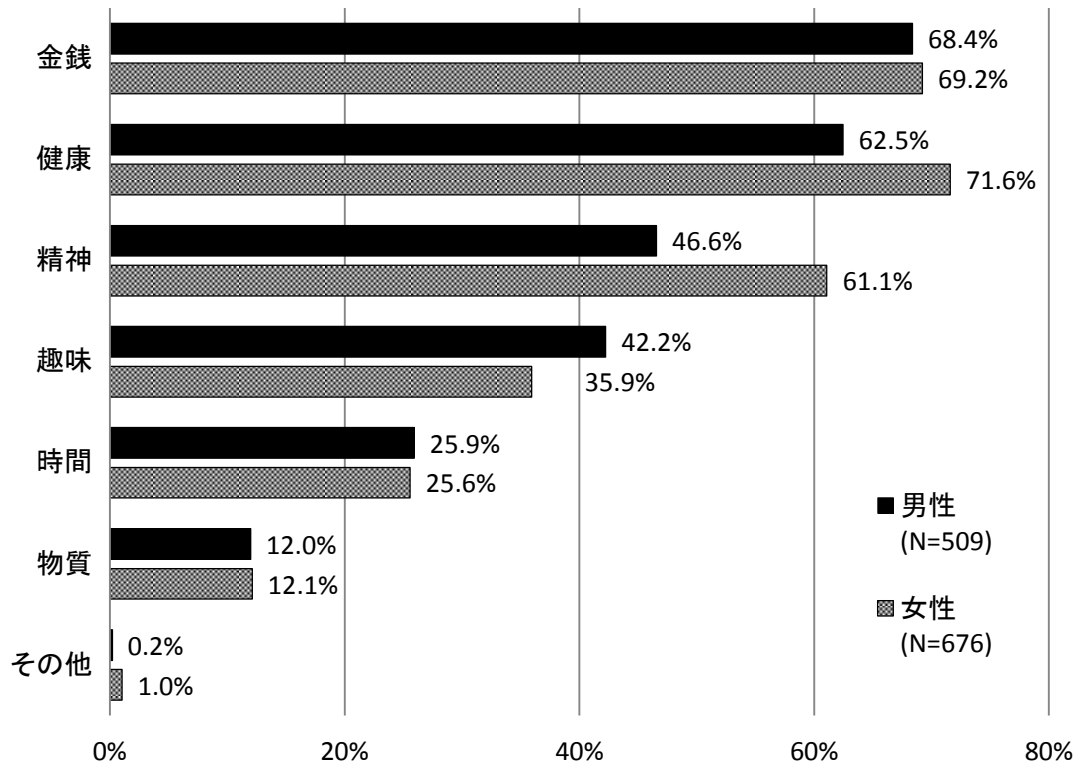


図 107 Q62 生活を豊かにしたい面 (男女別)

Q62 を年代別で見ると、「金銭」において、20代が79.5%、30代で82.4%であるが、その後年代が上がるごとに減少し、70代以上では56.0%である。一方で「健康」においては、20代で36.1%であるが、年代が上がるごとに増加し、60代では82.2%である。70代以上では少し減少し79.4%である（図108）。

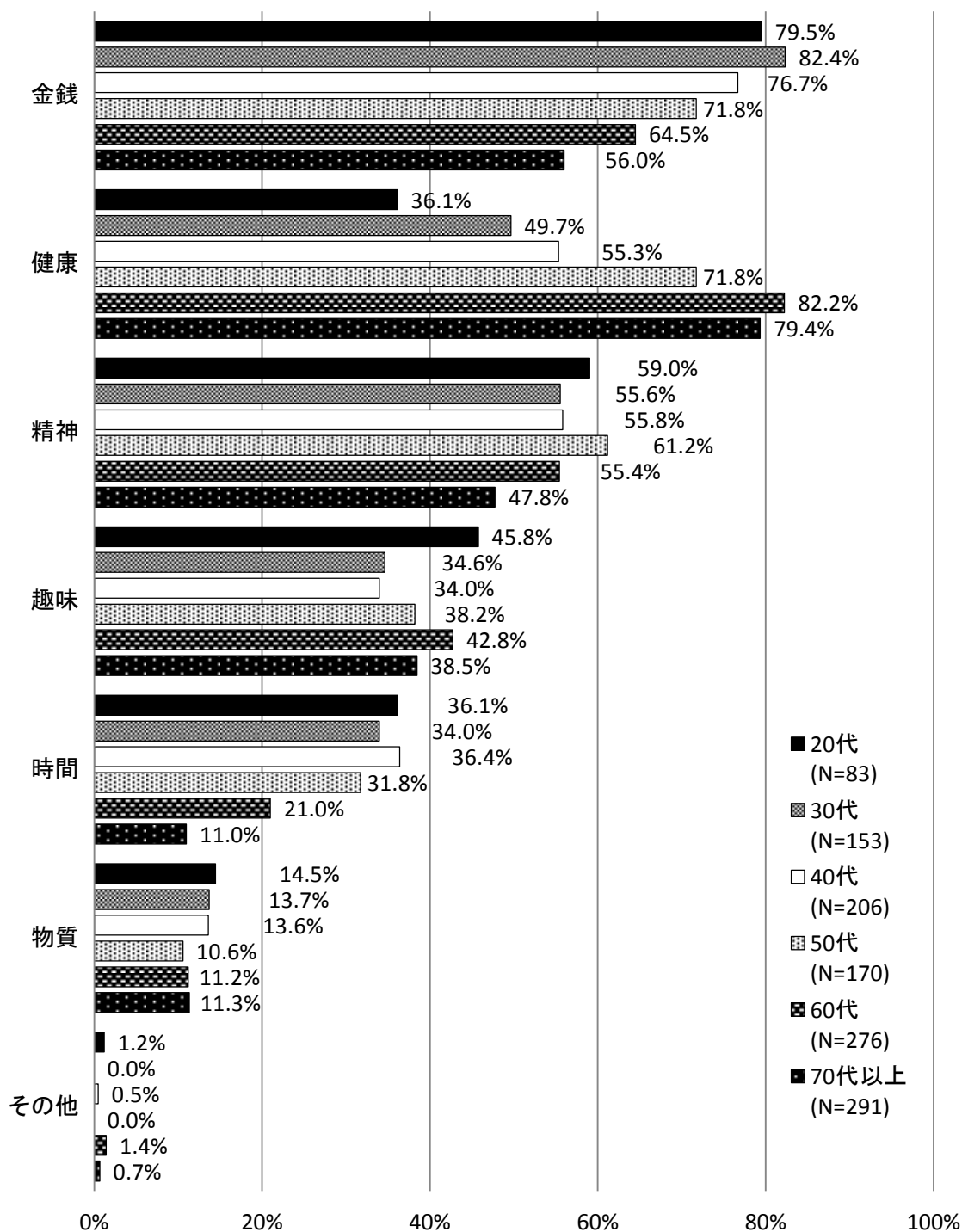


図108 Q62 生活を豊かにしたい面（年代別）

Q63 の 15 歳の頃の家庭の収入に関しては、男女別・年代別のすべての層で「ほぼ平均」が最も高い割合である。「平均よりかなり少ない」または「平均より少ない」と回答した人の割合は、合計で見ると、32.9%である。男女別で見ると、その割合は、男性では 38.4%、女性では 29.0%と、男性の方が 9 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、20代と 30代では 2 割程度であるが、40代以上では 3 割以上である（図 109）。

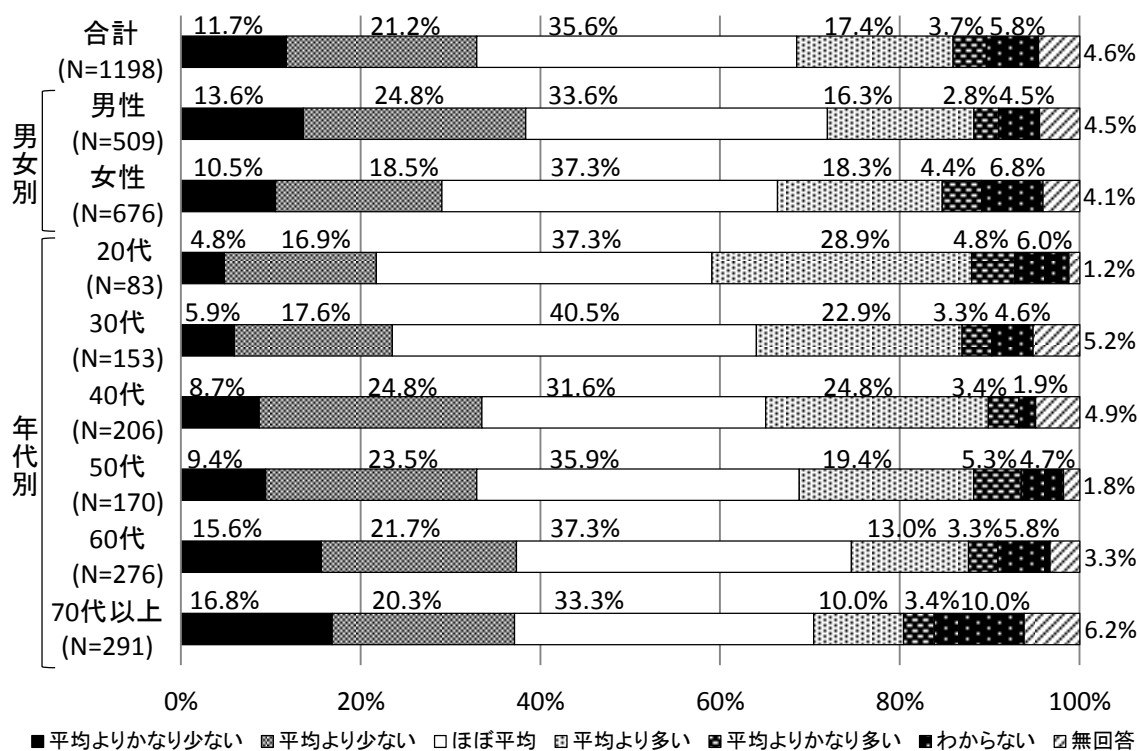


図 109 Q63 15 歳の頃の家庭の収入

Q64 の家族との1日平均会話時間に関しては、合計で見ると、1時間未満の割合は、53.4%である。男女別で見ると、その割合は、男性では61.1%、女性では47.9%と、男性の方が13ポイントほど高い。年代別で見ると、30代が38.6%と最も低く、50代が67.1%と最も高い割合である（図110）。

Q65 の子育てのための施設が整っているかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「あまりそう思わない」が最も高い割合で、次いで「ややそう思う」が高い。「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、男女別で見ると、男性では34.3%、女性では42.6%と、女性の方が8ポイントほど高い（図111）。

Q66 の育児においての助け合いが行われているかに関しては、男女別・年代別のすべての層で「あまりそう思わない」が最も高い割合である。「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、年代別で見ると、20代では17.0%、30代では22.8%であるが、その後年代が上がるごとに減少し、60代では9.6%である。ただし70代以上になると大きく増加し、38.1%である（図112）。

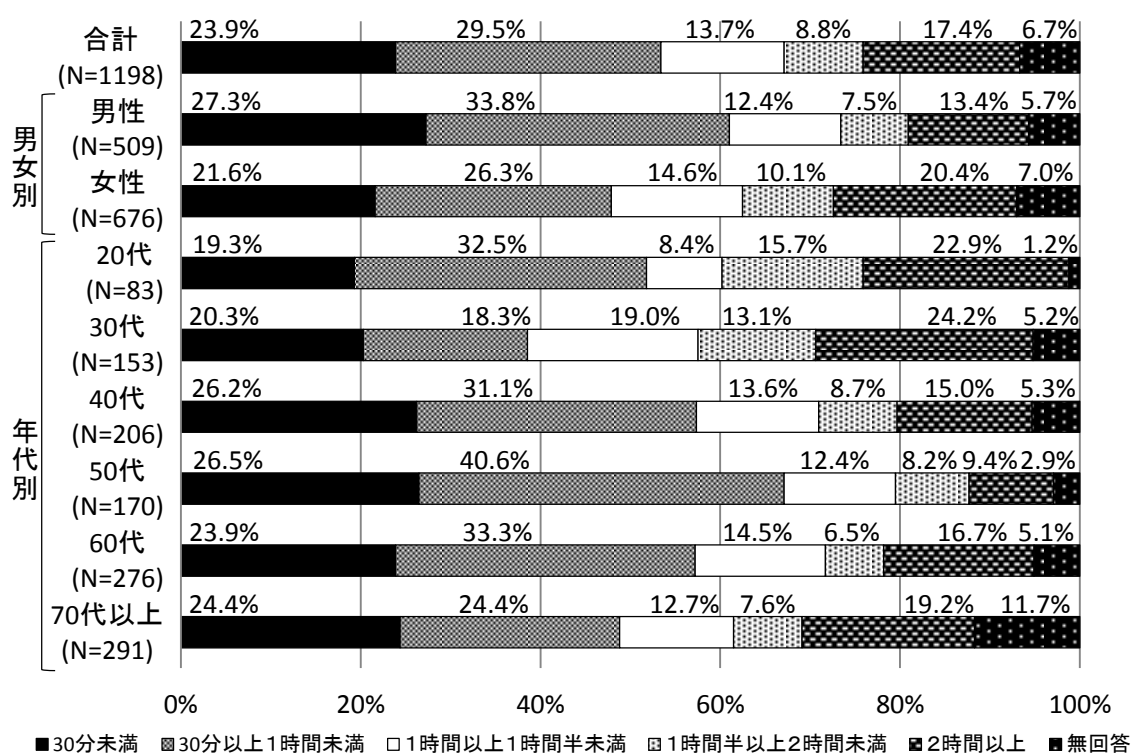


図 110 Q64 家族との1日平均会話時間

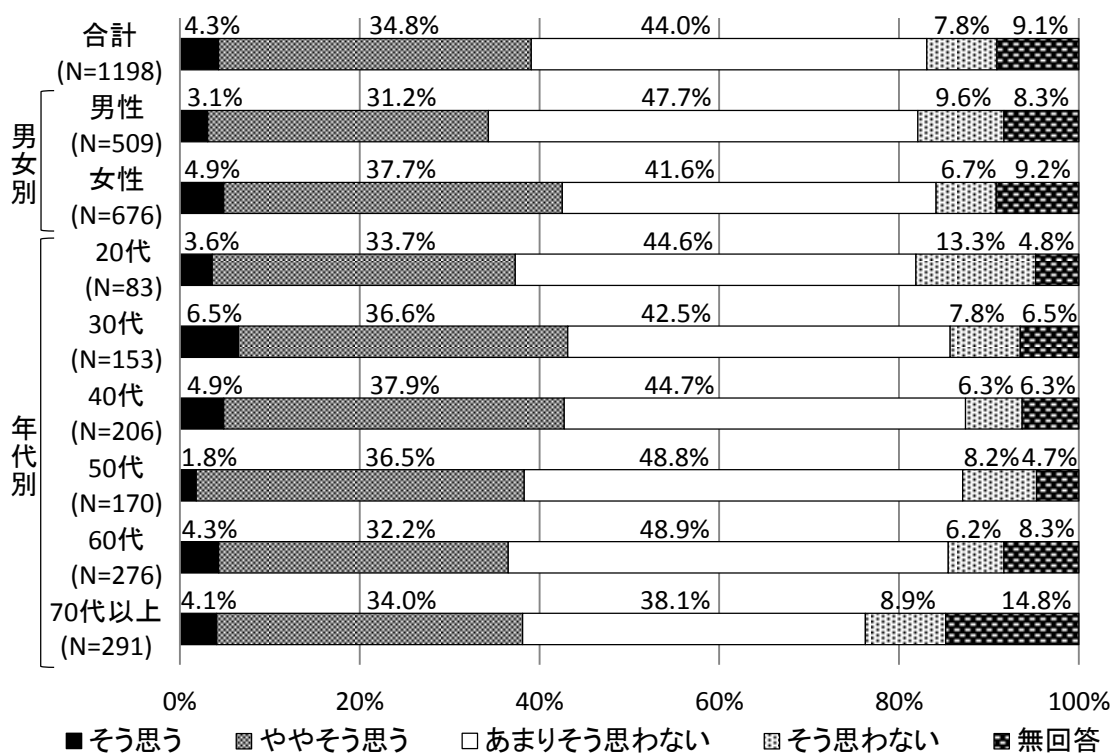


図 111 Q65 子育てのための施設が整っているか

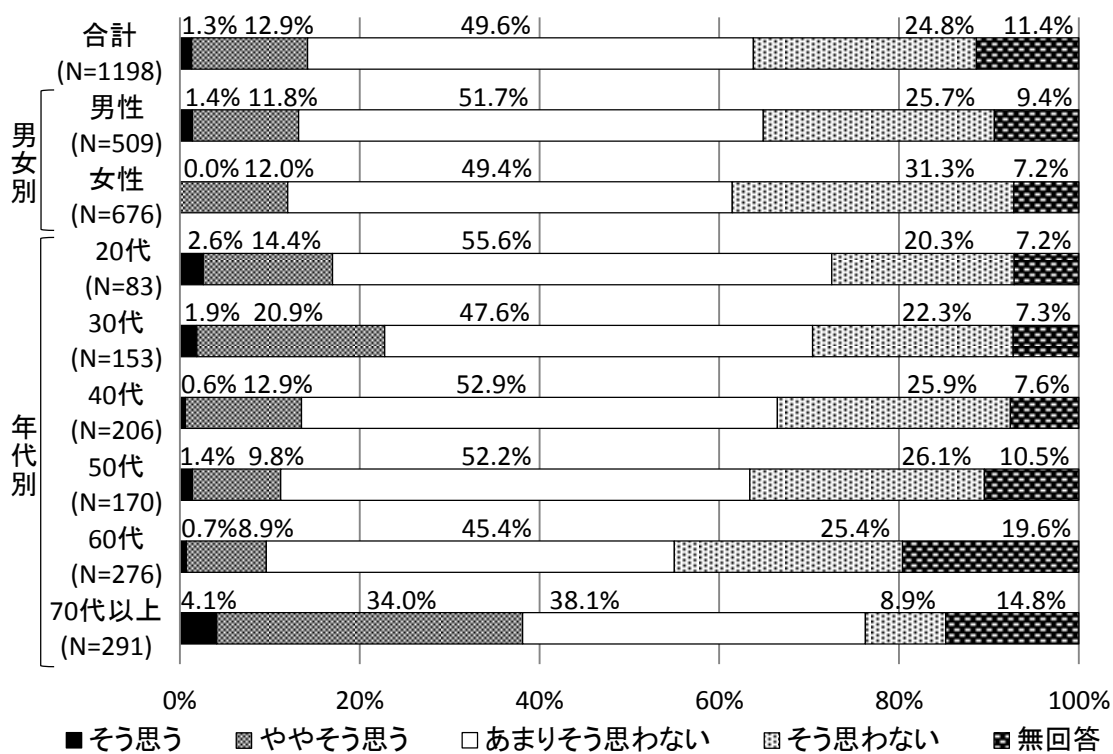


図 112 Q66 育児における助け合いが行われているか

Q67 の婚姻状況に関しては、20 代を除く男女別・年代別のすべての層で、「既婚（配偶者あり）」が最も高い割合である。20 代では「未婚」が最も高い。男女別で見ると、「既婚（離別・死別）」の割合は、男性で 6.3%、女性で 18.0%と、女性の方が 12 ポイントほど高い（図 113）。

Q68 の夫婦での 1 日平均会話時間に関しては、合計および男性・女性で見ると、1 時間未満の割合は 6 割程度である。年代別で見ると、その割合は、40 代と 50 代が 7 割程度と他の年代よりも高い。20 代と 70 代以上では、1 時間未満の割合は 5.5 割未満であるが、一方で「2 時間以上」の割合は 2 割以上である。特に 20 代は「2 時間以上」が 34.6%と高い（図 114）。

Q69 の配偶者の育児の取組みに対する満足度に関しては、合計で見ると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 51.5%である。男女別で見ると、その割合は、男性では 63.3%、女性では 41.4%と、男性の方が 23 ポイントほど高い。年代別で見ると、その割合は、30 代から 50 代では 6 割前後であるが、その他の年代では 5 割未満である。また、「子どもはいない」の割合は 20 代が最も高く 34.6%である（図 115）。

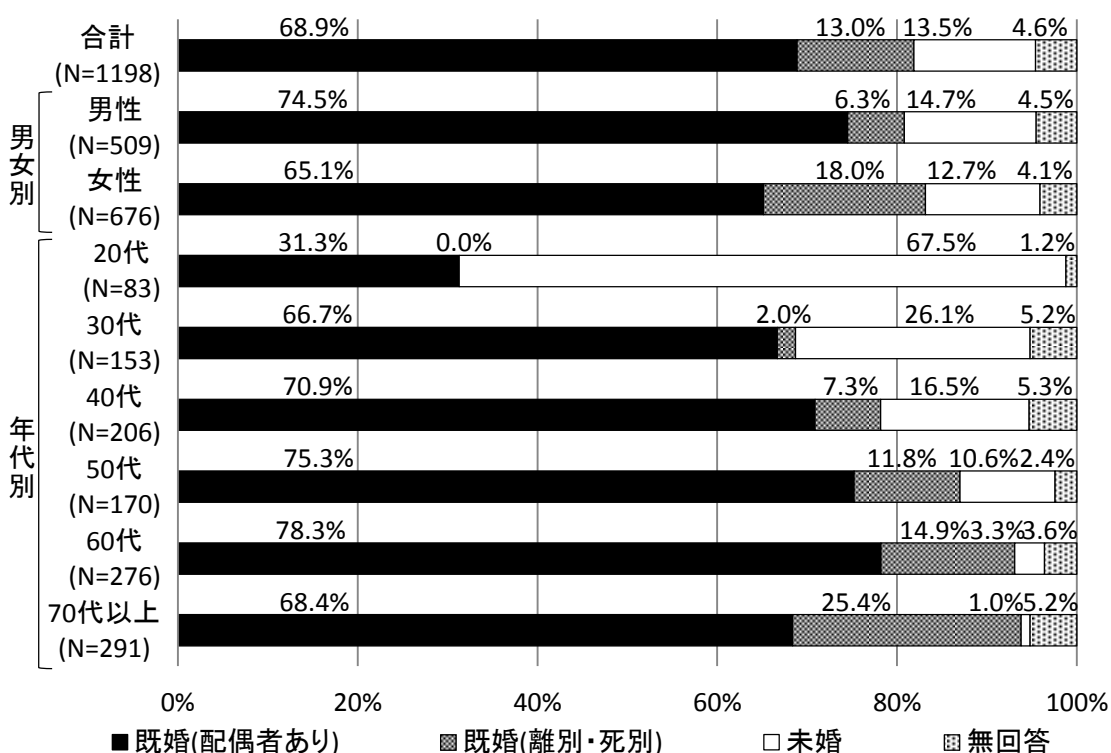


図 113 Q67 婚姻状況

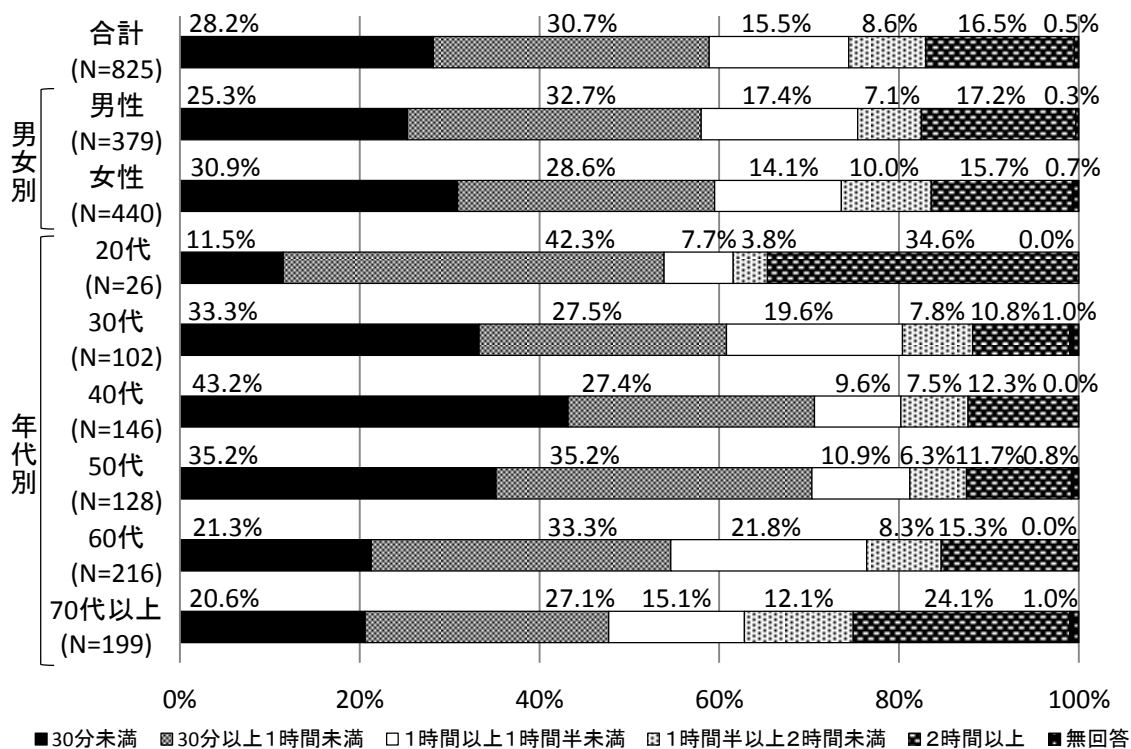


図 114 Q68 夫婦での1日平均会話時間

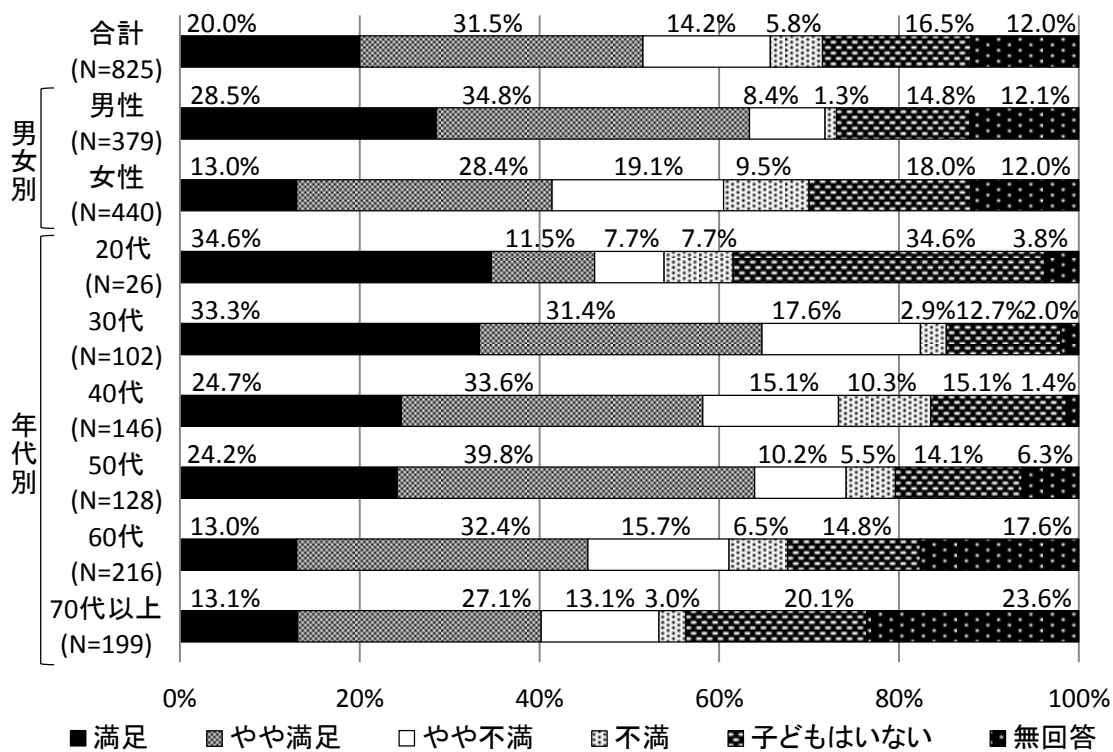


図 115 Q69 配偶者の育児の取組みに対する満足度

Q70 の初婚年齢に関しては、男女別・年代別のすべての層で「20代」が最も高い割合である。「30代」について男女別で見ると、男性で27.3%、女性で10.0%と、男性の方が17ポイントほど高い割合である。また、年代別で見ると、30代でのみ「30代」が30.5%と、その他の年代よりも21ポイント以上高い（表16）。

Q71 の子供の人数に関しては、20代を除く男女別・年代別のすべての層で「2人」が最も高い割合である。20代では「いない」が最も高い。「3人」の割合は20代で3.8%と最も低く、60代で減少するが、年代が上がるごとに増加し、70代以上では20.9%である（図116）。

表 16 Q70 初婚年齢

		(%)					
		10代	20代	30代	40代	50代以上	無回答
合計 (N=981)		0.6	68.2	17.2	1.4	0.5	12.0
男女別	男性 (N=411)	0.0	58.9	27.3	2.4	0.7	10.7
	女性 (N=562)	1.1	75.3	10.0	0.7	0.4	12.6
年代別	20代 (N=26)	0.0	96.2	0.0	0.0	0.0	3.8
	30代 (N=105)	0.0	62.9	30.5	0.0	0.0	6.7
	40代 (N=161)	0.6	67.1	19.3	4.3	0.0	8.7
	50代 (N=148)	0.7	65.5	16.9	1.4	1.4	14.2
	60代 (N=257)	1.2	70.4	14.0	0.8	0.4	13.2
	70代以上 (N=273)	0.4	68.9	15.4	1.1	0.7	13.6

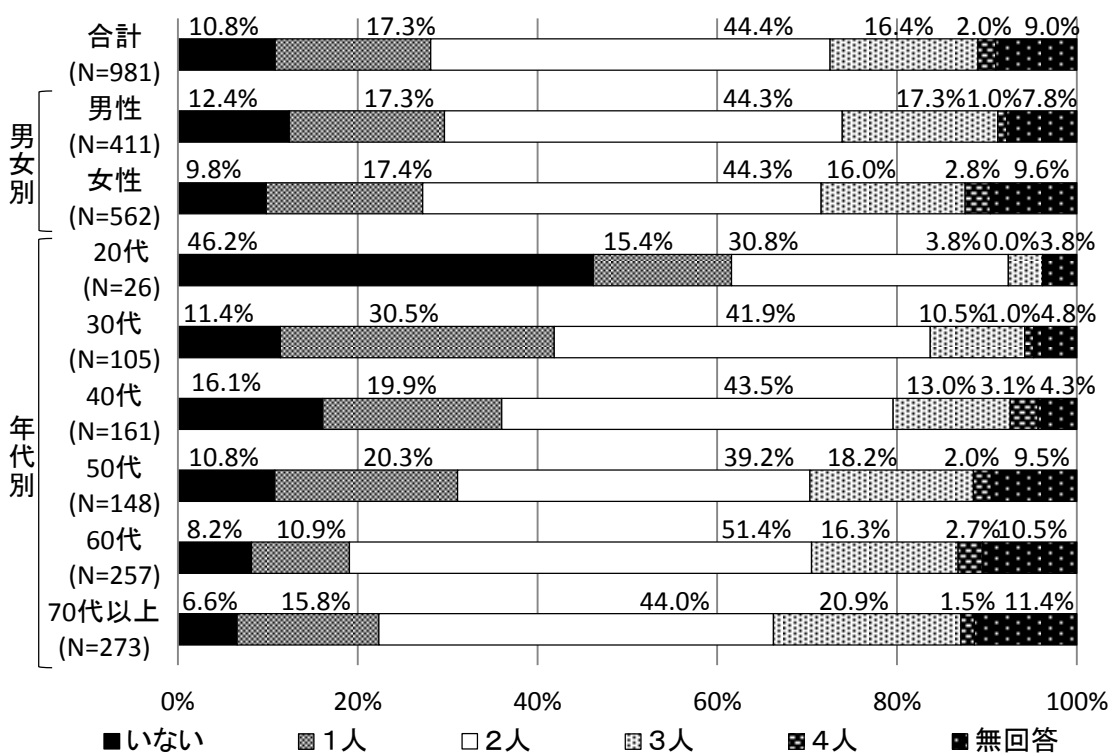


図 116 Q71 子供の人数

第3章 地域におけるつながりの現状と需要に関する分析

原田 淳平

1. はじめに

地域コミュニティの衰退が叫ばれるようになって久しい。東日本大震災の前後を境に、地域コミュニティの再生やつながりの大切さが社会的な話題として強く認識されるようになってきているのである。震災の被災地域に焦点を当てたものだけでなく、単身世帯や孤独死に関する報道特集が組まれたこともあり、世間に衝撃を走らせた。朝日新聞が震災前後の単身世帯の現状を取材した「孤族の国」シリーズ、NHKによる「行旅死亡人」の人生を辿った「無縁社会」などがその代表例である。このような報道は、現代日本人々の「つながりの弱さ」、つまり、地域の人々のつながりを指す「地縁」、親族間のつながりを指す「血縁」、職場でのつながりを指す「社縁」といったつながりの衰退を強く指摘するものとなっている。

こうした社会的ネットワークやその相互依存の規範は、社会学や経済学の分野において「社会関係資本」または「ソーシャル・キャピタル」と呼ばれ、今日までに様々な研究が行われてきている。経済指標には表れることのない「ご近所づきあい」や「地域の底力」が再評価されるようになったのである。東日本大震災以降は行政機関においてもこの概念が知られるようになり、地域おこしや孤立対策等に関する政策のなかで頻繁に持ち出されるようになった。

本章では、このような視点から、高槻市において地域の人々のつながりに影響している要因を分析することによって、社会関係資本の構築にはどのような人々が関わっているのか、また、どのような人々に向けたアプローチが必要なのかを見ていくことにしたい。つまり、高槻市における「地域の底力」はどのようにすれば高めることが可能なのか、その一端を明らかにしていくのが本章の目的である。

2. 先行研究と仮説

2.1. 先行研究

社会関係資本や「ご近所づきあい」に関する先行研究からは、どのような知見を得ることができるだろうか。分析に入る前に3つほど、本章に関連する研究を紹介する。

稲葉(2011)によると、内閣府が2007年に発表した『平成十八年度国民生活選好度調査』の結果から、年齢が高くなるほど隣近所の人とのつながりが増加し、また、男性よりも女性の方が、家族以外の人とのつながりが多岐にわたるという傾向が読み取れるという。この傾向から、男性の場合に退職年齢を境に「社縁」が減少し、「第二の人生」を歩むうえで他の人々となつなぐ必要があることが考えられるのである。

こうした社会関係資本における性差は、1990年と1995年にそれぞれ名古屋都市圏においてネットワーク調査を行った松本(1999)の分析にも表れている。この調査では、女性の担う主婦役割や

子育て役割が、隣近所の人とのつながりを短期間に拡大させるために、女性の方が隣近所の人とのつながりが多くなることが説明されている。また、松本の研究では現住地の居住年数が長くなるにつれて隣近所の人とのつながりが多くなることが指摘されており、居住年数が長いほど近隣ネットワークが男女ともに拡大していくことが述べられている。この近隣ネットワークの規模に関しては、職業による影響もここでは指摘されており、男性の場合には「自営業主、無職」の人、女性の場合には「自営家族従事者、無職、生産労働者」の人について、隣近所の人とのつながりが多いことがわかっている。このことは、主に中小企業や小規模の事業所が近隣ネットワークの形成に関連していることを示唆しているといえる。さらに、都市的環境のもとでは近隣ネットワークの規模が減少することも指摘されている。つまり、都市部に居住している人ほど隣近所とのつながりが少なくなるという理論的説明がなされているのである。しかし、日本においては都市部に居住していても隣近所の人とのつながりが多いケースも見られ、一概にはこの理論的説明が当てはまらないことも松本の論文では述べられている。

最後に、先行研究として昨年度の本調査報告書から、本章に関連する分析を1つ紹介しておきたい。吉井(2014)による平成25年度の「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の分析によると、どの世代においても近所づきあいの関心が薄れてきていることが結果として述べられている。

これらの先行研究をまとめると、「社会関係資本」の構築には性別、年齢、現住地の居住年数、職業、都市度など、様々な要因が影響しているといえる。また、高槻市においては、この「社会関係資本」への需要はどの年齢層においても少ないことが指摘されている。

2.2. 仮説

以上の先行研究を踏まえ、本章では「近所の人たちとの世間話の頻度」から、社会関係資本の大きさに影響する要因を分析し、「近所づきあいへの関心度」から、社会関係資本を希求する人々がどの層に属しているのかを分析していく。本分析では以下の4つの仮説を設定している。

仮説1: 世間話の頻度に影響する要因に関連するもの。

仮説1a: 男性より女性の方が近所の人たちとの世間話の頻度は高い。

仮説1b: 年齢が高い人ほど近所の人たちとの世間話の頻度は高い。

仮説2: 近所づきあいへの関心度に影響する要因に関連するもの。

仮説2a: 男性より女性の方が近所づきあいへの関心度は高い。

仮説2b: 年齢が高い人ほど近所づきあいへの関心度は高い。

3. データと変数

3.1. データ

データについては、平成26年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1198票、回収率は59.9%であった。

3.2. 変数

本分析で用いる従属変数は以下の2つである。本分析では、どちらの変数も元の変数に欠損値処理を施したのち反転させたものを用いている。つまり、数値が高くなるほど、近所での世間話の頻度が高く、また、近所づきあいを増やしたいということを表している。

1) q9 近所での世間話の頻度(反転後)

1.ほとんどない 2.月に1~2日 3.週に1~2日 4.週に3~4日 5.ほぼ毎日

2) q10 近所づきあいを増やしたいか(反転後)

1.減らしたい 2.少し減らしたい 3.どちらともいえない 4.少し増やしたい 5.増やしたい

次に、従属変数の要因として考えられる、重回帰分析で用いる独立変数を列挙する。こちらも、全ての変数において欠損値処理を施している。

1) q72 性別

本分析では、「1.男性(=1)」、「2.女性(=0)」とした、変数「男性ダミー」を用いる。

2) q73 年齢

この質問における回答は、「1.20代」「2.30代」「3.40代」「4.50代」「5.60代」「6.70代以上」の6段階である。

3) q74 職業

本分析では、「1.常時雇用の勤め人、5.経営者、役員(=1)」、その他を「0」とする変数「常勤の勤め人ダミー」と、「3.自営業主、4.自営業の家族従事者(=1)」、その他を「0」とする変数「自営業者ダミー」、そして、「2.臨時雇用、パート、アルバイト、6.家事専業、7.学生、8.無職、9.その他(=1)」、その他を「0」とする変数「その他の職業ダミー」を用いる。

4) q76 最終学歴

本分析では、「1.中学(旧小学校など)(=1)」、その他を「0」とする変数「初等教育ダミー」と、「2.高校(または旧制中学など)、3.専門学校、4.短大・高専(5年制)(=1)」、その他を「0」とする変数「中等教育ダミー」、そして、「5.大学(旧高専)・大学院(=1)」、その他を「0」とする変数「高等教育ダミー」を用いる。

5) q77 居住地域

本分析では、「2.高槻北地区、3.高槻南地区(=1)」、その他を「0」とする変数「都市部地域ダミー」を用いる。この都市部と郊外部の分類は、前年度調査における下仲(2014)の分類方法に依ったものである。

6) q78 市内居住年数

この質問における回答は、「1.1年未満」「2.1年以上3年未満」「3.3年以上5年未満」「4.5年以上10年未満」「5.10年以上20年未満」「6.20年以上30年未満」「7.30年以上40年未満」「8.40年以上50年未満」「9.50年以上」の9段階である。

7) q81 世帯人数

本分析ではデータの数値を直接用いる。

8) q82 世帯収入

この質問における回答は、「1. 100万円未満」「2. 100万円～200万円未満」「3. 200～400万円未満」「4. 400万円～600万円未満」「5. 600万円～800万円未満」「6. 800万円～1000万円未満」「7. 1000万円～1500万円未満」「8. 1500万円以上」の8段階である。

4. 分析

4.1. 世間話の頻度に影響する要因

まず、世間話の頻度から、社会関係資本を多く持つと思われる人々の傾向を見ていくことにしたい。ここでは、従属変数を「q9 近所での世間話の頻度(反転後)」として、前節で述べた独立変数を投入することにより、重回帰分析を行った結果を以下(表1)に示す。

表1 「近所での世間話の頻度」の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	1.102 **	.243	
男性ダミー	-.263 **	.082	-.105
q73 年齢	.211 **	.033	.270
常勤の勤め人ダミー	-.476 **	.100	-.179
自営業者ダミー	-.180	.149	-.037
中等教育ダミー	.148	.135	.058
高等教育ダミー	.149	.150	.055
都市部地域ダミー	-.033	.073	-.013
q78 市内居住年数	.027	.023	.040
q81 世帯人数	.092 **	.032	.094
q82 世帯収入	.019	.027	.024
調整済決定係数	.152 **		
N	998		

**p<.01, *p<.05

この重回帰分析では、自由度調整済み決定係数(R²)が0.152であることから、従属変数である「q9 近所での世間話の頻度」の分散のうち15.2%が投入した独立変数で説明されていることがわかる。また、分散分析でF検定を行うと1%水準で有意であるため、母集団においても「近所での世間話の頻度」の予測に役立つモデルであることがわかる。

表1から、1%水準で有意な変数は「男性ダミー」「q73 年齢」「常勤の勤め人ダミー」「q81 世帯人数」である。つまり、列挙した4つの変数が「近所での世間話の頻度」に影響を及ぼしていることがわかる。では、それぞれの変数はどのように「近所での世間話の頻度」に影響を及ぼしているのだろうか。

それぞれの独立変数が従属変数に与える影響量を比較するには、ここでは β (ベータ)の値を

見ていけばよい。ベータの値の絶対値が大きい方から順に見ていくと、まず、変数「q73 年齢」におけるベータの値 ($\beta=0.270$) が最大である。ここから、年齢が高い人ほど近所の人たちとの世間話の頻度が高くなる傾向にあることが示される。つまり、第2節で設定した仮説 1b が支持されることになる。

次にベータの値の絶対値が大きいのは、変数「常勤の勤め人ダミー」であり、ベータの値 ($\beta=-0.179$) は負の値を取っていることから、常勤で働いている人は基準値である「その他の職業」の人と比較して、近所の人たちとの世間話の頻度は低いということがわかる。

続いて、変数「男性ダミー」のベータの値 ($\beta=-0.105$) から、年齢ほどの影響量は無いが、女性と比較して男性は世間話の頻度が低いということがわかる。つまり、逆を言えば「男性より女性の方が近所の人たちとの世間話の頻度は高い」という仮説 1a が支持されたことになる。

また、変数「q81 世帯人数」のベータの値 ($\beta=0.094$) から、世帯人数が多い人ほど近所の人たちとの世間話の頻度が高いことが窺える。

小括すると、高齢の女性で、常勤の仕事に就いていない、世帯人数が多い人が近所の人たちとの世間話の頻度が高い傾向にあるという分析結果が表 1 から得られたことになる。

4.2. 近所づきあいへの関心度に影響する要因

次に、近所づきあいを増やしたいかどうかを訊くことで、社会関係資本の需要がどの層の人々にあるのかを見ていくことにしたい。ここでは、従属変数を「q10 近所づきあいを増やしたいか(反転後)」として、前節で述べた独立変数を投入することにより、重回帰分析を行った結果を以下(表 2)に示す。

表2 「近所づきあいを増やしたいか」の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	2.932 **	.146	
男性ダミー	.021	.049	.015
q73 年齢	.076 **	.020	.175
常勤の勤め人ダミー	.052	.060	.035
自営業者ダミー	.041	.089	.015
中等教育ダミー	-.044	.081	-.031
高等教育ダミー	-.002	.090	-.002
都市部地域ダミー	-.001	.044	-.001
q78 市内居住年数	-.028 *	.014	-.077
q81 世帯人数	.024	.019	.044
q82 世帯収入	.019	.016	.042
調整済決定係数	.010 *		
N	1002		

** $p < .01$, * $p < .05$

この重回帰分析では、自由度調整済み決定係数(R²)が 0.010 であることから、従属変数である「q10 近所づきあいを増やしたいか」の分散のうち 1.0%が投入した独立変数で説明されていることがわかる。また、分散分析で F 検定を行うと 5%水準で有意であるため、母集団においても「近所づきあいへの関心度」の予測に役立つモデルであることがわかる。

表 2 から、1%水準で有意な変数は「q73 年齢」であり、5%水準で優位な変数は「q78 市内居住年数」である。つまり、ここでは「q73 年齢」「q78 市内居住年数」が「近所づきあいを増やしたいか」に影響を及ぼしていることがわかる。では、それぞれの変数はどのように「近所づきあいを増やしたいか」に影響を及ぼしているのだろうか。

まず、変数「q73 年齢」におけるベータの値 ($\beta=0.175$) から、年齢が高い人ほど近所づきあいを増やすことを望む傾向にあることが示される。つまり、「年齢が高い人ほど近所づきあいへの関心度は高い」という第 2 節で設定した仮説 2b がこの分析からは支持されることになる。

また、変数「q78 市内居住年数」のベータの値 ($\beta=-0.077$) から、市内居住年数が長い人ほど近所づきあいへの関心度は低いことがわかる。

小括すると、年齢が上がるほど、また、市内居住年数が短い人ほど近所づきあいを増やすことを望む傾向があるという分析結果が表 2 から得られたことになる。

5. まとめと考察

前節の分析では、「世間話の頻度の高さ」には、「高齢であること」「女性であること」「常勤の勤務でないこと」「世帯人数が多いこと」が影響していることが明らかになった。また、「近所づきあいへの関心度の高さ」には、「高齢であること」「市内居住年数が短いこと」が影響していることが明らかになった。近所づきあいへの関心度に関しては先行研究で挙げた吉井による前年度の分析結果と異なるが、この差異は分析方法の違いによるものと考えられる。

この分析結果から何が得られるのかを示すために、「世間話の頻度の高さ」に関して逆の視角から捉え直してみたい。つまり、「世間話の頻度の低さ」には「若年層であること」「男性であること」「常勤の勤務に就いていること」「世帯人数が少ないこと」が影響しているとこの分析結果を捉えるのである。ここで考察対象としたいのは、働き盛りの男性の「世間話の頻度の低さ」である。

女性の社会進出が進んでいる現代の日本においても、未だに若年・中年男性が主に働き手となり、「地縁」よりも「社縁」の方を重視する傾向にあることは、本分析結果からも見て取ることができる。稲葉によると、こうした男性が定年等で退職する時期になると、ここでいう「社縁」から「地縁」へと社会関係資本の再構築を余儀なくされるのである。つまり、退職によって職場や仕事仲間とのつながりが弱まることによって、近所づきあいなどの今まで重視できなかった社会的つながりが重視されるようになるのである。一方女性は、退職以前から家族以外の人とのつながりが多岐にわたっているため、同様に近所づきあいを重視する傾向にあっても、その適応は男性よりスムーズであるようだ。

一方で稲葉は、内閣府の『高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査』から、退職後の高齢男性がまちづくり活動に「すでに参加している」または「参加・貢献したい」という意思を女性よりも強く示している傾向にあることを明らかにしている。ここで重要なことは、男性の社会参加には何か「ま

ちづくり」のような大義名分が必要だということである。つまり、こうした高齢の人の社会参加を促すためには、地域における活動には何か目的を持たせた方がよいのである。本分析においても、高齢の人ほど近所づきあいを増やすことを望む傾向があることは前述したとおりであり、一定の目的がある地域活動を展開することで、こうした需要に応えることができるものと考えられる。

社会関係資本は様々な面で役に立つことが指摘されている。経済活動や地域社会の安定、人々の健康や教育、政府の効率などの分野でその有用性が指摘されており、地域におけるつながりに関して言えば、平成 25 年度の「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の分析結果からもその一端を見ることができる。藤原(2014)による分析によると、世間話の頻度や近所づきあいへの需要の高さがボランティア活動の参加の多さと相関があることが示されているし、中村(2014)による分析によると、「地域において、育児の助け合いが行われていること」が地域において子育てしやすい社会環境が整っていると感じる要因になっていることが明らかになっている。つまり、高槻市においても社会関係資本を活用し拡大させることには、これまでの研究で指摘されているように、様々な分野で有用性があるといえるのである。

本分析では、「世間話の頻度の高さ」に影響する要因を分析することにより、高槻市民に関して社会関係資本の大きさがどのような要因にあるのか、また、「近所づきあいへの関心度」に影響する要因を分析することにより、社会関係資本の需要がどの層の人々にあるのかを明らかにしてきた。本分析で明らかとなった今現在既に存在する社会関係資本や社会関係資本に対する需要を実際にどのように生かしていくかは、行政の仕事でもあるし、市民が自ら考え行動に移していくべきものでもある。具体的にどのようなアプローチを行うべきかという提案については本分析での目的を超えるものであるのでここで言及することはしないが、本分析が高槻市においてこうしたアプローチの一助になることを願いつつ、本章を締めくくりにしたい。

6. 文献

- [1] 朝日新聞「孤族の国」取材班, 2012,『孤族の国 ひとりがつながる時代へ』朝日新聞出版.
- [2] 藤原邦彦,「住民の地域社会に対する印象と社会貢献との関係性」関西大学総合情報学部編『平成 25 年度社会調査実習報告書 —高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—』関西大学総合情報学部, 2014, 96-101.
- [3] 稲葉陽二, 2011,『ソーシャル・キャピタル入門 孤立から絆へ』中央公論新社.
- [4] 松本康,「都市社会の構造変容 都市社会—空間構造と社会的ネットワーク」奥田道大編『講座社会学 4 都市』東京大学出版会, 1999, 105-157.
- [5] 中村佳世,「子育てしやすい社会環境に関する分析」関西大学総合情報学部編『平成 25 年度社会調査実習報告書 —高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—』関西大学総合情報学部, 2014, 143-150.
- [6] NHK スペシャル取材班編, 2012,『無縁社会』文藝春秋.
- [7] ロバート・D・パットナム(猪口孝訳)『流動化する民主主義 先進 8 カ国におけるソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房, 2013.

- [8] 下仲悠希,「高槻市営バスの満足度に関する要因についての分析」関西大学総合情報学部編『平成 25 年度社会調査実習報告書 —高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—』関西大学総合情報学部, 2014, 236-240.
- [9] 吉井実南,「高槻市内で行われるイベント参加と近所づきあいの関係」関西大学総合情報学部編『平成 25 年度社会調査実習報告書 —高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—』関西大学総合情報学部, 2014, 112-121.

第4章 属性別による環境に対する意識について

山本 明

1. はじめに

あなたは自分自身で3Rを実施しているだろうか。環境省によると3Rとは、「Reduce(発生抑制)ごみも資源ももともと減らす」、「Reuse(再利用)くりかえし使う」、「Recycle(再生利用)資源として再び利用する」ことを意味し、それぞれの単語の頭文字をとったものである。

経済発展が進むにつれゴミ問題が深刻化するという現実があり、日本でも不法投棄問題やダイオキシン類問題、PCB問題などの様々な環境破壊問題が発生している。このように問題が多岐にわたる中、これらの問題を解決するために、環境と経済の両立を図る必要があり、循環型社会の形成が注目すべき戦略であるといえよう。

環境省によると3Rイニシアティブとは、3Rを通じて循環型社会の構築を目指したものである。これは平成16年6月8日～10日に米国ジョージア州シーアイランドで開催されたG8サミット(シーアイランドサミット)において、資源の有効利用を通じて環境と経済の両立を図る3Rの取組は今後益々重要になるとし、この3Rイニシアティブが採択された。これを受けて我が国が2005年4月に東京で開催した「3Rイニシアティブ閣僚会合」において3Rイニシアティブが正式にスタートした。この記述から以前から3Rが注目されていたことがうかがえる。

そこで筆者は今回の調査で属性が3Rおよび自然環境への意識・関心にどのように影響しているかを分析する。

2. 仮説

環境省・環境研究・技術情報総合サイトによって発表された「3R意識や行動に関するアンケート調査(2009)」において、学校での環境教育等の影響から学生が一般市民と比べ3Rの認知度が高かった。このことから若年層が3Rに注目し、関心が高いことがうかがえる。これについて、属性別による環境に対する意識調査として以下の仮説を立てた。

[仮説1] 女性は男性と比較すると環境に対して関心が高い。

[仮説2] 若年層は老年層と比較すると環境に対して関心が高い。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成26年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1198票、回収率は59.9%である。

3.2. 変数

今回の分析では「Q22 ゴミを出さないように心がけているか」、「Q72 性別」、「Q73 年齢」、「Q76 最終学歴」、「Q82 世帯収入」の5つの変数を利用し、分析のため以下のように変数を操作した。

[従属変数]

上記先行研究では、ゴミ問題に関する行動について調査を実施していたため、今回の調査では以下を従属変数とする。

・ゴミを出さないように心がけているか

「Q22 ゴミを出さないように心がけているか」の回答項目から「1.かなり心がけている」、「2.ある程度心がけている」を「心がけている(=1)」とした。また、「3.あまり心がけていない」、「4.全く心がけていない」を「心がけていない(=0)」とし、2カテゴリに分類した。

[独立変数]

・性別

「Q72 性別」の回答項目から「女性(=1)」、「男性(=0)」とし、女性を「女性ダミー」とした。

・年齢

「Q73 年齢」の回答項目から「1.20代」、「2.30代」を「若年層(=1)」、これ以外を「その他(=0)」とし、これを「若年層ダミー」とした。また「3.40代」、「4.50代」、「5.60代」、「6.70代以上」を「老年層(=1)」、これ以外を「その他(=0)」とし、これを「老年層ダミー」とした。

・最終学歴

「Q76 最終学歴」の回答項目から「1.中学」、「2.高校」、「3.専門学校」を「1.初等学歴」とした。次に「4.短大・高専」を「2.中等学歴」とした。最後に「5.大学・大学院」を「3.高等学歴」とし、3カテゴリに分類した。なお、「6.わからない」は欠損値処理を行った。また3カテゴリに分類した変数を利用し「1.初等学歴」を「初等学歴(=1)」、これ以外を「その他(=0)」とし、初等学歴を「初等学歴ダミー」とした。同様に「2.中等学歴」を「中等学歴(=1)」、これ以外を「その他(=0)」とし、中等学歴を「中等学歴ダミー」とした。同様に「3.高等学歴」を「高等学歴(=1)」、これ以外を「その他(=0)」とし、高等学歴を「高等学歴ダミー」とした。

・世帯収入

「Q82 世帯収入」の回答項目から「1.100万円未満」、「2.100万円～200万円未満」、を「1.200万円未満」とした。次に「3.200万円～400万円未満」、「4.400～600万円」を「2.200万円以上600万円未満」とした。最後に「5.600万円～800万円未満」、「6.800万円～1,000万円未満」、「7.1,000万円～1500万円未満」、「8.1,500万円以上」を「3.600万円以上」とし、3カテゴリに分類した。なお、「9.わからない」は欠損値処理を行った。また、3カテゴリに分類した変数を利用し「1.200万円未満」を「低所得者(=1)」、これ以外を「その他(=0)」とし、低所得者を「低所得者ダミー」とした。同様に「2.200万円以上600万円未満」を「中所得者(=1)」、それ以外を「その他(=0)」とし、中所得者を「中所得者ダミー」とした。同様に「3.600万円以上」を「高所得者(=1)」、それ以外を「その他(=0)」とし、高所得者を「高所得者ダミー」とした。

[分析方法]

今回の分析ではロジスティック回帰分析を用いて分析を実施した。

4. 分析

ロジスティック回帰分析の結果から表 1 にまとめることができる。まず、他の変数の影響を一定にすれば、「女性ダミー」(Exp(B)=1.395)が有意性検定において 5%水準で有意であることから、女性は男性と比較するとゴミを出さないように心がける確率が約 1.4 倍であることがわかる。次に、「若年層ダミー」(Exp(B)=0.285)が有意性検定において 1%水準で有意であることから、若年層は老年層と比較するとゴミを出さないように心がける確率が約 0.3 倍、すなわち 70%減少することがわかる。そして「高所得ダミー」(Exp(B)=0.619)が有意性検定において 5%水準で有意であることから、高所得者は低所得者と比較するとゴミを出さないように心がける確率が約 0.6 倍、すなわち 40%減少することがわかる。

その他の変数は環境行動に影響していなかった。

表 1 「ゴミを出さないように心がけているか」のロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	Exp(B)
女性ダミー	.333 **	.157	1.395
若年層ダミー	-1.256 ***	.165	.285
中所得者ダミー	.031	.234	1.032
高所得者ダミー	-.480 **	.237	.619
中等学歴ダミー	-.411	.230	.663
高等学歴ダミー	-.037	.172	.964
定数	1.574	.234	4.828
Negelkerke R ²	0.105		
model $\chi^2(df=6)$	83.013 ***		
N=1159			

***p<.01, **p<.05

5. 考察

分析の結果、「[仮説 1] 女性は男性と比較すると環境に対して関心が高い」は 5%水準で有意であった。次に「[仮説 2] 若年層は老年層と比較すると環境に対して関心が高い」は 1%水準で有意であったが負の値となった。そして「高所得者は低所得者と比較すると環境に対して関心が低い」ことは 5%水準で有意であった。

これらの結果について、まず[仮説 1]では、女性は男性と比較すると優しさや思いやり、といった性格が強いため、地球環境のことを考える気持ちが実際の行動に繋がったと予測する。これにより環境に対して関心が高くなったと考える。次に[仮説 2]では、若年層は老年層と比較すると 3R という言葉は認知しているが、多忙であるため実際の行動に移すことが少なくなったと予測する。これにより負の結果となったと考える。最後に仮説としなかった所得においては、高所得者は低所得者と比較すると所得が増加するにつれて長時間労働も増加する傾向があるため、仕事以外のことに費やす時間が少なくなったと予測する。これにより環境に対して関心が低くなったと考える。以上の結果から、属性ごとに環境に対する意識・関心は大きく偏った結果となった。従って、それぞれの属性全体に環境に対する意識・関心を持たせていくこと、また実際の行動に移してもらうために、3R が取り組みやすい環境を築いていくことが必要だと考えた。

6. 文献

- [1] 環境省 3R 容器包装リサイクル法 『いま、はじめる 3R』
http://www.env.go.jp/recycle/yoki/b_5_book/pdf/book_06.pdf
- [2] 環境省 3R イニシアティブ 『報告書』
<http://www.env.go.jp/recycle/3r/approach/03a.pdf>
- [3] 環境省 3R イニシアティブ 『3R イニシアティブとは』
<http://www.env.go.jp/recycle/3r/outline.html>
- [4] 環境省 『4 章 3R 意識や行動に関するアンケート調査』
http://www.env.go.jp/policy/kenkyu/suishin/kadai/syuryo_report/pdf/K22097-4.pdf
- [5] ベネッセ教育総合研究所 『第2節 大学生の生活実態』
<http://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3159>
- [6] 日本弁護士連合会 『労働時間法制の規制緩和に反対する意見書』
http://www.nichibenren.or.jp/library/ja/opinion/report/data/2014/opinion_141121.pdf

第5章 生活における自然環境の影響

越智 祐貴

1. はじめに

近年地球温暖化問題、森林伐採などの自然環境について問題は世界中で取り上げられている。そして、緑などの自然環境が人のストレスや生活に影響を与えていると聞くことがある。『「自然な景観」が人に与える影響』の中で取り上げられている、Kuo (1990) は、「工物の無い自然な風景は人の精神に良いものであり、人を回復させ元気にさせる何かがあるのかもしれない。」と述べている。このことから、環境問題は人の精神に大きな影響を及ぼしているのである。また、現代社会はストレス社会などと言われ、生活に対する不満などが大きくなっているといえなくもない。

そこで、自然環境が日々の生活にどれくらい影響を及ぼすのかどうかを今回市民の生活環境における自然環境の重要性の意識について調べ、生活満足度の観点から分析した。

2. 仮説

国土技術政策総合研究所(国総研)の『自然環境とのふれ合いが人間に及ぼす影響に関する基礎的研究』によると、生理計測および主観調査の双方から人が河川環境(自然が豊かである環境)に滞在することでストレス緩和効果が得られる可能性を定量的・総合的にしめすことができたとしている。生理計測とは身体の生理的な反応を捉え数値化し、リラックスしているのか緊張しているのかを観測するために有効とされている計測方法である。

今回は自然環境がどれくらい生活に影響を及ぼすものなのかを調べるために以下のような仮説をたてた。

仮説:地域の自然環境に満足している人ほど生活満足度は高くなる。

3. データと変数

3.1. データ

この分析で用いたデータは平成 26 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」である。調査対象は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女である。計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1198 票、回収率は 59.9%となっている。

3.2. 変数

変数として用いたのは「生活満足度」、「地域の自然環境満足度」、「地域の自然の量」、「居住地域選択時における自然環境の重要度」、「性別」、「年齢」、「収入」の質問項目と回答である。以上の変数でクロス表と重回帰分析を行う。クロス表では変数をそのまま用いるが、

重回帰分析では一部変数を以下のように操作して分析を行なう。

「Q1. 生活満足度」<反転>

「5. 満足している」、「4. やや満足」、「3. どちらでもない」、「2. やや不満」、「1. 不満」
数値が大きいほど生活満足度が高くなるように操作している。

「Q6. 地域の自然環境満足度」<反転>

「5. 満足している」、「4. やや満足」、「3. どちらでもない」、「2. やや不満」、「1. 不満」
数値が大きいほど自然環境満足度が高くなるように操作している。

「Q7.地域の自然の量」<反転>

「5. 多いと思う」、「4. やや多いと思う」、「3. 普通だと思う」、「2. やや少ないと思う」、「1. 少ないと
思う」

数値が大きいほど自然の量が多いと感じているとして操作している。

「Q8. 居住地域選択時における自然環境の重要性」<反転>

「4. 重要だった」、「3. やや重要だった」、「2. あまり重要でなかった」、「1. 重要でなかった」
数値が大きいほど居住地域選択時に自然環境が重要であったとして操作している

「Q72. 性別」<男性ダミー>

「0. 女性」「1. 男性」になるように操作している。

Q73「年齢」と Q82「世帯収入」はそのまま用いる。

4. 分析

まずは「生活満足度」と3つの変数「地域の生活満足度」、「地域の自然量」、「居住地域選択時における自然環境の重要性」の関係についてクロス表を用いて検討する。

表1 地域の自然環境満足度 と 生活満足度 のクロス表

		生活満足度					合計
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満	
満足	度数	69	86	24	7	4	190
	行%	36.3%	45.3%	12.6%	3.7%	2.1%	100.0%
やや満足	度数	57	263	111	46	16	493
	行%	11.6%	53.3%	22.5%	9.3%	3.2%	100.0%
地域の自然 環境満足度	どちらとも	36	107	96	51	13	303
	いえない	11.9%	35.3%	31.7%	16.8%	4.3%	100.0%
やや不満	度数	8	55	43	28	13	147
	行%	5.4%	37.4%	29.3%	19.0%	8.8%	100.0%
不満	度数	9	12	12	14	9	56
	行%	16.1%	21.4%	21.4%	25.0%	16.1%	100.0%
合計	度数	179	523	286	146	55	1189
	行%	15.1%	44.0%	24.1%	12.3%	4.6%	100.0%

$\chi^2(df=16, N1189)=174.187^{**}$, CramerV=0.191**,

** $p<.01$, * $p<.05$

検定の結果、カイ2乗の値は174.187でCramerのVの値は0.191であった。また、有意確率は1%水準で有意であった。表1のクロス表を見ると生活満足度のやや満足だと感じている人のうちの53.3%が地域の自然環境満足度でもやや満足と答えていることがわかる。CramerのVの値を見る限りでもある程度は関連性の強さがあるとわかる。

表2 地域の自然の量と生活満足度のクロス表

		生活満足度					合計
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満	
多いと思う	度数	58	97	26	12	8	201
	行%	28.9%	48.3%	12.9%	6.0%	4.0%	100.0%
やや多いと思う	度数	36	130	69	32	8	275
	行%	13.1%	47.3%	25.1%	11.6%	2.9%	100.0%
地域の自然の量 普通だと思う	度数	49	175	97	46	19	386
	行%	12.7%	45.3%	25.1%	11.9%	4.9%	100.0%
やや少ないと思う	度数	20	85	56	36	10	207
	行%	9.7%	41.1%	27.1%	17.4%	4.8%	100.0%
少ないと思う	度数	16	37	39	20	10	122
	行%	13.1%	30.3%	32.0%	16.4%	8.2%	100.0%
合計	度数	179	524	287	146	55	1191
	行%	15.0%	44.0%	24.1%	12.3%	4.6%	100.0%

$\chi^2(df=16, N=1191)=71.881^{**}$, CramerV=0.123**

** $p<.01$, * $p<.05$

検定の結果、カイ2乗の値は71.881でCramerのVの値は0.123であった。また、有意確率は1%水準で有意であった表2のクロス表を見るとでは生活満足度でやや満足と答えた人のうち48.3%が地域の自然の量は多いと思うと答えている。CramerのVの値をみるとやや関連性の強さはあるとわかる。

表3 居住地域選択時における自然環境の重要度と生活満足度のクロス表

		生活満足度					合計
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満	
重要だった	度数	45	81	26	12	5	169
	行%	26.6%	47.9%	15.4%	7.1%	3.0%	100.0%
やや重要 だった	度数	49	201	86	44	14	394
	行%	12.4%	51.0%	21.8%	11.2%	3.6%	100.0%
居住地域選択時に おける自然環境の 重要度 あまり重要 でなかった	度数	70	206	141	72	27	516
	行%	13.6%	39.9%	27.3%	14.0%	5.2%	100.0%
重要でな かった	度数	13	31	32	17	9	102
	行%	12.7%	30.4%	31.4%	16.7%	8.8%	100.0%
合計	度数	177	519	285	145	55	1181
	行%	15.0%	43.9%	24.1%	12.3%	4.7%	100.0%

$\chi^2(df=12, N=1181)=53.016^{**}$, CramerV=0.212**

** $p<.01$, * $p<.05$

検定の結果、カイ2乗の値は53.016でCramerのVの値は0.122であった。また、有意確率は1%水準で有意であった表3のクロス表を見るとでは生活満足度のやや満足と答えている人のうち51.0%が居住地選択時における自然環境の重要性やや重要だったと答えており、39.9%の人があまり重要でなかったと答えていることから二極化している可能性があると思われる。CramerのVの値をみると関連性が強いとわかる。

最後に、重回帰分析では変数で説明した「生活満足度反転」を従属変数にして「地域の自然環境満足度反転」、「地域の自然の量反転」、「居住地選択時における自然環境の重要性反転」、「男性ダミー」、「年齢」「世帯収入」を独立変数として分析を行う。

表4 生活満足度の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	1.723 **	.161	
地域の自然環境満足度反転	.280 **	.038	.287
地域の自然の量反転	-.044	.034	-.052
居住地選択時における自然環境の重要度	.068	.040	.055
男性ダミー	-.188 **	.061	-.090
年齢	.065 **	.020	.099
世帯収入	.162 **	.020	.240
調整決定係数	.149 **		
N	1018		

** $p < .01$, * $p < .05$

表4の重回帰分析の結果「地域の自然環境満足度」「男性ダミー」「年齢」「世帯収入（中央値）」は1%水準で有意になり、「地域の自然の量」と「居住地選択時における自然環境の重要度」は有意ではなかった。変数の中で「地域の自然環境満足度」はベータ値($\beta=0.287$)と特に高いことから、他の変数の影響をコントロールすれば、自然環境満足度が生活満足度に及ぼす影響が特に高いと判断できる。つまり、「地域の自然環境満足度」が高くなると「生活満足度」が高くなることが分かる。次に「男性ダミー」のベータ値をみると($\beta=-0.090$)となりマイナスの値をとっている。このことから女性に比べると男性の方が「生活満足度」は低いと判断ができる。「年齢($\beta=0.099$)」は1%水準で有意になったことから「生活満足度」に影響する変数であることがわかる。つまり年齢が高くなるほど「生活満足度」も高くなる。「世帯収入」をみるとベータ値が($\beta=0.240$)と比較的他の変数よりも高いことから他の変数の影響をコントロールすると、世帯収入が「生活満足度」に及ぼす影響は「地域の自然環境満足度」の次に高いと判断できる。

このことから、「地域の自然環境満足度」「男性ダミー」「年齢」「世帯収入」は生活満足度に影響を及ぼす変数であり、特に「地域の自然環境満足度」は変数の中でもっとも「生活満足度」に影響しているといえる。

5. 考察

上記の分析の結果から、仮説の「地域の自然環境に満足している人ほど生活満足度は高くなる」が支持される結果となったので、自然環境が生活満足度に大きく影響を及ぼしていると考えられる。しかし、生活満足度が自然の量で決定しているのではなく、居住地域選択時においても自然環境を重要視している人が必ずしも生活満足度が高いわけではないという結果になってしまった。だが、クロス表をみると関連性はあるように読み取ることができる。したがって、自然環境の満足度が生活満足度に大きく影響を及ぼしているということがわかる。そして、必ずしも自然の量で変化しているのではないが関連性が全くないわけではない。自然環境を重要視している人の生活満足度が高いというわけでもないが関連性が全くないわけではない。

今回の分析に使用した変数は数ある要因のごく一部であり、本稿の分析では社会的ストレスを生活満足度に置き換えるやや強引な解釈が行われている部分が存在している。そのため幾つかの項目において「歪み」を与えている危険性が孕んでいる。また重回帰分析において用いた変数についても必要最小限であり隠れた要因についても分析を行わなければならなかったことは自明である。分析方法についても使用したものはクロス表と重回帰分析の 2 種類だけであり、その他の分析法方については一切触れていない。そのため、自然環境が生活にどのような影響を及ぼすかについては、さらに多面的に分析する方法を模索しなければならない。

6. 文献

- [1] WIDRED JonahLehrer 「自然な景観」が人に与える影響 [日本語版：ガリレオ-矢倉美登里/合原弘子] (WIRED.jp 2010 年 08 月 25 日 12 時 17 分)
- [2] 国土技術政策総合研究所(国総研) 環境部 河川環境研究室 [自然環境とのふれ合いが人間に及ぼす影響に関する基礎的研究] (研究期間 平成 18~20 年度)
- [3] 関西大学 総合情報学部, 2014, 「平成 25 年度社会調査実習報告書—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—」

第6章 女性の初婚年齢と家庭の豊かさの因果関係

井上 愛弓

1. はじめに

数年前から日本の大きな問題として少子化がある。厚生労働省の平成25年度「人口動態統計月報年計(概数)の概況」のデータによれば、合計特殊出生率は1.43(概数値)と、前年に対して0.02%ほど上昇している。一方で出生率は8.2%と、前年の数値と同率であったが、実際は7431人減少している。この少子化問題の要因の1つに、日本女性の晩婚化が挙げられる。厚生労働省の平成22年度「出生に関する統計」のデータによれば、2009年時点での日本女性の平均初婚年齢は28.6歳であり、1975年では24.7歳であったことから上昇傾向が続いていることが分かる。このように、日本女性の平均初婚年齢が上昇している要因として、1986年より施行されている男女雇用機会均等法や1992年より施行されている育児休業制度の定着により、女性の社会進出が進行していることが1つであると推測する。そこで、本調査では日本女性の晩婚の原因について検証をする。

2. 先行研究と仮説

参考にした先行研究は、Shrestha Mulmi Rabita (2010)の「結婚行動における女性の社会経済的地位の影響」である。この調査によると、近年ネパールの農村地区での結婚はごく最近まで若年期に行われていたが、近年の社会・経済的な変化により結婚年齢が上昇していると述べられている。この調査では、仮説として「社会・経済的に豊かな家庭出身の女性たちは、遅い年齢で結婚する」が立てられ、明らかにされた。この結果は、両親の高い社会・経済的地位および、高い学歴が娘たちにも高学歴をもたらし、その教育が女性の結婚年齢の上昇をもたらしている、という事実である。

本調査では、先行研究と同じく「社会・経済的に豊かな家庭出身の女性ほど、遅い年齢で結婚する」という仮説を立て、日本においてもネパールと同様の結果がみられるか調査を行った。これは社会・経済的に豊かな家庭出身の女性ほど、教育環境が整っているため、社会進出がしやすいということを前提としている。

3. データと変数

3.1. データ

分析においては、平成26年に実施された「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」のデータを用いた。調査対象者は無作為に選ばれた、高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女である。計画標本サイズは2000、有効回収率は1198、回収率は59.9%である。

3.2. 変数

変数として用いたのは以下の通りである。

【従属変数】

Q70. 初婚年齢

1. 10代
2. 20代
3. 30代
4. 40代
5. 50代以上

【独立変数】

Q63. 15歳の頃の家庭の収入

1. 平均よりかなり少ない
2. 平均より少ない
3. ほぼ平均
4. 平均より多い
5. 平均よりかなり多い

重回帰分析に用いる為に、ダミー変数を作成した。選択肢 1,2 を「15歳の家庭収入 平均以下ダミー」、選択肢 3 を「15歳の家庭収入 平均ダミー」、選択肢 4,5 を「15歳の家庭収入 平均以上ダミー」とする。本調査では「15歳の家庭収入 平均以上ダミー」を基準値としている。

Q73. 年齢

1. 10代
2. 20代
3. 30代
4. 40代
5. 50代
6. 60代
7. 70代以上

Q74. 職業

1. 常時雇用の勤め人
2. 臨時雇用、パート、アルバイト
3. 自営業主
4. 自営業の家族従業者
5. 経営者、役員
6. 家事専業
7. 学生
8. 無職
9. その他

重回帰分析に用いる為に、ダミー変数を作成した。選択肢 1,5 を「常勤の勤め人ダミー」、選択肢 3,4 を「自営業者ダミー」、その他の選択肢を「その他ダミー」とする。本調査では「その他ダミー」を基準値としている。

Q76. 最終学歴

1. 中学(旧小学校など)
2. 高校(または旧制中学など)
3. 専門学校
4. 短大・高専(5年制)
5. 大学(旧高専)・大学院

重回帰分析に用いる為に、ダミー変数を作成した。選択肢 1,2,3 を「初等教育ダミー」、選択肢 4 を「中等教育ダミー」、選択肢 5 を「高等教育ダミー」とする。本調査では「初等教育ダミー」を基準値としている。

4. 分析

本調査における性別の度数分布表は以下のようになった。(表1)

表1 q72 性別

	度数	パーセント
男性	509	43.0
女性	676	57.0
合計	1185	100.0

本調査では結婚したことのある女性に限定して分析を行った。その際に、Q67.婚姻状況に対して2値のリコードを行った。選択肢1「既婚(配偶者あり)」と2「既婚(離別・死別)」を「既婚」、選択肢3「未婚」を「未婚」とし、「既婚」を1、「未婚」を2と置いた。結婚したことのある女性に限定して分析を行うため、Q73.性別の「女性」とQ.67 婚姻状況の「既婚」をケース選択した。既婚女性と未婚女性の度数分布表は以下のようになっている。(表2)

表2 既婚・未婚女性

	度数	パーセント
既婚女性	562	86.7
未婚女性	86	13.3
合計	648	100.0

この既婚女性 562 人を対象に、従属変数である「初婚年齢」が、それぞれの独立変数にどのような影響を与えているか、ダミー変数を用いて重回帰分析を行った。(表3)

表3 「初婚年齢」の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	2.145**	.086	
15歳の頃の家庭収入平均以下ダミー	.106*	.050	.116
15歳の頃の家庭収入平均ダミー	.079	.048	.089
中等教育ダミー	.022	.055	.021
高等教育ダミー	.096	.060	.082
常勤の勤め人ダミー	.063	.060	.052
自営業者ダミー	-.074	.085	.041
年齢	-.026	.016	-.087
調整済決定係数	.019*		
N	474		

**p<.01, *p<.05

表3では、調査済み決定係数(R²)は0.019であることから、従属変数の「初婚年齢」の分散のうち1.9%が、投入した独立変数で説明されることを示している。また分散分析でF検定を行うと、5%水準で有意である。つまり決定係数の値は統計的に有意であり、母集団においても「初婚年齢」の予測に役立つモデルであることを示している。

初婚年齢と15歳の頃の家庭収入 平均以下ダミーの有意確率は5%水準で有意であることから、15歳の頃の家庭の収入が平均以上の人に比べ、15歳の頃の家庭の収入が平均以下の人の方が晩婚であることが分かる。一方で、その他の変数は「初婚年齢」に有意な影響を及ぼしていないことが分かった。

5. 考察

上記にも述べたが、分析結果より 15 歳の頃の家庭の収入が平均以上だった女性と比べて、平均以下の女性の晩婚であるという結果が導き出された。つまり、これは仮説と先行研究で述べられた「社会・経済的に豊かな家庭出身の女性ほど、遅い年齢で結婚する」とは異なる結果となった。原因として、日本とネパールの社会状況が異なることが関係しているのではないかと考える。ネパールはまだ女性の活躍がほんの一握りである。そもそもネパールではカースト制度が廃止されたものの生活習慣にカースト制度が現在も根付いている為、同カースト同士の結婚が一般的となっており、両親の同意によって成立する見合い結婚が多くなっている。21世紀に入り、ネパールの教育や社会改善が大きく変わってきたことから、恋愛結婚・異カースト同士の結婚は増えつつあるが、一部の大都市でしか未だ見る事ができないのが現状のようだ。実際、ネパールでは法的に廃止されているものの、幼児婚や一夫多妻制などが存在する。これらの要因が、ネパールの女性の初婚年齢が法的な結婚年齢である 18 歳よりも低い 17.8 歳(「Child Marriage in South Asia」参照)になっているのではないかと考える。その為、ネパールでは高い社会・経済的地位の女性は両親の高い社会・経済的地位により、長期間の教育が可能である結果、初婚年齢が遅いという仮説が成り立ったと考える。一方、日本ならではの傾向として、「日本女性は自身の高い社会・経済的地位よりも結婚相手の高い社会・経済的地位と安定した職が重要である。」がある。今回の調査においては、この傾向の影響がもっとも大きな要因だと考える。

6. 文献

- [1] 厚生労働省 平成 25 年「人口動態統計月報年計(概数)の概況」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai13/>
- [2] 厚生労働省 平成 22 年度「出生に関する統計」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/syussyo06/syussyo1.html>
- [3] Shrestha Mulmi Rabita (2010) 「結婚行動における女性の社会経済的地位の影響」
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009587533>
- [4] 「Child Marriage in South Asia」
https://www.icrw.org/files/publications/Child_marriage_paper%20in%20South%20Asia.2013.pdf#search='Review+of+National+Legislations+and+Policies+on+Child+Marriage+in+South+Asia'

第7章 配偶者の育児満足度について

乗本 愛美

1. はじめに

女性の社会進出が進み、積極的に活動をする女性が多く存在するようになった。また男女平等も多く訴えられ、今では「男は外で働き、女は家で家事をする」ことが当然という訳ではなくなり、夫婦の役割は各々の家庭で役割分担や話し合いで納得して決めていくという傾向にある。しかし総務省統計局による調査では夫婦の共働きの割合が年々増加の傾向にあり、2002年から2012年の10年間で共働き世帯が2.9%増加し、夫が働き妻は働かないという世帯は4.1%減少している。一方、家族類型の推移を見ると1995年から2010年の15年間で夫婦のみの世帯が2.5%増加し、夫婦と子供から成る世帯は6.3%減少している。共働き夫婦というあり方の増加は夫婦の関係や家族の形、子育てのあり方に変化を与えている。その変化に伴い夫婦の間で子育てのあり方について意思疎通を図る時間を十分にとれているか、また相手の働きに対し満足できているかは疑問である。そこで、夫婦の会話時間と配偶者の育児の取り組みに対する満足度の関係性を調べた。

2. 先行研究と仮説

渡邊タミ子ら(2001)「父親の育児協力、夫婦の対話と母親の育児満足度との関連性」によると『父親の協力に対する母親の育児満足は、1日の対話時間が長いほど、有意に高い傾向にある』ことがわかった。この研究は父親の育児認識や協力状況を把握し、さらに父親との意思疎通を母親の育児への満足度との関連性を明らかにすることを目的としている。つまり渡邊らの研究は育児は母親が担うものであるということを前提とし、その上で父親の協力等による育児満足度の関連性を調べたものであり、質問紙も父親と母親で別のものを使用している。しかし近年共働きの家庭が増加の傾向にあり、李東輝(2012)「日本の父親の育児参加に関する考察-共働き夫婦を中心に-」の研究により共働き夫婦における父親が育児を大切にしたいという意識を持ち、ほとんどの父親が様々な形で育児活動に参加していることが明らかになった。これらの研究を踏まえ本研究は父親と母親で別に調査をするのではなく、男女同じ条件で「配偶者の育児に対する満足度」について調査し、性別や夫婦間のコミュニケーションがどのような影響を与えるかを明らかにすることを目標とする。

上記の内容より、夫婦の育児満足度に関して立てた仮説は以下の通りである。

仮説 1 夫婦の会話の時間が長いほど配偶者の育児への取り組みに対する満足度が高くなる。

仮説 2 配偶者の育児への取り組みに対する満足度は性別と関係している。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成26年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1198票、回収率は59.9%である。

3.2. 変数

この分析で用いた変数は以下の通りである

・Q68 夫婦の会話時間

「1. 30分未満」「2. 30分以上1時間未満」「3. 1時間以上1時間半未満」「4. 1時間半以上2時間未満」「5. 2時間以上」

・Q69 配偶者の育児の取り組みに対する満足度

尚、Q69は下の通り反転処理を行っている。つまり、数値が高くなるほど、配偶者の育児の取り組みに対する満足度は高くなることを表している。

「0. 子どもはいない」「1. 不満」「2. やや不満」「3. やや満足」「4. 満足」

・Q71 子どもの人数

「0. いない」「1. 1人」「2. 2人」「3. 3人」「4. 4人」「5. 5人以上」

・Q72 性別

「1. 男性」「2. 女性」

ここで「男性=1、女性=0」としたダミー変数「男性ダミー」を作成した。

・Q73 年齢

「1. 20代」「2. 30代」「3. 40代」「4. 50代」「5. 60代.」「6. 70代以上」

・Q74 職業

「1. 常時雇用の勤め人」「2. 臨時雇用、パート、アルバイト」「3. 自営業主」「4. 自営業の家族従業者」「5. 経営者、役員」「6. 家事専業」「7. 学生」「8. 無職」「9. その他」

ここで「常時雇用の勤め人、経営者、役員=1、それ以外=0」としたダミー変数「常勤の勤め人ダミー」と「自営業主、自営業の家族従業者=1、それ以外=0」としたダミー変数「自営業者ダミー」「2. 臨時雇用、パート、アルバイト 6. 家事専業 7. 学生 8. 無職 9. その他 (=1)」、その他を「0」とする変数「その他職業ダミー」を作成した。

・Q76 最終学歴

「1. 中学」「2. 高校」「3. 専門学校」「4. 短大・高専」「5. 大学・大学院」

ここで「短大・高専=1、それ以外=0」としたダミー変数「中等教育ダミー」と「大学・大学院=1、それ以外=0」としたダミー変数「高等教育ダミー」を作成した。

・Q82 世帯収入

「1. 100万円未満」「2. 100万円～200万円未満」「3. 200万円～400万円未満」「4. 400万円～600万円未満」「5. 600万円～800万円未満」「6. 800万円～1000万円未満」、

「7. 1000 万円～1500 万円未満」、 「8. 1500 万円以上」

4. 分析

本研究では「配偶者の育児の取り組みに対する満足度」に影響する要因を重回帰分析によって解明することを目的とする。分析では「配偶者の育児の取り組みに対する満足度」を従属変数とし、「夫婦の会話時間」、「子供の人数」「性別」、「年齢」、「職業」、「最終学歴」、「世帯収入」を独立変数とする。

表1 「配偶者の育児の取り組みに対する満足度反転」の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	2.288 **	0.177	
q68 夫婦の会話時間	.134 **	.026	.211
q71 子供の人数	.060	.048	.052
q73 年齢	-.060 *	.031	-.099
q82 世帯収入	.001	.001	.026
男性ダミー	.543 **	.087	.307
中等教育ダミー	.146	.125	.052
高等教育ダミー	.162 *	.082	.086
常勤の勤め人ダミー	.194	.099	.103
自営業者ダミー	.057	.135	.018
調整済決定係数	.183 **		
N	513		

**p<.01, *p<.05

表1では、調整済み決定係数(R²)は0.183である。これは、従属変数である「配偶者の育児の取り組みに対する満足度」の分散のうち18.3%が、投入した独立変数で説明されていることを示している。夫婦の会話時間の有意確率は1%水準で有意なので他の変数の影響をコントロールすれば、夫婦の会話時間が長くなるほど配偶者の育児の取り組みに対する満足度も高くなる。年齢の有意確率は5%水準で有意なので他の変数の影響をコントロールすれば、年齢が高くなるほど配偶者の育児の取り組みに対する満足度は低くなる。男性ダミーの有意確率は1%水準で有意なので男性は女性と比較して、配偶者の育児の取り組みに対する満足度が高い。高等教育ダミーの有意確率は5%水準で有意なので最終学歴が高等教育の者は最終学歴が初等教育の者と比較して、配偶者の育児の取り組みに対する満足度が高い。

また、有意な変数のβの値より、配偶者の育児の取り組みに対する満足度に最も大きい影響を与えているのは性別(β=0.307)であることがわかった。

結論として仮説1, 2は支持された。

5. 考察

先行研究と同様に夫婦の会話時間が配偶者の育児の取り組みに対する満足度に影響があることが証明された。配偶者の育児に対する満足度に最も影響を与えるのは性別である。男性の方が女性と比較して配偶者の育児に対する満足度に高い満足度を感じる傾向にある。父親であるか母親であるかが配偶者の育児の取り組みに対する満足度に大きな影響を与えることが明らかになった。また配偶者の育児の取り組みに対する満足度に影響を与える他の要因として年齢と最終学歴があげられることが明らかになった。年齢が高くなるほど配偶者の育児の取り組みに対する満足度は低くなる。さらに最終学歴が高等教育の者は最終学歴が初等教育の者と比較して配偶者の育児の取り組みに対する満足度が高い。

6. 文献

- [1] 「なるほど統計学園高等部」,(2013),総務省統計局
(<http://www.stat.go.jp/koukou/cases/cat4/fact4.htm>)
- [2] 渡邊タミ子ら (2001)「父親の育児協力・夫婦の対話と母親の育児満足度との関連性」
(<http://opac.lib.yamanashi.ac.jp/metadb/up/yamanashi/KJ00000560977.pdf>)
- [3] 李東輝 (2012)「日本の父親の育児参加に関する考察：共働き夫婦を中心に」
(http://ci.nii.ac.jp/els/110009675487.pdf?id=ART0010156854&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1419400884&cp=)

第 8 章 エコ志向と公共交通機関利用度との関係

松岡 亮祐

1. はじめに

今日では地球温暖化や環境汚染を防ぐためにエコという考え方が広まっている。買い物でゴミになるナイロン袋を利用しない為に、エコバックを利用する人、詰め替え用を積極的に使い余計なゴミを増やさない人、短い距離の移動なので自家用車やバイクを使わずに自転車や徒歩で移動する人などエコ志向の人は少なくない。一方、社会にはエコではない物もある。その内の一つは車である。国土交通省の「2 地域公共交通の現状」によると近年全体的な公共交通機関の利用率は減っていると述べられている。自家用車の利用が増えているのである。車の排気ガスは地球温暖化や環境汚染の原因とされている。しかし、排気ガスは出るがバスはエコな乗り物とされており、また電車もエコな乗り物とされている。その理由として1回の運行で多くの人を運べるというのが理由である。つまり、公共交通機関の利用はエコにつながる。本研究ではリサイクル、ゴミの削減、節水などの観点からエコ志向の程度を仮定し、公共交通機関の利用との関係を調べる。

2. 仮説

エコ志向な行動を取るためには、地球温暖化や環境問題への関心がなければ出来ない。原田らの「地球温暖化および地球環境問題に対する一般住民の意識」ではリサイクル製品利用度とそれら製品価格の観点から意識について述べられている部分がある。「多少値段が高くても再生素材を使用した製品を利用すべきか」という質問に対し、意識の高い答えになるにつれ、行動の度合いも高くなり、環境保全のための税金の負担額も増えているとしている。また、関心や話題を問う質問によるクロス表でも同様の結果が得られたとしている。つまりエコ志向な行動をとる傾向がある人は環境問題等に対して関心がある人ということになる。そこで、環境問題への関心がある人は自家用車やバイクではなく公共交通機関を利用する人とし、本研究では「エコ志向の人ほど公共交通機関を多く利用する」という仮説をたてて分析する。エコ志向の人とはゴミ拾いへの参加、ゴミの分別、エコバックの利用、ゴミを少なくする、これらのような行動を心がけている人のこと表す。また公共交通機関とはバスや電車のことを表す。公共交通機関は一回に多くの人を運ぶことができるためエコな乗り物といわれている。エコ志向の人はエコな乗り物である公共交通機関を多く利用するのではないかと考えた。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 26 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数

は 1198 票、回収率は 59.9%である。

3.2. 変数

変数は以下の質問の結果を用いた。変数のコードを反転させ、分析結果の数値が大きくなるほどエコ志向が強くなるように操作した。

Q21_r ごみを分別反転

1 そう思わない 2 あまりそう思わない 3 どちらともいえない 4 ややそう思う 5 そう思う

Q22_r ゴミの削減反転

1 まったく心がけていない 2 あまり心がけていない 3 ある程度心がけている

4 かなり心がけている

Q23_r 公共交通機関の利用度反転

1 まったく心がけていない 2 あまり心がけていない 3 ある程度心がけている

4 かなり心がけている

Q41 節水のためにしていること

Q41_1 節水_水道水をこまめに止めるダミー

0 こまめに止めない 1 こまめに止める

Q41_2 節水_洗濯に再利用ダミー

0 再利用しない 1 再利用する

Q41_3 節水_節水機能利用ダミー

0 利用しない 1 利用する

Q73 年齢

1 20代 2 30代 3 40代 4 50代 5 60代 6 70代以上

Q82 世帯収入

1 100万円未満 2 100万円～200万円未満

3 200万円～400万円未満 4 400万円～600万円未満

5 600万円～800万円未満 6 800万円～1000万円未満

7 1000万円～1500万円未満 8 1500万円以上

Q72 性別（男性ダミーを作成）

0 女性 1 男性

Q76 最終学歴（ダミー変数を作成）

中等学歴ダミー

0 「短大・高専」が最終学歴でない 1 「短大・高専」が最終学歴である

高等学歴ダミー

0 「大学・大学院」が最終学歴でない 1 「大学・大学院」が最終学歴である

なお、学歴ダミー変数で初等学歴ダミーは基準になるため重回帰分析に入れていない。以上の 11 個の変数で重回帰分析をかけて、独立変数と従属変数の関係を調べた。

4. 分析

以下は重回帰分析の結果である。

表1 公共交通機関の利用頻度に関する重回帰分析

	B	SE	ベータ
(定数)	1.441	0.205	
q22_r ごみの削減反転	0.22 **	0.053	0.147
q21_r ごみの分別反転	0.079	0.041	0.067
男性ダミー	-0.129 **	0.061	-0.07
q82 世帯収入	-0.069 **	0.019	-0.117
q73 年齢	0.107 **	0.021	0.187
q41_1 節水方法 水道水を止める	0.206 **	0.072	0.092
q41_2 節水方法 洗濯に再利用	-0.014	0.058	-0.008
q41_3 節水方法 節水機能の利用	0.023	0.07	0.01
中等学歴ダミー	0.141	0.092	0.051
高等学歴ダミー	0.281 **	0.069	0.142
調整済み決定係数			0.119 **
N			953

p<.01,p<.05

結果より調整済み決定係数は 0.119 であるため、従属変数の「公共交通機関利用の心がけ」の分散の内 11.9%が投入された独立変数によって説明出来ている。また、「男性ダミー」においては 5%水準、「Q22 ごみの削減」、「Q82 世帯収入」、「Q73 年齢」、「Q41_1 節水方法 水道水を止める」、「高学歴ダミー」においては 1%水準で有意な結果が得られた。B 値を見るとごみの削減反転($\beta=0.147$)、男性ダミー($\beta=-0.07$)、世帯収入($\beta=-0.117$)、年齢($\beta=0.187$)、水道水をこまめに止める($\beta=0.092$)、高学歴ダミー($\beta=0.142$)であった。つまりごみの削減を気にしている人、男性よりも女性、世帯収入が低い、年齢が高い、水道水をこまめに止めている人、高学歴の人ほど公共交通機関の利用頻度が高い。特に年齢の変数がもっとも影響が大きかった。

以上より分析をまとめると、エコ志向な行動の中でごみの削減を意識している、水道水をこまめに止めていると答えた方が外出時に公共交通機関を利用するように心がけているに影響を与えていることが分かった。また、ごみの分別を心がけている、風呂水を洗濯に再利用、節水機能の利用は公共交通機関を利用するように心がけているかには影響しなかった。

5. 考察

今回の調査よりエコ志向な行動を行っている人の中にも交通手段は意識しない人がいることが分かった。ここで影響した変数と影響しなかった変数の違いについて考察する。分析に影響を及

ぼした「ごみの削減」、「水道水をこまめに止める」は意識的にごみを減らそう、水はこまめに止めようなど考えないと出来ないことである。つまり意識的なエコ志向の行動は公共交通機関の利用に影響する。しかし、ごみの分別、風呂水を洗濯に再利用、節水機能の利用はエコ志向な行動のほうである。今回の調査では有意な結果は得られなかった。ここで高槻市在住の方々にとって今回有意な結果が得られなかった3つの変数、ごみの分別、風呂水の再利用、節水機能の利用は高槻市民にとっては実行して当たり前のことになっているのではないかと推測される。そのため今回の調査では有意な結果がえられなかったのではないかと考えられる。以上の考察より、エコを意識的に実行している人は交通手段もエコな乗り物である公共交通機関を意識して利用するというのが今回の調査の結果である。

6. 文献

- [1] 地球温暖化および地球環境問題に対する一般住民の意識
原田昌幸、久野覚
- [2] 地域公共交通の現状
国土交通省

第9章 商店街と地域の関わり

山下 慶洋

1. はじめに

近年商店街は廃れてきている印象がある。その要因の1つとして、郊外に大規模ショッピングセンターができているというものがある。さらに近年、商店街はもともと地域に根ざした地域に開かれた存在であるのに対し、家族という狭い枠の中に閉じこもり家族にしか事業を継承しないとといった近代家族がある。それが要因となり後継者難という問題を引き起こしている。中小企業庁による「全国商店街実態調査」においても、大きな問題として「大規模店に客足が取られている」、「経営者の高齢化等による後継者難」、「大規模出店ラッシュに押され気味」、「魅力ある店舗が少ない」、「商店街活動への事業者の参加意識が薄い」が占めている。これらの要因の対策として本研究では、商店街を活性化させるために地域との関わりを明確に検証したい。

2. 先行研究と仮説

商店街に関する地域愛着度の調査は様々な場所で行われてきた。立正大学心理学研究所「商店街に対する態度と購買意識による類型別にみた地域愛着」という論文をみると、因子分析を行い、第1因子には、「昔の地元の話ができる」「自分の家族について知っていてくれる」などの6項目が高い因子負荷量を示した。そこで、これらの項目は自分を中心とした人間関係を期待する内容を表すと解釈され、「人間関係機能期待」と命名された。この結果から、商店街を利用する人物の特徴を明確にするために次の仮説をたてる。

【仮説1】地域愛着度が高い人ほど商店街を利用することが多い。

【仮説2】地域に長く住んでいる人ほど商店街を利用することが多い。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成26年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1198票、回収率は59.9%である。

3.2. 変数

今回使用した変数は以下のとおりである。

Q19「高槻市愛着度」

「1. 感じない」「2. あまり感じない」「3. やや感じる」「4. 感じる」の4段階であるが、後述する重回帰

分析に備えて予め変数を反転しておいた。つまり、重回帰分析においては、分析結果の数値が大きくなるほど愛着度が高い傾向を示すように調整した。

Q29「商店街買い物頻度」

「1. いくことがない」「2. 年に1~2日」「3. 月に1~2日」「4. 週に1~2日」「5. 週に3~4日」「6. ほぼ毎日」の6段階であるが、「高槻市愛着度」と同様の理由により変数を反転しておいた。これによって、分析結果の数値が大きくなるほど頻度が多くなるといえる。

Q72「性別」

「1. 男性」「2. 女性」の2段階である。ただし、これらは名義尺度であるため、重回帰分析で用いる際には、「1. 男性」「0. 女性」の「男性ダミー」として投入した。

Q73「年齢」

「1. 20代」「2. 30代」「3. 40代」「4. 50代」「5. 60代」「6. 70代以上」の6段階である。

Q76「最終学歴」

「1. 中学」「2. 高校」「3. 専門学校」「4. 短大・高専」「5. 大学・大学院」「6. わからない」の6段階であるが、「性別」と同様の理由によりダミー変数にリコードして投入した。作成したダミー変数は、「1, 2, 3, =初等教育ダミー」「4=中等教育ダミー」「5=高等教育ダミー」である。

Q74「職業」

「1. 常時雇用の勤め人」「2. 臨時雇用、パート、アルバイト」「3. 自営業主」「4. 自営業の家族従業者」「5. 経営者、役員」「6. 家事専業」「7. 学生」「8. 無職」「9. その他」の9段階である。作成したダミー変数は、「1,5=常勤の勤めダミー」「3, 4=自営業者ダミー」「2, 6, 7, 8, 9=その他職業ダミー」である。

Q78「市内居住年数」

「1. 1年未満」「2. 1年以上3年未満」「3. 3年以上5年未満」「4. 5年以上10年未満」「5. 10年以上20年未満」「6. 20年以上30年未満」「7. 30年以上40年未満」「8. 40年以上50年未満」「9. 50年以上」の9段階である。

Q82「世帯収入」

「1. 100万円未満」「2. 100万円~200万円未満」「3. 200万円~400万円未満」「4. 400万円~600万円未満」「5. 600万円~800万円未満」「6. 800万円~1000万円未満」「7. 1000万円~1500万円未満」「8. 1500万以上」の8段階である。

4. 分析

まず、クロス表を用いて Q29「商店街の買い物頻度」と Q19「高槻市愛着度」との関連性を検討する。

表1 商店街や繁華街に行く頻度 と q19 高槻市に愛着を感じるか のクロス表

		q19 高槻市に愛着を感じるか				合計	
		感じる	やや感じる	あまり感じない	感じない		
q29 商店街 や繁華街に 行く頻度	ほぼ毎日	度数	31	29	5	3	68
		割合	45.6%	42.6%	7.4%	4.4%	100.0%
	週に3～4日	度数	35	54	9	1	99
		割合	35.4%	54.5%	9.1%	1.0%	100.0%
	週に1～2日	度数	151	135	34	2	322
		割合	46.9%	41.9%	10.6%	.6%	100.0%
	月に1～2日	度数	160	204	48	7	419
		割合	38.2%	48.7%	11.5%	1.7%	100.0%
	年に1～2日	度数	36	62	22	2	122
		割合	29.5%	50.8%	18.0%	1.6%	100.0%
	行くことがない	度数	13	27	8	4	52
		割合	25.0%	51.9%	15.4%	7.7%	100.0%
	合計	度数	426	511	126	19	1082
		割合	39.4%	47.2%	11.6%	1.8%	100.0%

$\chi^2(df=15, N=1082)=38.438^*$, CramerV=0.109*

**p<.01, *p<.05

検定の結果、カイ2乗の値は38.438でCramerのVの値は0.109であった。また有意確率は1%水準で有意であった。

表1から商店街にほぼ毎日と回答している人の中で、45.6%が高槻市に愛着を感じており、やや感じている人も合わせると87.8%にも及び、商店街を利用している8割7分以上の人が高槻に愛着を感じていることがわかった。

逆に、商店街に行くことがない人の7.7%が高槻市に愛着を感じていなく、これは他の商店街を利用している層と比較して、大きな割合を占めているといえる。以上のことから、商店街買い物頻度と高槻市愛着度の間に関連性があるのが証明された。従って、【仮説1】地域愛着度が高い人ほど商店街を利用することが多い。が支持された。

次にQ29「商店街の買い物頻度」とQ78「市内居住年数」との関連性をクロス表にて検討する。

検定の結果、カイ2乗の値は39.094でCramerのVの値は0.085であった。また有意確率は有意ではなかった。

10年以上住んでいる度数が900以上あり、30年以上40年未満、40年以上50年未満の人の割合が高く、層ごとの傾向の違いはあまり見られない。従って、有意ではなく意味を持たない結果だったので、【仮説2】地域に長く住んでいる人ほど商店街を利用することが多い。は支持されなかった。

続いて、Q19「高槻市愛着度」と Q78「市内居住年数」を含む複数の変数で、Q29「商店街の買い物頻度」をどの程度説明できるのかを検証するため、これらの変数を用いて重回帰分析を行った。従属変数には「商店街の買い物頻度反転」を投入し、独立変数には、「高槻市愛着度反転」「男性ダミー」「中等教育ダミー」「高等教育ダミー」「常勤の勤め人ダミー」「その他職業ダミー」「年齢」「市内居住年数」「世帯収入」を投入して説明力を分析した。

表2 「商店街買い物頻度の反転」の重回帰

	B	標準誤差	ベータ
(定数)	2.339**	0.268	
q19_r 高槻市愛着反転	0.164*	0.051	0.106
男性ダミー	-0.297**	0.083	-0.129
中等教育ダミー	0.164	0.124	0.046
高等教育ダミー	0.186*	0.092	0.075
常勤の勤め人ダミー	0.140	0.156	0.056
その他職業ダミー	0.188	0.146	0.080
q73 年齢	0.165**	0.031	0.231
q78 市内居住年数	-0.056*	0.024	-0.092
q82 世帯収入	0.041	0.027	0.055
調整決定係数	0.060**		
N	925		

**p<.01,*p<.05

分析の結果、調整済み決定係数が 0.060 であることから、従属変数「商店街買い物頻度反転」の分散の 6.0%が、投入した独立変数によって説明できる。また、1%水準で有意な変数は「男性ダミー」、「年齢」の計 2 つであり、5%水準で有意な変数は、「高槻市愛着反転」、「高等教育ダミー」、「市内居住年数」の 3 つである。

「高槻市愛着反転」が有意であることから、高槻市に愛着を感じている人ほど商店街で買い物をすることが増えると言える。

「男性ダミー」が有意であり、負であることから、男性より女性の方が商店街を利用する頻度が高い傾向であると言える。

「年齢」が有意であることから、年齢が高くなるほど、商店街で買い物をする頻度が高くなると言える。

「高等教育ダミー」が有意であることから、初等教育に比べて、高等教育の人は商店街買い物頻度が高いといえる。

「市内居住年数」が有意であり、負であることから市内居住年数が低いほど商店街で買い物をする頻

度が多いといえる。

この中でも「年齢」のベータ値 ($\beta=0.231$) が特に高いことから、年齢の変化が商店街利用に及ぼす影響は、投入した独立変数の中で特に高いものであると判断できる。この重回帰分析によって【仮説1】地域愛着度が高い人ほど商店街を利用することが多い。が支持された。一方、「市内居住年数」に関しては、低い方が商店街で買い物する頻度が多いと読み取れたので、【仮説2】地域に長く住んでいる人ほど商店街を利用することが多い。とはいえないことが分かった。

5. 考察

以上の分析結果から、「商店街買い物頻度」と「高槻市愛着度」・「市内居住年数」との間には関連性があり、仮説1は支持される形になったが、仮説2は本分析で仮説とは反対の形になった。

一つ目の分析はクロス表を用いて、各変数間との関連性を分析した。この結果から、商店街で買い物をしている人は高槻市に愛着を感じている人が多いことがわかった。次の重回帰分析では、変数ごとの説明力を検証した。この結果から、年齢が商店街買い物頻度に与える影響が特に大きいことがわかった。重回帰分析の結果から、商店街で買い物する人の特徴を想定すると、女性の高齢者であり、そんなに市内居住年数は高くなく、高等教育を受けており、高槻市に愛着を感じている人物ではないかと推測できる。

仮説1の地域愛着度が高い人ほど商店街を利用することが多いは、そのとおりの分析結果を出せたが、仮説2の地域に長く住んでいる人ほど商店街を利用することが多いとは反対になる分析結果が出てしまった。クロス表では今回郵送調査の対象者からの返答で市内居住年数に偏りがあるためあまり有意ではないことが推測できたが、重回帰分析での説明では仮説とは反対の説明になったため新しい発見であった。市内に長く住むにつれ、商店街で買い物する頻度は減少する結論である。このことは住んでいる場所等の他の要因の影響もあるかもしれないと考えられる。

6. 文献

- [1] 中小企業庁、2006、「全国商店街実態調査」
- [2] 高橋 尚也ほか、2014、「商店街に対する態度と購買意識による類型別にみた地域愛着」

第10章 継続したコミュニティ構築による 社会問題改善の提案

小谷 勇人

1. はじめに

「孤独死」という言葉をご存じだろうか。「孤独死」はだれにも気づかれずに一人きりで死ぬことである。この問題は今、日本の社会において大きな問題となっており、その件数は2008年から2012年まで年々増え続けている。この問題を改善するために行政、自治体は様々な動きを行っている。例として、兵庫県神戸市では、厚生労働省による「孤独死防止対策」として、包括的支援事業等費を組み込むことにより、地域の元気な高齢者がグループでの活動を通じて仲間同士で見守りあう体制を作ることを支援している。また、高槻市においても第2回高槻市社会福祉審議会高齢者福祉専門分科会の議論の中で「孤独死」を考えなければならないという意見が出ている。また、若者においても、「ニート」「ひきこもり」の存在は大きな社会問題となっている。厚生労働省の報告書や大阪一丸の就労モデル検討会議の結果を見ると、これらの2つの問題における共通点はコミュニティを構築できていないという点であるということがわかる。

コミュニティ構築のために必要な要件としては様々なものが挙げられるが、前提として、なにも行動をしなければコミュニティの構築をすることなどできない。しかし、そもそもコミュニティ構築に興味を示さない者がいるため、継続したコミュニティの構築が厳しくなっているのが現状である。故に、高知県の地域コミュニティの再構築に関する検討委員会が行った調査においても、そのような意見が出ている。

また、そういったコミュニティに参加したくても、仕事依存症候群（ワーカーホリック）となってしまう、時間の多くを仕事にかけ、仕事から抜け出せずにいる人が多数いる。しかし、そこから抜け出そうにも、収入を得るためには働くことが必要となるため抜け出すことは難しいのが現状である。

そこで本研究では、趣味に使う時間を仕事から抜け出した時間と捉え、収入と趣味に使う時間の関係性を紐解くことで、継続したコミュニティ構築を行っていくための障壁となっているこれらの点を明確にする。また、こういった社会問題に対するため、継続したコミュニティ構築への提案を行いたい。

2. 仮説

第1章で述べたとおり、コミュニティ構築は社会問題改善への第一歩となる。今回全ての要因を紐解くことは難しいため、収入と趣味に視点を置いて分析を行う。

仮説：家庭の収入の多い人ほど、生活の中で趣味にかける時間が多くなる。

3. データと変数

3.1. データ

分析においては、「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」（平成 26 年度市民意識調査）のデータを用いた。調査母集団は高槻市民で、対象者は、無作為に選ばれた 20 歳以上 85 歳未満の男女 2000 人である。有効回収数は 1198 件であり、回収率は 59.9%である。

3.2. 変数

この分析で用いた変数は以下の通りである。

[従属変数]

Q56：自由時間

1. 仕事
2. 友人とのつきあい
3. 買い物
4. 運動
5. 趣味
6. 勉強
7. 睡眠
8. その他

今回の研究では、趣味=1、その他の回答=0 とし、使用する。

[独立変数]

Q72：性別

1. 男性
2. 女性

ここで、「男性=1」「女性=0」にリコードし、「男性ダミー」を作成する。

Q73：年齢

1. 20代
2. 30代
3. 40代
4. 50代
5. 60代
6. 70代以上

Q74：職業

ここで、各項目をリコードし、1.常時雇用の勤め人、5.経営者・役員を「常勤の勤め人ダミー」、3.自営業者、4.自営業者の家族従業者を「自営業者ダミー」、2.臨時雇用・パート・アルバイト、6.家事専業、7.学生、8.無職、9.その他を「その他職業ダミー」とする。

Q76：最終学歴

ここで、各項目をリコードし、1.中学（旧小学校など）、2.高校（または旧制中学など）、3.専門学校を「初等学歴ダミー」、4.短大・高専（5年制）を「中等学歴ダミー」、5.大学（旧高専）・大学院を「高等学歴ダミー」とする。

Q82：世帯収入

1. 100万円未満
2. 100万円～200万円
3. 200万円～400万円
4. 400万円～600万円
5. 600万円～800万円
6. 800万円～1000万円
7. 1000万円～1500万円
8. 1500万円以上

4. 分析

収入と趣味の関係性を紐解くためロジスティック回帰分析を行った。使用した変数は3.2変数で示した通りである。

	B	標準誤差	Exp(B)
男性ダミー	-0.08	0.15	0.92
年齢	0.03	0.05	1.03
中等学歴ダミー	-0.34	0.21	0.71
高等学歴ダミー	0.26	0.16	1.30
世帯収入	0.09 *	0.05	1.10
常勤の勤め人_ダミー	-0.51 **	0.18	0.60
自営業_ダミー	-0.25	0.26	0.78
定数	0.05	0.33	1.05
Negelkerke R ²	0.03		
model X ² (df=7)	20.49 **		
N=970			

** p<.01, * p<.05

モデル係数を見ると、有意確率が1%水準であり、有意であったため、今回のモデルは母集団においてもあてはまるモデルであると考えられる。

この表を見ると、常勤の勤め人ダミーにおいて1%水準で有意であることがわかる。この変数においてExp(B)を見ると、0.60である。つまり、職業が常勤の人はその他職業の人と比べて自由時間を趣味に使う確率が0.6倍となることがわかる。つまり、その他職業の人と比べて、常勤の勤め人は約40%、自由時間を趣味に使う確率が減少する。

また、5%水準で有意な世帯収入のExp(B)を見ると、1.10である。つまり、世帯収入が1項目上昇するごとに自由時間を趣味に使う割合が1.10倍になることがわかる。他の変数においては残念ながら有意な結果が得られなかった。

5. 考察

分析の結果、「家庭の収入の多い人ほど、生活の中で趣味にかける時間が多くなる。」という仮説は分析の結果支持されることがわかる。故に、家庭の収入が多い人ほど、生活の中で趣味にかける時間が多いたということがわかった。また、職業が常勤になると、自由時間を趣味に使う割合が減少することがわかった。

上記の2つの結果から収入が多ければ趣味に時間をかけることができるが、多くの収入を得るためには多くの収入を得ることができる常勤として働く必要があり、常勤として働

くためには趣味にかける時間を仕事へと費やさなければならないという一種のジレンマのようなものに陥っているのではないかという結論を導き出した。

上記のジレンマを改善するために、行政は仕事時間、収入、自由時間。このトライアングルのどこかを分断するための政策を打つ必要がある。これらを分断することで、継続したコミュニティ構成に間接的な手助けをすることができるのではないだろうか。今回はあくまでも「趣味を通じて」という一例を挙げたが、他にも「子育て」や「地域イベント」などもコミュニティ構築のための目的となるだろう。どうしても、コミュニティ構築のためには直接的なコミュニティ構成の場を与え、そこに参加させる方向にいきがちであるが、そこに至るまでのバックグラウンドを改善するところを具体的に考えなければ結局できたコミュニティも一時的なものとなってしまう。こういった点を考慮することが継続したコミュニティ作りへの第一歩となるのではないだろうか。

6. 文献

- [1] 高槻市 平成 24 年度第 2 回高槻市社会福祉審議会 高齢者福祉専門分科会
(<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/kakuka/kenkouf/chouju/shingikai/koureisayahukusisenmonbunkakai/1344306518997.html>)
- [2] 内閣府 平成 26 年度版高齢社会白書(概要版) 6 高齢者の生活環境
(http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/gaiyou/s1_2_6.html)
- [3] 文部科学省 教育関係 NPO 法人の活動事例 Vol 2-3
(http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/npo/npo-vol2/1316489.htm)
- [4] 「地域コミュニティの再構築」 検討委員会 報告書
(<http://www.city.kochi.kochi.jp/uploaded/attachment/9903.pdf>)
- [5] バルクマーケティングリサーチサービス vol. 18 休日に関する調査
(<http://www.city.kochi.kochi.jp/uploaded/attachment/9903.pdf>)
- [6] 大阪一丸 レイブル応援プロジェクト REPORT 03
(<http://www.osaka1gan.jp/neet-conference/01/report03.html>)
- [7] 高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議（「孤独死」ゼロを目指して）—報告書
—(http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/03/dl/h0328-8a_0001.pdf#search='%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%8B%E3%83%86%E3%82%A3%E6%A7%8B%E7%AF%89+%E5%AD%A4%E7%8B%AC%E6%AD%BB')
- [8] 厚生労働省 労働統計要覧 E 賃金
(http://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyr_e.html)

第 11 章 人生設計の意識について

松山 奈央

1. はじめに

現在、日本は少子高齢化社会である。このまま少子高齢化が続けば、2060年（平成72年）には2.5人に1人が65歳以上になることが見込まれている。そんな中、先日発表された年金の財政検証の結果データでは、現在30代以下の世代の人が定年を迎える頃、基礎年金だけで暮らすのは難しいという結果が出た。また、若者の雇用については、完全失業率や非正規雇用の労働者比率は高まっている。以上のようなデータを踏まえ、これからの日本社会を考えた時、極めて不安要素が多いのではないだろうか。これは、個人の将来について考えた時も同じであろう。

内務省が発表した「2014年度版子ども・若者白書」の中に、諸外国の若者の意識に関する調査（平成25年度）がある。その中で、日本の若者は諸外国に比べ、自分の将来に明るい希望を持つことができているという事実が発覚した。また、NHK首都圏スペシャル「プロジェクト2030」のアンケートによると、将来に不安を感じている若者が82.2%もいた。

様々な調査の結果、若いうちから人生設計をしっかり立て、日々の生活を過ごしていくことが大切なのではないだろうか。そこで本研究では、高槻市民を対象として、これからの人生設計についてどのような意識を持っているのかについて調査を行った。

2. 仮説

人生設計を立てる際、重要になり得る項目は何なのか。進学、就職、結婚など様々な項目があげられるが、中でも「収入」に注目した。NHK首都圏スペシャル「プロジェクト2030第1シーズン」のアンケートによると、「将来への不安点は何ですか」という質問に対し、「生活費・収入」と答えた若者が83.4%に上った。そこで、人生設計において重要な項目は「収入」であると考えた。

また、所得の少ない人は、今の生活を送ることに必死で、将来について考える機会が少なく、一方所得の多い人は、将来の自分の生活のことを見据え、現在の生活を送っているのではないかと考えた。したがって、「収入の多い人ほど、人生設計を立てる意識が高い」という仮説を立てた。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成26年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効

回収数は 1198 票、回収率は 59.9%である。

3.2. 変数

今回使用した変数を以下に表記する。

q60 若者は将来に備えるべきか

1: と思う 2: ややと思う 3: どちらともいえない 4: あまりそう思わない 5: そう思わない

分析の際は、分析結果の数値が高くなるほど、将来に備える意識が強いことを表すように操作した。

q72 性別

1: 男性 2: 女性

ここで、男性=1、女性=0 としたダミー変数「男性ダミー」を作成した。

q73 年齢

1: 20代 2: 30代 3: 40代 4: 50代 5: 60代 6: 70代以上

q74 職業

1: 常時雇用の勤め人 2: 臨時雇用、パート、アルバイト 3: 自営業主 4: 自営業の家族従業員
5: 経営者、役員 6: 家事専業 7: 学生 8: 無職

1: 常時雇用の勤め人 5: 経営者、役員 を「1: 常時勤め人」に、3: 自営業主 4: 自営業の家族従業員を「2: 自営業」に、2: 臨時雇用、パート、アルバイト 6: 家事専業 7: 学生 8: 無職を「3: その他の職業」に変更し、3 カテゴリで分析を行った。さらに「常勤の勤め人ダミー」「自営業者ダミー」を作成した。

q76 最終学歴

1: 中学(旧小学校など) を「1: 初等学歴」に、2: 高校(または旧中学校など) 3: 専門学校 4: 短大・高専(5年生) を「2: 中等学歴」に、5: 大学(旧高専・大学院) を「3: 高等学歴」にし、さらに「中等学歴ダミー」「高等学歴ダミー」を作成した。

Q82 世代収入

1: 100万円未満 2: 100万円～200万円未満 3: 200万円～400万円未満
4: 400万円～600万円未満 5: 600万円～800万円未満 6: 800万円～1000万円未満
7: 1000万円～1500万円未満 8: 1500万円以上

以上の変数を使用し、重回帰分析を行った。

4. 分析

表1:若者は経済的な準備をしておくべきかを従属変数にした重回帰分析

	B	標準偏差	β
(定数)	3.914 **	.150	
男性ダミー	-.160 **	.060	-.096
中等学歴ダミー	.144	.099	.085
高等学歴ダミー	.246 *	.110	.136
q82世帯収入	.041 *	.019	.077
q73年齢	.054 **	.020	.103
常勤の勤め人ダミー	.031	.072	.018
自営業者ダミー	-.111	.110	-.033
調整済決定係数	.017 **		
N	970		

**p<01*, p<05

表1は、q60「一般的に言って、若い人は、退職後の生活や今後の生活に備えて、貯蓄や私的な年金保険などの経済的な準備をするべきだと思いますか。」を従属変数にした重回帰分析の結果である。従属変数である「若者は経済的な準備をしておくべきか」の分散のうち、2%が投入した独立変数で説明できる(調整済 R²=0.017)。分散分析でF検定を行うと、1%水準で有意である。つまり、決定係数の値は統計的に有意であり、母集団においても「若者は経済的な準備をしておくべきか」の予測に役立つモデルである。

表1の結果から、従属変数に有意に影響を与えている変数は、「男性ダミー」、「高等学歴ダミー」「世帯収入」、「年齢」の4つであった。このうち、有意水準1%で有意な変数は「男性ダミー」「年齢」の2つで、5%水準で有意な変数は「高等学歴ダミー」と「世帯収入」であった。

他の変数の影響をコントロールすると、女性に比べて男性の方が「若者は経済的な準備をしておくべき」という意識が低くなる。他の変数の影響を除去すると、初等学歴の人に比べて高等学歴の人の方が「若者は経済的な準備をしておくべき」という意識が高くなる。他の変数の影響が一定であれば、世帯収入が多くなるほど、「若者は経済的な準備をしておくべき」という意識が高くなる。他の変数の影響を除去すると、年齢が高くなるほど、「若者は経済的な準備をしておくべき」という意識が高くなる。ベータの値を見ると、「若者は経済的な準備をしておくべきか」という意識に対し、最も重要な要因は「年齢」(β=.103)であり、以下「男性ダミー」(β=-.096)、「中等学歴ダミー」(β=.085)、「世帯収入」(β=-.077)と続いている。

5. 考察

表1より、高槻市民で「若者は経済的な準備をしておくべきだ」という意識を持ってい

る人は、男性より「女性」、「学歴が高い人」「年齢が高い人」、「世帯収入が多い人」であった。仮説では、「収入の多い人ほど、人生設計を立てる意識が高い」と考えており、「世帯収入」は重要な要因の1つではあるが、「性別」、「年齢」の方が重要な要因であることがわかった。今回の結果により、収入だけが人生設計を立てようという意識を持つ要因ではなかった。

今後、「人生設計を立てる意識」とその要因にはどのようなものがあるのか、さらに詳しく調べる必要があると考える。

6. 文献

- [1] 内閣府「平成26年度版高齢社会白書」
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/s1_1_1.html
- [2] 厚生労働省「国民年金及び厚生年金に係る財政の現況及び見通し-平成26年財政検証結果-」
http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/nenkin/nenkin/zaisei-kensyo/dl/h26_kensyo.pdf
- [3] 内閣府「2014 年度版子ども・若者白書」
http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/tokushu_02.html
- [4] NHK 首都圏スペシャル「プロジェクト 2030」関東甲信越に暮らす18歳～34歳の 2000 人アンケート
<http://www.nhk.or.jp/shutoken/2030/series1/result/index.html>
- [5] 厚生労働省「国民生活基礎調査の概要」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/dl/03.pdf>

第 12 章 生活満足度と運動頻度の関連性

福山 将平

1. はじめに

近年、運動不足が重大な社会問題の 1 つとして挙げられている。運動不足は、肥満や精神疾患、老化促進、免疫力低下などの様々な症状を引き起こし、生活習慣病の原因となる。それらは、日常生活において支障をきたすことになる。しかし、積極的に運動をすることによりこれらの症状の予防になり、また運動を通しての人とのコミュニケーションにより、心の健康を促進することになる。運動をすることで、生活習慣病の予防となり、人はより充実した生活を送ることができるのではないかと考え、これを検証する。

2. 先行研究と仮説

平成 25 年 1 月に文部科学省が実施した体力・スポーツに関する世論調査によると、運動不足を感じるという人の割合は年々増えており、平成 6 年 10 月調査では 60.1%であったが、平成 25 年 1 月調査においては 74.6%にまで上がっている。実に 4 人中 3 人が運動不足を感じている。年々運動不足と感じる人が増えているなか、運動頻度が生活満足度にどのような影響を与えるのか調査したいと考え、以下の仮説を立てた・

仮説 1 「運動頻度が高い人ほど生活満足度は高くなる」

3. データと変数

3.1. データ

データについては、平成 26 年度に行った「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は 20 歳以上 85 歳未満の高槻市民、計画標本サイズは 2000 である。有効回収数は 1198 票、回収率は 59.9%となった。

3.2. 変数

変数は以下の質問の回答を用いた。変数を以下のように数値が大きくなるほど満足度や頻度は高く、印象はよくなることを表すように操作した。

Q1. 生活満足度反転

1 不満 2 やや不満 3 どちらともいえない 4 やや満足 5 満足

Q3. 居住地域の暮らしやすさ反転

1 非常に悪い 2 やや悪い 3 どちらともいえない 4 まあよい 5 非常によい

Q5. 地域の役に立ちたいか反転

- 1 そう思わない 2 あまりそう思わない 3 どちらともいえない 4 ややそう思う 5 そう思う

Q7. 地域の自然の量反転

- 1 少ないと思う 2 やや少ないと思う 3 普通だと思う 4 やや多いと思う 5 多いと思う

Q9. 近所での世間話の頻度反転

- 1 ほとんどしない 2 月に1~2日 3 週に1~2日 4 週に3~4日 5 ほぼ毎日

Q10. 近所づきあいを増やしたいか反転

- 1 減らした 2 少し減らしたい 3 どちらともいえない 4 少し増やしたい 5 増やしたい

Q52. 時間的ゆとりを感じるか反転

- 1 まったく感じない 2 あまり感じない 3 どちらともいえない 4 やや感じる 5 よく感じる

Q57. どれくらいの頻度で運動をしているか反転

- 1 運動はしない 2 年に1~2日 3 月に1~2日 4 週に1~2日 5 週に3~4日 6 ほぼ毎日

Q73. 性別

- 1 男性 2 女性

ここで男性=1 女性=0 として男性ダミーを作成した。

Q76. 最終学歴

- 1 中学(旧小学校など) 2 高校(または旧制中学など) 3 専門学校 4 短大・高専(5年生) 5 大学(旧高専)・大学院 6 わからない

ここで6 わからないを欠損値処理し、中学(旧小学校など)=0 高校(または旧制中学など)=0 専門学校=0 短大・高専(5年生)=1 大学(旧高専)・大学院=0 として中等教育ダミーを作成した。

また中学(旧小学校など)=0 高校(または旧制中学など)=0 専門学校=0 短大・高専(5年生)=0 大学(旧高専)・大学院=1 として高等教育ダミーを作成した。

Q82. 世帯収入

- 1 100万円未満 2 100万円~200万円未満 3 200万円~400万円未満 4 400万円~600万円未満 5 600万円~800万円未満 6 800万円~1000万円未満 7 1000万円~1500万円未満 8 1500万円以上 9 わからない

4. 分析

今回の分析ではクロス表、重回帰分析と相関係数を用いた。仮説に対して、q1「生活満

満足」と q57「どれくらいの頻度で運動をしているか」に関するクロス集計を行った。(表1)

表1 q57 どれくらいの頻度で運動をしているかと q1 生活満足度 のクロス表

		q1 生活満足度					合計	
		満足	やや満足	ちらともいえな	やや不満	不満		
q57 運動頻度	運動はしなし	度数	42	74	32	20	12	180
		行%	23.30%	41.10%	17.80%	11.10%	6.70%	100.00%
	年に1~2回	度数	25	81	25	11	5	147
		行%	17.00%	55.10%	17.00%	7.50%	3.40%	100.00%
	月に1~2回	度数	42	121	49	37	6	255
		行%	16.50%	47.50%	19.20%	14.50%	2.40%	100.00%
	週に1~2回	度数	23	69	28	17	7	144
		行%	16.00%	47.90%	19.40%	11.80%	4.90%	100.00%
	週に3~4回	度数	7	28	21	10	3	69
		行%	10.10%	40.60%	30.40%	14.50%	4.30%	100.00%
	ほぼ毎日	度数	28	121	107	43	20	319
		行%	8.80%	37.90%	33.50%	13.50%	6.30%	100.00%
	合計	度数	167	494	262	138	53	1114
		行%	15.00%	44.30%	23.50%	12.40%	4.80%	100.00%

$\chi^2(df=20, N=1114)=61.372^{**}, **p<.01$

表1より χ^2 検定結果の有意確率が1%水準で有意である。年に1~2回運動する人は生活満足度の高い人の割合が高く、生活満足度の低い人の割合が低い結果となった。また、月に1~2回から週に1~2回運動をする人の満足度は上昇し、それ以上運動する人の満足度は減少傾向にある。度数で見れば、満足度が高いのは月に1~2回が1番高く、続いてほぼ毎日が高かった。かなり運動をする人は生活満足度が低くなるという結果になった。

続いて、従属変数をq1「生活満足度」として、q73「年齢」、q82「世帯収入」、q72「性別(男性ダミー)」、q76「最終学歴(中等教育ダミー)」、q76「最終学歴(高等教育ダミー)」、q52「時間的ゆとりを感じるか反転」、q57「どれくらいの頻度で運動をしているか反転」を説明変数として重回帰分析をした。

表2 「q1_r 生活満足度反転」の重回帰分析

	B	標準偏差	β
(定数)	1.879	.149	
q73 年齢	.026	.023	.040
q82 世帯収入	.169 **	.021	.251
男性ダミー	-.262 **	.066	-.125
中等教育ダミー	.098	.104	.030
高等教育ダミー	.319 **	.077	.141
q52_r 時間的ゆとり反転	.246 **	.030	.268
q57_r どれくらいの頻度で運動をしているか反転	.050 **	.019	.087
調整済決定係数	.174 **		
N	951		

** $p<.01$, * $p<.05$

調整済み決定係数は 0.174 である。これは、従属変数である「生活満足度」の分散のうち 17.4%は投入した独立変数で説明されていることを示している、分散分析F検定を行うと有意確率1%水準で有意である。つまり、母集団においても「生活満足度」の予測に役立つモデルであると言える。q82「世帯収入」、q72「性別(男性ダミー)」、q76「最終学歴(高等教育ダミー)」、q52「時間的ゆとり反転」、q57「どれくらいの頻度で運動をしているか反転」においては有意確率が1%水準で有意である。その中で標準化係数(β)を見てみると最も値が大きいのは「時間的ゆとりを感じるか」($\beta=0.268$)で、次に「世帯収入」($\beta=0.251$)である。よって「生活満足度」に最も影響があるのは、「時間的ゆとりを感じるか」と「世帯収入」である。一方、「どれくらいの頻度で運動をしているか」は $\beta=0.087$ で生活満足度への影響は比較的少ないといえる。

次に運動頻度を高める要素は何かを分析する。従属変数を q57「どれくらいの頻度で運動をしているか反転」として、q82「世帯収入」、q72「性別(男性ダミー)」、q76「最終学歴(中等教育ダミー)」、q76「最終学歴(高等教育ダミー)」、q73「年齢」、q52「時間的ゆとりを感じるか反転」、q1「生活満足度反転」、q3「居住地域の暮らしやすさ反転」、q5「地域の役に立ちたいか反転」、q7「地域の自然の量反転」、q10「近所づきあいを増やしたいか反転」を説明変数として重回帰分析をした。

表3 「q57_r どれくらいの頻度で運動をしているか反転」の重回帰分析

	B	標準偏差	β
(定数)	.448	.403	
q82 世帯収入	-.024	.038	-.020
男性ダミー	.262 *	.118	.072
中等教育ダミー	-.317	.180	-.057
高等教育ダミー	.284 *	.135	.072
q73 年齢	.217 **	.041	.191
q52_r 時間的ゆとり反転	.294 **	.054	.185
q1_r 生活満足度反転	.124 *	.062	.071
q3_r 居住地域の暮らしやすさ反転	-.087	.085	-.035
q5_r 地域の役に立ちたいか反転	.167 **	.061	.094
q7_r 地域の自然の量反転	.083	.045	.056
q9_r 近所での世間話の頻度反転	.184 **	.049	.126
q10_r 近所づきあいを増やしたいか反転	-.103	.084	-.04
調整済み決定係数	.189 **		
N	931		

** $p<.01$, * $p<.05$

調整済み決定係数は 0.189 である。これは、従属変数である「運動頻度」の分散のうち 18.9%は投入した独立変数で説明されていることを示している。分散分析F検定を行うと有意確率1%水準で有意である。つまり、母集団においても「運動頻度」の予測に役立つモデルであると言える。q73「年齢」、q52「時間的ゆとり反転」、q5「地域の役に立ちたいか反転」、q9「近所での世間話の頻度反転」においては有意確率が1%水準で有意である。また、

q72「性別(男性ダミー)」、q76「最終学歴(高等教育ダミー)」、q1「生活満足度反転」においては有意確率が5%水準で有意である。その中で標準化係数(β)を見てみると最も値が大きいのは「年齢」($\beta=0.191$)で、次に「時間的ゆとりを感じるか」($\beta=0.185$)である。よって「運動頻度」に最も影響があるのは、「年齢」と「時間的ゆとりを感じるか」である。つまり、年齢が高いほど、また時間的ゆとりを感じる人ほど運動を良く行っていることが分かる。

5. 考察

以上より、運動頻度が高いほど生活満足度は高くなるが、運動頻度による生活満足度への影響はあまりない。そして、生活満足に影響を与える要因としては、「時間的ゆとり」と「世帯収入」である。また、運動頻度に影響を与える要因としては、「年齢」と「時間的ゆとり」である。また、「近所での世間話の頻度」や「地域の役に立ちたいか」の要素も運動頻度を上げる要因の一つであるつまり、つまり、運動頻度が高ければ生活満足度があがるのではなく、年齢が高ければ高いほど時間的ゆとりができ、その結果運動頻度が上がり、また、地域に積極的に関わる人ほど運動頻度が上がるということがいえる。

6. 参考文献

- [1] 文部科学省：体力・スポーツに関する世論調査(平成25年1月調査)
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/sports/1338692.htm

第 13 章 高槻市民が感じるゴミ排出への関心度

東久保 亮成

1. はじめに

現在のゴミ処理の現状をどれだけの人が認識しているのだろうか。環境省で発表している平成 24 年度の一般廃棄物処理実態調査によると、日本全体でのごみのリサイクル率(リサイクル可能なものすべてが対象)は 20.4%となっている。これは諸外国と比べても高い数値であり、特に鉄、紙、ペットボトル、アルミ・スチール缶、ガラス瓶、プラスチックは世界でもトップクラスのリサイクル率をほこっている。

しかし、同時に問題点も存在している。それは、年間 1 人あたりのゴミの焼却量(つまり排出量のこと)は日本がワースト 1 位である点だ。それに伴い、焼却時に発生するダイオキシン排出量もワースト 1 位という結果も示している。この環境問題について、本分析ではリサイクルを行う技術は立証されつつもごみの排出量をできるだけ少なくするといった国民 1 人 1 人の環境への配慮が欠落しているのではないかと考えている。そこで今回の調査で、高槻市民が自分の住んでいる地域でのゴミ処理についてどのように考えているかを分析し、検討することにした。

2. 仮説

2.1. 先行研究

高槻市・産業環境部・資源循環推進課が発表した「高槻市ごみ減量等推進員活動の手引きー平成 25 年度版」をみると、企業や工場(事業系ゴミ)、家庭(家庭系ゴミ)から排出されている廃棄量の減少数には差があることがうかがえる。

まず、ゴミの量がピーク時であった平成 13 年と最も少ない平成 24 年の全てのゴミ処理量を比較すると、11 年間で 66,480 トンの削減に成功している。しかし、処理量の内訳を見ると完全に行えていないことが言える。事業系ゴミの場合、平成 13 年には約 90,000 トンある廃棄物が平成 24 年には約 40,000 トンと半分以下に削減されている。一方、家庭系ゴミの場合、平成 13 年度には同じく約 90,000 トン近くある廃棄物が平成 24 年度には約 70,000 トンしか削減されていない。つまり、削減できた 66,480 トンのうち約 75%が事業系ゴミ、約 25%が家庭系ゴミという結果になり、家庭から排出しているゴミの削減は企業や工場から排出しているゴミと比べ、あまり改善していないことがわかる。

2.2. 仮説

そこで今回の調査では、ゴミ処理の削減があまり進んでいない家庭系ゴミがどのような思考、活動を示すことで改善されるかについて調べたいと思う。そこで、「高槻市在住の人々が果たしてゴミ削減についてどれほど考えているのか」という点を「地域活動、清掃活動をどれだけ行っているか」、「ゴミを出すことに責任を持って行動しているか」というテーマに置き換えて、「地域にどれだけ貢献

したいと考えているか」という基準で仮説を立てるものとする。

仮説 1: 地域活動・清掃活動を活発に行っている人ほど、ゴミを出さないように考えている

仮説 2: ゴミを出すことに責任を持って行動している人ほど、ゴミを出さないように考えている

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 26 年度に実施した「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者として、高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女であり、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1198 票、回収率は 59.9%である。

3.2. 変数

変数は以下のものを使用して分析を行うものとする。いずれの変数も数値が高くなるほど、「ゴミの分別・削減意識」が高まることを表すよう、以下のように操作している。(○～はこの後どの分析に使用する変数なのかを表しているものとする)

○従属変数

・Q5_r 地域の役に立ちたいか反転

1: そう思わない 2: 思わない 3: どちらともいえない 4: ややそう思う 5: そう思う

○階層変数

・Q72 性別

1: 男性 2: 女性

・Q73 年齢

1: 20代 2: 30代 3: 40代 4: 50代 5: 60代 6: 70代以上

○仮説1

・Q13_r 地域活動参加頻度反転

1: 参加したことはない 2: 過去に参加したことはあるが現在は参加していない

3: あまり参加している 4: ときどき参加している 5: よく参加している

・Q14_r 清掃活動参加頻度反転

1: 参加していない 2: 1~2回 3: 3~4回 4: 5回以上

○仮説2

・Q21_r ゴミを分別するか反転

1: そう思わない 2: あまりそう思わない 3: どちらともいえない

4: ややそう思う 5: そう思う

・Q22_r ゴミをださないように心がけているか反転

1: まったく心がけていない 2: あまり心がけていない 3: ある程度心がけている

4: かなり心がけている

4. 分析

まず今回の分析において、仮説を証明するために「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」との関連をクロス表で分析するものとする。

表1 Q73 年齢 と Q5_r 地域の役に立ちたいか反転 のクロス表

		Q5_r 地域の役に立ちたいか反転						
		そう思わない	思わない	どちらともいえない	ややそう思う	そう思う	合計	
Q73 年齢	20代	度数	8	14	28	25	7	82
			9.8%	17.1%	34.1%	30.5%	8.5%	100.0%
	30代	度数	6	15	58	58	16	153
			3.9%	9.8%	37.9%	37.9%	10.5%	100.0%
	40代	度数	12	19	65	84	25	205
			5.9%	9.3%	31.7%	41.0%	12.2%	100.0%
	50代	度数	3	25	39	67	34	168
		1.8%	14.9%	23.2%	39.9%	20.2%	100.0%	
	60代	度数	9	32	67	107	59	274
			3.3%	11.7%	24.5%	39.1%	21.5%	100.0%
	70代以上	度数	6	22	95	105	59	287
			2.1%	7.7%	33.1%	36.6%	20.6%	100.0%
	合計	度数	44	127	352	446	200	1169
			3.8%	10.9%	30.1%	38.2%	17.1%	100.0%

$\chi^2(df=20, N=1169)=51.830^{**}$, CramerV=0.105

**p<.01, *p<.05

上記の表1は「Q73 年齢」と「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」のクロス表である。この結果より、各年代とも「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」の質問に対して年代が上がるにつれて若干の変化はあるが概ね「どちらともいえない」、「ややそう思う」に回答が集中し、過半数が回答しているため年代ごとに考え方が違うとあまり考えられないものとなった。

表2 q72 性別 と q5_r 地域の役に立ちたいか反転 のクロス表

		q5_r 地域の役に立ちたいか反転						
		そう思わない	思わない	どちらともいえない	ややそう思う	そう思う	合計	
q72 性別	男性	度数	21	53	139	196	97	506
			4.2%	10.5%	27.5%	38.7%	19.2%	100.0%
	女性	度数	23	75	213	252	106	669
			3.4%	11.2%	31.8%	37.7%	15.8%	100.0%
	合計	度数	44	128	352	448	203	1175
			3.7%	10.9%	30.0%	38.1%	17.3%	100.0%

$\chi^2(df=4, N=1175)=4.299$, CramerV=0.06

**p<.01, *p<.05

次の表2は「Q73 年齢」と「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」のクロス表である。この結果より、

表 1 と同様に「どちらともいえない」、「ややそう思う」に回答が集中し、性別によって回答の傾向が変わることも特にないので男女の差で考え方が違うとは言えないものとなった。

表3 q13_r 地域活動参加頻度反転とq5_r 地域の役に立ちたいか反転のクロス表

		q5_r 地域の役に立ちたいか反転					合計
		そう思わない	思わない	どちらともいえない	ややそう思う	そう思う	
q13_r 地域活動参加頻度反転	参加したことはない	度数 32 9.5%	58 17.3%	114 33.9%	98 29.2%	34 10.1%	336 100.0%
	過去に参加したことはあるが現在は参加していない	度数 4 1.9%	28 13.1%	75 35.2%	73 34.3%	33 15.5%	213 100.0%
	あまり参加していない	度数 4 1.6%	28 10.9%	85 32.9%	110 42.6%	31 12.0%	258 100.0%
	ときどき参加している	度数 3 1.1%	12 4.4%	67 24.4%	129 46.9%	64 23.3%	275 100.0%
	よく参加している	度数 0 0.0%	1 1.2%	11 12.9%	36 42.4%	37 43.5%	85 100.0%
	合計	度数 43 3.7%	127 10.9%	352 30.2%	446 38.2%	199 17.1%	1167 100.0%

$\chi^2(df=16, N=1167)=162.788^{**}$, CramerV=0.187

**p<.01, *p<.05

次の表 3 は「Q13_r 地域活動参加頻度反転」と「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」のクロス表である。この結果より、地域の役に立ちたいと思っている人ほど地域活動を積極的に参加している割合が高いことがわかる。しかし、「Q13_r 地域活動参加頻度」だけ見ると「参加したことはない」、「過去に参加したことがあるが現在は参加していない」、「あまり参加していない」と消極的な回答が過半数を占めるなど一概に考えていることと実際に行動に移す段階の間で差が発生しているということがわかる。

表4 q14_r 清掃活動参加頻度反転 と q5_r 地域の役に立ちたいか反転 のクロス表

		q5_r 地域の役に立ちたいか反転					合計
		そう思わない	思わない	どちらともいえない	ややそう思う	そう思う	
q14_r 清掃活動参加頻度反転	参加していない	度数 39 6.4%	85 14.0%	197 32.5%	210 34.6%	76 12.5%	607 100.0%
	1~2回	度数 3 0.8%	33 8.3%	116 29.2%	172 43.3%	73 18.4%	397 100.0%
	3~4回	度数 0 0.0%	5 5.3%	21 22.1%	40 42.1%	29 30.5%	95 100.0%
	5回以上	度数 1 1.6%	4 6.3%	17 27.0%	21 33.3%	20 31.7%	63 100.0%
	合計	度数 43 3.7%	127 10.9%	351 30.2%	443 38.1%	198 17.0%	1162 100.0%

$\chi^2(df=12, N=1162)=72.323^{**}$, CramerV=0.144

**p<.01, *p<.05

次の表 4 は「Q14_r 清掃活動参加頻度反転」と「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」のクロス表である。この結果より、「Q14_r 清掃活動参加頻度反転」をみると「参加していない」と回答した人が過半数を超えているが、「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」では「ややそう思う」と回答している人が34.6%と多いことがわかる。このことから、地域の役に立ちたいと思うことは実際に清掃活動

に参加することに対して関連がないように思える。

表5 q21_r ゴミを分別するか反転とq5_r 地域の役に立ちたいか反転のクロス表

		q5_r 地域の役に立ちたいか反転					合計
		そう思わない	思わない	どちらともいえない	ややそう思う	そう思う	
q21_r ゴミを分別するか反転	そう思わない	度数 4	3	3	0	1	11
		36.4%	27.3%	27.3%	0.0%	9.1%	100.0%
	あまりそう思わない	度数 3	5	5	9	8	30
		10.0%	16.7%	16.7%	30.0%	26.7%	100.0%
	どちらともいえない	度数 5	9	27	15	6	62
		8.1%	14.5%	43.5%	24.2%	9.7%	100.0%
	ややそう思う	度数 15	43	145	153	34	390
		3.8%	11.0%	37.2%	39.2%	8.7%	100.0%
	そう思う	度数 16	67	175	269	152	679
		2.4%	9.9%	25.8%	39.6%	22.4%	100.0%
合計	度数 43	127	355	446	201	1172	
		3.7%	10.8%	30.3%	38.1%	17.2%	100.0%

$\chi^2(df=16, N=1172)=102.472^{**}$, CramerV=0.148

**p<.01, *p<.05

次の表 5 は「Q21_r ゴミを分別するか反転」と「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」のクロス表である。この結果より、「Q21_r ゴミを分別するか反転」は「そう思う」で679票と過半数を占め、「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」も「そう思う」、「ややそう思う」で過半数の割合を超えたことから「ゴミを出さない＝地域の役に立っていると感じている」と考えている人が多いので、地域に役に立ちたいと思っている人ほどゴミを分別していることがわかる。

表6 q22_r ゴミをださないように心がけをしているか反転とq5_r 地域の役に立ちたいか反転のクロス表

		q5_r 地域の役に立ちたいか反転					合計
		そう思わない	思わない	どちらともいえない	ややそう思う	そう思う	
q22_r ゴミをださないように心がけをしているか反転	まったく心がけていない	度数 10	5	5	1	1	22
		45.5%	22.7%	22.7%	4.5%	4.5%	100.0%
	あまり心がけていない	度数 7	41	74	85	27	234
		3.0%	17.5%	31.6%	36.3%	11.5%	100.0%
	ある程度心がけている	度数 21	75	244	315	123	778
		2.7%	9.6%	31.4%	40.5%	15.8%	100.0%
	かなり心がけている	度数 5	6	31	45	50	137
		3.6%	4.4%	22.6%	32.8%	36.5%	100.0%
合計	度数 43	127	354	446	201	1171	
		3.7%	10.8%	30.2%	38.1%	17.2%	100.0%

$\chi^2(df=12, N=1171)=175.076^{**}$, CramerV=0.223

**p<.01, *p<.05

次の表 6 は「Q22_r ゴミをださないように心がけをしているか反転」と「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」のクロス表である。この結果より、「Q22_r ゴミをださないように心がけをしているか反転」を見ると、「ある程度心がけている」と回答した人で過半数を占め、「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」も「そう思う」、「ややそう思う」で過半数の割合を超えたことから「ゴミを出さない＝地域の役に

立っていると感じている」と考えている人が多いことがわかる。

表7 Q5_r地域の役に立ちたいか反転の重回帰分析

	B	SE	β
Q72 性別	-0.930	0.057	0.045
Q73 年齢	-0.020	0.020	-0.031
Q13_r 地域活動参加 頻度反転	0.203 **	0.026	0.261
Q14_r 清掃活動参加 頻度反転	0.066	0.041	0.054
Q21_r ゴミを分別する か反転	0.131 **	0.040	0.102
Q22_r ゴミをださない ように心がけを しているか反転	0.212 **	0.053	0.128
調整済み決定係数	0.141 **		
N	1129		

**p<.01,*p<.05

次の表 7 は「Q5_r 地域の役に立ちたいか反転」を従属変数として他の独立変数との関連を調べた重回帰分析である。この結果より、「Q72 性別」と「Q73 年齢」そして、「Q14_r 清掃活動参加頻度反転」に有意性が認められなかったので上記の表 1 と表 2、表 4 の結果は今回の分析では関連がないという裏付けとなった。逆に有意性が認められた「Q13_r 地域活動参加頻度反転」、「Q21_r ゴミを分別するか反転」、「Q22_r ゴミをださないように心がけをしているか反転」は地域の役に立ちたいと考えられるものとなる。その中で、特に「Q13_r 地域活動参加頻度反転」の β 値が 0.261 という点から強い影響力が高いことがあることがわかり、地域活動に対して役に立ちたいことと参加頻度は同意義のように思われる。

5. 考察

以上の分析の結果、表 1、表 2、表 7 から地域の役に立ちたいという思想は年代や性別が違うことで考え方に大きな差は発生しないことがわかった。これを前提に各仮説の考察を行いたいと思う。

まず仮説 1 は、「Q13_r 地域活動参加頻度反転」に対してのみ有意性が認められる結果となった。これは高槻市が第 3 者機関に清掃活動の大部分を任せているため、一般市民が清掃活動に参加するという概念、つまり「清掃活動＝地域活動」と考えない人が増えてきているのではないかと考えられる。なので、地域活動という 1 つの大きな枠組みでは Q13_r、Q14_r とも同じ質問であるはずなのが見ると違った思想に転換している例だと本分析では結論づける。よって、今回の

「高槻市在住の人々が果たしてゴミ削減についてどれほど考えているのか」という点において、市民自身がゴミ削減に対して強い関心が認められないと考えられるので仮説 1 は認められないものとする。

次に仮説 2 は、Q21_r、Q22_rともに有意性が認められる結果となった。これは、ゴミを出す責任という点において、分別、排出量の削減を気にしていることがうかがえる。そして、表 7 の分析結果に記載したように「Q13_r 地域活動参加頻度反転」は特に強い影響力があることが証明されたので、仮説 2 はゴミ削減に関して考えていると認められるものと判断できる。

総評として、地域活動のために役に立つという考えは実行に移すまでに個人差があり、清掃活動といった具体的な活動を行う人は少数派であることがわかった。この現状は、家庭系ゴミを削減するためには実際のゴミの現状を知ることが大きな近道だと本分析は考えているため、今後の高槻市が検討しないといけない問題点だと思われる。なので、ゴミの分別、排出量を気にする傾向にある高槻市民が自主的に清掃しないといけない区域を作るといった市策を行うことでさらにゴミ削減に関心を持たれることだと考えられる。

6. 文献

- [1] 環境省 廃棄物処理技術情報 廃棄物処理の現状と科学研究

http://www.env.go.jp/recycle/waste_tech/ippan/h24/index.html

- [2] 環境創造株式会社

<http://ecocreative.jp/environment/article03.html>

- [3] 高槻市ごみ減量等推進員活動の手引きー平成 25 年度版

<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/86/tebiki.pdf>

第 14 章 高槻市のバスと地域満足度の関係性

樋之内 祥馬

1. はじめに

高槻市には電車やバスなど公共交通機関が多く発達している。しかし、公共交通機関が発達することによって生活は便利になるが、その地域での生活に満足しているとは言いきれないだろう。しかし、近年では様々な地域で公営バスが運行されており、その多くは経営利益が赤字だと言われている中で、高槻市営バスの経営利益は黒字だと言われている。その理由として、バス利用者数が多いこと、バス利用時の満足度だと考える。そこで、地域での生活における公共交通機関による「便利」になることで地域への「満足」には関係性があると考える。つまり、地域への満足度と公営バスへの満足度には密接な関係性があると予測される。

以上より本研究では、高槻市民にアンケート調査を行った結果に基づいて、高槻市民の市営バスへの満足度は、高槻市の地域への満足度にどのような影響を与えているのか分析、検証するとともに、高槻市営バスの運行状況の問題点及び改善案を提起する。

2. 仮説

先行研究として細見晶歩の分析によると、高槻市でのバスの運行本数と生活満足度には密接な関係があるが、バス満足度と生活満足度ではあまり関係性がないとされている。しかし、生活とは収入や自家用自動車の有無など、バス利用以外の要因も関わっている。そのため「生活満足度」ではなく「地域満足度」とすることで、高槻市営バス利用が及ぼす影響についてより正確に知ることができるだろう。

高槻市では生活の一部にバスの乗車が大きく関わっているため、バス満足度と居住地域満足度には関係性があると考える。そこで、「バス満足度が高い人ほど、地域満足度は高い」という仮説を立てた。検証方法は、まず居住地域の暮らしやすさとバス利用満足度についてクロス表を作成し、次に地域満足度を従属変数、バス満足度及びその他の変数を独立変数として重回帰分析を行う。

3. データと変数

3.1. データ

分析に関しては、「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」のデータを用いる。調査対象は高槻市在住の無作為に選ばれた 20 歳以上 85 歳未満の男女で、調査対象者数 2000 人、有効回収数は 1198 件、回収率は 59.9%である。

3.2. 変数

今回用いた変数は、Q3「居住地域の暮らしやすさ」、Q12-b「交通や施設の満足度 バス」、Q72

「性別」、Q73「年齢」、Q74「職業」、Q76「最終学歴」、Q82「世帯収入」である。

(従属変数)

Q3「居住地域の暮らしやすさ」

本分析では地域満足度を測る指標として Q3「居住地域の暮らしやすさ」を用いる。分析では変数のコードを下の通り反転操作している。

1.非常に悪い 2.やや悪い 3.どちらともいえない 4.まあよい 5.非常によい

つまり、分析結果の数値が大きくなるほど居住地満足度が高いことを表している。

(独立変数)

Q12-b「交通や施設の満足度 バス」

本分析では地域満足度を測る指標として Q12-b「交通や施設の満足度 バス」を用いる。分析では変数のコードを下の通り反転操作している。

1.不満 2.やや不満 3.どちらともいえない 4.やや満足 5.満足

つまり、分析結果の数値が大きくなるほど居住地満足度が高いことを表している。

Q72「性別」

1.男性 2.女性

男性=1、女性=0 にリコードし「男性ダミー」を作成する。

Q73「年齢」

1.20代 2.30代 3.40代 4.50代 5.60代 6.70代以上

Q74「職業」

それぞれ各項目をリコードしダミーを作成する。1.常時雇用の勤め人 5.経営者・役員を「常勤の勤め人ダミー」、3.自営業者 4.自営業者の家族従業員を「自営業者ダミー」、2.臨時雇用・パート・アルバイト 6.家事専業 7.学生 8.無職 9.その他を「その他職業ダミー」とする。

Q76「最終学歴」

それぞれ各項目をリコードしダミーを作成する。1.中学(旧小学校など) 2.高校(または旧性中学校など) 3.専門学校を「初等学歴ダミー」、4.短大・高専(5年制)を「中等学歴ダミー」、大学院を「高等学歴ダミー」とする。

Q82「世帯収入」

1.100万円未満 2.100万～200万円 3.200万～400万円 4.400万～600万円 5.600万～800万円 6.800万～1000万円 7.1000万～1500万円 8.1500万円以上

以上の変数を使用してクロス表および重回帰分析を行う。

4. 分析

表1: q3 居住地域の暮らしやすさ と q12_b 交通や施設の満足度 バス のクロス表

		q12_b 交通や施設の満足度 バス					合計	
		満足	やや満足	いえない	やや不満	不満		
q3 居住地域の暮らしやすさ	非常によい	度数	72	33	20	8	3	136
		割合	52.9%	24.3%	14.7%	5.9%	2.2%	100.0%
	まあよい	度数	215	279	163	102	41	800
		割合	26.9%	34.9%	20.4%	12.8%	5.1%	100.0%
	どちらともいえない	度数	18	51	34	40	21	164
		割合	11.0%	31.1%	20.7%	24.4%	12.8%	100.0%
	やや悪い	度数	7	12	7	18	11	55
		割合	12.7%	21.8%	12.7%	32.7%	20.0%	100.0%
	非常に悪い	度数	1	3	2	5	5	16
		割合	6.3%	18.8%	12.5%	31.3%	31.3%	100.0%
	合計	度数	313	378	226	173	81	1171
		割合	26.7%	32.3%	19.3%	14.8%	6.9%	100.0%

N=1171 X²=146.013** cramerV=.177**

**p<.01

表1の結果より、バスに満足している人の52.9%が居住地域に非常に暮らしやすいと感じていることが分かる。また、バスに満足・やや満足している人を合わせると、居住地域の生活の暮らしやすさに非常によいと感じている人の77.2%もの多くの高槻市民がバスに満足していることが分かる。

次に重回帰分析によって、各変数ごとの居住地域の暮らしやすさへの影響を見る。

表2:「居住地域の暮らしやすさ」の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	2.842	.115	
q12_b 交通や施設の満足度 バス	.192 **	.018	.318
q73 年齢	.003	.017	.007
男性ダミー	-.039	.050	-.027
中等教育ダミー	.105	.073	.047
高等教育ダミー	.175 **	.054	.109
常勤の勤め人ダミー	.026	.059	.017
自営業者ダミー	-.056	.089	-.019
q82 世帯収入	.065 **	.016	.136
調整済決定係数	.129		
N	1001		

**p<.01

表2の結果を見ると、「交通や施設の満足度 バス」「高等教育ダミー」「世帯収入」が有意確率1%水準で有意となるため「居住地域の暮らしやすさ」、つまり「地域満足度」に影響を及ぼしていることが分かる。「交通や施設の満足度 バス」は正の影響を及ぼしているため、バス満足度が高いほど地域満足度は高くなることが読み取れる。また「高等教育ダミー」「世帯収入」はともに正の影響を及ぼしているため、それぞれ高等学歴の人の方が初等学歴の人に比べて地域満足度は高く、また、収入が高い人ほど地域満足度が高くなることが読み取れる。次に、バス満足度のβ(0.318)を見ると数値が極めて大きいことが分かる。「学歴」「収入」よりも「バス満足度」が「地域満足度」に

かなり大きな影響を及ぼしていることが分かる。つまり、高槻市ではバス乗車に満足している住民ほど、居住地域に満足していることがわかる。また最終学歴が大学卒業の人のほうが中学・高校・専門学校などを卒業した人より地域満足度が高いという結果が出た。さらに世帯収入が高ければ高いほど、地域満足度が高いという結果が出た。

5. 考察

表1の結果より、「居住地域の暮らしやすさ」が非常によいと回答した市民の7割以上がバス利用に満足しており、高槻市でのバス利用満足度と居住地域満足度には、非常に密接な関係があることが分かる。また、バス満足度に不満を持っている人は、居住地域満足度にも非常に悪いと感じている人が多く見られた。これは、高槻市内をさらに細分化した地域の一部で、未だにバスの運行本数が少ないなどのバス利用への不満があると考えられるため、バス運行状況を見直すことでさらなる経営利益を見越すことができる。

表2の結果より、バス満足度と地域満足度の有意な関係性から、本研究の仮説である「バス満足度が高い人ほど、地域満足度は高い」ことが立証される。また最終学歴と世帯収入の二つにもなんらかの因果関係があるのではないかと考えられる。最終学歴、世帯収入ともにバス利用者の属性を決定づける要因となるため、利用客の属性ごとに調査を行うことで新たな問題を提起することができ、その改善を行うことでより高い経営利益を見込めるだろう。

6. 文献

- [1] 「高槻市ホームページ」 <http://www.city.takatsuki.osaka.jp/>
- [2] 「国土交通省」 <http://www.mlit.go.jp/>
- [3] 「地域公共交通の現状-国土交通省」 <http://www.tb.mlit.go.jp/kinki/kansai/program/02.pdf>
- [4] 布目ゆきお(2013)「公共交通対策特別委員会の視察より(その3)・・・市営バス維持の高槻市」
<http://www.nunomeyukio.jp/blog/archives/3075>
- [5] 細見晶歩「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」
http://www.kansai-u.ac.jp/Fc_inf/img/ug/shikaku/pdf/25.pdf

第 15 章 通学時間・通勤時間と生活満足度の関係性

佐々木 百合

1. はじめに

現在の日本では、過労死や過労自殺が問題となっている。厚生労働省の調査である「脳・心臓疾患の労災補償状況」の平成 25 年度の調査を見てみると脳・心臓疾患になった人のうち「業務上疾患」と認定され労災保険給付を決定した支給決定件数は、306 件(44.8%)で、うち死亡した人の支給決定件数は、133 件 (45.9%) である。平成 24 年度は全体で 338 件 (45.6%)であったため、減少しているものの、うちの死亡数は平成 24 年度の 123 件(45.2%)から 133 件 (45.9%) と上昇している。このことから、日本人には過労による深刻な問題が存在し、それによる精神や身体での疲れが大きな問題になっていると考えられる。この論文では、労働などにより、大きな疲れがあるところに通学・通勤時間までもが長時間であると疲れが増し、精神的にも身体的にも疲れが残ってしまうのではないかと考えることから始まる。

2. 仮説

新見、中尾、川瀬、佐々木、川波、筒井、堀江(2007)によると、長期間にわたる 1 日 5 時間以下の睡眠は循環器系や交感神経系に影響を与え、虚血性心疾患の発症率を増加させるということが述べられている。また、「労働者の時間外労働時間・通勤時間と睡眠時間の関係」の調査で通勤時間が睡眠時間に影響を与えるということが明らかになった。

このことから、過酷な労働を終えた後、通学・通勤時間が長いとプライベートの時間が減り、身体を休めることが出来ないことから生活満足度に大きく影響を与えるとともに、過労死にもつながっていくのではないかと考える。そのため、通学時間・通勤時間と生活満足度の関係性を調べることに意義があると考えられる。今回、高槻市と関西大学のアンケート調査により、人々と通勤・通学時間の関係性について調べ、人々が心身ともに健康でいられるために必要な対策について調べる。

この論文の仮説は、通学時間、通勤時間が短いほど生活満足度は高くなるである。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 26 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収率は 1198 票、回収率は 59.9%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。

【従属変数】

q1.生活満足度反転

値が大きいほど生活満足度が上がるようにコードの反転をしている。反転後のコードは、「1, 不満 2, やや不満, 3, どちらともいえない 4, やや満足 5, 満足」である。

【独立変数】

q27. 通勤・通学時間の片道所要時間

「1, 30分未満 2, 30以上1時間未満 3, 1時間以上1時間半未満 4, 1時間半以上2時間未満 5, 2時間以上」

q28. 通勤手段ダミー

公共交通機関以外(自転車、徒歩、バイク、自家用車、その他)のコードを「0」と置き、公共交通機関(バス、電車)のコードを「1」になるように操作している。

Q29. 男性ダミー

男性のコードを1、女性のコードを0と置いている。

Q73. 年齢

「1, 20代 2, 30代 3, 40代 4, 50代 5, 60代 6, 70代」

Q76. 高等教育ダミー

初等教育ダミー、中等教育ダミー、高等教育ダミー変数を作成した。初等教育ダミーは、1, 中学(旧小学校など)、2, 高校(または旧制中学など)、3, 専門学校を「1」と置き、それ以外を「0」と置いた。

中等教育ダミーは、短大・高専(5年制)と答えた人を「1」と置き、それ以外を「0」と置いた。

高等教育ダミーは、5, 大学・大学院を卒業した人を1と置き、それ以外を「0」と置いた。

Q74. 常勤の勤め人ダミー

常勤の勤め人ダミー、自営業ダミー、その他職業ダミー変数を作成した。常勤の勤め人ダミーは、1, 常時雇用の勤め人 5, 経営者、役員を「1」と置き、その他の回答を「0」と置いた。自営業ダミーは、3, 自営業種 4, 自営業の家族従業者を「1」と置き、その他を「0」と置いた。その他職業ダミーは、2, 臨時雇用、パート、アルバイト 6, 家事専業 7, 学生 8, 無職 9, その他を「1」と置き、その他を「0」と置いた。

Q82. 世帯収入

「1, 100万円未満 2, 100万円～200万円未満 3, 200万円～400万円未満 4, 400万円～600万円未満 5, 600万円～800万円未満 6, 800万円～1000万円未満 7, 1000万円未満～1500万円未満 8, 1500万円以上」

4. 分析

4.1. 生活満足度に関係する値

まず、「通学・通勤時間」と「生活満足度」の関係性を調べる為に重回帰分析をする。「生活満足度」が従属変数で、生活満足度に関わってくる変数と考えられる「通学・通勤の片道所要時間」、「通勤手段」、「性別」、「年齢」、「高等教育ダミー」、「常勤の勤め人ダミー」、「自営業者ダミー」、「世帯収入」を独立変数にした。

表1 「生活満足度」の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	2.36	.20	
q27 通学・通勤の片道所要時間	.05	.06	.04
通勤手段ダミー	.14	.11	.07
男性ダミー	-.17	.10	-.08
q73 年齢	-.02	.04	-.02
高等教育ダミー	.29 **	.11	.13
中等教育ダミー	.09	.14	.03
常勤の勤め人ダミー	.15 **	.11	.07
自営業者ダミー	.31	.19	.08
q82 世帯収入	.19	.03	.27
調整済決定係数	.12		
N	512		

** $p < .01$, * $p < .05$

表1の調整済み決定係数 (R^2) は0.12である。分散分析でF検定を行うと、1%水準の有意であることが分かり、表を読み取る意義があると考えられる。個々の独立変数を見ていくと、有意確率が5%水準で有意である変数は、高等教育ダミー ($\beta = 0.13$) と世帯収入 ($\beta = 0.27$) である。この分析の仮説である「通学時間・通勤時間」や「通勤手段」は「生活満足度」に有意な影響を及ぼしていなかった。

高等教育は、1%水準で有意である。また $B = 0.29$ であり、符号がプラスであることから、基準となる初等教育の人に比べて、大学・大学院卒業の人は生活満足度が高いという結果が出ている。また、世帯収入も1%水準で有意である。 $B = 0.190$ でこちらも符号が正の値である。つまり、世帯収入が高いほど生活満足度が高くなるのがこの表で示されている。

4.2. 分析対象者を50代以下に限定

次に、収入と学歴、生活満足度との関係を調べるために、年齢を働く世代である50代以下に限定した。表2の調整済み決定係数 ($R^2 = 0.15$) は、表1の係数 ($R^2 = 0.12$) よりも高くなっている。分散分析でF検定を行うと、1%水準の有意であることがわかる。独立変数の各変数は、性別、学歴、世帯収入が1%水準の有意であった。表1では、有意でなかった性別(男性ダミー)が1%水準で有意と

なった。性別(男性ダミー)は、 $B=-.320$ で符号がマイナスとなっていることから、女性と比較して男性の方が、生活満足度が低いという結果になった。つまり、収入や学歴は生活満足度に大きく影響しているが、働く男性は女性よりも生活の満足を得られないことが分かった。

表2 「生活満足度」の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	2.46	.22	
q27 通学・通勤の片道所要時間	.06	.07	.05
通勤手段ダミー	.12	.13	.05
男性ダミー	-.32 **	.11	-.15
q73 年齢	-.08	.05	-.07
高等教育ダミー	.39 **	.12	.18
中等教育ダミー	.04	.15	.02
常勤の勤め人ダミー	.23	.13	.10
自営業者ダミー	.38	.22	.09
q82 世帯収入	.20 **	.03	.28
調整済決定係数	.15		
N	413		

** $p < .01$, * $p < .05$

上の分析結果を基に、ここで、女性よりも男性の方が働いており、労働の疲れなどから生活満足度が軽減しているのではないかと仮説を立てた。

4.3. 女性と男性の労働の割合

4.2.で浮上した仮説を検証するべく、クロス表分析により、男性と女性の労働の割合を比較した。

表3 男性と女性の職業の割合

												合計
性別		常時雇用の勤め人	臨時雇用、パート、アルバイト	自営業主	自営業の家族従業者	経営者、役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答	
		男性	212	43	33	8	15	0	6	170	17	
		41.7%	8.4%	6.5%	1.6%	2.9%	0.0%	1.2%	33.4%	3.3%	1.0%	100.0%
女性	124	147	18	18	5	212	6	121	14	11	676	
		18.3%	21.7%	2.7%	2.7%	.7%	31.4%	.9%	17.9%	2.1%	1.6%	100.0%
合計	336	190	51	27	20	213	12	293	31	26	1199	
		28.0%	15.8%	4.3%	2.3%	1.7%	17.8%	1.0%	24.4%	2.6%	2.2%	100.0%

$\chi^2(df=18, N=1198)=595.926^{**}$, CramerV=0.499**, ** $p < .00$

表3から分かる通り、常時雇用の勤め人の男性の割合は212人(41.7%)、女性124人(18.3%)で、臨時雇用、パート、アルバイトは男性43人(8.4%)、女性147人(21.7%)である。また自営業種(男性33人(6.5%)、女性18人(2.7%)、経営者、役員(男性15人(2.9%)、女性5人(0.7%)、な

ど働く人材として男性の方が圧倒的に割合が高い。女性の方が多いのは、自営業の家族従業者（男性8人(1.6%)、女性18人(2.7%)、家事専業(男性0人(0.0%)、女性212人(31.4%)である。

この割合からみて、男性の方が女性よりも管理職などの責任がある任務についていることが分かる。

5. 考察

結果として、「通学時間、通勤時間が短いほど生活満足度は高くなる」という仮説は有意ではなかったが、他の有意である変数(性別、学歴、世帯収入)を使って検証することができた。まず、仮説を立てたきっかけとして、厳しい労働などの中、通学時間、通勤時間が長いほど疲労がたまり、生活満足度が減少し、過労死などの原因になるのではないかと考えたからである。その中で、生活満足度に有意となる変数は、学歴、世帯収入となった。つまり、大学・大学院卒であればあるほど生活満足度が高くなり、世帯収入が高ければ高いほど生活満足度が高くなるという結果になった。年齢を50代以下に限定すると、性別も有意となり、女性よりも男性の方が生活満足度が低いことが分かった。

川西、マオア(2006)によると、雇用者全体に占める女性の割合は1956年の31.7%から2000年の40.0%へと上昇した。しかし、その相当数はパートタイマーでの雇用であったため、正社員よりもパートタイムで雇用される女性の数が多かったと述べている。つまり、正社員や管理職など責任のある任務をこなし、重労働を行うのは男性の方が比率が高い。そのため、働く年代の男性は、労働の疲労などから生活満足度が上がらないと考えることができる。実際にこの調査の欠課をクロス表(表3)にしてみると、女性よりも男性の方が働いていることが分かる。収入や学歴は、生活満足度に大きく影響しているが、働く世代の男性たちが収入を得るために労働をし、生活満足度を減少させることになっている。生活満足度が減ると同時にそれらが過労死や自殺につながっていくことにも関係してくると考えられる。高い学歴を持ち、社会に出て高収入を得ると生活満足度が上がることがデータとして表れているが、その収入を得るための労働の過酷さに、生活満足度を減少させているデータもまた同時に出ている。厚生労働省の平成25年度の調査「脳・心臓疾患と精神障害の労災補償状況」によると、正規職員・従業員、契約謝金、派遣労働者、パート・アルバイト、その他(特別加入者等)の合計133人のうち、支給決定件数は286件、うち死亡件数は124件である。つまり、正規職員・従業員はより労働による過労が高いということが分かる。今回、調査した中でも男性の正規雇用率は女性よりも遥かに高い。そのことから50代以下の男性の方が、生活満足度が低いという結果になったと考えることが出来る。

高学歴で収入があることが幸せと感じる人は多いだろう。しかし、その収入を得るために身を削ってまで稼ぐことに集中してしまうと、逆に生活満足度が下がってしまうことが明らかになった。収入を得ることは確かに生活満足度に大きく影響していることが示されているが、そのために過酷な労働をしてしまい、生活満足度を減少してしまえば、生活満足度を得ていることには実際ならない。だからこそ、生活の様々な面でバランスを保ち、例えば「収入を得る」ことだけに熱中しないように心がけるべきである。

まとめとして、今回の仮説は有意にはならなかった。最初は、過酷な労働の後、授業の後、疲れているのに通学・通勤時間が長いほど家で休む時間が短く、生活満足度が減るのではないかと考えていた。働く世代の男性の生活満足度が下がるという点から労働と生活満足度の関係性は確認できたものの、直接的に通学・通勤時間と生活満足度の関係性を明らかにすることはできなかった。なぜこの変数と生活満足度が有意でなかったのかと考察したところ、労働と通勤時間は別のものであると考える。通学・通勤時間はある意味、労働から解放され、落ち着くことができる時間なのかもしれない。通学・通勤時間は労働の延長線上の苦痛な時間と考えていた認識が少しずれていたのだと考える。労働と通勤・通学時間を分離して考えるとこの結果は妥当であると考えられる。

6. 文献

- [1] 新見、川瀬、佐々木、筒井、堀江、中尾、川浪(2007). 56.労働者の時間外労働時間・通勤時間と睡眠時間の関係(第24回産業医科大学学会総会 学術講演会記録)
- [2] 彼西宏祐、ロス・マオア(2006). 労働社会学入門. 東京. 関山製本社
- [3] 厚生労働省(2013). 平成24年度「脳・心臓疾患と精神障害の労災補償状況を公表:精神障害の労災認定件数が1,409件(前年度比152件増)と過去最多.
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000049293.html> RETRIEVED December, 24 2014 FROM.

第 16 章 地域観光におけるゆるキャラの影響力

中田 千裕

1. はじめに

近年、ブームもありゆるキャラがその知名度を徐々に上げている。ゆるキャラとは、「ゆるいマスコットキャラクター」の略で、地域おこしや名産品の紹介等の地域全般の PR、企業・団体のマスコットキャラクターのことである。本来、ゆるキャラを用いる理由は外部の人々への観光 PR であり、高槻市の公式マスコットキャラクターである「はにたん」は 2014 年にはゆるキャラグランプリご当地部門で 20 位に入るなど全国での知名度も徐々に上げている。しかし、ゆるキャラの魅力は高槻市民と外部の人々との繋がりを誘発しているのだろうか。

2. 仮説

クロス・マーケティングが実施したインターネットの市場調査による「ゆるキャラに関する調査」では、「くまモン」や「ふなっしー」の認知度が 9 割を超えた。ゆるキャラの活動イメージでは「地域の PR に貢献している」(86.9%)、「地域のマスコットとなっている」(84.5%)、「地域のイメージアップに貢献している」(74.4%)、「人々の地域に対する愛着をもたらしている」(73.2%) と高い数値が出ている。

本研究では、高槻市の観光マスコットキャラクター「はにたん」がその地域の住人にどのような影響を与えているのかについて、以下の仮説をたてて検証する。

仮説 「ゆるキャラ(はにたん)に対する愛着が高いほど地域観光への関心も高くなる」

3. データと変数

3.1. データ

分析においては 2014 年に実施した「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」のデータを用いた。調査対象者は高槻市に居住する無作為に選ばれた 20 歳以上 85 歳未満の男女、対象者数は 2000 人、有効回収数は 1198 人、回収率は 59.9% である。

3.2. 変数

変数は「q20 はにたん に愛着を感じるか」、「q51_a 観光客に地域の良さを体験してほしいか」、「q51_b 観光客と交流」、「q51_c 観光客による活性化」、「q51_d 環境整備による利便性」、「q51_e 観光のための環境整備」、「q51_f 生活を優先し観光開発」、「q72 性別」、「q73 年齢」、「q74 職業」、「q76 最終学歴」、「q78 市内居住年数」を使用した。具体的な質問内容と選択肢は以下の通りである。

・Q20. はにたんへ愛着を感じるか

分析時に以下の通り回答の反転処理を行っている。つまり、数値が高くなるほど「はにたん」への愛着が強いことを表している。

1 感じる 2 やや感じる 3 あまり感じない 4 感じない 5 はにたんを知らない

・Q51. 高槻市と観光について、以下のa～fのような考えや意見につて、あなたはそれぞれどう思いますか。

- a. 多くの観光客にこの地域の良さを経験してもらいたい
- b. いろいろな機会を通して、観光客と交流してみたい
- c. 観光客が訪れることで、この地域は活性化している
- d. 地域観光のための環境整備によって、住民の日常生活の利便性も高まっている
- e. 企業や行政は、観光のための環境整備をいっそう進めることが望ましい
- f. 住民生活を最優先した上で、観光開発すべきだ

分析時に以下の通り回答の反転処理を行っている。つまり、いずれの回答も、数値が高くなるほど質問内容を肯定する程度が強くなることを表している。

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらともいえない 4. ややそう思う 5. そう思う

ただし、q51 は数値を合計して分析に用いる。そのため、q51a_r から q51f_r に関して信頼性分析を実施したところ、0.789 であった。しかし、q51f_r を削除した場合に 0.826 まで上昇したので、q51f_r を除いた q51a_r から q51e_r までを合計した。それを「地域と観光の関係はよいものだと思っている程度得点」として分析に使用した。これは、数字が大きいくほど、地域と観光の関わりについて好意的であることを示す。

・Q72. あなたの性別はどちらですか。

1 男性 2 女性

分析時に以下の通り回答のダミー変数を作成した。

男性ダミー変数 1 男性 0 女性

・Q73. あなたの年齢をお答えください。

1 20代 2 30代 3 40代 4 50代 5 60代 6 70代以上

・Q74. あなたの現在の職業はどれにあたりますか。(複数の職業に就かれている場合は、主なもの1つにマル)

1 常時雇用の勤め人 2 臨時雇用、パート、アルバイト 3 自営業主 4 自営業の家族従業者 5 経営者、役員 6 家事専業 7 学生 8 無職 9 その他

分析時に以下の通り回答のダミー変数を作成した。

通常勤め人ダミー 1 常時雇用の勤め人、経営者、役員 0 その他

自営業者ダミー 1 自営業主、自営業の家族従業者 0 その他

・Q76. あなたの最終学歴を教えてください(在学中の方は、いま通っている学校を選んでください)

1 中学(旧小学校など) 2 高校(または旧制中学など) 3 専門学校 4 短大・高専(5年制) 5 大学(旧高専)・大学院 6 わからない

分析時に以下の通り回答のダミー変数を作成した。

初等教育ダミー 1 中学(旧小学校など) 0 その他

中等教育ダミー 1 高校(または旧制中学など)、専門学校、短大・高専(5年制) 0 その他

・Q78. 高槻市には現在までどのくらいお住まいですか。

1 年未満 2. 1年以上3年未満 3. 3年以上5年未満 4. 5年以上10年未満 5. 10年以上20年未満 6. 20年以上30年未満 7. 30年以上40年未満 8. 40年以上50年未満 9. 50年以上

4. 分析

表 1. q51sum 地域と観光の関係はよいものだと思っている程度得点の重回帰分析

	B	標準誤差	ベータ
(定数)	12.005 **	.622	
q20 はにたんに愛着を感じるか反転	.430 **	.096	.143
男性ダミー	.237	.278	.030
q73 年齢	.433 **	.102	.176
初等教育ダミー	.042	.524	.003
中等教育ダミー	.039	.291	.005
常勤の勤め人ダミー	.031	.319	.004
自営業者ダミー	.439	.495	.029
q78 市内居住年数	-.064	.077	-.031
調整済み決定係数	.032 **		
N	1000		

**p<.01,*p<.05

本分析の結果、モデルの決定係数（調整済み決定係数 R^2 ）は 0.032 であり、有意確率が 0.01 未満であるため、母集団においても「観光客に地域の良さを体験してほしいか」の予測に役立つモデルである。つまり、従属変数である「観光客に地域の良さを体験してほしいか」の分散のうち 3.2%が投入した独立変数で説明される。

他の変数の影響をコントロールすると、はにたんへの愛着が高いほど観光客に地域の良さを体験してほしいと感じる程度が強くなる。年齢においては年齢が高くなるほど観光客に地域の良さを体験してほしいと考える傾向がうかがえる。また、そのほかの係数は有意確率が 0.05 以上であったため有意とはいえない。

なお、合計から除いた q51f_r は q51a_r から q51e_r とは分析内容が異なるため本研究の

分析から削除した。

5. 考察

上記の分析より、はにたんは高槻市の観光に対する意識を向上させるのに大いに貢献しているといえる。さらに、高槻市の観光には年齢が高い人ほど感心が高いとうかがえる。そのような結果が出た理由として、経験・知識が多いほど、また、それにより心のゆとりのある人の方が他の地と自身の住む地域の周りを比較し見ることができる視野を持っているからではないかと考える。

また、はにたんのようなゆるキャラを媒介として用いることで観光に対し、市民にアピールしやすく、目を向けさせやすくなったため、「ゆるキャラ（はにたん）に対する愛着が高いほど地域観光への関心も高くなる」という仮説が実証されたのではないだろうか。

6. 文献

- [1] 「ゆるキャラの認知度ランキング、観光 PR 効果は若年層女性ほど高い結果に」
<http://www.travelvoice.jp/20131217-13398>

第 17 章 高槻市民の地域活動への参加と愛着度の関係

古森 光

1. はじめに

現在全国の人口は 1 億 2643 万人と発表されている。これは前年のマイナス 24 万人であり、5 年連続の減少傾向にある。そのなかでも全国 1748 市区町村の 82.4%を占める 1440 自治体で人口は減少しており、このままいくと 2040 年には 1748 市区町村中、49.8%にあたる 896 市区町村が「消滅可能性都市」になるとする推計結果が発表されている。高槻市に関しても大阪府の市町村の中で 2 番目の減少数である。

自治体の人口減少の背景には少子高齢化問題のほか、過疎化の問題もあげられる。そこで、地域の人口流出に歯止めをかけるためには地域への愛着を持たせることが重要な鍵となる。その手段として地域イベントによる街の活性化が効果的であるのではないかと予測し、実際に地域活動に参加している人はその地域に愛着を持っているのかどうかを今回の調査で検証する。

2. 仮説

先行研究として『地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究』（鈴木春菜・藤井聡 土木計画学研究・論文集）が挙げられる。この研究では地域愛着が高い人ほど、町内会活動やまちづくり活動などの地域活動に熱心である傾向にあると示されているが、本研究では反対に地域活動への参加が地域愛着度を測れるかを検証する。

日本には京都の祇園祭りや福岡国際マラソンなどの地域イベントが各地方で様々あるが、高槻市にも高槻祭りや高槻シティハーフマラソンなど様々な地域イベントが開催されている。こうしたまちづくりイベントには地域の一体感を高めるなど地域活性化を目的としていることが多い。そこで住民もこのような行事に参加する人ほどその地域のことに敏感であると考え、以下の仮説を立てる。

①地域活動に参加している人ほどその地域への愛着度が高い

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 26 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1198 票、回収率は 59.9%である。

3.2. 変数

今回用いた変数と回答を以下に表記する。

「Q13 地域活動参加頻度」この変数に対する回答を操作し分析中では「1.参加したことはない」「2.過去に参加したことはあるが現在は参加していない。」「3.あまり参加していない。」「4.ときどき参加している。」「5.よく参加している」の順になるようにコードを反転させたものを使用する。

「Q72 性別」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.男性」=1 「2.女性」=0とリコードし、「男性ダミー」として使用する。

「Q74 職業」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.常時雇用の勤め人 5.経営者、役員」を「常勤の勤めダミー」、「3.自営業主 4.自営業の家族従業員」を「自営業者ダミー」、「2.臨時雇用 6.家事専業 7.学生 8.無職 9.その他」を「その他職業ダミー」とリコードし使用する。

「Q76 最終学歴」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.中学(旧小学校) 2.高校(または旧制中学など) 3.専門学校」を「初等教育ダミー」、「4.短大・高専」を「中等教育ダミー」、「5.大学(旧高専)・大学院」を「高等教育ダミー」としてリコードし使用する。

他「Q73 年齢」「Q82 世帯収入」を独立変数とし分析を行った。

また従属変数は「Q19 高槻市に愛着を感じるか」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.感じる 2.やや感じる=1」「3.あまり感じない 4.感じない=0」とリコードし、「高槻市への愛着_2」として使用する。

4. 分析

分析全体のモデルが母集団において意味を持つかの検定を行っているが、有意確率 0%水準で有意であり、母集団においても当てはまるモデルと考えられる。

次の表1の結果は従属変数として使用した質問項目「Q19 高槻市に愛着を感じるか」と独立変数として使用した「Q13 地域活動参加頻度」の二つをクロス集計した結果である。この観測結果は高槻市に愛着を「あまり感じない」と回答した人が「参加したことはない」から「よく参加している」にかけて、つまり参加頻度が多い人につれ少なくなっている。また Q13 の地域活動参加頻度を軸に観察しても「よく参加している」と回答した人のうち「Q19 高槻市に愛着を感じるか」に対して「あまり感じない」(度数4)、「感じない」(度数1)と回答したものは極めて少ない。このことから比較的調査対象者は地域活動に参加している人ほど高槻市に対して愛着をあることがわかる。

表1 q13 地域活動参加頻度とq19 高槻市に愛着を感じるかのクロス表

q13 地域活動参加頻度		q19 高槻市に愛着を感じるか				合計
		感じる	やや感じる	あまり感じない	感じない	
よく参加している	度数	53	28	4	1	86
	q19 高槻市に愛着を感じるかの%	11.60%	5.10%	2.80%	4.50%	7.40%
ときどき参加している	度数	126	122	24	3	275
	q19 高槻市に愛着を感じるかの%	27.70%	22.20%	16.80%	13.60%	23.50%
あまり参加していない	度数	92	141	24	1	258
	q19 高槻市に愛着を感じるかの%	20.20%	25.70%	16.80%	4.50%	22.10%
過去に参加したことはあるが現在は参加していない	度数	79	107	24	4	214
	q19 高槻市に愛着を感じるかの%	17.40%	19.50%	16.80%	18.20%	18.30%
参加したことはない	度数	105	151	67	13	336
	q19 高槻市に愛着を感じるかの%	23.10%	27.50%	46.90%	59.10%	28.70%
合計	度数	455	549	143	22	1169
	q19 高槻市に愛着を感じるかの%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%

以下の表2は各独立変数が従属変数にどのように影響しているかロジスティクス回帰分析の結果により示している。

表2 「地域愛着度」のロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	Exp(B)
地域活動参加頻度反転	0.384	0.077 **	1.468
男性ダミー	-0.388	0.206	0.678
年齢	0.125	0.069	1.133
中等教育ダミー	-0.092	0.29	0.913
高等教育ダミー	0.386	0.231	1.472
常勤の勤め人ダミー	0.241	0.242	1.273
自営業者ダミー	-0.323	0.344	0.724
世帯収入	0.034	0.065	1.034
定数	0.232	0.411	1.262
Nagelkerke R2 乗	0.071		
model X ² (df=8)	41.295 **		
N=1002			

** p<0.01

まず各独立変数のうち有意である変数を読み解く。5%水準で有意であれば、その変数の効果を読むことができるが、この分析結果のうち1%水準で有意な変数は「q13_r 地域活動参加頻度反転」である。

表の右端にある Exp(B)は独立変数が1段階増加すると、オッズ（生起確率）が Exp(B)倍になると解釈する。この分析結果では「q13_r 地域活動参加頻度反転」が Exp(B)=1.468なので、他の変数の影響をコントロールすれば、「地域活動参加頻度」が一段階増加すると、「高槻市への愛着」が高まる確率が約1.5倍増加する（50%増加する）ことがわかる。その他の変数においては有意水準の5%に満たさなかったため「高槻市への愛着」への効果は読み取れない。

5. 考察

分析の結果、仮説である「地域活動に参加しているほどその地域への愛着度が高い」は証明された。また地域活動への参加することで高槻市への愛着にかなり影響することがわかる。このことにより、地域イベントが人口急減や若者の都市一極集中化の問題を改善させるため提唱されている地域再生、地域創生事業を後押しするのではないかと考えられる。地域への愛着は地方創生のキーワードとして今後重要になっていくのではないだろうか。

6. 文献

- [1] 佐々木 晶二 先駆的な地方創生プロジェクトからみた地方創生政策のあり方検討メモ
(http://www.minto.or.jp/print/urbanstudy/pdf/research_06.pdf#search='ふるさと創生事業+文献')
- [2] 大阪府調査結果概要 市町村別人口
(<http://www.pref.osaka.lg.jp/toukei/kokuchou05-1/gaiyou9.html>)
- [3] 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究
(http://trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp/tba/wp-content/uploads/2013/09/area_cooperative.pdf)
- [4] 高槻市における人口動態の現況
([http://www.city.takatsuki.osaka.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/9/jinkoudoutai\(H12-H24\).pdf](http://www.city.takatsuki.osaka.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/9/jinkoudoutai(H12-H24).pdf))

第 18 章 高槻市バスの利用マナーとバス満足度の関連性

守田 早輝子

1. はじめに

高槻市は、バス、JR、阪急電車など公共の交通機関が充実している。このように数多くの交通機関がある都市は少ない。そして、その公共交通機関を多くの人が利用しているために、一人一人振るまいが重要になってくると思われる。例えば、高槻市営バスはマナーの向上をアナウンスで常に呼びかけている。このように、公共交通機関におけるマナーへの関心が高まっており、社会問題として取り上げられることも少なくない。例えば、音楽をイヤホンつけずに聞いたり、大声で話したり等々などである。このような迷惑行為は他の乗客たちにとって不快なものであるかもしれない。また、バスの中で席を譲ろうとする人が少ないことや、混雑時でも前につめようとしめないなど、簡単に出来る他者への配慮が欠け、そのためにバスのマナーが悪いと感じる乗客もいるだろうと予想される。今回高槻市と関西大学で実施した合同アンケート調査に基づいて、高槻市民のバスマナーとバス満足度との関係を分析し考察する。

2. 先行研究・仮説

2006年7月にNHK放送文化研究所で実施された「日本人のモラルに関する意識調査」では、日本人のモラルについて、77%の人が「低い」と答え、また、58%の人が「10年前と比べて、日本人のモラルが低くなった」と答えた。このように、日本人のモラルは悪化していると感じている人がほとんどであることがわかる。

本分析では「乗客のバス利用マナーが良いと思っている人ほど、バス満足度が高い」という仮説のもと分析を行う。バス利用マナーとは、バスに乗車しているときの作法や、他人が不快にならないように気をつけることであり、バス満足度とは、人がバスに乗車するとき、そのバスに感じる何らかの満足感のことである。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 26 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数 1198 票、回収率は 59.9%である。

3.2. 変数

変数として用いたのは以下の 2 種類である。

① Q12_b 高槻市営バスの満足度

1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足

② Q24 高槻市バスの乗車マナーは守られていると思うか

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらともいえない 4. ややそう思う 5. そう思う

4. 分析

まず、高槻市営バスを利用している方のバスのマナーについての結果を度数分布の表で示す。

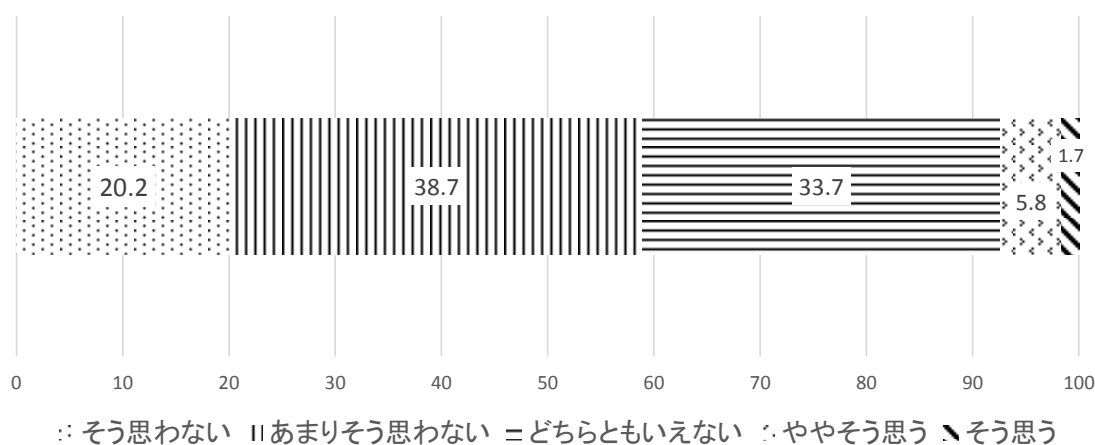


図1 バスの利用マナーは守られているかどうかの度数分布表

図1から、バスの利用マナーは守られているかどうかについて、あまりそう思わない、そう思わないという項目の割合が5割を超えていることから、回答者の半数以上はバスに乗るときにマナーは守られていないと考えていることがわかる。

次にバスの満足度について度数分布で分析し、図2に示す。

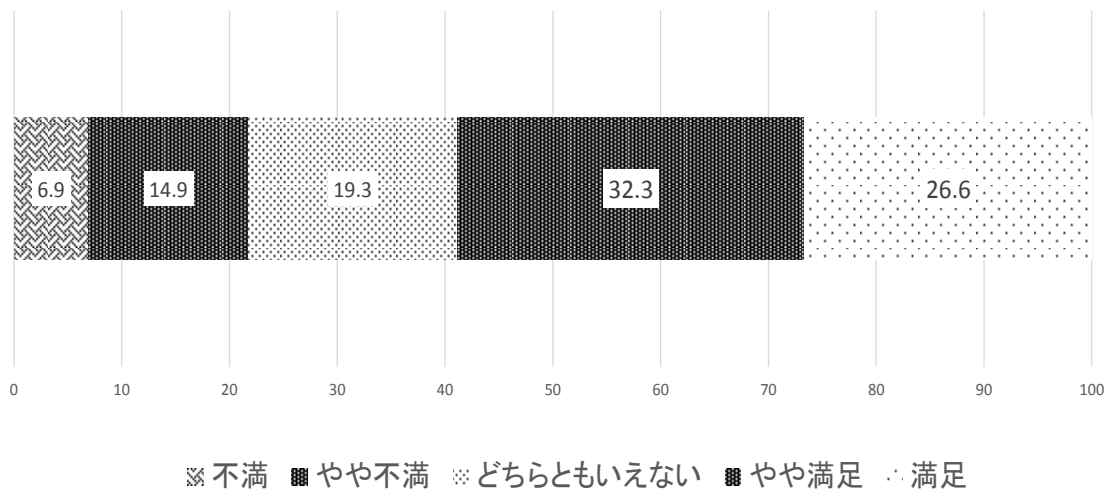


図2 バスの満足度の度数分布図

バスの満足度について、やや満足、満足という項目で6割ちかくが満足していることがわかる。しかし、同時にバスに不満をもっているひとも2割近くいる。次に、バス満足度とバスマナーをクロス表にしたものを表1に示す。

表1 バス満足度とバス乗客マナーのクロス表

		バスの満足度					合計	
		不満	やや不満	どちらともいえない	やや満足	満足		
乗客はバスの中でマナーを守っているか	そう思わない	度数	8	31	20	67	102	228
		行%	3.5%	13.6%	8.8%	29.4%	44.7%	100.0%
	あまりそう思わない	度数	28	58	64	175	117	442
		行%	6.3%	13.1%	14.5%	39.6%	26.5%	100.0%
	どちらともいえない	度数	26	63	111	109	71	380
		行%	6.8%	16.6%	29.2%	28.7%	18.7%	100.0%
	ややそう思う	度数	7	12	11	18	17	65
		行%	10.8%	18.5%	16.9%	27.7%	26.2%	100.0%
	そう思う	度数	5	6	2	3	2	18
		行%	27.8%	33.3%	11.1%	16.7%	11.1%	100.0%
合計	度数	74	170	208	372	309	1133	
	行%	6.50%	15.00%	18.40%	32.80%	27.30%	100.00%	

$\chi^2=112.579^{**}, CramerV=0.158^{**}$

$^{**}p < .01, *p < .05$

このクロス表のカイ二乗検定が有意であり、CramerVも有意であった。クロス表の結果から特に一番数値が高かったのは、バスに満足している人は、マナーを守っていると思わないと考えている人の割合の44.7%であった。もともとの仮説である、乗客のバス利用マナーが良いと思っている人で、バス満足度が高いと考えている人は11.1%の割合であった。

5. 考察

この結果から、バス乗客の利用マナーがよいと思っている人ほど、バスの満足度が高いことはいえなかった。よって仮説は正しいということを検証できなかった。バスの利用マナーが良いと考えていても、それが実際にバスの満足度に直接的に影響はしないということがわかる。ここからバス会社にマナーを守ることを呼びかけることはもちろん大事であるが、バスの利用者を増やすためにも運賃を安くする、バスの本数を増やすなどの政策を提案したい。高槻市営バスはこれからも発展し、より便利なバスになることを望む。ここから考える、今後の展望としては、賃金が安いほど満足するのか、そして、バスの本数に満足している人ほどバスに満足しているのかなどを調べ、高槻市営バスの利用者数の増加につながるような調査をし、対策を提案して行きたい。

6. 参考文献

- [1] 布目ゆきお(2013)『「よくあることだから」やってもいいのか?』「公共交通機関対策特別委員会の視察より(その3)・・・市営バス維持の高槻市」
<http://www.nunomeyukio.jp/blog/archives/3075>
- [2] 高槻市ホームページ
<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/>

第 19 章 バスの利用頻度に関する調査

鼻崎 将

1. はじめに

現代の日本は世界で最も少子高齢化が進んだ国家となってしまった。これには様々な要因があり、迅速に解決策を練り出さなくてはならない。だがその一方、高齢者が増加した現在、より一層高齢者の生活を理解し、保障していかなければならないのである。高齢者の生活の実態は様々なレベルに分かれており、次の5つに分けることができる。

1. ほとんど自立しており、独り暮らしもなんとか可能。できれば家族と同居が望ましいレベル。
2. 車椅子を使用する人であったり、起き上がりなどが困難。独り暮らしは難しいレベル。
3. 独り暮らし不可能。食事や排泄など、第三者の援助が必要なレベル。
4. 日常のほぼ全般において援助が必要。家族の介護では難しく、プロに委託すべきレベル。
5. いわゆる「寝たきり」であり、経管栄養（鼻やお腹から食事を注入）するレベル。ターミナル（余命わずか）状態など。

今回の調査ではこのうちで5を除いた1～4のレベルに該当すると思われる高齢者の生活を理解するために、その交通手段に特定して調査を行い、その実態を把握することを目的とする。またこれによって高齢者の生活をよりよいものにする思案を考察することを目的とする。

2. 仮説

先行研究を調べたところ、少子高齢化が急速に進行している日本にとって高齢者・障害者などの交通弱者に対する人にやさしい交通システムである市バスは、必要不可欠である。（箕面市(2012), 箕面市総合都市交通戦略）このことから交通弱者である高齢者の方にとって市営バスは重要な交通手段ということが考えられ、年齢が高い方がより市営バスを利用するのではないかと考える。

仮説については、先ほどの先行研究を参考にし、高齢者は体の不自由さから、移動手段を限定され、その中でもバスを利用する機会が全体の利用者に比べて多いと予測する。よって、「年齢が高くなるほどバスをよく利用する」とする。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成26年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収率は1198票、回収率は59.9%である。

3.2. 変数

変数は以下の種類の項目を使用、操作した。

- ・「q72 性別」分析中では男性ダミー変数（「男性」=1 「女性」=0）を使用している。
- ・「q73 年齢」
- ・「q25 バス利用頻度」に関しては、分析中では反転させて利用した。反転後のコードは「1.年に1～2日」「2.月に1～2日」「3.週に1～2日」「4.週に3～4日」「5.ほぼ毎日」の5段階である。つまり、分析結果の数値が大きいほどバス利用頻度が高いことを表している。
- ・「q76 最終学歴」は学歴ダミーとして、「1.中学」「2.高校」「3.専門学校」を初等学歴ダミー、「4.短大・高専」を中等学歴ダミー、「5.大学・大学院」を高等学歴ダミーと設定した。
- ・「q82 世帯収入」

4. 分析

まず、仮説の「年齢が高くなるほどバスをよく利用する。」を検討する。そのために「q25 バス利用頻度」と「q73 年齢」でクロス表、棒グラフを作成した。

表1 「q25 バス利用頻度」と「q73 年齢」のクロス表

		q73 年齢					合計	
		30代	40代	50代	60代	70代以上		
q25 市バスの利 用頻度	ほぼ毎日	度数	9	15	9	15	15	68
		行%	13.2%	22.1%	13.2%	22.1%	22.1%	100.0%
	週に3～4日	度数	3	8	10	10	34	66
		行%	4.5%	12.1%	15.2%	15.2%	51.5%	100.0%
	週に1～2日	度数	10	16	5	29	78	145
		行%	6.9%	11.0%	3.4%	20.0%	53.8%	100.0%
	月に1～2日	度数	40	55	51	76	72	319
		行%	12.5%	17.2%	16.0%	23.8%	22.6%	100.0%
	年に1～2日	度数	60	70	63	85	45	344
		行%	17.4%	20.3%	18.3%	24.7%	13.1%	100.0%
	利用しない	度数	31	39	32	57	38	221
		行%	14.0%	17.6%	14.5%	25.8%	17.2%	100.0%
	合計	度数	153	203	170	272	282	1163
		行%	13.2%	17.5%	14.6%	23.4%	24.2%	100.0%

$\chi^2(df=25, N=1163)=143.863$, CramerV=0.157, **p<0.01

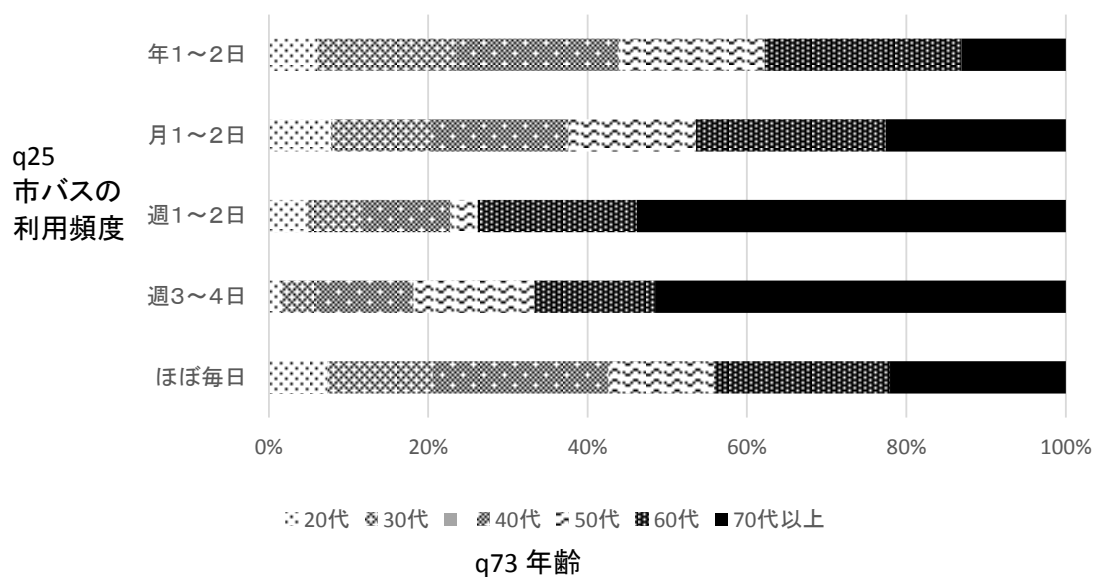


図1 「q25 バス利用頻度」と「q73 年齢」のグラフ

結果より、まず市バスをほぼ毎日利用する人は高齢者に限定せず、全世代が同程度の割合で利用していることがわかる。しかし、週に1~2日と週に3~4日の高い頻度で市バスを利用する人は、60代、70代以上が半分以上を占めている。これらのことから、通勤通学で市バスを利用する場面を除いた場合、高齢者の方がバスを利用する頻度が高くなることが考えられる。

次に、市バスの利用頻度と年齢に関する要因を調べるため、従属変数として「q25_r 市バスの利用頻度反転」を、独立変数として「q72 性別」、「q73 年齢」、「q82 世帯収入」、「q76 最終学歴」を用いて重回帰分析を行った。

表2 q25_r バス利用頻度反転の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	1.102 **	.208	
q73 年齢	.126 **	.028	.166
男性ダミー	-.001	.090	.000
中等教育ダミー	.007	.136	.002
高等教育ダミー	.234 **	.104	.089
q82 世帯収入	.010	.029	.013
調査済み決定係数	0.05 **		
N	958		

** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

表2では、調整済み決定係数(R^2)は0.05である。これは、従属変数である「バス利用頻度」の分散のうち5.0%が、投入した独立変数で説明されていることを示している。分散分析でF検定を

行くと、1%水準で有意である。つまり、決定係数の値は統計的に有意であり、母集団においても「バス利用頻度」の予測に役立つモデルであることがわかる。

バス利用頻度反転と年齢の有意確率は1%水準で有意であるので、年齢が高ければ高いほどバスを利用する頻度が高いことがわかる。このことから、仮説「年齢が高くなるほどバスをよく利用する」は支持される。

高等教育ダミーは1%水準で有意であるので、最終学歴が高等教育の人は、初等教育ダミーの人に比べてバスをよく利用することがわかる。

また、分析結果より高等教育ダミーのベータ値($\beta=0.089$)に比べて年齢のベータ値($\beta=0.166$)の方が大きい。つまり、教育よりも年齢の方がバス利用頻度に大きな影響を及ぼしていることがわかる。

5. 考察

表2の分析結果の考察を行うと、従属変数である「バスの利用頻度」に影響する独立変数は「年齢」「高等教育ダミー」の2つであることがわかる。「年齢」についての考察は先述したとおり、「通勤通学で市バスを利用する場面を除いた場合、高齢者の方がバスを利用する頻度が高くなる。」である。また、最終学歴が中学・高校・専門学校の方は、家業を継ぐ人や農家の人であり、自宅で働く人が多く、バスを利用する頻度が低くなると推測できる。

本調査から高齢者の生活にとって、バスの示す割合は大きいことがわかった。このことから、高齢者の生活をよりよいものにするために、バスのサービスの改善や高齢者にとって親切的なバス設計を検討していくことが必要であると考えられる。

6. 文献

- [1] 天野圭子・中山徹,平成17年度,「コミュニティバス運用の効果と可能性について—先行事例の調査分析、および大阪府羽曳野市バスへの応用検討—」
- [2] 天野圭子・黒見敏丈,2004年8月,「コミュニティバスの利用実態に関する研究—岐阜県山県市のハーバスを事例として—」
- [3] 箕面市(2012), 箕面市総合都市交通戦略 ～「鉄道・バスが便利なまち 箕面」総合都市交通戦略～
- [4] 関西大学, 平成25年度社会調査実習報告書「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」

第 20 章 子育て環境の分析

山田 航暉

1. はじめに

現在、日本の人口は減少しつつある。厚生労働省の人口動態統計月報年計の概況のデータによると、平成 25 年の合計特殊出生率は 1.43（概数値）と前年に対して 0.02%上昇しているが、出生数は 102 万 9,800 人で、前年の 103 万 7,231 人から 7,431 人減少している。平成 23 年から 3 年連続減少し、過去最少となった。自然増減数は、23 万 9,000 人と過去最大の減少幅である。少子化の原因には未婚化、無産化などがあげられる。その背景の中で経済的な理由が一例としてあげられている。ここでは働く女性が増えたことによる晩婚化に注目する。現在、仕事をしながら子育てをするというのは難しく、十分な環境が整っているとはいえない状態であるといえる。そこで子育てをするには環境を整える必要があり、子どもを育てる環境にはどのようなものが必要であるのかを分析することにする。

2. 仮説

先行研究では、子育てとその周りの環境についての研究が盛んに行われている。そして、井出・伊藤・津田・寺村（2012）「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」によると、子育ては孤独な環境でなされていると述べており、子育てが孤独な環境でなされる状況は、子育てという問題に止まらず、私たちが生活していく場における社会環境の閉塞性、特に人間と人間との関わりあいの問題が横たわっている。郭（2012）「子育て環境にみる家族の機能と社会的支援」によると、急用ができ、子どもの世話を頼まなければならないときに頼りにする人としてもっとも多く挙げられたのは「自分の親」であった。現代社会では、子育てにおいて、家族・親族ネットワークがまだ重要な役割を果たしていることが分かった。近隣の人や専門家・サービスが挙げられる割合は低く、家族関係がうまくいかない場合、あるいは近くに家族が住んでいない場合には、孤独な子育てとなる可能性がかなり高い。谷本都栄・福岡孝純（2013）「地域における子育て環境」では、子育てのしやすい環境は、老若男女あらゆる人々の生命（明るさ、楽しさ、たくましさ）が輝き出るような、共によりよく生きられる、共生共創が可能な新たな生活文化の創出、そして、健康・環境・教育・芸術・文化・福祉・スポーツ・観光政策等の地域連携と開かれた地域間交流が大切である。日本の子どもの人口が 3 年連続で減少しつつあり、女性の社会進出により、働く女性の増加が仕事と子育ての両立を難しくしていることが分かった。ここでは、居住地域の環境が子育てする環境に影響しているのかを分析する。

仮説「子育てできる環境であると思っている人ほど、居住地域が良いと思っている」

3. データと変数

3.1. データ

今回の分析には、平成 26 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」データを用いる。調査対象者は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズは 2000、有効回収数は 1198 票、回収率は 59.9%である。

3.2. 変数

- ・「Q3 居住地域の暮らしやすさ」

これに対する回答として分析中では「1.非常に悪い」「2.やや悪い」「3.どちらともいえない」「4.まあよい」「5.非常によい」の順になるように反転させたものを使用している。つまり、分析結果の数値が大きくなるほど居住地域が暮らしやすいと感じていることを表している。

- ・「Q65 居住地域の子育てのための施設が整っている」

これに対する回答として分析中では「1.そう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.あまりそう思わない」「4.そう思う」の順になるように反転させたものを使用している。つまり、分析結果の数値が大きくなるほど子育てのための施設が整っていると感じていることを表している。

- ・「Q66 居住地域の育児における助け合い」

これに対する回答として分析中では「1.そう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.あまりそう思わない」「4.そう思う」の順になるように反転させたものを使用している。つまり、分析結果の数値が大きくなるほど育児における助け合いが行われていると感じていることを表している。

- ・「Q72 性別」

性別に関する回答は「男性」「女性」の2段階である。分析中ではダミー変数(「男性」=1「女性」=0)を使用している。

- ・「Q73 年齢」

年齢に関する回答は「1.20代」「2.30代」「3.40代」「4.50代」「5.60代」「6.70代以上」の6段階である。

- ・「Q74 あなたの現在の職業」

職業に関する回答は「1.常時雇用の勤め人」「2.臨時雇用・パート・アルバイト」「3.自営業主」「4.自営業の家族従業者」「5.経営者・役員」「6.家事専業」「7.学生」「8.無職」「9.その他」の9段階である。(「常時雇用の勤め人」「経営者・役員」=1「臨時雇用・パート・アルバイト」「自営業主」「自営業の家族従業者」「経営者・役員」「家事専業」「学生」「無職」「その他」=0)を使用し、「常勤の勤め人ダミー」を作成する。「自営業主」「自営業の家族従業者」=1「臨時雇用・パート・アルバイト」「経営者・役員」「家事専業」「学生」「無職」「その他」=0)を使用し、「自営業者ダミー」を作成する。「臨時雇用・パート・アルバイ

ト」「家事専業」「学生」「無職」「その他」=1「常勤の勤め人ダミー」「自営業主」「自営業の家族従業者」「経営者・役員」=0を使用し、「その他職業ダミー」を作成する。）

・「Q76 最終学歴」

最終学歴に関する回答は「1. 中学校」「2. 高校」「3. 専門学校」「4. 短大・高専」「5. 大学・大学院」「6. 分からない」の6段階である。ただし、「6. 分からない」は欠損値として扱った。（「中学」「高校」「専門学校」=1「短大・高専」「大学」=0を使用し、「初等教育ダミー」を作成する。「中学」「高校」「専門学校」「大学」=0「短大・高専」=1を使用し、「中等教育ダミー」を作成する。「中学」「高校」「専門学校」「短大・高専」=0「大学」=1を使用し、「高等教育ダミー」を作成する。）

・「Q82 過去1年間の世帯収入」

世帯収入に関する回答は「1. 100万円未満」「2. 100万円～200万円未満」「3. 200万円～400万円未満」「4. 400万円～600万円未満」「5. 600万円～800万円未満」「6. 800万円～1000万円未満」「7. 1000万円～1500万円未満」「8. 1500万円以上」「9. わからない」の9段階である。ただし、「9. わからない」は欠損値として扱った。

4. 分析

「表1 「q3_r 居住地域の暮らしやすさ反転」の重回帰分析」

	B	標準誤差	ベータ
(定数)	3.01 **	.14	
q65_r 子育てのための施設が整っているか反転	.15 **	.04	.14
q66_r 育児においての助け合いが行われているか反転	.04	.04	.04
男性ダミー	.04	.06	.03
q73 年齢	.01	.02	.03
常勤の勤め人ダミー	.00	.06	.00
自営業者ダミー	-.10	.10	-.03
中等教育ダミー	.12	.08	.05
高等教育ダミー	.20 **	.06	.12
q82 世帯収入	.07 **	.02	.14
調整済決定係数	.06 **		
N	910		

** $p < .01$

表1において、Q65_r 子育てのための施設が整っているか反転、高等教育ダミー、q82 世帯収入の3つの項目で有意がみられた。Q65_rが有意水準1%で正の影響がある。よって、Q65_rが上がると居住地域の暮らしやすさへの満足度が上がることが分かる。最終学歴が中学、高校、専門学校に対して大学・大学院の方が居住地域の暮らしやすさへの満足度が大きい。Q82 世帯収入では世帯収入が高いほど居住地域の暮らしやすさへの満足度が大きい。

いという傾向があった。

5. 考察

上記の分析より、「子育てできる環境であると思っている人ほど、居住地域が良いと思っている」という仮説は支持されていることが分かる。子育てしやすい環境が整っていると思っている人は自身の居住地域もよいと思っている。また、最終学歴が中学、高校、専門学校の人も居住地域が暮らしやすいと思っているが大学・大学院を出た人の方がより居住地域が暮らしやすいと思っている。世帯収入が多い人は生活するにあたり、子育てをする環境が整っていること、つまり生活しやすい地域に住んでいることで居住地域の暮らしやすさがよいと思っているのではないか。3年連続して出生率が下がり、日本の子どもの人口が減少していることは女性の社会進出が進み、働きながらの子育てが難しくなったことで今、子育てをする施設が整っていることが重要である。子育てする環境が整っていれば経済的な面や女性の晩婚化が関係なく、日本の子どもの人口増加につながり、少子化対策にもなると思われる。

6. 文献

- [1] 厚生労働省「平成 25 年人口動態統計月報年計（概数）の概況」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai13/>
- [2] 井出・伊藤・津田・寺村（2012）「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」 「神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要」
- [3] 郭（2012）「子育て環境にみる家族の機能と社会的支援」 「北海道大学大学院文学研究科紀要」
- [4] 谷本都栄・福岡孝純（2013）の「地域における子育て環境」 「法政大学スポーツ健康学部紀要」

第 21 章 公共の施設の利用に対する生活満足度

谷口 有紀

1. はじめに

年々、公園を使う人が少なくなっているといわれている。昔より子供も外であまり遊ばず、家や屋内の施設で遊ぶことが多くなったといわれているが確かに普段、公園で遊んでいる子供の姿をあまり見かけなくなってきたように感じる。しかし、公園というものは市民が払っている税金を使って作られており、だれでも無料で無制限で使える施設である。市民はせつかく自分たちがお金を払っている施設で、健康のためにも、休憩にも、いろいろな用途に使えるのだからもっと活用すべきだと考える。そこで、現代の人はどのくらい公園を使っており、また、そのように施設を活用できている人は、既存のものを自分の生活普段の生活も充実できているのではないかということに着目して研究をしていきたい。

2. 仮説

公園を使うということは市の施設など身の回りのものを活用できる人ではないかということを考えて、そのように身近なものを自分へと活用できる人ほど、生活満足度は高くなるのではないかと考える。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 26 年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象は高槻市に居住する 20 歳以上 85 歳未満の男女、計画標本サイズ 2000、有効回収数は 1198 票、回収率は 59.9%である。

3.2. 変数

今回の分析では「Q1 生活満足度」、「Q30 公園の使用頻度」、「Q31 公園の滞在時間」、「Q72 性別」、「Q73 年齢」の5つの変数を利用し、分析しやすいように、以下のような変数を操作した。

[従属変数]

Q1 現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

選択肢は「1. 満足」「2. やや満足」「3. どちらともいえない」「4. やや不満」「5. 不満」である。これを反転して、数字が大きい選択肢ほど満足度が高いように「1. 不満」「2. やや不満」「3. どちらともいえない」「4. やや満足」「5. 満足」と書き換えた。

Q30 あなたはどれくらいの頻度で、近くの公園に出かけますか。

選択肢は「1. ほぼ毎日」「2. 週に3～4日」「3. 週に1～2日」「4. 月に1～2日」「5. 公園には行かない」である。これを反転して、数字が大きい選択肢ほど公園に行く頻度が高いように「1. 公園には行かない」「2. 月に1～2回」「3. 週に1～2日」「4. 週に3～4日」「5. ほぼ毎日」と書き換えた。公園を使用している人の中で使用率によって生活満足度を比較したため、「5. 公園には行かない」は欠損値処理として扱った。また、この項目は5段階であるが「3. 週に1～2日」「4. 週に3～4日」「5. ほぼ毎日」と「2. 月に1～2回」の二段階に分けて分析をおこなった。

Q 3 1 あなたか公園を使用するときの滞在時間はどのくらいですか。

選択肢は「1. 10分未満」「2. 10分以上30分未満」「3. 30分以上1時間未満」「4. 1時間以上」である。

Q 7 2 あなたの性別はどちらですか。

選択肢は「1. 男性」「2. 女性」これは性別ダミーを用いて重回帰分析をおこなった。

Q 7 3 あなたの年齢をお答えください。

選択肢は「1. 20代」「2. 30代」「3. 40代」「4. 50代」「5. 60代」「6. 70代以上」である。

この5つの変数を主に使っている。なお、5つとも無回答の答えは欠損値とし、処理して分析を行っている。

4. 分析

表1 公園に行くほど生活満足度が高い生活満足度

	B	標準誤差	ベータ
(定数)	2.34 **	.25	
q73 年齢	.10 *	.04	.17
男性ダミー	-.34 **	.12	-.17
中等教育ダミー	.12	.20	.03
高等教育ダミー	.29 *	.12	.14
常勤の勤め人ダミー	.16	.15	.08
自営業者ダミー	.08	.21	.02
q82 世帯収入	.16 **	.04	.23
q30_r 公園に行く頻度反転	.15 **	.05	.15
調整済決定数	.094 **		
N	350		

**p<.01,*p<.05

表1より、生活満足度は女性よりも男性の方が高く、最終学歴が中学・高校卒業の人よりも、大学卒業の人の方が幸せを感じやすいことがわかった。また、世帯収入が多いほど幸せを感じやすく、公園に行く頻度が少ない人よりも多い人の方が、生活満足度が高いという結果になった。

5. 考察

分析から、仮説どおり、高槻市民は公園の使用頻度が高いほど生活満足度が高いことがわかった。高槻市では、市の施設を活用できている方が日々の生活も有意義に暮らせるということが考えられる。しかし公園を使用する頻度はとても少ないため、高槻市民がもっと公園を使用する人が増えた上で生活満足度があがるといいと考えられる。ただ公園が作られるだけではなく、市民が払った税金を使われて作られた公園のため、市民が公園に作ってほしいものや、公園を使用する人が増えるための施設や設備を作るようにして、公園の使用率を高める必要がある。そして、公園など、市の施設を活用する人が増え、日々の生活を有意義に過ごすようにし、生活満足度を高められるようにする必要がある。

6. 文献

- [1] 高槻市ホームページ www.city.takatsuki.osaka.jp/
- [2] (仮称)安満遺跡公園整備構想【素案】に対する意見募集の結果について
<http://www.city.takatsuki.osaka.jp/kakuka/toshi/amaiseki/publiccomment/1394684265041.html>

第 22 章 地方行政活動が地域愛着へ与える影響

石倉 広祐

1. はじめに

平成 18 年、国会で地方分権改革推進法が成立した。同法は、第一条による「この法律は、国民がゆとりと豊かさを実感し、安心して暮らすことのできる社会を実現することの緊要性にかんがみ、(中略)地方分権改革を総合的かつ計画的に推進することを目的とする。」という言葉と共に始まる。地方分権が推進することで、各地方に与えられた裁量の範囲が広がった。従って、地方行政が地域住民に様々な影響を与えることが可能となった。良い影響の一つとして、地域に対する愛着の上昇が考えられる。

都市部への人口流出やNIMBY症候群、隣人関係の希薄化、これらは現代の日本全体に見られる重大な社会問題である。国や地方は解決の糸口を探っているが、有効な対策は未だ見出せていない。日本では極端な個人主義が進み、社会に対する無関心さが顕著になっていると言われている。どのようにすれば、地域の問題に関して、市民が身近な問題として意識出来るのだろうか。その解決策の一つとして、地域に対する愛着が挙げられるのではないだろうか。私たちは愛着のあるものに関心を寄せ、問題が発生していれば解決しようとする。居住地域に対して愛着を持つ事が出来れば、この問題の解決の糸口となり得る。

地域に対する愛着形成に関しては多くの要因が考えられるが、今回注目したものは地域行政である。現在日本では地方分権に移行しつつあり、市や県が持つ政策決定権も拡大している。適切に活用することで居住環境を改善するだけでなく、社会問題の解決に繋がるのではないかと考えた次第である。

2. 仮説

先の研究で、引地らは地域への愛着に対する最も重要な決定要因は地域集団に対するポジティブな認識であるとし、行政の評価がこの集団に含まれるとしている。地域行政に対して良い印象を持つことで地域愛着度が高まると結論づけている。また、若林らは地域に愛着を感じることで、市民が地域活動や防災活動への参加意向を非常に高めるという研究結果を示した。このように、地域行政が社会問題の改善に繋がるといえるためには、間に愛着の存在が不可欠である。すなわち、「地域行政によって愛着が上昇する」「愛着が上昇することによって地域に対する関心が高まる」ということである。

以上二つの研究によって明らかにされた、地域行政によって愛着が高まり、それによって地域活動への参加が促進されるという分析結果に基づき、本研究では下のようにより具体的な仮説をたてて分析する。

[仮説] 地方行政による居住環境満足度が高まると、地域に対する愛着が高まる

3. データと変数

3.1. データ

使用したデータは「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」である。この調査は、高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女を対象に、平成26年に実施したものである。計画標本サイズは2000、有効回収数は1198、回収率は59.9%である。

3.2. 変数

使用した変数は以下の通りである。

Q12. A. 電車満足度、B. バス満足度、C. 図書館満足度、D. 体育館満足度、E. 市の行政サービス満足度(反転処理)

A. 電車満足度

1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足

B. バス満足度

1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足

C. 図書館満足度

1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足

D. 体育館満足度

1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足

E. 市の行政サービス満足度

1. 不満 2. やや不満 3. どちらともいえない 4. やや満足 5. 満足

Q19. 高槻市への愛着度(反転処理)

1. 感じない 2. あまり感じない 3. やや感じる 4. 感じる

Q72. 性別(ダミー変数 1=男性 0=女性)

1. 男性 0. 女性

Q73. 年齢

1. 20代 2. 30代 3. 40代 4. 50代 5. 60代 6. 70代以上

いずれの変数も分析結果の数値が高くなるほど満足度や愛着度が高くなることを表す。

4. 分析

まず、高槻市への愛着度について、度数分布表のグラフによって結果を示す。

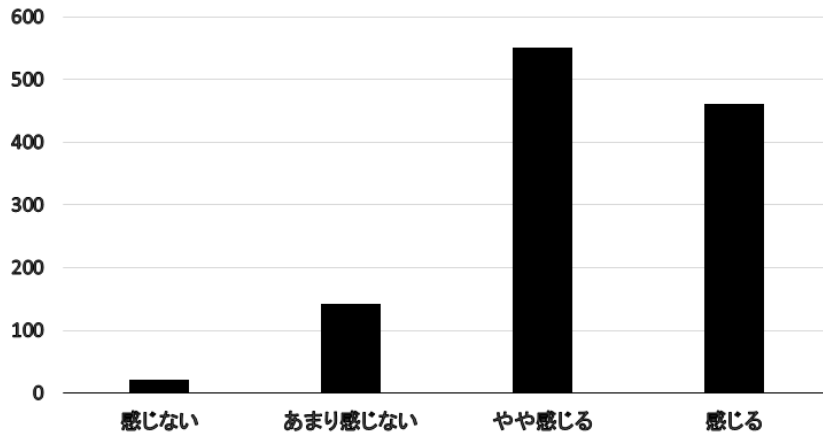


図1:高槻市への愛着度反転

図1から、やや感じる又は感じると回答した人が多く、高槻市民の多くが高槻市への愛着を感じているということが分かる。

次に、クロス表分析を用い、カイ二乗検定を行った上で、5つの居住環境の要素が高槻市への愛着度に影響しているかどうかを検証する。割合は小数点以下を四捨五入しているため、合計は100%とならない場合がある。

表1:電車満足度と高槻市への愛着度 のクロス表

		高槻市への愛着度				合計
		感じない	あまり感じない	やや感じる	感じる	
不満	度数	2	12	18	10	42
	割合	5%	29%	43%	24%	100%
やや不満	度数	2	14	47	24	87
	割合	2%	16%	54%	28%	100%
電車満足度 どちらともいえない	度数	6	33	63	31	133
	割合	5%	25%	47%	23%	100%
やや満足	度数	6	42	229	132	409
	割合	2%	10%	56%	32%	100%
満足	度数	6	40	188	260	494
	割合	1%	8%	38%	53%	100%
合計	度数	22	141	545	457	1165
	割合	2%	12%	47%	39%	100%

$\chi^2(df=12 N=1165)=102.709^{**}$, CramerV=0.171**

**p<0.01 *p<0.05

表2:バス満足度 と 高槻市への愛着度 のクロス表

		高槻市への愛着度				合計
		感じない	あまり感じない	やや感じる	感じる	
不満	度数	7	19	37+AG6:AJ7AO	18	81
	割合	9%	24%	46%	22%	100%
やや不満	度数	6	32	82	52	172
	割合	4%	19%	48%	30%	100%
バス満足度 どちらともいえない	度数	4	33	110	77	224
	割合	2%	15%	49%	34%	100%
やや満足	度数	4	39	199	136	378
	割合	1%	10%	53%	36%	100%
満足	度数	1	19	115	175	310
	割合	0%	6%	37%	57%	100%
合計	度数	22	142	543	458	1165
	割合	2%	12%	47%	39%	100%

$\chi^2(df=12 N=1165)=97.749^{**}$, CramerV=0.167**

**p<0.01 *p<0.05

表3:図書館満足度 と 高槻市への愛着度 のクロス表

		高槻市への愛着度				合計
		感じない	あまり感じない	やや感じる	感じる	
不満	度数	4	17	24	20	65
	割合	6%	26%	37%	31%	108%
やや不満	度数	1	13	56	38	108
	割合	1%	12%	52%	35%	100%
図書館満足度 どちらともいえない	度数	9	64	202	134	409
	割合	2%	16%	49%	33%	100%
やや満足	度数	6	35	168	116	325
	割合	2%	11%	52%	36%	100%
満足	度数	1	12	91	146	250
	割合	0%	5%	36%	58%	100%
合計	度数	21	141	541	454	1157
	割合	2%	12%	47%	39%	100%

$\chi^2(df=12 N=1157)=76.886^{**}$, CramerV=0.149**

**p<0.01 *p<0.05

表4:体育館満足度 と 高槻市への愛着度 のクロス表

		高槻市への愛着度				合計
		感じない	あまり感じない	やや感じる	感じる	
不満	度数	3	17	35	31	86
	割合	4%	20%	41%	36%	100%
やや不満	度数	4	13	62	57	136
	割合	3%	10%	46%	42%	100%
体育館満足度 どちらともいえない	度数	13	92	333	242	680
	割合	2%	14%	49%	36%	100%
やや満足	度数	1	15	73	70	159
	割合	1%	9%	46%	44%	100%
満足	度数	0	2	33	49	84
	割合	0%	2%	39%	58%	100%
合計	度数	21	139	536	449	1145
	割合	2%	12%	47%	39%	100%

$\chi^2(df=12 N=1145)=32.485^{**}$, CramerV=0.097**

**p<0.01 *p<0.05

表5:市の行政サービス満足度と高槻市への愛着度のクロス表

		高槻市への愛着度				合計	
		感じない	あまり感じない	やや感じる	感じる		
市の行政サービス満足度	不満	度数	6	14	25	15	60
		割合	10%	23%	42%	25%	100%
	やや不満	度数	5	29	58	36	128
		割合	4%	23%	45%	28%	100%
	どちらともいえない	度数	10	78	304	185	577
		割合	2%	14%	53%	32%	100%
	やや満足	度数	1	17	144	155	317
		割合	0%	5%	45%	49%	100%
	満足	度数	0	3	15	70	88
		割合	0%	3%	17%	80%	100%
	合計	度数	22	141	546	461	1170
		割合	2%	12%	47%	39%	100%

$\chi^2(df=12 N=1170)=146.138^{**}$, CramerV=0.204**
 **p<0.01 *p<0.05

上記の通り、有意性検定を行った結果、全てにおいて1%水準で有意であった。すなわち、これらの分析結果には意味があるといえる。独立性の検定を行うため、カイ二乗検定を行った結果、表 5、表 1、表 2 の順に高く、2 変数には関連があるといえる。関連性の検定を行うためのクラメールの V では、表 5 が 0.2 と最も高く、ある程度の関連性があるといえる。

最後に、電車、バス、図書館、体育館の満足度、市の行政サービス満足度と地域愛着度について重回帰分析を用いて検証した。検証結果は以下の通りである。

表6:居住環境(独立変数)と地域愛着度(従属変数)の重回帰分析

	B	標準誤差	ベータ
(定数)	1.989 **	0.119	
電車満足度反転	0.070 **	0.022	0.102
バス満足度反転	0.073 **	0.020	0.121
図書館満足度反転	0.044	0.023	0.066
体育館満足度反転	-0.014	0.026	-0.018
市の行政サービス満足度反転	0.160 **	0.026	0.198
男性ダミー	-0.014	0.042	-0.010
年齢	0.020	0.013	0.044
調整済決定係数	0.120 **		
N	1110		

**p<0.01 *p<0.05

まず、モデルの説明力は 12%であり、これは 1%水準で有意であることから、このモデルが地域愛着度の予測に役立つということが分かる。次に、独立変数ごとの結果を分析する。居住環境の要因としては、前述の通り 5 項目を挙げた。そのうち、電車満足度、バス満足度および市の行政サービス満足度が 1%水準で有意であった。一方で、図書館満足度および体育館満足度は地域愛着度に対して有意ではないと分かった。さらに、居住環境以外の変数である、性別や年齢についても地域愛着度に対して有意な影響を与えていないといえる。ベータに関しては、市の行政サービス満足度 ($\beta = 0.198$) が最も高く、他の変数の影響をコントロールすれば、地域愛着度に対する影響力が

相対的に最も強い。

5. 考察

全体として、地方行政による居住環境によって地域に対する愛着が高まるという仮説は支持されたと言える。公共交通や公共施設について、有意なものとうではないものとの間には大きな開きが見られた。公共交通・公共施設・その他の要因の3つに分け、それぞれ考察していく。

まず、公共交通間の影響の違いについて、高槻市ではバスは高槻市営バスのみであり、市の運営によってのみ満足度が左右される。一方で電車に関して、高槻市を通る電車は、JR および阪急電車であり、市営電車というものが存在しない。したがって、市営であるバスに比べて、電車が市に対する愛着に大きな影響を与えなかったということが考えられる。

次は、公共施設について、地域愛着度との関係は見られなかった。図書館は有意確率が5%には満たなかったものの、ベータの符号は正であり、性別や年齢と比べて大きかった。体育館に関しては表4からも分かるように、満足度がどちらともいえないという回答が非常に多かった。これは、市の体育館というものを利用する機会が少ないために、満足かどうかそもそも判断が出来なかったということが考えられる。

最後に、その他の要因については、2つのことが考察される。仮説の地方行政という言葉の言い換えとも受け取れる、市の行政サービス満足度は、今回の分析では有意であり、最もベータが大きくなったことは、過去の先行研究とも一致する結果であったといえる。また、性別や年齢などが地域満足度に対して影響を及ぼさないということに関しても、先行研究に従った結果であった。地域に対する愛着は、先天的な事項によってではなく、後天的な事項によって決定されると考えられる。

個別の行政サービスについてあまり多くを対象とする事が出来なかったため、他の地域満足度に影響している可能性のある内容を検討することが出来なかった。しかし、今回の調査によって、市の管理運営の度合いが高く、市民が普段からよく利用するものほど、地域愛着度に影響を及ぼすということが推測される。市の行政のあり方によって市民の地域愛着度を高めることは可能であり、地域の間人関係の希薄化や社会問題に対する無関心を改善に向かわせる効果を持たせ得ると考えられる。

6. 文献

- [1] 引地博之・青木俊明(2005)『地域に対する愛着形成の心理過程の検討』
<http://www.jsce.or.jp/library/open/proc/maglist2/00897/2005/pdf/B41D.pdf>
- [2] 若林直子・赤坂剛・小島隆矢・平手小太郎(2000)『住民の防災意識の構造に関する研究』
http://ci.nii.ac.jp/els/110004150454.pdf?id=ART0006385821&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1418187055&cp
- [3] 鈴木春菜・藤井聡(2008)『地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究』
http://ci.nii.ac.jp/els/110004150454.pdf?id=ART0006385821&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1418187055&cp

第 23 章 環境で形成する高槻市への愛着

中川 千彰

1. はじめに

高槻市は京都市と大阪市のちょうど中心に位置しており、北摂のベッドタウンと常に注目を集めている街である。交通の利便性や買い物の利便性により 2003 年以降、徐々に人口増加傾向に見られる。急速なベッドタウン化が進むことにより、高槻市民は大都市への交通の利便性だけでなく、行政、自然環境といった高槻市の独自の魅力を感じ愛着を持ち住んでいるのだろうか、また住民同士の交流やコミュニケーションといった対人関係の充実を感じて愛着を持ち住んでいるのだろうかと疑問を抱いた。本稿では、高槻市民は行政、自然環境といった高槻市の独自の魅力から抱く高槻市への愛着と住民同士の交流やコミュニケーションといった対人関係の充実から抱く高槻市への愛着について調査する。また両者のどちらが高槻市への愛着に関係しているか比較し、考察する。

2. 先行研究と仮説

2.1. 先行研究

先行研究として土木学会論文集の引地博之、青木俊明、大淵憲一著者(2009)による『地域に対する愛着の形成機構-物理環境と社会的環境の影響-』があった。それによると、1) 地域の物理的環境に対する評価が高い人ほど、地域に対する愛着が強い 2) 地域の社会的環境に対する評価が、高い人ほど地域に対する愛着が強い、3) 地域の社会的環境に対する評価が、物理的環境に対する評価が高い人より地域に対する愛着が強いと考察している。引地らの研究では、物理的環境を「工芸品等の加工物や、道路や病院の建造物、自然環境」とし、社会的環境は「住民同士の交流など、地域の社会生活を円滑にする対人関係」と定義している。

2.2. 仮説

上記の研究が高槻市でも同様のことが言えると考え、以下のように仮説を立てた。

物理的環境要因として

仮説 1 地域の自然環境に満足している人ほど、地域に対する愛着度が強い

仮説 2 市の行政サービスに満足している人ほど、地域に対する愛着度が強い

社会的環境要因として

仮説 3 近所づきあいを多くしている人ほど、地域に対する愛着が強い

仮説 4 地域活動に参加している人ほど、地域に対する愛着度が強い

3. データと変数

3.1. データ

データは平成26年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1198票、回収率は59.9%である。

3.2. 変数

今回使用した変数と回答を以下に表記する。

- ・「Q6.自然環境満足度」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.不満」「2.やや不満」「3.どちらともいえない」「4.やや満足」「5.満足」の順になるようにコードを反転させたものを使用する。
- ・「Q9.近所での世間話頻度」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.ほとんどない」「2.月に1~2」「3.週に1~2」「4.週に3~4」「5.ほぼ毎日」の順になるようにコードを反転させたものを使用する。
- ・「Q12.E.市の行政サービス満足度」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.不満」「2.やや不満」「3.どちらともいえない」「4.やや満足」「5.満足」の順になるようにコードを反転させたものを使用する。
- ・「Q13.地域活動参加頻度」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.参加したことはない」「2.過去に参加したことはあるが現在は参加していない」「3.あまり参加していない」「4.ときどき参加している」「5.よく参加している」の順になるようにコードを反転させたものを使用する。
- ・「Q19.高槻市への愛着度」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.感じる 2.やや感じる=1」「3.あまり感じない 4.感じない=0」とリコードし、「高槻市への愛着_2」として使用する。以上の変数は、分析結果の数値が高くなるほど「満足度」「頻度」「愛着」が高くなることを表す。
- ・「Q.72 性別」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.男性」=1 「2.女性」=0 とリコードし、「男性ダミー」として使用する。
- ・「Q74 職業」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1.常時雇用の勤め人 5.経営者、役員」を常勤の勤めダミー、「3.自営業主 4.自営業の家族従業員」を自営業者ダミー、「2.臨時雇用、パート、アルバイト 6.家事専業 7.学生 8.無職 9.その他」をその他職業ダミーとリコードし使用する。
- ・「Q76最終学歴」この変数に対する回答を操作し分析中では、「1 中学(旧小学校).2.高校(または旧制中学など).3. 専門学校」を初等教育ダミー、「4.短大・高専」を中等教育ダミー、「5.大学(旧高専)・大学院」を高等教育ダミーとリコードし使用する。
- ・「Q73 年齢」・「Q78 住居年数」・「Q82 年収」を使用した。

4. 分析

今回の分析では、各仮説を検証するためはじめに、クロス表を用いて X^2 検定を行った。

表1 q19 高槻市に愛着を感じるかと q6地域の自然環境満足度 のクロス表

		q6地域の自然環境満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満		
q19	感じる	度数	126	165	103	50	17	461
高槻市に		行 %	27.3%	35.8%	22.3%	10.8%	3.7%	100%
愛着を感じるか	やや感じる	度数	50	274	150	59	16	549
		行 %	9.1%	49.9%	27.3%	10.7%	2.9%	100%
	あまり感じない	度数	11	46	41	30	15	143
		行 %	7.7%	32.2%	28.7%	21.0%	10.5%	100%
	感じない	度数	2	5	3	4	8	22
		行 %	9.1%	22.7%	13.6%	18.2%	36.4%	100%
合計		度数	189	490	297	143	56	1175
		行 %	16.1%	41.7%	25.3%	12.2%	4.8%	100%
X ² (df=12, N=1175)		=	154.195 ^{a**}					
CramerV		=	0.209 ^{**}					
*p<.05,**p<.01								

表2 q19 高槻市に愛着を感じるかと q9 近所での世間話の頻度 のクロス表

		q9 近所での世間話の頻度					合計	
		ほぼ毎日	週に3~4日	週に1~2日	月に1~2日	ほとんどない		
q19	感じる	度数	46	60	124	92	136	458
高槻市に		行 %	10.0%	13.1%	27.1%	20.1%	29.7%	100%
愛着をかんじるか	やや感じる	度数	22	51	153	115	208	549
		行 %	4.0%	9.3%	27.9%	20.9%	37.9%	100%
	あまり感じない	度数	6	11	25	28	73	143
		行 %	4.2%	7.7%	17.5%	19.6%	51.0%	100%
	感じない	度数	3	2	4	2	11	22
		行 %	13.6%	9.1%	18.2%	9.1%	50%	100%
合計		度数	77	124	306	237	428	1172
		行 %	6.6%	10.6%	26.1%	20.2%	36.5%	100%
X ² (df=12, N=1172)		=	44.014 ^{a**}					
CramerV		=	.112 ^{**}					
*p<.05,**p<.01								

表3 q19 高槻市に愛着を感じるかと q12.e 交通や施設の満足度 市の行政サービス のクロス表

		q12.e 交通や施設の満足度 市の行政サービス					合計	
		満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満		
q19	感じる	度数	70	155	185	36	15	461
高槻市に		行 %	15.2%	33.6%	40.1%	7.8%	3.3%	100%
愛着を感じるか	やや感じる	度数	15	145	304	57	25	546
		行 %	2.7%	26.6%	55.7%	10.4%	4.6%	100%
	あまり感じない	度数	3	17	78	29	14	141
		行 %	2.1%	12.1%	55.3%	20.6%	9.9%	100%
	感じない	度数	0	1	10	5	6	22
		行 %	0.0%	4.5%	45.5%	22.7%	27.3%	100%
合計		度数	88	318	577	127	60	1170
		行 %	7.5%	27.2%	49.3%	10.9%	5.1%	100%
X ² (df=12, N=1170)		=	146.138 ^{a**}					
CramerV		=	.204 ^{**}					
*p<.05,**p<.01								

表4 q19 高槻市に愛着を感じるかと q13 地域活動参加頻度のクロス表

		q13 地域活動参加頻度					合計
		よく参加している	ときどき参加している	あまり参加している	過去に参加したことは現在は参加していない	合計	
q19 高槻市に愛着を感じるか	感じる	度数 53	126	92	79	105	455
		行 % 11.6%	27.7%	20.2%	17.4%	23.1%	100%
	やや感じる	度数 28	121	142	107	151	549
		行 % 5.1%	22.0%	25.9%	19.5%	27.5%	100%
	あまり感じない	度数 4	24	24	24	67	143
		行 % 2.8%	16.8%	16.8%	16.8%	46.9%	100%
	感じない	度数 1	3	1	4	13	22
		行 % 4.5%	13.6%	4.5%	18.2%	59.1%	100%
	合計	度数 86	274	259	214	336	1169
		行 % 7.4%	23.4%	22.2%	18.3%	28.7%	100%

$X^2(df=12, N=1169) = 65.73^{**}$
 CramerV = 0.237**
 *p<.05,**p<.01

表1、2、3、4より X^2 検定結果、すべて有意確率が1%水準で有意である。どの表でも高槻市へ愛着を感じている人が全体の約85%と多くの人々が愛着を感じていることが読み取れる。次に各表について言及する。表1より、愛着を感じている人は自然環境にも満足している人が多い傾向が見られる。表2より、愛着を感じている人は多いが、近所話をする頻度が「月に1~2」「ほとんどない」の割合が多い。高槻市への愛着を感じているに関わらず、近所での世間話頻度は低いことが分かった。表3より、愛着を感じている人は市の行政サービスへ満足している人が多い傾向がある。同様に、表4愛着を感じている人は地域活動への参加頻度が高いことが言える。

最後に従属変数を「Q19.高槻市への愛着度」として、物理的環境要因としての独立変数を「Q6.自然環境満足度」と「Q12.E.市の行政サービス満足度」、社会的環境要因としての独立変数を「Q9.近所での世間話頻度」と「Q13.地域活動参加頻度」とおいて、ロジスティクス回帰分析を行った。

表4 高槻市への愛着ロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	Exp(B)
自然環境満足度反転	0.369 **	0.088	1.447
近所での世間話頻度反転	0.021	0.095	1.022
市の行政サービス反転	0.658 **	0.112	1.932
地域活動反転	0.297 **	0.09	1.346
男性ダミー	-0.328	0.226	0.72
年齢	-0.078	0.081	0.925
住居年数	0.318 **	0.058	1.374
年収	-0.02	0.07	0.98
中等ダミー	-0.151	0.305	0.86
高等ダミー	0.457	0.249	1.579
常勤ダミー	0.304	0.262	1.355
自営ダミー	-0.301	0.372	0.74
定数	-3.771 **	0.633	0.023
Nagelkerke R2乗	0.217		
X^2	130.415 **		
df =12,N =989			

**p<.01,*p<.05

表4より、1%水準で有意な変数は「地域の自然環境満足度反転」「市の行政サービス反転」「地域活動頻度」「住居年数」である。その中でロジスティック回帰係数(B)を見てみると最も値が大きいのは「市の行政サービス」(B=0.658)である。よって「高槻市への愛着」に最も影響があるのは「市の行政サービス」である。このことから高槻市への愛着により多く影響を及ぼしているのは「近所での世間話頻度」「地域活動参加頻度」である社会的要因ではなく、「地域の自然環境満足度」「市の行政サービス」である物理的環境であることが言える。

次に生起確率を示す $\text{Exp}(B)$ について言及する。「地域の自然環境満足度反転」 $\text{Exp}(B)=1.447$ は、他の変数の影響をコントロールすれば、「地域の自然環境満足度」が一段階増加するごとに、「高槻市への愛着」を感じる確率は約1.5倍に増加する。「市の行政サービス反転」 $\text{Exp}(B)=1.932$ は、他の変数の影響を一定にすれば、「市の行政サービス」が一段階増加するごとに、「高槻市への愛着」を感じる確率は約1.9倍に増加する。「地域活動頻度反転」 $\text{Exp}(B)=1.346$ は、他の変数の影響を操れば、「地域活動頻度」が一段階増加するごとに、「高槻市への愛着」を感じる確率は約1.4倍に増加する。「住居年数」 $\text{Exp}(B)=1.374$ は、ほかの変数の影響を制御すれば、「住居年数」が一段階増加するごとに、「高槻市への愛着」を感じる確率は約1.4倍に増加する。その他の変数の「高槻市への愛着」への効果は見られない。

以上、結論として、

仮説1 地域の自然環境に満足している人ほど、地域に対する愛着度が強い

仮説2 市の行政サービスに満足している人ほど、地域に対する愛着度が強い

仮説4 地域活動を多くしている人ほど、地域に対する愛着が強い

は支持された。

5. 考察

以上の分析結果より、「高槻市への愛着度」と「自然環境満足度」「市の行政サービス満足度」「地域活動頻度」との間には関連性があり、仮説1、仮説2、仮説4は支持された。

今回の分析では、高槻市への愛着要因として影響を及ぼしている変数を大きいものから並べると「市の行政サービス満足度」「自然環境満足度」「住居年数」「地域活動頻度」になることがわかる。市の行政サービスは道路、上下水道などインフラ設備や清掃、消防、教育、福祉など住民の生活の充実に直結するため一番影響力が強いと考えた。自然環境について高槻市は「水とみどりの生活文化都市」とキャッチフレーズがあるように、北部には北摂山系、南部には淀川を始め一級河川が多くあり、非常に自然環境に恵まれた都市であることが言える。一般的に緑を見ると人は癒やされると言われており、自然が豊かなほど心に余裕ができ充実した生活が送れるのではないかと考えた。地域活動に関しては、表4より参加したことがないと回答した人が多数いるため、他の変数より影響力が小さくなったと言えるだろう。

引地ら(2009)の研究によると地域の社会的環境に対する評価が、物理的環境に対する評価が

高い人より地域に対する愛着が強いと考察している。本稿でも社会的環境を「近所での世間話頻度」「地域活動頻度」物理的環境を「自然環境満足度」「市の行政サービス満足度」と置き研究した。上記でも述べた通り物理的環境としてあげた変数の方が高槻市への愛着の影響が強いため、高槻市において引地らの考察は否定され地域の物理的環境に対する評価が、社会的環境に対する評価が高い人より地域に対する愛着が強いと言える。

これまでの高槻市の地域づくりは、道路や建物の施設整備といった行政サービスや自然環境保護に重点的に進められてきたため、これらの満足度は高いと考えられる。一方、住民同士のネットワークに関して軽薄に感じる。今後は住民同士の人付き合いを充実させられるような社会的環境改善を行うことで益々、高槻市に対する愛着が高まるだろうと推測する。

6. 文献

- [1] 引地博之、青木俊明、大淵憲一,2009,『地域に対する愛着の形成機構-物理環境と社会的環境の影響-』

第 24 章 インターネット利用が近所付き合いに与える影響

杉浦 翔

1. はじめに

今日の ICT 技術の発展には、目覚ましいものがある。総務省の報告（2012）によると、平成 23 年末におけるインターネット利用者は全国民の 79.1% となり、情報通信端末の普及度は全国民を母数として、パソコンの普及率が 62.6%、携帯端末の普及率が 52.1% となっている。この数値から、今やほとんどの人々が自由に情報の受信をすることが可能であることが読み取れる。また効率的な情報伝送技術の進歩により、情報へのアクセスが快適なものとなった。これらを背景として、インターネット上では、より快適な生活を享受するためのアプリケーション・サービスが数多く提供されている。また、2013 年に実施された『SNS の利用のアンケート調査』結果に見られるように、Twitter や SNS をはじめとしたコミュニケーションツールの普及は、世界中の人々と身近に繋がることのできるツールとして注目されている。

ところで、あなたは身近な人（家族、同窓生、近所の人など）と普段どのくらい交流しているだろうか。世間では無縁社会と言われて久しいが、都市部においては、昔と比較して face-to-face でのコミュニケーションの機会が減少したと実感する人が多いのではないだろうか。では、このような社会が生まれる原因は何なのであろうか。筆者は、インターネットの普及が身近な人々との直接的な関わりを阻害している要因の 1 つなのではないかと考えた。

本研究では、コミュニケーションの対象を近所の人に絞り、インターネットの普及により近所の人たちとの関わり方がどのように変化したかを調査・分析していく。

2. 仮説

赤木の先行研究では、無縁社会の「縁」という言葉を「人との繋がり」と「行政サービスとの繋がり」の 2 種類に分類していた。そして、NHK のドキュメンタリー番組「無縁社会 ～“無縁死” 3 万 2 千人の衝撃～」に対して、現代における人間関係のあり方として「ネット縁」を用いて批評している。

そこで、本研究ではネット縁という言葉に注目し、インターネットによる人間関係の構築が現実社会での人間関係に対してどのように影響を与えるかを分析する。そのための足掛かりとして、以下の仮説を設定する。

【仮説】 インターネットの利用時間が長く、それによる情報収集を重視する人ほど、世間話をする頻度が少ない

3. データと変数

3.1. データ

データは平成26年度に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を用いる。調査対象者は高槻市に居住する20歳以上85歳未満の男女、計画標本サイズは2000、有効回収数は1198票、回収率は59.9%である。

3.2. 変数

今回の分析では「Q9 近所での世間話の頻度」、「Q53 情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか」、「Q54 インターネットの平均利用時間」、「Q72 性別」、「Q74 職業」、「Q76 最終学歴」、「Q82 世帯収入」の7つの変数を利用し、分析結果が理解しやすいように以下のように変数を操作した。

[従属変数]

- ・近所での世間話の頻度

「Q9 近所での世間話の頻度」を反転させ、「1. ほとんどない」、「2. 月に1~2日」、「3. 週に1~2日」、「4. 週に3~4日」、「5. ほぼ毎日」の順に並び替えた。

[独立変数]

- ・情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか

「Q53 情報収集にインターネット上のやりとりを重視するか」の回答項目である「1. 重視する」「2. 少し重視する」を「重視する (=1)」、「3. どちらともいえない」を「どちらともいえない (=2)」、「4. あまり重視しない」「5. 重視しない」を「重視しない (=3)」の3段階のコードとした。加えて、「1. 重視しない」、「2. どちらともいえない」、「3. 重視する」の順に並び替えた。

- ・インターネットの平均利用時間

「Q54 インターネットの平均利用時間」の回答項目である「2. 30分未満」「3. 30分以上1時間未満」を「1分~1時間未満 (=2)」、「4. 1時間以上1時間半未満」「5. 1時間半以上2時間未満」「6. 2時間以上3時間未満」を「1時間~3時間未満 (=3)」、「7. 3時間以上4時間未満」「8. 4時間以上5時間未満」を「3時間~5時間未満 (=4)」、「9. 5時間以上」を「5時間以上 (=5)」とした。なお、「1. 全く利用しない」はそのまま利用した。

- ・性別

「Q72 性別」から「男性 (=1)」、「女性 (=0)」とし、男性を「男性ダミー」とした。

- ・職業

「Q74 職業」の回答項目である「1. 常時雇用の勤め人」「5. 経営者、役員」を「常勤の勤め人 (=1)」、「それ以外 (=0)」とし、常勤の勤め人を「常勤の勤め人ダミー」とした。「3. 自営業主」「4. 自営業の家族従事者」を「自営業者 (=1)」、「それ以外 (=0)」とし、自営業者を「自営業者ダミー」とした。「2. 臨時雇用、パート、アルバイト」「6. 家事専業」「7. 学生」「8. 無職」「9. その他」を「その他職業 (=1)」、「それ以外 (=0)」とし、その

他職業を「その他職業ダミー」とした。

・最終学歴

「q76 最終学歴」の回答項目である「1. 中学（旧中学校など）」「2. 高校（または旧制中学校など）」「3. 専門学校」を「初等教育ダミー」とした。「4. 短大・高専（5年制）」を「中等教育ダミー」とした。「5. 大学（旧高専）」・大学院」を「高等教育ダミー」とした。

・世帯収入

「q82 世帯収入」の回答項目である「1. 100万円未満」「2. 100万円～200万円未満」を「1. 200万円未満」、「3. 200万円～400万円未満」「4. 400万円～600万円未満」「5. 600万円～800万円」を「2. 200万円以上800万円未満」、「6. 800万円～1000万円未満」「7. 1000万円～1500万円未満」「8. 1500万円以上」を「3. 800万円以上」とし、3カテゴリに分類した。また、この3カテゴリに分類した変数を利用し、「1. 200万円未満」を「低所得者 (=1)」、それ以外を「その他 (=0)」とし、低所得者を「低所得者ダミー」とした。同様に「2. 200万円以上800万円未満」を「中所得者 (=1)」、それ以外を「その他 (=0)」とし、中所得者を「中所得者ダミー」とし、「3. 800万円以上」を「高所得者 (=1)」、それ以外を「その他 (=0)」とし、高所得者を「高所得者ダミー」とした。

以上の変数を用いて、クロス表から作成した帯グラフと重回帰分析により仮説の検証を行った。

4. 分析

4.1. クロス表から作成した帯グラフ

まず、仮説を検証するために、「q53_cat_r インターネットでの情報収集の重視度_反転」と「q54_cat インターネットの利用時間」、「q9_r 世間話の頻度_反転」のクロス表を作成し、カイ2乗検定を行うことで関連性を調べた。クロス表をグラフ化したものを図1、図2に示す。

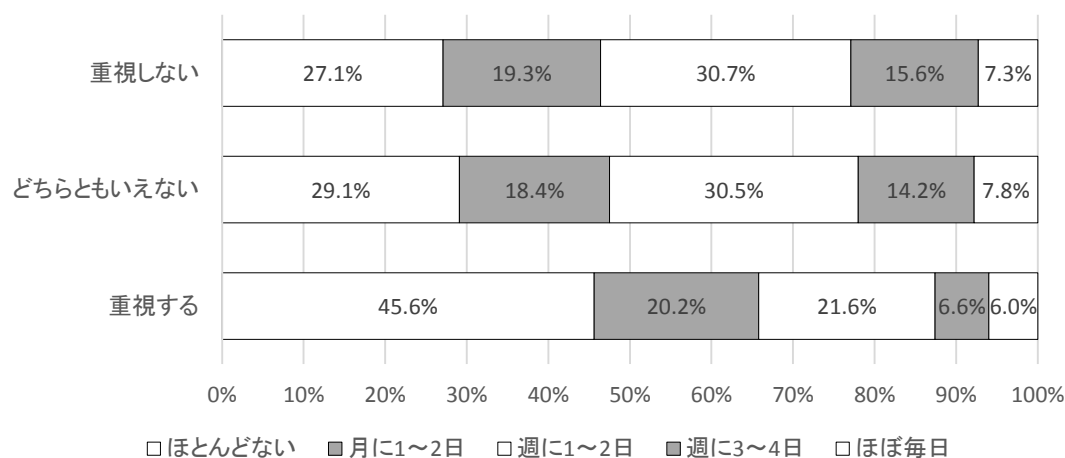


図 117 q53_cat_r インターネットでの情報収集の重視度_反転 と q9_r 世間話の頻度_反

転

クロス表を作成し図 1 のようにグラフ化した結果、インターネットでの情報収集を重視する人ほど、世間話の頻度が減っていく傾向が見て取れる。また、重視しない、どちらともいえないと回答した人の傾向は比較的類似していることが分かった。分析結果の有意性検定を行った結果、 χ^2 (df = 8、N=1104) は 53.527、Cramer の V は 0.156 となり、いずれも 1%水準で有意であった。すなわち、この分析には意味があると言える。

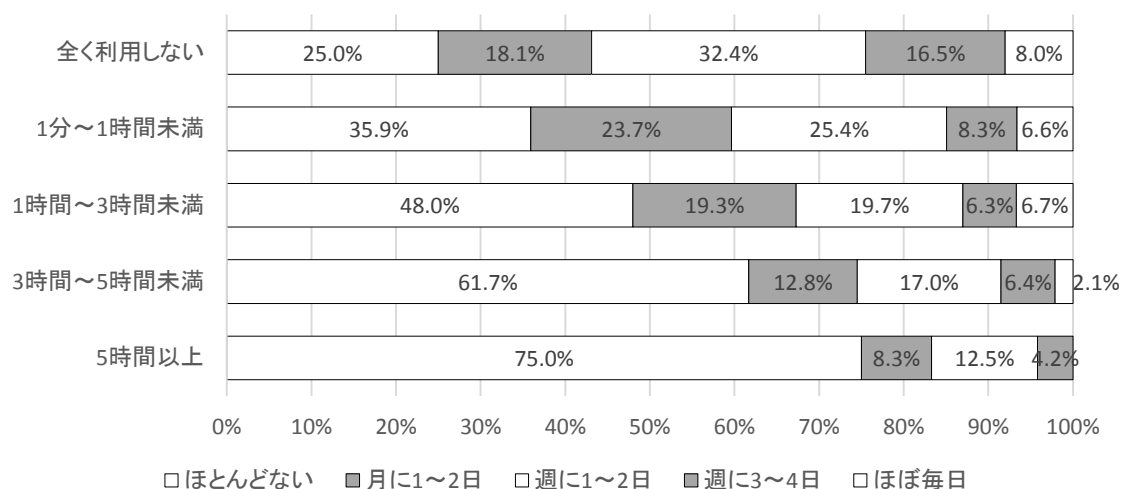


図 118 q54_cat インターネットの利用時間 と q9_r 世間頻度_反転

クロス表を作成し図 2 のようにグラフ化した結果、インターネットの利用時間が長い人ほど、世間話の頻度が減っていく傾向が見て取れる。また、調査対象者の中でインターネットの利用時間が 5 時間以上と回答した人の中で、世間話の頻度としてほぼ毎日と回答した人はいなかった。なお、分析結果の有意性検定を行った結果、 χ^2 (df = 16、N=1110) は 84.607、Cramer の V は 0.138 となり、いずれも 1%水準で有意であった。すなわち、この分析には意味があると言える。

4.2. 重回帰分析

次に、近所の人たちとの世間話の頻度に対して影響力を持つ変数を調べるために、重回帰分析を行った。重回帰分析の結果を表 1 に示す。

表 17 q9_r 近所での世間話の頻度_反転の重回帰分析

	B	標準誤差	β
(定数)	2.960 **	.158	
男性ダミー	-.130	.081	-.052
初等教育ダミー	.023	.090	.009
中等教育ダミー	-.118	.132	-.031
常勤の勤め人ダミー	-.730 **	.088	-.273
自営業者ダミー	-.208	.145	-.042
低所得者ダミー	-.200	.127	-.053
中所得者ダミー	.109	.087	.042
q53_cat_r インターネットでの情報 収集の重視度_反転	-.027	.053	-.020
q54_cat インターネットの利用時間	-.160 **	.051	-.123
調整済決定係数	.120 **		
N	1067		

**p<.01, *p<.05

表 1 の調整済決定係数 (R²) の値は 0.120 である。したがって、「q9_r 近所での世間話の頻度_反転」の分散の 12.0%が、投入された独立変数によって説明できることが分かる。なお、このモデルの分散分析結果の有意確率は、1%水準で有意であった。つまり、このモデルは母集団においても意味があると言える。

この分析結果で従属変数に有意に影響を与えている変数は、1%水準のもので「常勤の勤め人ダミー」、「q54_cat インターネットの利用時間」の 2 つである。このことから、以下のことが分かる。

- ・他の変数をコントロールすると、常時雇用の勤め人もしくは経営者、役員である人は、その他職業の人と比べて、近所での世間話の頻度が少ない
- ・他の変数の影響が一定であれば、インターネットの利用時間が長くなるほど、近所での世間話の頻度は少なくなる傾向がある

なお、有意な独立変数の中で、近所での世間話の頻度に最も強い影響を与えているのは、「常勤の勤め人ダミー」($\beta=-0.273$)である。

5. 考察

「q9_r 世間話の頻度_反転」と「q53_cat_r インターネットでの情報収集の重視度_反転」、「q54_cat インターネットの利用時間」のクロス表を作成し、従属変数と2つの独立変数の関係性を調べた結果、1%水準で関連性があることが分かった。また、「q9_r 世間話の頻度_反転」を従属変数とした重回帰分析を行った結果、「q53_cat_r インターネットでの情報収集の重視度_反転」からの影響はなく、「q54_cat インターネットの利用時間」と「常勤の勤め人ダミー」において1%水準での影響があることが分かった。

以上より、「インターネットの利用時間が長く、それによる情報収集を重視する人ほど、世間話をする頻度が少ない」という仮説は支持されなかった。また、「インターネットの利用時間が長く、常勤である人ほど、近所の人と世間話をする頻度が少なくなる傾向がある」という結果となった。

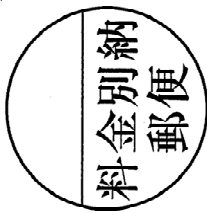
今回は世間話の頻度という概念に対してインターネットからの影響、特に利用時間と収集した情報の重視度という方向性からアプローチを行った。今回の分析では、勤労形態に関わる変数で有意な結果が見られたため、年間休暇実績や週間平均労働時間、帰宅時間帯などの詳細な労働条件を変数として分析することを今後の課題とする。

6. 文献

- [1] 総務省(2012)『平成24年版 情報通信白書 第2部 情報通信の現況と政策動向 —第3節 インターネットの利用動向—』
(<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc243120.html>)
- [2] マイボイスコム株式会社(2013)『SNSの利用のアンケート調査(9)』
(<http://www.myvoice.co.jp/biz/surveys/18414/>)
- [3] WEBRONZA+(2011)『NHK「無縁社会」を「比較的無縁」の立場で考える』
(<http://astand.asahi.com/magazine/wrnational/special/2011031800009.html>)

資料：
予告はがき・調査票

郵便はがき



予告はがき

「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」 ご協力をお願い

高槻市と関西大学は、高槻市民の生活ともの見
方についての調査を共同で実施することになりまし
た。調査の対象は、無作為に選ばれた20歳以上の
市民の方です。

近日中に調査票の入った大きな茶封筒（ボールペ
ン入り）が届きます。ご多忙中、誠に恐縮ですが、
届き次第、調査票に回答をご記入の上、ご返送頂き
ますようよろしくお願い申し上げます。

平成26年 8 月



高槻市
Takatsuki City



関西大学

市民生活部 市民生活相談課 高槻市桃園町2-1
 〒569-0067 TEL 072-674-7130
 総合情報学部 高槻市靈仙寺町2-1-1
 〒569-1095 TEL 072-690-2151

※あて所に尋ねあたらない場合は、高槻市へ返戻して下さい。

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査

(調査実施) 高槻市・関西大学総合情報学部

高槻市と関西大学は共同で、市政と市民生活に関する調査を行います。市は、今後の施策を検討するうえでの基礎資料とすることを目的に、大学は、高槻市民の生活ともの見方に関する研究と教育を行うことを目的に実施するもので、調査の対象は、無作為に選ばれた20歳以上の市民の方です。この調査票に、封筒宛名のご本人様ご自身で、回答をご記入いただきますようお願いいたします。調査の回答は、調査の目的以外には、一切利用いたしませんので安心してお答えください。

調査結果につきましては、本年12月頃に速報版を、翌年3月中に最終報告書を発行し、高槻市と関西大学で閲覧できるようにいたします。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

* ボールペンを同封しております。回答の際にご利用ください(返却の必要はありません)。

* ご回答は、とくに断りがなければ、選択肢番号を1つだけ選んでマルをつけてください。マルをつける個数が決められていたり、回答していただく方が限られていたりするものは、指示に従ってお答えください。

* お忙しいところ誠に恐縮ですが、9月12日(金)までに、同封の封筒(切手貼付済み)でご返送いただきますようお願いいたします。

* この調査票と封筒には、ご住所やお名前を記入されないようお願いいたします。

(どなたがどのような回答をされたかわからないようにするためです。)

<調査に関するお問い合わせ> 高槻市 市民生活部 市民生活相談課

tel : 072-674-7130

関西大学 総合情報学部

tel : 072-690-2151

Q1. 現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q2. 「あなたの住んでいる地域」というと、思い浮かべるのは次のどの範囲ですか。

1. 自治会	4. 小学校区
2. 町単位	5. 中学校区
3. 地区コミュニティ(連合自治会)	6. 市域全体
7. その他()	

Q3. あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。

1	2	3	4	5
非常によい	まあよい	どちらともいえない	やや悪い	非常に悪い

Q4. あなたは、現在住んでいる地域にどのくらい「住み続けたい」と思いますか。

1	2	3	4	5
ずっと住み続けたい	住み続けたい	まあ住み続けたい	どちらともいえない	機会があれば引っ越したい

Q5. あなたは、地域社会の一員として何か地域のために役に立ちたいと思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q6. あなたは現在住んでいる地域の自然環境に満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q7. あなたが現在住んでいる地域は、自然や緑が多い方だと思いませんか、それとも少ない方だと思いませんか。

1	2	3	4	5
多いと思う	やや多いと思う	普通だと思う	やや少ないと思う	少ないと思う

Q8. 現在の居住地を選択したときに、緑などの自然環境はどのくらい重要でしたか。

1	2	3	4
重要だった	やや重要だった	あまり重要でなかった	重要でなかった

Q 9 あなたは近所の人たちとどの程度世間話をしますか。

- | | | | | |
|------|--------|--------|--------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ほぼ毎日 | 週に3~4日 | 週に1~2日 | 月に1~2日 | ほとんどない |

Q 10 . あなたは、今まで以上に近所づきあいを増やしたいですか。それとも減らしたいですか。

- | | | | | |
|-------|---------|-----------|---------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 増やしたい | 少し増やしたい | どちらともいいない | 少し減らしたい | 減らしたい |

Q 11 ふだんの暮らしにおける地域のつながりについて、あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- 1 . 病気やけが等の緊急時に助け合うために必要だと思う
- 2 . 地域での孤立や孤独への不安から必要だと思う
- 3 . 生活上の困りごとを助け合うために必要だと思う
- 4 . 災害時に助け合うために必要だと思う
- 5 . 防犯のために必要だと思う
- 6 . 子育てのために必要だと思う
- 7 . 地域の環境を維持・継承するために必要だと思う
- 8 . 地域の文化を維持・継承するために必要だと思う
- 9 . その他の理由から必要だと思う
↳その理由:()
- 10 . つながりは必要ないと思う

Q 12 . あなたは、次の項目のようなお住まいの地域の交通や施設などについてどのくらい満足していますか。それぞれお答えください。

A . 電車

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいいない | やや不満 | 不満 |

B . バス

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいいない | やや不満 | 不満 |

C . 図書館

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいいない | やや不満 | 不満 |

D . 体育館

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいいない | やや不満 | 不満 |

E . 市の行政サービス

- | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいいない | やや不満 | 不満 |

Q 13 . あなたは現在、お住まいの地域で、地域活動に参加していますか。

- 1 . よく参加している
- 2 . ときどき参加している
- 3 . あまり参加していない
- 4 . 過去に参加したことはあるが現在は参加していない
- 5 . 参加したことはない

Q 14 . あなたは、ここ1年間で、地域で開催している清掃活動にどのくらいの頻度で参加していますか。

- | | | | |
|------|------|------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5回以上 | 3~4回 | 1~2回 | 参加していない |

Q 15 . 現在お住まいの地域で参加している地域活動として、あてはまるものすべてにマルをつけてください。

- Q 16
- 1 . 自治会・地区コミュニティの活動
 - 2 . 子ども会・PTA・青少年団体の活動
 - 3 . 防犯・防災・消防活動
 - 4 . 社会福祉・社会奉仕団体の活動
 - 5 . 生涯学習・芸術文化団体の活動
 - 6 . スポーツ団体の活動
 - 7 . 老人クラブの活動
 - 8 . その他 ()
 - 9 . 何も参加していない
- ↑
右上の Q 18へ

Q 15で1~8を選んだ方におたずねします。

Q 16 . あなたが参加している地域活動の中で、最も重要視しているものはどれですか。Q 15の選択肢から、1つだけ選んでください。

【 】

Q 17 . Q 16で回答した活動や団体運営の課題としてどのようなものがあると思いますか。あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- 1 . 活動を支える人が少ない
- 2 . 活動を支える人が高齢化している
- 3 . 参加者が増えない、あるいは減少している
- 4 . 活動拠点が不足している
- 5 . 他の団体との交流や情報交換の機会が少ない
- 6 . 新しい活動に取り組むことが難しい
- 7 . 役員の事務負担が大きい
- 8 . 情報の発信・収集・共有が不足している
- 9 . その他 ()
- 10 . 課題はない

右上のQ 18へ ↑

Q18. あなたの地域活動への参加について、あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

1. 忙しくて参加するほど時間に余裕がない
2. 参加するきっかけが得られない
3. 身近に参加したいと思う活動や団体がない
4. 役員などになると大変だと思う
5. 一緒に参加できる仲間がいない
6. 団体や活動内容に関する情報がない
7. 会費等の支払いに負担を感じる
8. 参加すること自体に興味や関心がない
9. その他()
10. 参加することに不安やためらい、妨げになるものは何もない

Q19. あなたは高槻市に愛着を感じますか。

- | | | | |
|-----|-------|---------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 感じる | やや感じる | あまり感じない | 感じない |

Q20. あなたは、高槻市のご当地キャラクター「はにたん」に愛着を感じますか。

- | | | | | |
|-----|-------|---------|------|-----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 感じる | やや感じる | あまり感じない | 感じない | はにたんを知らない |

Q21. あなたは、ゴミを分別している方だと思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | どちらともいえない | あまりそう思わない | そう思わない |

Q22. あなたはどの程度、ゴミをできるだけ出さないように心がけていますか。

- | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| かなり心がけています | ある程度心がけています | あまり心がけていない | まったく心がけていない |

Q23. 外出のときには、できるだけ自家用車やタクシーを使わず、公共交通機関を利用するように心がけていますか。

- | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| かなり心がけています | ある程度心がけています | あまり心がけていない | まったく心がけていない |

Q24. 高槻市のバスの乗客は、乗車中にマナーを守って行動していると思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | どちらともいえない | あまりそう思わない | そう思わない |

Q25. あなたはどの程度高槻市内でバスを利用しますか。

- | | | | | | |
|------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| ほぼ毎日 | 週に3~4日 | 週に1~2日 | 月に1~2日 | 年に1~2日 | 利用しない |

Q26. あなたは現在、通勤や通学をしていますか。

- | | |
|---------|----------|
| 1. している | 2. していない |
| ↓ | ↓ |
| Q27へ | Q29へ |

Q26で「1. している」と回答された方におたずねします。

Q27. あなたの通勤・通学時間は片道どのくらいですか。複数ある場合は、最も主要なものについてお答えください。

1. 30分未満
2. 30分以上1時間未満
3. 1時間以上1時間半未満
4. 1時間半以上2時間未満
5. 2時間以上

Q28. あなたの最も主要な通勤・通学手段は、次のうちどれですか。ひとつだけマルをつけてください。

- | | |
|-----------|---------|
| 1. バス | 4. 徒歩 |
| 2. 電車 | 5. バイク |
| 3. 自転車 | 6. 自家用車 |
| 7. その他() | |

Q29へ

Q29. あなたは、高槻市の商店街や繁華街に、通勤・通学・商用以外でどのくらいの頻度で行きますか。

- | | | | | | |
|------|--------|--------|--------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| ほぼ毎日 | 週に3~4日 | 週に1~2日 | 月に1~2日 | 年に1~2日 | 行くことがない |

Q30. あなたはどれくらいの頻度で、近くの公園に出かけますか。

- | | | | | |
|---------------|-----------------|-----------------|-----------------|-------------------|
| 1
ほぼ
毎日 | 2
週に
3～4日 | 3
週に
1～2日 | 4
月に
1～2日 | 5
公園には
行かない |
|---------------|-----------------|-----------------|-----------------|-------------------|

Q31へ

Q33へ

Q30で1～4を選んだ方におたずねします。

Q31. あなたが公園を使用するときの平均滞在時間はどのくらいですか。

- | | | | |
|----------------|---------------------|---------------------|----------------|
| 1
10分
未満 | 2
10分以上
30分未満 | 3
30分以上
1時間未満 | 4
1時間
以上 |
|----------------|---------------------|---------------------|----------------|

Q32. あなたが公園を使用する主な目的として、あてはまるものすべてにマルをつけてください。

- | | | | |
|-----------------|---------------------|---------|-----------------|
| 1
子どもと
遊ぶ | 2
トレーニング
(運動) | 3
休憩 | 4
その他
() |
|-----------------|---------------------|---------|-----------------|

Q33へ

Q33. 高槻市内で行われている次のような行事への、あなたの参加頻度はどのくらいですか。

A. 高槻シティハーフマラソン

- | | |
|-------------|----------------|
| 1. 毎年参加している | 3. 1回だけ参加した |
| 2. 時々参加している | 4. 全く参加したことがない |

B. 高槻まつり

- | | |
|-------------|----------------|
| 1. 毎年参加している | 3. 1回だけ参加した |
| 2. 時々参加している | 4. 全く参加したことがない |

C. 高槻ジャズストリート

- | | |
|-------------|----------------|
| 1. 毎年参加している | 3. 1回だけ参加した |
| 2. 時々参加している | 4. 全く参加したことがない |

D. 関西大学の行事(講演会や学園祭など)

- | | |
|-------------|----------------|
| 1. 毎年参加している | 3. 1回だけ参加した |
| 2. 時々参加している | 4. 全く参加したことがない |

Q34. 就寝用の居室(寝室・子ども部屋)と階段(寝室が2階以上の階にある場合)の全てに、住宅用火災警報器が設置されていますか。

- | | | |
|---------------------|--------------------|-------------------|
| 1
全てに設置
されている | 2
一部設置
されている | 3
設置されて
いない |
|---------------------|--------------------|-------------------|

Q35. あなたは救急車を呼ぶかどうかの判断に迷ったことがありますか。

- | | |
|-------|-------|
| 1. ある | 2. ない |
|-------|-------|

Q36. あなたは、夜間や休日でも、急な病気やけがを診てもらえる医療機関を知っていますか。

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

Q37. 突然の病気やけがでどうしたらよいか迷った時に、24時間365日大阪府下全域で電話で相談することができる「救急安心センターおおさか」があります。これについて、以前から知っていましたか。

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

Q38. あなたの世帯の、直近2ヶ月の使用水量を教えてください。なお高槻市では、水道料金の請求書には2ヶ月分の使用水量が記載されています。

- | | |
|--|--|
| 1. 10m ³ 未満 | 5. 40m ³ 以上 50m ³ 未満 |
| 2. 10m ³ 以上 20m ³ 未満 | 6. 50m ³ 以上 60m ³ 未満 |
| 3. 20m ³ 以上 30m ³ 未満 | 7. 60m ³ 以上 70m ³ 未満 |
| 4. 30m ³ 以上 40m ³ 未満 | 8. 70m ³ 以上 |

Q39. あなたの世帯の給水方式はどちらですか。マンションなどの集合住宅でご不明な場合は、管理会社などにお尋ねになると判明する場合があります。

1. 直結給水方式
(配水管からの水圧をそのまま利用して給水する方式)
2. 受水槽給水方式
(水道水をいったん受水槽に受けて給水する方式)

Q40. あなたの世帯の水道水の使用用途として、あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- | | | |
|----------|----------|-------------|
| 1
家庭用 | 2
店舗用 | 3
その他() |
|----------|----------|-------------|

Q41. あなたが水を節約するために行っていることとして、あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

1. 水道の水をこまめに止める
2. お風呂の水を洗濯に再利用する
3. 家電製品の節水機能を利用する
4. その他()

Q42. あなたが普段利用している道路は、歩行に際して安全だと思いますか、それとも危険だと思いますか。

- | | | | | |
|-----------------|-------------------|--------------------|-------------------|-----------------|
| 1
安全
だと思う | 2
ほぼ安全
だと思う | 3
どちらとも
いえない | 4
多少危険
だと思う | 5
危険
だと思う |
|-----------------|-------------------|--------------------|-------------------|-----------------|

Q43. あなたが普段利用している路地は、自動車に抜け道として使われていると思いますか。

- | | | | | |
|---------------|-----------------|--------------------|------------------------|-----------------|
| 1
そう
思う | 2
やや
そう思う | 3
どちらとも
いえない | 4
あまり
そう思わ
ない | 5
そう
思わない |
|---------------|-----------------|--------------------|------------------------|-----------------|

Q44. あなたは、普段から車を運転していますか。

1. はい → Q45へ
 2. いいえ → 右上のQ49へ

Q44で「1. はい」と回答された方におたずねします。

Q45. 普段利用している幹線道路において、渋滞がよく発生していると思いますか。

- | | | | | |
|----------|------------|---------------|-------------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう
思う | やや
そう思う | どちらとも
いえない | あまり
そう思わ
ない | そう
思わない |

Q46. 普段利用している幹線道路において、昨年と比べて渋滞が減少していると思いますか。

- | | | | | |
|----------|------------|---------------|-------------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう
思う | やや
そう思う | どちらとも
いえない | あまり
そう思わ
ない | そう
思わない |

Q47. 新名神高速道路（高槻インターチェンジ）が完成したら、どのルートを通行したいですか。左下にある図1の地図を参考にして答えてください。

1. 十三高槻線・高槻東道路ルート
2. 国道170号・伏見柳谷高槻線ルート
3. 枚方亀岡線・南平台日吉台ルート
4. その他()

Q48. 新名神高速道路（高槻インターチェンジ）の完成後、どのインターチェンジを利用したいですか。右下にある図2の地図を参考にして答えてください。

1. 高槻インターチェンジ（名神・新名神）
2. 茨木インターチェンジ（名神）
3. 茨木北インターチェンジ（新名神）
4. 大山崎インターチェンジ（名神・京滋バイパス・京都縦貫）
5. その他()

右上のQ49へ

Q49. 次のa~tは、市の仕事のうち、生活に関係の深いものをあげています。

以下から、あなたが、最近良くなってきたと思うもの（マルはいくつでも）また、あなたが、今後力を入れてほしいもの（マルは3つまで）をそれぞれ選んでください。

力を入れてほしいもの（3つまで）		
良くなってきたもの（いくつでも）		
a. 学校教育の充実、青少年の健全育成	1	1
b. 図書館、博物館などの文化施設の整備	2	2
c. スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	3	3
d. 高齢者や障がい者等への福祉対策	4	4
e. 医療施設や救急医療体制の整備	5	5
f. 空気の汚れ、騒音などへの対策	6	6
g. 地球温暖化対策	7	7
h. 公園の整備や自然・緑の保全	8	8
i. 街並み・景観の整備	9	9
j. 駅前の整備、駐車・駐輪対策	10	10
k. ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	11	11
l. 下水道の整備	12	12
m. 水の安定供給、上水道整備	13	13
n. バス・鉄道などの公共交通機関の整備	14	14
o. 身のまわりの生活道路の整備	15	15
p. 交通安全・災害防止対策	16	16
q. 公営住宅の建設や住宅融資制度	17	17
r. 市の広報・窓口相談、情報公開の充実	18	18
s. 災害対策・防犯対策	19	19
t. 子育て支援	20	20
u. 特になし	21	21

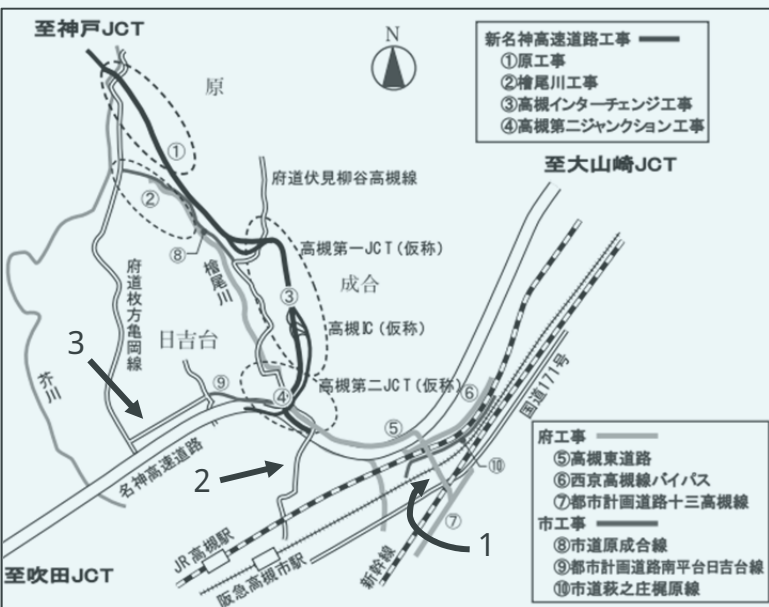


図1 Q47の参考地図

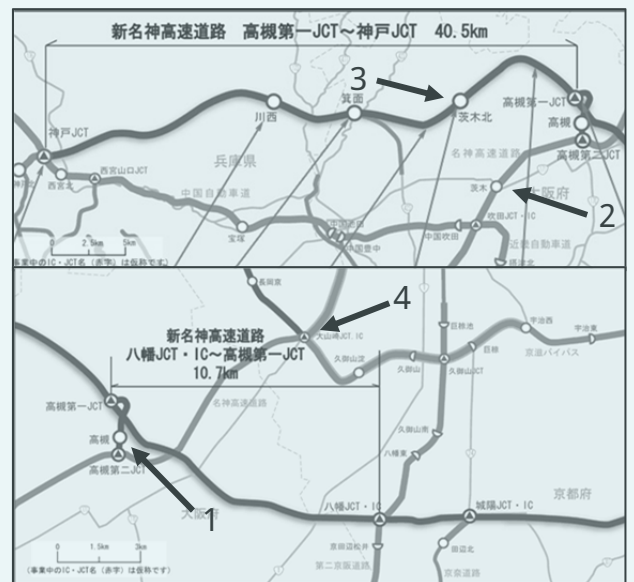


図2 Q48の参考地図

Q50. あなたの実感として、高槻市を訪れる観光客数は多いと思いますか、それとも少ないと思いますか。

- | | | | | |
|-----|------|-----|-----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 多い | やや多い | 適正 | やや | 少ない |
| と思う | と思う | である | 少ない | と思う |
| | | と思う | と思う | |

Q51. 高槻市と観光について、以下のa~fのような考えや意見について、あなたはそれぞれどう思いますか。

a. 多くの観光客にこの地域の良さを体験してもらいたい

- | | | | | |
|----|------|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう | やや | どちらとも | あまり | そう |
| 思う | そう思う | いえない | そう思わ | 思わない |
| | | | ない | |

b. いろいろな機会を通して、観光客と交流してみたい

- | | | | | |
|----|------|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう | やや | どちらとも | あまり | そう |
| 思う | そう思う | いえない | そう思わ | 思わない |
| | | | ない | |

c. 観光客が訪れることで、この地域は活性化している

- | | | | | |
|----|------|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう | やや | どちらとも | あまり | そう |
| 思う | そう思う | いえない | そう思わ | 思わない |
| | | | ない | |

d. 地域観光のための環境整備によって、住民の日常生活の利便性も高まっている

- | | | | | |
|----|------|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう | やや | どちらとも | あまり | そう |
| 思う | そう思う | いえない | そう思わ | 思わない |
| | | | ない | |

e. 企業や行政は、観光のための環境整備をいっそう進めることが望ましい

- | | | | | |
|----|------|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう | やや | どちらとも | あまり | そう |
| 思う | そう思う | いえない | そう思わ | 思わない |
| | | | ない | |

f. 住民生活を最優先した上で、観光開発すべきだ

- | | | | | |
|----|------|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう | やや | どちらとも | あまり | そう |
| 思う | そう思う | いえない | そう思わ | 思わない |
| | | | ない | |

Q52. あなたは日常生活の中で時間的ゆとりを感じますか。

- | | | | | |
|-----|-----|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| よく | やや | どちらとも | あまり | まったく |
| 感じる | 感じる | いえない | 感じない | 感じない |

Q53. あなたは、情報収集の手段として、インターネット上でやりとりすることをどれくらい重視しますか。

- | | | | | |
|----|------|-------|-------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 重視 | 少し | どちらとも | あまり | 重視 |
| する | 重視する | いえない | 重視しない | しない |

Q54. あなたが1日に平均してインターネットをご利用になる時間はどの程度ですか。

- | | |
|----------------|---------------|
| 1. 全く利用しない | 6. 2時間以上3時間未満 |
| 2. 30分未満 | 7. 3時間以上4時間未満 |
| 3. 30分以上1時間未満 | 8. 4時間以上5時間未満 |
| 4. 1時間以上1時間半未満 | 9. 5時間以上 |
| 5. 1時間半以上2時間未満 | |

Q55. あなたは趣味に費やす時間が1日にどのくらいありますか。

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 1時間未満 | 1時間以上 | 3時間以上 | 5時間以上 |
| | 3時間未満 | 5時間未満 | |

Q56. あなたは自由時間を主に何に使われていますか。あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- | | |
|-------------|------------|
| 1. 仕事 | 5. 趣味 |
| 2. 友人とのつきあい | 6. 勉強 |
| 3. 買い物 | 7. 睡眠 |
| 4. 運動 | 8. その他 () |

Q57. あなたは、どのくらいの頻度で運動(散歩・ハイキングなどを含む)をしていますか。

- | | | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| ほぼ | 週に | 週に | 月に | 年に | 運動は |
| 毎日 | 3~4 | 1~2 | 1~2 | 1~2 | しない |
| | 日 | 日 | 日 | 日 | |

Q58へ

Q60へ

Q57で1~5を選んだ方におたずねします。

Q58. 運動(散歩・ハイキングなどを含む)は、主に誰と一緒にしていますか。あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 一人で | 5. 友人 |
| 2. 夫婦で | 6. 職場や仕事関係の人 |
| 3. 子ども | 7. 地域の人 |
| 4. その他の家族 | 8. その他 () |

Q59. 運動(散歩・ハイキングなどを含む)をするのはどのような目的からですか。あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- | | |
|-------------------|--------------|
| 1. 健康のため | 5. 純粋に楽しむため |
| 2. 息抜きのため | 6. 子供との遊びのため |
| 3. ストレス解消のため | 7. 仲間を作るため |
| 4. ある競技でよい記録を出すため | 8. その他 () |

右上のQ60へ

Q60. 一般的に言って、若い人は、退職後の生活や今後の生活に備えて、貯蓄や私的な年金保険などの経済的な準備をするべきだと思いますか。

- | | | | | |
|------|------------|---------------|-------------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | やや
そう思う | どちらとも
いえない | あまり
そう思わ
ない | そう
思わない |

Q61. 一般的に言って、人々の老後の生活費はどのようにまかなわれるのが最も適切だと思いますか。以下のうち、ひとつだけマルをつけてください。

1. 働けるうちに自分で準備する
2. 家族が面倒をみる
3. 公的な社会保障でまかなう
4. その他 ()

Q62. あなたはどのような面で、これからの生活を豊かにしていきたいですか。あてはまる番号すべてにマルをつけてください。

- | | |
|------------|----------|
| 1. 金銭的な面で | 4. 時間の面で |
| 2. 物質的な面で | 5. 趣味の面で |
| 3. 精神的な面で | 6. 健康の面で |
| 7. その他 () | |

Q63. あなたが15歳の頃のあなたの家庭の収入は、当時の平均的な家庭と比べて、どうでしたか。

1. 平均よりかなり少ない
2. 平均より少ない
3. ほぼ平均
4. 平均より多い
5. 平均よりかなり多い
6. わからない

Q64. あなたは、家族と1日平均何分くらい会話をしていますか。

1. 30分未満
2. 30分以上1時間未満
3. 1時間以上1時間半未満
4. 1時間半以上2時間未満
5. 2時間以上

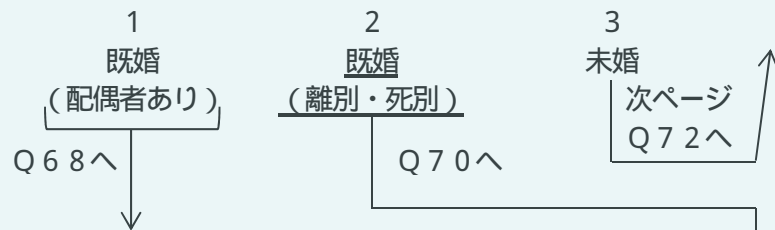
Q65. あなたが生活する地域では、子育てのための施設が整っていると思いますか。

- | | | | |
|----------|----------------|-------------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | やや
そう
思う | あまり
そう
思わない | そう
思わない |

Q66. あなたが生活する地域では、子育てをしている家庭の子どもを預けあうなど、育児においての助け合いがよく行われていると思いますか

- | | | | |
|----------|----------------|-------------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | やや
そう
思う | あまり
そう
思わない | そう
思わない |

Q67. あなたは、現在、結婚なさっていますか。



Q67で「1. 既婚(配偶者あり)」と回答された方におたずねします。

Q68. 夫婦で1日平均何分くらい会話をしていますか。

1. 30分未満
2. 30分以上1時間未満
3. 1時間以上1時間半未満
4. 1時間半以上2時間未満
5. 2時間以上

Q69. 配偶者の育児の取り組みに対して、満足ですかそれとも不満ですか。

- | | | | | |
|----|----------|----------|----|-------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 満足 | やや
満足 | やや
不満 | 不満 | 子どもは
いない |

Q70へ

Q70. 結婚(初婚)されたのは、あなたが何歳のときですか。

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代以上 |

Q71. 現在、何人のお子さまがおられますか。

- | | | | | | |
|-----|----|----|----|----|------|
| 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| いない | 1人 | 2人 | 3人 | 4人 | 5人以上 |

最後に、今回の調査結果を統計的に処理するために、いくつかのお答えがほしいです。答えたくない質問や答えにくい質問は空欄のままでも構いません。

Q72 . あなたの性別はどちらですか。

- 1 . 男性 2 . 女性

Q73 . あなたの年齢をお答えください。

- | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代以上 |

Q74 . あなたの現在の職業はどれにあたりますか。(複数の職業に就かれている場合は、主なもの1つにマル)

- | | |
|--|------------|
| 1 . 常時雇用の勤め人 | 5 . 経営者、役員 |
| 2 . 臨時雇用、パート、アルバイト | 6 . 家事専業 |
| 3 . 自営業主 | 7 . 学生 |
| 4 . 自営業の家族従業者 | 8 . 無職 |
| 9 . その他 () | |

Q75 . あなたは、平均すると週に何日間、収入を得られる仕事をしていますか。

- | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 0日 | 1日 | 2日 | 3日 | 4日 | 5日 | 6日 | 7日 |

Q76 . あなたの最終学歴を教えてください。(在学中の方は、いま通っている学校を選んでください)

- 1 . 中学(旧小学校など)
- 2 . 高校(または旧制中学など)
- 3 . 専門学校
- 4 . 短大・高専(5年制)
- 5 . 大学(旧高専)・大学院
- 6 . わからない

Q77 . あなたの住まいの地域はどこですか。()内の小学校区を参考にしてお答えください。

- 1 . 榎田地区(榎田小学校)
- 2 . 高槻北地区(芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校)
- 3 . 高槻南地区(高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校)
- 4 . 五領地区(五領・上牧小学校)
- 5 . 高槻西地区(群家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校)
- 6 . 如是・富田地区(芝生・丸橋・寿永・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校)
- 7 . 三箇牧地区(三箇牧・柱本小学校)

Q78 . 高槻市には現在までどのくらいお住まいですか。

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 . 1年未満 | 6 . 20年以上30年未満 |
| 2 . 1年以上3年未満 | 7 . 30年以上40年未満 |
| 3 . 3年以上5年未満 | 8 . 40年以上50年未満 |
| 4 . 5年以上10年未満 | 9 . 50年以上 |
| 5 . 10年以上20年未満 | |

Q79 . あなたの現在のお住まいは、一戸建てですか、集合住宅ですか。

- 1 . 一戸建て 2 . 集合住宅(アパート・マンションなど)

Q80 . そのお住まいは、次のどれにあたりますか。

- 1 . 持ち家(親などが持ち主の場合も含む)
- 2 . 民間の賃貸住宅
- 3 . 社宅・公務員住宅等の給与住宅
- 4 . 公社・公団等の公営の賃貸住宅
- 5 . その他

Q81 . あなたの世帯の人数を、あなたも含めてお答えください。

人

Q82 . 過去一年間のあなたの世帯の収入はどれくらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1 . 100万円未満 | 6 . 800万円~1000万円未満 |
| 2 . 100万円~200万円未満 | 7 . 1000万円~1500万円未満 |
| 3 . 200万円~400万円未満 | 8 . 1500万円以上 |
| 4 . 400万円~600万円未満 | 9 . わからない |
| 5 . 600万円~800万円未満 | |

お忙しいなか、ご協力いただきありがとうございました。ご回答いただきました調査票は、返信用封筒に入れて、9月12日(金)までにご返送ください。早目にご投函いただければ幸いです。

なお、同封のボールペンは、返信用封筒に入れずに、日頃の生活の中でご利用ください。

調査結果資料(速報版)発行予定:平成26年12月頃

調査報告書発行予定:平成27年3月

閲覧窓口:高槻市役所本館1階行政資料コーナー

関西大学総合情報学部事務室

(高槻市・関西大学総合情報学部のウェブページでも閲覧可能となる予定です。)

執筆者紹介

李 容玲	(り ようれい)	編集・はじめに・第1章	(関西大学非常勤講師)
松本 渉	(まつもと わたる)	編集・第1章	(関西大学総合情報学部准教授)
吉崎 雅基	(よしざき まさき)	第2章	(関西大学ティーチング・アシスタント)
原田 淳平	(はらだ じゅんぺい)	第3章	(関西大学総合情報学部生)
山本 明	(やまもと あきら)	第4章	(関西大学総合情報学部生)
越智 祐貴	(おち ゆうき)	第5章	(関西大学総合情報学部生)
井上 愛弓	(いのうえ あゆみ)	第6章	(関西大学総合情報学部生)
乗本 愛美	(のりもと まなみ)	第7章	(関西大学総合情報学部生)
松岡 亮祐	(まつおか りょうすけ)	第8章	(関西大学総合情報学部生)
山下 慶洋	(やました よしひろ)	第9章	(関西大学総合情報学部生)
小谷 勇人	(こたに はやと)	第10章	(関西大学総合情報学部生)
松山 奈央	(まつやま なお)	第11章	(関西大学総合情報学部生)
福山 将平	(ふくやま しょうへい)	第12章	(関西大学総合情報学部生)
東久保 亮成	(ひがしくぼ あきのり)	第13章	(関西大学総合情報学部生)
樋之内 祥馬	(ひのうち しょうま)	第14章	(関西大学総合情報学部生)
佐々木 百合	(ささき ゆり)	第15章	(関西大学総合情報学部生)
中田 千裕	(なかだ ちひろ)	第16章	(関西大学総合情報学部生)
古森 光	(こもり ひかる)	第17章	(関西大学総合情報学部生)
守田 早輝子	(もりた さきこ)	第18章	(関西大学総合情報学部生)
鼻崎 将	(はなさき しょう)	第19章	(関西大学総合情報学部生)
山田 航暉	(やまだ こうき)	第20章	(関西大学総合情報学部生)
谷口 有紀	(たにぐち ゆき)	第21章	(関西大学総合情報学部生)
石倉 広祐	(いしくら こうすけ)	第22章	(関西大学総合情報学部生)
中川 千彰	(なかがわ かずあき)	第23章	(関西大学総合情報学部生)
杉浦 翔	(すぎうら しょう)	第24章	(関西大学総合情報学部生)

平成 26 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—

編集 関西大学総合情報学部、発行 関西大学総合情報学部、発行年月 平成 27 年 3 月

※ 関連する資料として、同時期に発行された『高槻市と関西大学による市民意識調査報告書—平成 26 年度—』（関西大学総合情報学部[編集]，高槻市・関西大学総合情報学部[発行]）があります。本報告書の 3 章～24 章が省略されたものになります。